

ブラジルアマゾンの日系移民による教育と unlearn に関する研究  
—パラ州トメアスーにおける農業発展を踏まえて—

Education and Unlearn of Japanese Immigrants in the Brazilian Amazon  
A Case Study of Agricultural Development in Tomé-Açu, Pará.

2017.9

東京農工大学大学院  
連合農学研究科  
農林共生社会科学専攻

酒井 佑輔

ブラジルアマゾンの日系移民による教育と unlearn に関する研究  
—パラ州トメアスーにおける農業発展を踏まえて—

目 次

序章 研究の目的・課題・方法・	1
第1節 研究の目的	
(1) ブラジルアマゾンの日系移民による教育を研究する意義	
(2) unlearn の理論・実証研究に取り組む意義	
第2節 研究地域の概要並びに研究方法	
第1章 unlearn の特徴とその可能性・	18
第1節 欧米における unlearn の議論と実践	
(1) 人種主義・白人優越主義	
(2) セクシャリティーと異性愛主義	
(3) 先住民や移民・難民	
(4) 欧米における unlearn に関する考察	
第2節 ガヤトリ・スピヴァクによる unlearn	
(1) スピヴァクによる unlearn の理論的枠組み	
(2) スピヴァクによる unlearn の日本での受容と展開	
第3節 日本における unlearn の議論の特徴とその広がり	
(1) 鶴見俊輔による unlearn	
(2) 大江健三郎による unteach (教え返す) と unlearn (学び返す)	
(3) 前平泰志による unlearn と〈ローカルな知〉	
(4) 学校教育における unlearn	
(5) 日本で受容された unlearn とその可能性	
第4節 終わりに	
第2章 日系移民をめぐるフォーマル教育の諸相・	39
第1節 トメアスーにおける学校教育並びに日本語学校の現状	
第2節 学校教育の歴史的変遷	
第3節 トメアスーの日本語教育の歴史的変遷	
第4節 日本語教育の内実—1980年代前半の日本語学校生徒の作文を事例に—	
第5節 終わりに	

### 第3章 アマゾントメアスーにおける農業発展とノンフォーマル教育 . . . . . 62

#### 第1節 アマゾン開拓と移民

- (1) アマゾン開拓の始まり
- (2) 日本人移民によるアマゾン開拓

#### 第2節 トメアスーにおける日本人移民史と農業発展

- (1) 入植初期の試験的多品種植付けと野菜栽培
- (2) 胡椒ブームの到来と単一大規模栽培化
- (3) 遷移型アグロフォレストリーへの展開

#### 第3節 トメアスーにおける農業開発の現状とその課題

- (1) カカオ栽培を基幹とするアグロフォレストリーの広がり
- (2) アサイ (Açaí; *Euterpe oleracea*) の需要増加とリスク管理
- (3) アブラヤシ (デンデ) (*Dendê; Elaeis guineensis*) 栽培の拡大
- (4) アグロフォレストリーの普及と発展

#### 第4節 トメアスーの農業発展とノンフォーマル教育

- (1) 移住・支援機関団体による教育
- (2) トメアスー総合農業協同組合による教育
- (3) 指導者による教育 とその思想 (平賀連吉)

#### 第5節 終わりに

### 第4章 トメアスーの農業発展にみる unlearn . . . . . 98

#### 第1節 農業における学習 (learn) と unlearn

#### 第2節 平賀練吉による unlearn

#### 第3節 坂口隆による unlearn

#### 第4節 小長野道則による unlearn

#### 第5節 終わりに

### 終章 . . . . . 119

### 主要参考文献一覧 . . . . . 125

### 謝辞

## 序章 研究の目的・課題・方法

### 第1節 研究の目的

本研究の目的は、ブラジル連邦共和国パラ州トメアスーにおける日系移民の教育の総体について、unlearn を用いて明らかにすることである。19 世紀から 20 世紀は「移民の世紀」と言われた。ただし 21 世紀の現代社会においても、紛争やテロ等を逃れる移民の数は増加する一方で彼らへのヘイトスピーチ、移民受入れ反対運動などのニュースがマスメディアを賑わせている。諸外国の大統領選においても移民や難民受け入れの是非はしばしば争点になる。日本でも少子高齢化に伴う労働力確保という文脈でしばしば移民の受け入れが議論されている。近年の多国籍企業等が海外進出する際に欲する「グローバル人材」<sup>1</sup>といった言葉も台頭するなかで、国境を越える人びと、移民という存在は注目されている。

そもそも、移動ないしは移動する人としての移民とは、「出移民」(emigrants)と「入移民」(immigrants)として定義される。ただし、伊豫谷登士翁や小泉康一も述べるように、移住や移民、ひいては難民などの定義区分は非常に難しく、それぞれに明確な境界線を引くことはそう簡単ではない<sup>2</sup>。そんな移民に関する研究は、これまでの日本の人文社会学においてはしばしば周縁に追いやられてきたものの、上述したような移民・難民の存在や彼らの抱える現実的課題が可視化され、日本国内でも近年学問的な地位を獲得し始めている<sup>34</sup>。教育学においても、日本に移り住んだ外国人ないしは日本で生まれた外国につながる子どもたちに関する研究や実践は注目されている<sup>5</sup>。

---

<sup>1</sup> 例えば、「グローバル人材」の議論の歴史的変遷やその特徴を明らかにしたのは、吉田文（「グローバル人材の育成」と日本の大学教育：議論のローカリズムをめぐって〈特集〉グローバル化と教育内容）日本教育学会『教育学研究』81(2)、2014、pp. 164-175）である。なお、吉田は現代のグローバル人材育成の議論が、日本企業の人材育成という問題、国家予算は日本人のために利用すべきという思考、地域/ローカルな課題対応の重視等の日本という空間・時間的にローカルな視点に立脚して議論が展開していることを明らかにしたうえで、育成する人材像が「海外留学経験があり英語が話せるもの」という欧米を価値化した国際化への適応であると批判している。

<sup>2</sup> 伊豫谷登士翁「方法としての移民 移動から場をとらえる」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』（有信堂、2007、pp. 3-23）や小泉康一「現代世界の人の移動—複合する危機と多様な人々」小泉康一・川村千鶴子編『多文化「共創」社会入門—移民・難民とともに暮らし、互いに学びあう社会へ—』慶應義塾大学出版会、2016、pp. 102-112。

<sup>3</sup> 1990 年代以降の日本では、移民の議論にも関連して、ユダヤ民族の被った強制的離散という意味で用いられてきた「ディアスポラ」(diaspora) 概念も、国民国家の強制力や恣意的にもたらされる境界線等という前提条件を持って上野俊哉『ディアスポラの思考』（筑摩書房、1999）や赤尾光春・早尾貴紀編『ディアスポラの力を結集する—ギルロイ・ボヤーリン兄弟・スピヴァク』（松籟社、2012）や赤尾光春・早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読む離散を架橋するために』（明石書店、2009）らにより議論されている。

<sup>4</sup> 人の移動や移民は、日本の近現代史や「村」や国民・国家の在り方を批判的に問う方法論としても注目を集めており、例えば、安岡健一『「他者」たちの農業史 在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』（京都大学学術出版会、2014）や、坂口満宏「出移民の記憶」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』（お茶の水書房、2011、pp. 80-103）などの研究がある。

<sup>5</sup> 日本国内の外国人や外国につながる子どもたちの教育に関する議論は清水睦美・「すたんどばいみー」編『いちよう団地発！外国人の子どもたちの挑戦』（岩波書店、2009）、小島祥美『外国人の就学と不就学社会で「見えない」子どもたち』（大阪大学出版会、2016）、宮島喬『外国人の子どもたちの教育 就学の現状と教育を受ける権利』（東京大学出版会、2014）、牛田千鶴編『南米につながる子どもたちと教育—

### （１）ブラジルアマゾンの日系移民による教育を研究する意義

このような状況において近年特に注目されているのが、日本から海を越えブラジルへと渡った日系ブラジル人<sup>6</sup>の教育に関する研究である。1908年に日本からブラジルへの移民が開始されて以降、ブラジルサンパウロを中心に戦前・戦後あわせて約26万人がブラジルへと渡った。彼らはブラジルに根をおろし、現在はその1世から6世までがブラジル全土に暮らしている。そんな彼らの多くが、日本の外国人不法就労者増加等を背景として1990年に改正・施行された出入国管理及び難民認定法（入国管理法）や、1980年代後半のブラジル経済の不況もあり、出稼ぎを目的として来日した。日本からブラジルへと渡った人びとやその子どもたちが、今度はブラジルから日本へと戻る還流が生じたのである。2007年時12月時点で在日ブラジル人総数は30万人以上となり、彼らの存在が次第に可視化されるなかで地域での文化的軋轢や教育的課題も顕在化していった<sup>7</sup>。それと同時に、在日ブラジル人に関する社会学的研究や、一条校<sup>8</sup>やブラジル学校で取り組まれている教育や地域での日本語支援、ポルトガル語の母語支援等に関する研究が広く取り組まれるようになる<sup>9</sup>。2008年秋にはリーマンショックによって多くのブラジ

---

複数文化を「力」に変えていくために―』（行路社、2014）がある。また諸外国の移民による教育研究も丸山英樹『ノンフォーマル教育による社会参加とエンパワメント―ベルリン在住トルコ女性移民の社会福祉事業を事例として―』（2013、学位論文）等がある。

<sup>6</sup> 本稿では、日系ブラジル人を、ブラジルへ移住した日本人とその子弟を指す言葉として用いる。なお、本稿では文脈に応じて「日本人移民」や「日系住民」「日系移民」等という言葉も適宜使用するが同様の意味である。また、日系ブラジル人ではない人びとについては「ブラジル人」や「非日系」等の言葉を適宜用いる。

<sup>7</sup> 1997年に愛知県小牧市で日系ブラジル人少年エルクラノ（当時14歳）が二十数名の日本人少年に集団で暴行され殺害された事件を扱ったルポ（西野瑠美子『エルクラノはなぜ殺されたのか 日系ブラジル人少年・集団リンチ殺人事件』（明石書店、1999））や、静岡県浜松市にデカセギの親と来日した日系ブラジル人の若者の日常を追ったドキュメンタリー映画『孤独なツバメたち デカセギの子どもに生まれて』（2012）等も日系ブラジル人の現実の断片を丁寧に描いている。

<sup>8</sup> 一条校とは、学校教育法第一条において掲げられた教育機関（幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学（短期大学及び大学院を含む）及び高等専門学校）の総称。「学校」として文科省の認可を得るためには、文部科学省が定めた設置基準に従うほか、学習指導要領に沿って教育をすすめる必要がある。

<sup>9</sup> 社会学的な調査によって日系ブラジル人の現状を明らかにしたのは、渡辺雅子編『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 上 論文篇[就労と生活]』（明石書店、1995）や、梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の见えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』（名古屋大学出版会、2005）等がある。また、日本の一条校やブラジル学校における教育実践については、小内透編『講座 トランスナショナルな移動と定住 第2巻 在日ブラジル人の教育と保育の変容』（お茶の水書房、2009）、山之内裕子『国境を越える在日ブラジル人の教育―ブラジル人保護者とブラジル人学校経営者の「戦術」に着目して―』森本豊富・根川幸男編『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化―過去から未来に向かって―』（明石書店、2012、pp. 156-168）、拝野寿美子「在日ブラジル人第二世代の教育」森本豊富・根川幸男編『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化―過去から未来に向かって―』（明石書店、2012、pp. 171-186）、拝野寿美子『ブラジル人学校の子どもたち―「日本かブラジルか」を超えて』（ナカニシヤ出版、2010）、拝野寿美子「在日ブラジル人の子どもたちの教育とブラジル人学校」三田千代子編『グローバル化の中で生きるとは―日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』（上智大学出版、2011、pp. 141-183）、山之内裕子「日系ブラジル人の移動とアイデンティティ形成―学校教育とのかかわりから」三田千代子、同上（pp. 184-193）、KOBEN 外国人支援ネットワーク編『在日マイノリティースタディーズⅠ 日系南米人の子どもの母語教育』2001等がある。

ル人が職を失ったことで、ブラジル人集住地域での彼らへの教育支援や<sup>10</sup>、ブラジルへ帰国した日系ブラジル人の心の問題等についても議論されている<sup>11</sup>。

一方で、そうした日系人がブラジルで取り組んだ教育ないしはその歴史的研究はそれほど多くはない<sup>12</sup>。数少ないブラジルの日系移民教育史研究においては、例えば、森脇礼之・古杉征己・森幸一による日本人移民の子弟教育通史的論考が先行研究としてあげられる<sup>13</sup>。森脇・古杉・森は、戦前から戦後までの日系社会やブラジル経済の変化を踏まえつつ、サンパウロ市で1915年にはじめて日系移民によって創立されたと言われている日系教育機関の大正小学校や、その翌年に開校された同じくサンパウロ州の農村に設立されたコチア小学校の事例に基づき、教育モデルやその理念の歴史の変遷に焦点をあてている。また、ブラジル日系移民の教育(史)に大きな一石を投じた根川幸男による研究も先行研究として位置付けられる。根川はブラジルの日系移民による教育研究の問題点として、①在日ブラジル人子弟教育に関する研究蓄積の多さに対して、戦前期のブラジルの日系移民子弟教育の研究が希少であること、②日系植民地に卓越した子弟教育のモデルや理念の変遷に重点が置かれ、教育機関の教育内容や環境、実生活には深く立ち入っていないことをあげ、特に1930年代のサンパウロ州における日系移民子弟教育の実践を歴史的資料や聞き取り調査から明らかにしている<sup>14</sup>。また、根川はサンパウロ州の都市部と農村部の地方格差に留意しつつ、教育旅行(修学旅行)を事例に、サンパウロ市と農村部の日系人の関係性についても明らかにしている<sup>15</sup>。このような日系移民の教育史に関する研究は、ポルトガル語ないしは英語の文献も数は多くはないものの存在している。例えば Zeila de Brito Fabri Demartini は、サンパウロ州における学校の特徴を、①移民会社により建てられた農業学校、②青年や大人向けの夜間学校、③Grupos Escolares や小学校に変容した日本語学校、④個人によって運営される初等教育機関、

---

<sup>10</sup> 2009年には文部科学省が定住外国人支援に関する当面の対策や、第二次定住外国人の子どもの緊急支援、ブラジル人学校等における日本語教育について協議するため、「ブラジル人学校等の教育に関するワーキング・グループ」を立ち上げその対策にも取り組んでいる。

<sup>11</sup> 最近では、日本の公立学校に通っていた児童らが母国に帰国したのち日常生活や学校に適応していく過程を調査したミックメーヒル・カイラン・松元エリカ「日本における言語教育環境の移民への影響—日系人帰国生家族の経験から」森本豊富・根川幸男編『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向かって—』(明石書店、2012、pp. 118-135) 等もある。

<sup>12</sup> 根川はこれまでの日本の教育史研究においてブラジルの日系移民による教育が取り上げられてこなかった要因として、ブラジルの公用語がポルトガル語という一般的とはいえない言語であることと、且つ日本とは地理的な距離もありハワイや北米といった地域よりも研究がなされてこなかったことを指摘している(根川幸男『戦前・戦中期ブラジルにおける日系移民子弟教育の史的研究』博士論文、2013、p. 10)。

<sup>13</sup> 森脇礼之・古杉征己・森幸一「第3章 ブラジルにおける子弟教育(日本語教育)の歴史」ブラジル日本移民百周年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会『ブラジル日本移民百年史第3巻 生活と文化 1』2010、pp. 251-370。

<sup>14</sup> 根川幸男「戦前期ブラジル日系移民子弟教育の先進的側面と問題点—サンパウロ市日系子弟の二言語・二文化教育に注目して—」森本豊富・根川幸男編『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向かって—』明石書店、2012、pp. 54-75。

<sup>15</sup> 根川幸男「海を渡った修学旅行：戦前期ブラジルにおける日系子弟の離郷体験(国境を越える人の移動：グローバルな視点から)」日本移民学会編集委員会『移民研究年報』2015、pp. 37-55。

⑤修道会による学校、⑥裁縫等の専門学校の6つに分類し、それぞれの教育実践について歴史的な考察をおこなっている<sup>16</sup>。

しかしながら、こうしたブラジル日系移民の教育に関する研究の多くのは、2つの陥穽を孕んでいる。まず1つは、ブラジル南東部サンパウロ州や南部パラナ州等の日本人移民が多く入植した地域に特化しており、他地域における研究が欠落している点である。日本からブラジルへと渡った移民はサンパウロに限られたわけではない。1987年から1988年を最後に実施された日系ブラジル人に関する人口統計調査によれば、当時のブラジル在住日系人口総数122万8千人のうち、地域分布は以下の通りとなる。

地域	構成比 (%)
北部	2.68
北東部	2.32
南東部 サンパウロ州	
サンパウロ市	26.55
サンパウロ大都市圏（サンパウロ市を除く）	13.84
上記以外	31.84
南東部	7.12
リオデジャネイロ州、エスピリトサント州	
ミナスジェライス州	
南部	11.68
中西部	3.97

表1 ブラジルの地域別日系人口構成比（1987年）

（出典）国際協力事業団『ブラジル日系人実態調査報告書』（1990、p. 9）より筆者作成

この地域分布を踏まえると、日系ブラジル人の約70%がサンパウロ州サンパウロ市並びにサンパウロ大都市圏に集中していることが理解できる。しかし、忘れてはならないのは、残りの約30%もの人びとがブラジルの他の地域に根をおろし生活を営んでいる現実である。根川は日本の移民研究におけるブラジルの移民研究の位相について、いみじくも以下のように述べている。

日本の移民研究では、例えばハワイのような比較的小さな地域を対象とする場合でも、各島の独自性や地域的格差に注意が払われている。これに対してブラジル日系社会を対象とする従来の研究では、しばしばそうした地域性や格差が軽視されてきた<sup>17</sup>。

<sup>16</sup> Zeila de Brito Fabri Demartini, “Japaneses in São Paulo: Challenges of Education in the New Land”, Tizuko Morchida Kishimoto & Zeila de Brito Fabri Demartini, *Education and Culture: Brazil and Japan*, 2012, pp. 23-48.

<sup>17</sup> 根川幸男『戦前・戦中期ブラジルにおける日系移民子弟教育の史的研究』総合研究大学院大学博士学位請求論文、2013、p. 16。

また根川は「従来のブラジル日系移民子弟教育のとらえ方は、やはり一面的であり、地域格差や多様性が軽視され、ブラジル日系社会を画一視する一国（一エスニック集団）史観的傾向に支配されてきた」<sup>18</sup>ことを問題視したうえで、地域の子弟教育の内実を明らかにする必要性を説いている。しかし、この地域というのはあくまでもサンパウロ州の都市部と農村という地域差であった。したがって、もしもブラジルにおける日系移民の教育の総体を明らかにしようとするならば、ブラジル南東部、ないしはサンパウロ州等以外に入植した日系移民による教育実践や教育史にも注視する必要がある<sup>19,20</sup>。

<sup>18</sup> 根川幸男、同上、2013、p. 12。

<sup>19</sup> 根川は日本の歴史学界、特に帝国形成という文脈を考える際に、「帝国の勢力圏外に越境した周縁を考えずして、私たちは帝国の総体を見ることができない」という問題意識に基づき、ハワイ・アメリカ・ブラジルなど日本帝国の非勢力圏に力点をおく重要性和、日本人による越境移動の地域や国を跨いだ関係性や連動性について明らかにしようと試みている（根川幸男「近現代日本人の海外体験と日系移民史の時期区分 - 「連動史」を描くために」根川幸男/井上章一編『越境と連動の日系移民教育史』ミネルヴァ書房、2016、p. 6）。もしブラジルの日系移民学界という文脈の総体を描こうとするならば、やはり周縁（特にブラジルアマゾン）や中央と周辺の関係性・連動性にまで考慮する必要があるのではないだろうか。

<sup>20</sup> 本研究は、移民政策とは一線を画すため掘り下げて言及はしないが、この学問領域においてもブラジルのアマゾン地域等の僻地に関する研究は微々たるものである。移民史・政策研究者である遠藤十亜希（『南米「棄民」政策の実像』岩波現代全書、2016）は、トメアスー移住地を「戦後移民の成功例」として「熱帯の過酷な風土でも農作物が育つような独自の農業技術を駆使した結果、ジュート、ココア、黒胡などの現金作物の栽培に成功した」（p. 58）と触れているものの、そもそもトメアスーではジュート栽培をおこなっていない。また、日系移民がアマゾナス州の気候および土壌条件に順応させジュート栽培に成功したと言われているのは、主に1930年から1940年代までであり、第二次世界大戦後の1953年にジュート増産を目的に日本人の移住は再会され1960年代頃までジュート景気がつづいたものの、それ以降1970年代のジュート需要後退により事業はしだいに縮小している。したがって、「戦後移民」としてジュート栽培に成功したわけでもないと言えるだろう。なお、ブラジルのジュート栽培において日本人が果たした役割については中野順夫「ブラジルにおける日系農業史研究：「ブラジルのジュート栽培—日本人のはたした役割—」（サンパウロ人文科学研究所）

（<http://www.cenb.org.br/articles/display/384>）（2017年5月1日閲覧）等を参照。

<sup>21</sup> 例えば森幸一は、特に人文・社会科学分野を中心とした日本人研究者によるこれまでのブラジル日本移民・日系研究の総括に取り組んでいる。（森幸一「ブラジル日本移民・日系「研究」の回顧と展望」丸山浩明『ブラジル日本移民百年の軌跡』明石書店、2010、pp. 13-66。）森は1980年代以降の研究動向の整理を踏まえ、「調査地域もサンパウロを中心としながらも、ブラジル全国へと広がりを見せるようになっていく」（p. 35）と結論づけている。しかしながら、本節において言及された参考文献や研究テーマはほぼ一貫してサンパウロ中心であり、「アマゾン移民」に関しては、野口敬子（「上塚司日本高等拓殖学校—アマゾニア開拓について—」国際協力事業団『移住研究』1990、no. 27、pp. 76-86.）と田中規子（「アマゾン熱帯地域における日系協同組合の経営危機とその要因分析 - トメアス総合農業協同組合を事例として - 」北海道大学大学院農学研究院『農経論叢』No. 52、1996、pp. 181-191）のみである。森があげていない1980年代以降の人文社会学関係のブラジルアマゾン、特にトメアスーに関する調査としては、本文中でも取り上げるが、Masaaki Yamada, *Japanese immigrant agroforestry in the Brazilian Amazon : a case study of sustainable rural development in the tropics*, Ph.D. diss., University of Florida, 1999 や、山本正三・松本栄次「アマゾン・トメアスー入植地における日系人農業の変容」『獨協経済』No. 70、1999、pp. 7-15）、トメアスー入植地にも言及しつつアマゾンの開発問題について多角的な学問領域から論じた西沢利栄、本郷豊、山田祐彰、小池洋一『アマゾン—保全と開発』（朝倉書店、2005）、トメアスーのデカセギに関して社会学的視点からまとめたものとして、北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室が2008年に発刊した『調査と社会理論研究報告書 外国人集住地域の社会学的総合研究その6 日系ブラジル人のデカセギと国家の対応』等もある。また、国際協



なお、ブラジルアマゾンで取り組まれた日系移民による教育については、アマゾン開拓の指導者育成のため東京の国士舘内に1年課程として設立された国士舘高等拓殖学校（後の日本高等拓殖学校）やその創設者の1人である上塚司の思想研究<sup>22</sup>、渋沢栄一が顧問を務め崎山比佐衛が創設した海外殖民学校に関する研究<sup>23</sup>、実際にアマゾンに移り住んだ高拓生に関する研究や資料は多く残されている。また、パラ州の州都ベレンから東方68km地点に位置し、自然発生的に日本人が集住してできた日系コミュニティのあるカスタンヤール（Castanhal）郡の日系ブラジル人の教育意識に関する調査報告もある<sup>24</sup>。

トメアスーの日系移民教育を部分的に扱ったものとしては、品川ひろみによる報告がある。品川は、昨今のデカセギ問題が子どもに与える影響を考察するため、トメアスーの日系ブラジル人に関する教育施設ニッケイ学校（Escola Nikkei de Tomé Açú）や幼稚園を訪問し調査している<sup>25</sup>。しかしながら、本調査はあくまでデカセギの児童に対する影響を考察するということに焦点化されているため、トメアスーにおける学校教育の現実やその歴史的変遷、どういった価値を持って教育が営まれていたのか等掘り下げて論じてはいない。つまり、ブラジルにおける日系移民の教育研究は、ブラジル南東部の特にサンパウロと学校教育が中心の位置を占めていると理解することができる。

2つめは、日系移民の教育研究における学校教育（日本語学校やブラジルの公的学校教育）偏重である。これまで見てきたように、日系移民による学校教育に関する歴史的研究やその傾向の変遷を明らかにした研究は多い。例えば Leiko Matsubara Morales は、サンパウロを中心とした日本語教育の現状や、日本語学校の歴史について明らかにしている<sup>26</sup>。また、ブラジルへと渡った移民の教育研究は、ブラジ

---

力事業団が発刊してきた『移住研究』の1980年代以降に限って言えば、鐙木功の「日語学校児童生徒の意識について—アマゾン日系2、3世児童生徒の日本語学習への関心度—」（国際協力事業団『移住研究』No. 18、1981、pp. 28-42）や、日系農家の経済状況に関する比較研究をおこなった栄田剛「移住地農業生産の展開過程—第2トメアスー、アルト・パラナ、サンファン移住地の比較考察—」（同上、No. 19、1982、pp. 82-99）等ある。これらの研究は、1980年代以降のアマゾンで実施された日本人による人文社会学研究をすべて網羅しているわけではない。しかしながら、アマゾンへと渡った移民に関する研究が少なくともこれだけなされてきたにも拘わらず、それらを踏まえずして「サンパウロを中心としながらも、ブラジル全国へと広がりを見せるようになっていく」と論じきってしまうのも、日系移民の研究に関するサンパウロ中心主義ないしは他地域の軽視と言えるのではないのだろうか。

<sup>22</sup> 上塚芳郎・中野順夫『上塚司のアマゾン開拓事業』（自費出版、2013）や、野口敬子「上塚司と日本高等拓殖学校—アマゾニア開拓について」国際協力事業団『移住研究』No. 27、1990、pp. 76-86、野口敬子「上塚司と日本高等拓殖学校（完結編）」国際協力事業団『移住研究』No. 30、1993、pp. 185-235、ASSOCIAÇÃO KOTAKU DO AMAZONAS, *A SAGA dos KOUTAKUSEIS no AMAZONAS Uma história de pioneirismo, sofrimento, perseverança e SUCESSO*, 2011等を参照。

<sup>23</sup> 崎山比佐衛については、渋沢史料館『企画展図録 日本人を南米に発展せしむ 日本人のブラジル移住と渋沢栄一』（2008）や海外殖民学校史研究会が2014年から2016年10月までに第6巻まで発行している「海外殖民学校と比佐衛」などがある。

<sup>24</sup> カスタンヤール日伯文化協会「日系人の教育意識（日本語教育・ブラジル公教育）についての一考察—ブラジル・カスタンヤール郡における教育意識調査より—」国際協力事業団『移住研究』No. 33、1996、pp. 89-115。

<sup>25</sup> 品川ひろみ「トメアスーの教育と保育：日系関連の教育施設を中心として」北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室『『調査と社会理論』・研究報告書』2008、pp. 123-132。

<sup>26</sup> Leiko Matsubara Morales, “The Nihongogakkô Communitarian Schools: Yesterday and Today”, Tizuko Morchida Kishimoto & Zeila de Brito Fabri Demartini, *Education and Culture: Brazil and Japan*, 2012, pp. 187-208。

ル現地でのサンパウロ農事実習場（エメボイ実習農場史：Instituto de Prática Agrícola de São Paulo）<sup>27</sup>等のサンパウロがやはり中心であった。ただし、学校外で取り組まれてきた教育に関する研究で、特にブラジルアマゾン地域における日系移民の学校外の教育に関する研究は管見の限り見当たらない<sup>28</sup>。

では、学校の外で教育が実践されてこなかったのかといえ、そうではないだろう。近代的な学校教育制度ないしはそのインフラとしての学校や教室等が未整備だった特に農村地域においても教育が取り組まれていたことは容易に想像がつく。また、ブラジルアマゾンへ渡った移民に限っては、経済的な理由や学校との物理的な距離等を理由に、学校で教育を受ける権利を行使することができなかったものの方が大半だったため、学校教育よりも学校外の教育ないしは学習活動の方が盛んだったことは想像に難くない。つまり、日系移民による教育ないしは学習を学校教育にのみ矮小化して語ることは、日系移民らの教育実践の理解を困難にしてしまうだろう。以上の理由から本稿では、ブラジルアマゾン、特に1929年にアマゾン地域で最初に移民が入植したトメアスーにおいて取り組まれた教育（ただし、公的な学校と日本語学校（フォーマル教育）とノンフォーマルな教育）に着目し、その総体を明らかにすることにした。

なお、本稿ではノンフォーマル教育を「正規の学校において取り組まれる定型的教育外の全ての教育活動」<sup>29</sup>と定義する。ここでいう「正規」とは、公権力による認可、つまり国や地方自治体、ないしはそうした組織が未整備である地域においては、それに代わる組織等が定めた枠組みのなかで運営される学校を意味する。つまり、フォーマルな教育（定型的教育）とは、一定程度体系だった脱文脈化されたカリキュラムに沿って、学校ないしは教室というインフラが整備された場所において、教師が生徒（学習者）に教育するという形態を意味する。したがって、本稿では特に学校教育と日本語教育をフォーマルな教育とし、それ以外に「非正規」で且つ定型化されずに実践された教育をノンフォーマルな教育、ないしはノンフォーマル教育として定義する。

なお、トメアスーの学校教育について議論するうえでブラジルの教育制度を整理しておきたい。そもそもブラジルで教育基本法（Lei de Diretrizes e Bases da Educação）が確立したのは1961年である。

<sup>27</sup> エメボイ実習農場については、増田秀一の労作『エメボイ実習農場史』（1981）を参照。

<sup>28</sup> ブラジルアマゾンの日系移民ではなくブラジル人によるノンフォーマル教育・社会教育研究については、田村梨花の「モヴィメント・レプブリカ・デ・エマウスーブラジルのコミュニティ教育の実践―」（江原裕美編『内発的發展と教育：人間主体の社会変革とNGOの地平』新評論、2003、pp. 171-179）や、田村梨花「NGOによる教育実践と子どものエンパワーメント」（篠田武司・宇佐見耕一編『安心社会を創る：ラテン・アメリカ市民社会の挑戦に学ぶ』新評論、2009、pp. 175-201）等がある。また、ブラジルアマゾンに限らずブラジル全土を見渡せば、ノンフォーマル教育に関する研究としては、例えば公的な成人教育に対抗し、それが軽視してきた空間に活動の場を広げる民衆教育の歴史と現状に関するモアシル・ガドッチ（野元弘幸訳）「ラテンアメリカにおける民衆教育の歴史と思想」（江原裕美編『内発的發展と教育』新評論、2003、pp. 356 - 382）の議論や、近年の民衆教育運動と公権力との関係性を論じた二井紀美子「ブラジルの生涯学習：1985年民政移管後の民衆教育を中心に」（名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯・キャリア教育研究センター『生涯学習・キャリア教育研究』2009、pp. 17-26）、また民衆教育としての識字教育の研究として、二井紀美子「ブラジルの識字教育―連邦直轄区の取り組みを中心に―」（新海英行・松田武雄編著『世界の生涯学習現状と課題』大学教育出版、2016、pp. 131-148）等多数ある。

<sup>29</sup> ノンフォーマル教育の定義を整理したものとしては、丸山英樹・太田美幸編『ノンフォーマル教育の可能性―リアルな生活に根ざす教育へ』（新評論、2013）を参照。

その後、表 2 のブラジルにおける教育制度の変遷のとおり、1971 年と 1996 年に大きく教育制度が変更した。2006 年には法律 11.274 号により義務教育課程が 8 年から 9 年に拡大され、2013 年には初等教育だけでなく、4-5 歳時の幼児教育や中等教育を含めた中等教育までも含めた合計 14 年が義務教育となり現行制度となっている。ブラジルでは帝政時代（1822-1889）から法制度上の初等教育の無償化は謳われていたが、1988 年憲法第 206 条に公教育の無償が規定された。公立学校の学費は一般的に無料で、授業は 1 日に 2 部（午前と午後）ないしは 3 部（午前と午後、夜）に分かれている。

1961 年制定の教育基本法に基づく教育制度			1971 年改正に基づく教育制度		
教育段階		年限	年齢	教育段階	年限 年齢
幼稚園 Pré-escola		3	4-6	幼稚園 Pré-escola	3 4-6
初等教育 Ensino Primário		4	7-10	第 1 課程（義務教育） Ensino de Primeiro Grau	8 7-14
中等教育 Ensino Médio	前期 Ginásio	4	11-14	第 2 課程 Ensino de Segundo Grau	3 15-17
	後期 Colégio	3	15-17		
高等教育 Ensino Superior		不定	18-	第 3 課程 Terceiro Grau	4- 17-

1996 年改正に基づく教育制度					2006 年改正に基づく教育制度	
教育段階		教育施設	年限	年齢	年限	年齢
基礎教育 Educação Básica	就学前教育 Educação infantil	保育園 Creche	4	0-3	4	0-3
		幼稚園 Pré-escola	3	4-6	2	4-5
		初等教育（義務教育） Ensino Fundamental	8	7-14	9	6-14
	中等教育 Ensino Médio	中等学校 Escola Secundária	3	15-17	3	15-17
高等教育 Educação Superior		大学 Graduação 大学院 Pós-graduação		18-		18-

2013 年に承認された 12.796 法案に基づく 2016 年現在の教育制度			
教育段階		教育施設	年限 年齢
幼児教育（Educação infantil）		保育園や幼稚園 Creche Pré-scolas 等	4 0-3
基礎教育 （義務教育） Educação Básica	就学前教育 Pré-escola	上記と同様	2 4-5
	初等教育 Ensino Fundamental	初等学校 Escola Primária	9 6-14
	中等教育 Ensino Médio	中等学校 Escola Secundária	3 15-17
高等教育 Educação Superior		大学 Graduação 大学院 Pós-graduação	18-

表2 ブラジルにおける教育制度の変遷

(出典) 外務省「諸外国・地域の学校情報」

([http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/04latinamerica/infoC42700.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/04latinamerica/infoC42700.html)) (2017年5月1日閲覧)並びに、平成25年度文部科学省生涯学習政策局政策課教育改革推進室改革企画係委託事業「教育改革の総合的推進に関する調査研究～諸外国における学制に関する改革の状況調査～」等より筆者作成。なお、塗りつぶしてあるところが義務教育部分である。

## (2) unlearnの理論・実証研究に取り組む意義

本稿では、学校型教育モデルを問い直す学習として注目される unlearn (アンラーン・アンラーニング) に着目し、unlearn を分析枠組みとしてトメアスーにおける農家の教育や学習を分析する。unlearn とは、learn に「(ある行為・状態の)逆・否定・除去・奪取・解放」を意味する接頭語の un がついた単語である。日本語では「(学んだこと)を忘れる」や「学習棄却」「逆学習」と訳されることが多い。unlearn は葡西伊仏語等にも同義語があり、ライフヒストリー研究や生涯教育学習等の分野で研究するフランスのガストン・ピノーも自著において“desapprendre”と用いている<sup>30</sup>。

unlearn という言葉は、ユネスコ等の国際機関や成人教育・運動、生涯学習においても印象的に用いられている。例えば1997年の「成人の学習に関するハンプブルグ宣言」が採択された“Final Report Fifth International Conference on Adult Education” (第5回ユネスコ成人教育会議最終報告書) には、「教育の権利も含む多様な権利を剥奪され差別されるマイノリティーに対し、マジョリティーは文化の多様性を尊重しつつ共感を持って知識を獲得しながら、そのマイノリティーに向けられる差別的な概念を unlearn する必要がある」という記述がある<sup>31</sup>。また、当時成人教育国際協議会 (ICAE; The International Council for Adult Education) の会長だったインド出身のラリタ・ラムダス (Lalita Ramdas) も、成人教育・生涯学習において「人びとの状況に厳しい影響を与えているグローバル化、構造調整等のマクロ政策は、今日では学歴と富と権力を持った人びとによって進められているのですから、我われが習得したことをいったん忘れ (unlearning)、問い直す過程は極めて重要だと言うことです」と述べ、高学歴者・資本家・権力者の再教育として、「未来へのアジェンダ」において「教育を受けた人びとの再教育—かつて学んだことをふりほどき、忘れる (unlearning) ことと学習し直すことの大切さ」を含むべきだとする<sup>32</sup>。また、世界の多国籍企業のリーダーや先進国関係者が集まるダボス会議に対して、反グローバル化運動に取り組む活動家や思想家、研究者らの集う世界社会フォーラム (WSF; World Social Forum) <sup>33</sup>があるが、2004年にムンバイで開かれた本フォーラムでは unlearn というタイトルの

<sup>30</sup> 前平泰志「〈講演記録〉ガストン・ピノーを語る：人と仕事」京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』2010、pp. 177-184。

(<http://hdl.handle.net/2433/109751>) (2011年10月22日閲覧)

<sup>31</sup> UNESCO, *Final Report -Fifth International Conference on Adult Education*, Hamburg, Germany, 14-18, July 1997, p. 21 (<http://www.unesco.org/education/uie/confintea/documents.html>) (2016年5月1日閲覧)。

<sup>32</sup> ラリタ・ラムダス (園崎寿子訳)「「開会式講演 成人教育・生涯学習・グローバルな知識への挑戦とその可能性」特集「抑圧者の教育学」へ向けての一步 第5回ユネスコ国際成人教育会議」『人権教育』明治図書出版、1997、pp. 48-56。

<sup>33</sup> 世界社会フォーラムとは2001年にブラジルのリオグランデ・ド・スル (Rio Grande do Sul) 州の州

ワークショップが開催され、またそれ自体が1つの重要な鍵概念としてフォーラム内で扱われている<sup>34</sup>。

日本国内でもunlearnという単語は注目され広く用いられている。例えば、移民・グローバリゼーションを研究する伊豫谷は、これまで人の移動ないしは移民に関する研究は一時的・例外的な出来事で正常(定住)からの逸脱と認識され、且つその分析枠組みはナショナル(国家)という範疇に制約されてきたと述べる。そして「「グローバリゼーション」への関心から人の移動を再構成しようとする、あるいはこれまでの移民研究を学び捨てる(アンラーニング)ための試み」<sup>35</sup>としての移民研究、つまり、場所をとらえ直すための移動を研究する意義を論じている。また、次章でも論じる教育学者の楠原彰は、鶴見俊輔が提唱したunlearnを鍵概念に自らの大学での教育実践を想起し、学生たちがこれまで不可視化してきた隣人や他者、世界といかに向き合い、それらから学生と楠原自身がいかに学んできたのかについて明らかにしている<sup>36</sup>。歴史学の分野においてunlearnを印象的に用いたのは、酒井直樹である。酒井は「国民主義の歴史学」や「国民国家の歴史叙述」を批判する取り組み自体を、後述するアメリカの比較文学者・フェミニストであるガヤトリ・スピヴァクが度々用いているunlearnを踏まえ、近代の歴史を再帰的に再歴史化する作業をおこなっている<sup>37</sup>。教育学においては、例えば朝岡幸彦は新自由主義やグローバリゼーションが加速度的に進む現代社会において、スピヴァクによるunlearnの重要性を指摘している<sup>38</sup>。

ただし、これらすべてに共通する点としては、unlearnを印象的に用いられている度合いが強く、そもそもunlearnとは何なのか、どうすれば「unlearnした」と言えるのかが具体的かつ実証的に論じられていないことがあげられる。また、日本国内におけるunlearnの議論で特に影響力を有したであろう鶴見俊輔やガヤトリ・スピヴァク等のunlearnの違いや共通点の整理等の構造化はこれまでなされてこなかった。したがって、unlearnはある種の使いやすいマジックワードとして印象的に用いられることで、理論整理等なされぬまま手垢にまみれた単語になってしまったとも言える。

このようにunlearnが理論的に不明瞭で且つ未整理な単語であるにも拘わらず、なぜこれだけ世界ないしは日本で注目され用いられているのか。そもそも、unlearnは単語の構造として、learnの批判・否定・解放等の意味を有して存在していることは既に述べた。つまり、unlearnはlearnへの批判や否定によって生じた言葉だと考えられるだろう。

---

都ポルト・アレグレ (Porto Alegre) によってはじめて開催されたフォーラムである。世界のNGOや協同組合等によって組織される。自己教育的ネットワークとしてWSFの可能性を明らかにしたものに吉田正純「「世界社会フォーラム」と成人教育 「もうひとつのグローバリゼーション」のための教育は可能か？」日本社会教育学会編『グローバリゼーションと社会教育・生涯学習』(東洋館出版社、2005、pp. 215-227)がある。

<sup>34</sup> Jose Maria Ramos, “The Mumbai World Social Forum: Alternative Futures from the Grassroots”, *Journal of Futures Studies*, 2004, 8(4), pp. 103-110

(<http://jfsdigital.org/wp-content/uploads/2014/07/84-R02.pdf>) (2016年6月10日閲覧)

<sup>35</sup> 伊豫谷登士翁「方法としての移民 移動から場をとらえる」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』(有信堂、2007、p. 3)。

<sup>36</sup> 楠原彰『学ぶ、向き合う、生きる 大学での「学びほぐし(アンラーン)」: 精神の地動説のほうへ』太郎次郎社エディタス、2013。

<sup>37</sup> 酒井直樹『ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』東京大学出版会、2006。

<sup>38</sup> 朝岡幸彦「グローバリゼーションのもとでの環境教育・持続可能な開発のための教育(ESD)」日本教育学会編『教育学研究』72(4)、2005、pp. 112-125。

では、既存の社会においてlearnはなぜ批判されているのか。たとえば、社会構造上もっともlearnがすすめられ且つ議論される学校教育に着目するとき、ブラジルの教育学者であるパウロ・フレイレ (Paulo Freire) (1921-1997) の「銀行型教育」(Banking Education) 批判を踏まえると分かりやすい。フレイレは、既存の多くの学校教育が推し進める知識や学習の画一化や学習者(学校での生徒)を客体化して学習者の主体性を収奪する他律的な教育を銀行型教育として批判した<sup>39</sup>。つまり、学校教育におけるlearnはしばしば「教えるもの」による他律的な営みと化し、学習者の主体性は発揮されにくく、知識は詰め込むことを重視した脱文脈化・画一化されたものだと考えられている。

こうした現状を踏まえ、社会教育や生涯学習においては教育の在り方を変容するための新たな学習モデルの探究がすすんでいる。しかし「教育」という概して他律的・権威的な「教える」行為が介在する場面を想定する場合、生活のなかで学習が生起し意味づけられるといった個々人の経験に即した形での学習を捉えるには限界がある<sup>40</sup>。またこうした教育概念では、「与え」「獲得する」ものとして固定的に認識された知識を捉えなおすことも難しい。

つまり、unlearnが印象的にしばしば用いられている背景の1つとして、フレイレが「銀行型教育」を批判してから半世紀たったものの、今なおlearnが中心となる教育においてそれとは異なる教育や学習の在り方が待望されているという現状があると言える。このような現状を踏まえるならば、learnを“un”するという期待を持ってしばしば用いられるunlearnの理論的枠組みの整理や実証的な研究はこの現代社会において必須であると言えるだろう。したがって、本稿ではunlearnの議論の整理を通じた理論研究並びに実証研究までも取り組むことにする。

## 第2節 研究地域の概要並びに研究方法

本稿で検討する地域のブラジルアマゾンのパラ州 (Pará) トメアスー (Tomé-Açu) は、ブラジル北部の法定アマゾン領<sup>41</sup>に位置し、1929年以降に日本人移民が入植し開拓された移住地である。もともとはアカラ郡 (Acará) であったが、市制改変で1959年に独立する。アマゾン河口部のパラ州の州都ベレン (Belém) からは南方約110kmに位置し、ベレンとトメアスー間は陸路で約250kmある。陸路の途中ではグアマ川 (Guamá) をフェリー (balsa) で渡らなければならない。1973年にベレン-トメアスー間の道路が開通するまでは水路の交通手段しかなく、片道で約15時間かかっていたため「陸の孤島」と呼ばれていた。

<sup>39</sup> パウロ・フレイレ (三砂ちづる訳) 『被抑圧者の教育学』亜紀書房、2010を参照。

<sup>40</sup> 津田英二「学ぶ側に視点を置いた理論」末本誠・松田武雄編著『新版 生涯学習と地域社会教育』春風社、2010。pp.167-189。

<sup>41</sup> 法定アマゾン (Amazônia Legal) とは、1953年に設立したアマゾン経済開発庁 (SPVEA ; A Superintendência do Plano de Valorização Econômica da Amazônia) によって地域区分された地域である。従来のアマゾン地域 (古典的アマゾン) であるアクレ (Acre)、アマパ (Amapá)、アマゾナス (Amazonas)、パラ (Pará)、ロンドニア (Rondônia)、ロライマ (Roraima) に加え、マラニョン (Maranhão) の一部とマツグロッソ (Mato Grosso)、トカンチンス (Tocantins) の9州を指す。約500万キロ平方メートルありブラジル国土の約60%を占める。



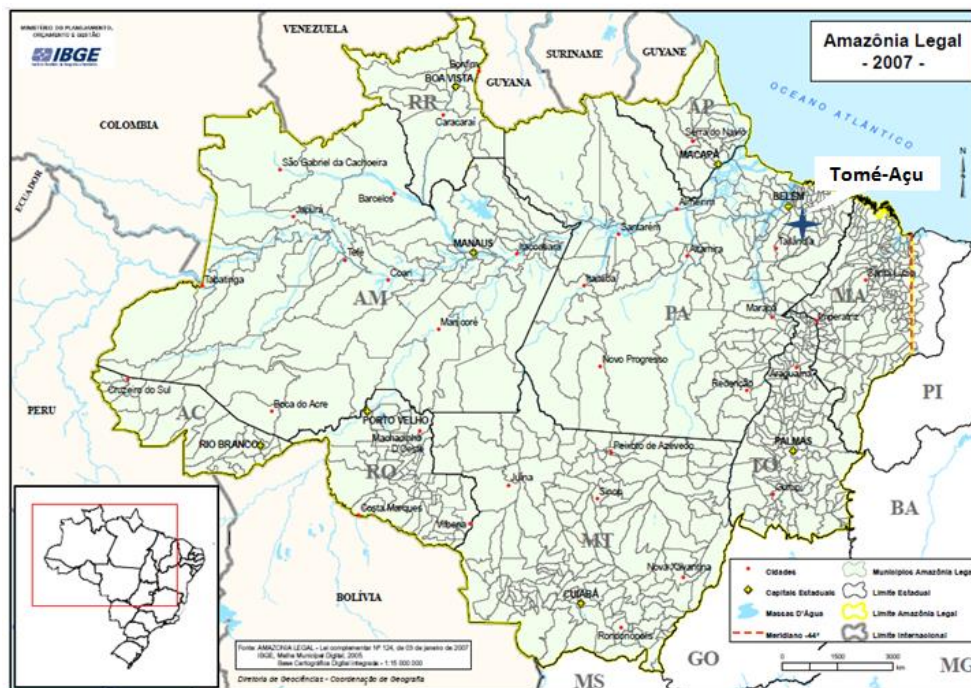


図1 ブラジル法定アマゾン領とトメアスーの地図

(出典) ブラジル地理統計院(IBGE ; Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística)に加筆

トメアスーは5,145km<sup>2</sup>と広大な面積を有する郡であり、年間降水量2,600mmの熱帯性気候に属し、高温多湿で12月から5月までが雨期、6月から11月までが乾期となっている。トメアスーの市街地はトメアスー地区と「十字路」という意味のクワトロ・ボッカス(Quatro Bocas)地区の2つがあり、両地区に郡内人口の大半が居住している。トメアスー地区には行政や司法領域の諸機関が存在する。一方で移住地の中心であるクワトロ・ボッカス地区は、経済領域の様々な機関や商店が集中している。

ブラジル地理統計院による統計によれば、2010年には約56,000人が居住している。1991年の国際協力事業団(現在の国際協力機構)による報告書『移住事業国別調査報告書(北部ブラジル)』によれば、当時約1,300名の日本人移住者・日系ブラジル人がトメアスーに居住していた<sup>42</sup>。

トメアスーに日本人移民が開始されたのは1929年9月のことであり、戦前の1937年までには352家族2,104人が入植している。1941年に勃発した第二次世界大戦によって日本人の移民政策は中断するが、1952年に再開された後には、29家族181名が入植した。その後トメアスーに大きな富をもたらす胡椒栽培によって、戦後は日本に限らずブラジル全土から多くの日系人が入植している。

<sup>42</sup> 国際協力事業団『移住事業国別調査報告書(北部ブラジル)』1991、p.14。なお、2010年の地理統計院によるトメアスー人口の人種別構成によれば、白色系が10,977人、黒色系が4,414人、黄色系が770人、褐色系(混血は「褐色」として申告される)は40,057人、そして先住民が300人である。ただし、黄色系がすべて日系ブラジル人ということではなく、日系人の数を出すのは困難である。なぜなら、そもそも生物学的に「人種」というカテゴリーは存在せず非科学的な社会構成概念であるため、地理統計院が実施するこの国勢調査の「人種」「肌の色」は被調査者の自己申告制になっていることと、今日のブラジル社会においては日系人の同化も進行しているためである。



トメアスーに移住した日系移民によって今日営まれているのが、世界的に注目されるアグロフォレストリー(森林農業)である。アグロフォレストリーとは、「ある土地に少なくとも一種類の木本性作物(用材樹種、果樹、香木、蔓植物、ヤシ類を含む)を草本性作物や家畜、養殖魚と組み合わせて栽培する農法である」と言われている<sup>43</sup>。ただし本定義は一般的なもので、実際は地域ごとにその風土に即した方法が実践され、様々な形態がある。実践地域もアフリカや東南アジア、中南米等と多様であり、日本の里山や防風林などもアグロフォレストリーとして議論されている。本農法の利点は、土壌改良や肥倍効果、地力維持、持続的土地利用、治山治水効果など、多岐にわたる。

このようなアグロフォレストリー導入が農家の生活の安定性に及ぼす影響について、中央アメリカとカリブ海諸国において調査をおこなったDean CurrentとErnst Lutzによれば、「収入面の多様化は大きな利点があるが、新規導入作物の環境適応性ととも、一方では干ばつに対する危険性や同伴作物との競合性、不安定な市場価格、樹木伐採の許可手続きや法制度上の問題点」が指摘されている<sup>44</sup>。

トメアスーで実践されているのは遷移型アグロフォレストリーである。この遷移型アグロフォレストリー(以下、アグロフォレストリー)は、二次林の植生遷移を模して有用植物の時系列的栽培を行うもので、植付けから収穫までの期間の異なる作物を混植する方法である。

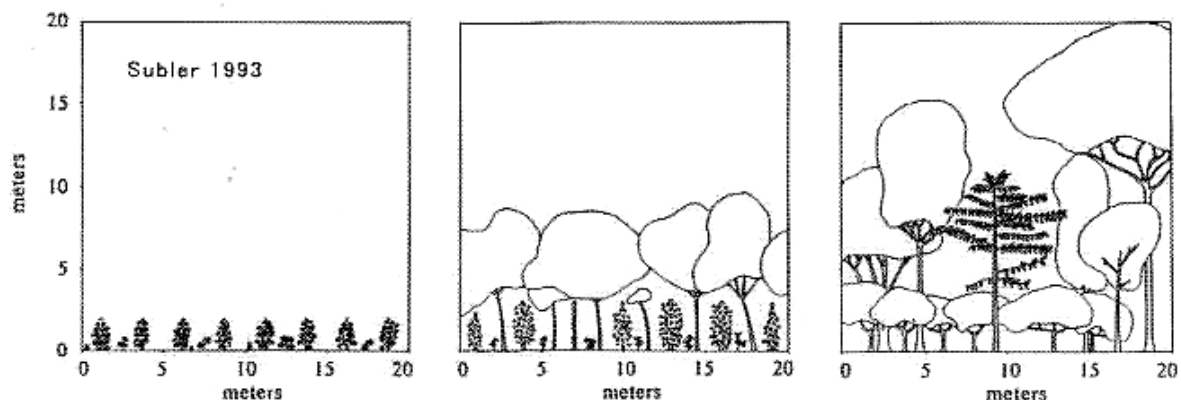


図2 遷移栽培の概念図

(出典) Subler、1993

トメアスーの日系人により営まれるアグロフォレストリーは、1耕地(25ha)の農業収入が、同地域の牧場経営単位と言われる1,000haに匹敵し、前者は常時1耕地あたり年間10人~20人を必要とすることから多くの雇用を創出する<sup>45</sup>。こうしたトメアスーのアグロフォレストリーは、生物多様性等の環境保全的側面だけでなく、農家の定住促進や雇用の創出、安定的な収入を担保する上でも持続可能な農業として注目されている。

<sup>43</sup> 内村悦三『実践的アグロフォレストリー・システム』国際緑化推進センター、2000。

<sup>44</sup> Dean Current, Ernst Lutz, Sara J. Scherr (林幸博訳)「アグロフォレストリーの農民の費用便益(The Cost and Benefits of Agroforestry to Farmers)」農政調査委員会『のびゆく農業—世界の農政—』No.857、1996。

<sup>45</sup> 西澤利栄、小池洋一、本郷豊、山田祐彰『アマゾン-保全と開発-』朝倉書店、2005、p.128。

このアグロフォレストリーについては、トメアスーに日本人移民の入植が開始された1929年から1990年代後半までの農業経営の歴史的展開並びにアグロフォレストリーの当時の現状を明らかにした山田祐彰 (Masaaki Yamada) の研究がある<sup>46</sup>。田中規子も、トメアスーにおけるアグロフォレストリーの歴史的発展について、トメアスー総合農業協同組合との関係から明らかにしている<sup>47</sup>。また、トメアスー入植地における農業の変容についてまとめた報告としては山本正三・松本栄次<sup>48</sup>や、トメアスー入植地にも言及しつつアマゾンの開発問題や保全について多角的学問領域から論じた、西沢利栄、本郷豊、山田祐彰、小池洋一による著作があげられる<sup>49</sup>。しかしながら、先述したようにトメアスーにおける公的な教育やノンフォーマル教育に関する研究や農業発展における教育や学習に焦点をあてた研究は管見の限り見当たらない。トメアスーでしばしば注目される農業発展と教育や学習の関係性も明らかにすることは、アグロフォレストリーの持続的発展や普及における実態を明らかにすることにもつながるだろう。

そもそも文化 (Culture) の語源がラテン語で「耕す」の意味を持つ “Colere” が有力とされるように、農村社会における「農耕・農業」は人類固有の営みである。人類はこの営みを基盤に食糧を自給し生活文化を形成してきた。生活文化においては、労働と生活が密接に結びつきそれ自体が農業に関する経験的な「知」や「技能」を創出していた。また、そうした知識や技能が生活をともにする人びとへと普及しそして個々人にあったかたちに咀嚼され、次世代へと受け継がれていった。つまり、農業やその発展段階においては「知」や「技能」を獲得するための学習やそれを共有するための共同学習が一般的であり、それらは農業を営むうえで必要不可欠であったに違いない。またそうした農業を営む人びとの学習は学校という制度が成立する以前から取り組まれてきた事実を考えれば、learnではなくそれを奪取・解放する営みとしてのunlearnの実践も展開していた可能性がある。そこで、本研究ではブラジルアマゾンへと渡った日系移民により実践されている公的な教育ならびに、農業の普及・発展過程に見られるノンフォーマル教育、そしてさらにその教育や共同学習等で営まれているunlearnに焦点を当てて分析していく。

本研究をすすめるため、unlearnの理論研究については、文献調査に依拠した。なお、トメアスーでの教育に関する調査は、2010年6月5日から12月19日と、2016年9月1日から9月9日までトメアスーに滞在した際に、参与観察を中心に聞き取り調査等を通じて実施した。また、2011年10月2日から2011年11月26日の約2カ月間、国際農林水産業研究センターを通じて国際アグロフォレストリー研究センター (ICRAF ; The World Agroforestry Centre) へ派遣された。そのさいに「アグロフォレストリーの基幹作物であるカカオの生産調査・認証制度に関する生産者意識調査」のためICRAFのあるベレンに約1カ月、トメアスーに約1カ月滞在しトメアスー総合農業協同組合 (CAMTA ; Cooperativa Agrícola Mista

<sup>46</sup> Masaaki Yamada, *Japanese immigrant agroforestry in the Brazilian Amazon : a case study of sustainable rural development in the tropics*, Ph.D. diss., University of Florida, 1999。この研究によってトメアスーのアグロフォレストリーが世界、特に日本で注目されたといつて良い。

<sup>47</sup> 田中規子「アマゾン地域における日系移民の農業展開と協同組合の役割 : トメアスー総合農業協同組合を事例として」『酪農学園大学紀要. 人文・社会科学編』24(2)、2000、pp. 289-340。

<sup>48</sup> 山本正三・松本栄次「アマゾン・トメアスー入植地における日系人農業の変容」独協大学経済学部『獨協経済』No. 70、1999、pp. 7-15。

<sup>49</sup> 西沢利栄、小池洋一、本郷豊、山田祐彰『アマゾン-保全と開発-』朝倉書店、2005。

de Tomé-açu) (以下、CAMTA) の日系組合員26名を対象に聞き取り調査を実施したが、その際にも本研究のため時間外に別途参与観察や聞き取り調査を実施した。

トメアスーの日系移民の歴史やアグロフォレストリーに関する文献資料は、主に1992年から現在まで当該地域で丹念な調査をおこなった山田祐彰や田中規子の論文、CAMTAが組合員のために発刊していた機関広報誌の『トメアスー (新聞)』並びに『緑風』<sup>50</sup>、『トメアスー組合だより』『Jornal Camta』、その他に国際協力機構等の事業報告書を参考にした。

トメアスーの農家による unlearn の実証研究においては、筆者がトメアスーで実施した聞き取り調査や、関連する新聞記事や文献資料等を基に複合的な手法を用いて取り組んだ。

以上が本研究の目的と方法、並びに対象とする地域である。最後に本稿における3つの課題を改めて確認しておきたい。まず1つは、ブラジリアマゾンのパラ州トメアスーにおいて日系移民により組み込まれてきた教育実践(学校教育と日本語教育、そして非定型(ノンフォーマル)な教育)を見取り図的に描き出すこと。2つめは、近年注目されている unlearn の理論的枠組みを明らかにすること。そして最後に、トメアスーへと移住した日系移民による教育や学習の内実について、unlearn を通じて実証的に明らかにすることである。これらの作業を通じて、ブラジルの日系移民による教育の多層性がより一層鮮明に描くことができ、ブラジルへと渡った移民の教育実践の実相に接近することが可能となるだろう。また、unlearn の理論的枠組みから日系移民の学習の内実を可視化することで、トメアスーの農業開発、特にアグロフォレストリーの発展を駆動させる学習や教育の営みも解明できるはずである。

本稿の構成はつぎの通りである。第1章では、西欧の教育実践においてしばしば位置づけられている unlearn に関する議論を整理する。次に unlearn という言葉を日本に広く普及する契機をつくった哲学者や思想家からの unlearn の理論とその共通項や差異等を明らかにする。第2章では、ブラジリアマゾンのトメアスーへと渡った日系移民による学校教育と日本語教育の歴史的変遷を整理したのち、1980年代に取り組みされた日本語教育の児童生徒の作文分析を通じて、公的教育が有していた価値や方向性について明らかにする。第3章では、トメアスーへ入植した日系移民の農業開発の変遷と今日のアグロフォレストリーをめぐる現状を整理したのち、トメアスーの農業の発展ないしは展開に大きな影響を与えた国際協力事業団らの講習会やセミナー、CAMTA 教育委員会並びに農事部がすすめた営農指導や後継者育成、そして、トメアスーの篤農家による営農指導をノンフォーマル教育として分析しその実態を明らか

<sup>50</sup> トメアスーの新聞は、1965年にトメアスー産業組合従業員親睦会が機関紙として発刊した『緑風』に始まる。1965年3月30日に発刊されその当時は不定期に発刊されていた。しかし、編集部はトメアスーの公的報道機関として発展すべきという意図から通し番号を引き継いで1971年6月12日第35号から、トメアスー新聞編集部による『トメアスー (新聞)』へと発展的に改称した(1971年3月15日第34号の『緑風』には、一面に「緑風の脱皮」なる記事がある)。その後、胡椒の病害が広がったことによる経済の悪化と資金不足ならびにスタッフ不足もあって運営が困難になり1979年9月第79号まで継続したのち廃刊となった。トメアスー産業組合も、組合の教育委員会が中心となり1984年に機関紙『広報』を創刊し、その後は『トメアスー組合だより』や『組合広報』『Jornal Camta』と名称は変えながらも発刊し続けた。組合の機関紙については『Jornal Camta』の1995年5月号が、筆者がトメアスーでの調査を通じて確認できた最新のものとなる。トメアスー文化協会も『文化協会だより』を1992年から発刊していたが、筆者が存在を確認できたのは1号から3号までである。なお、深沢正雪は『緑風』は1972年10月15日第36号から『トメアスー』へ移行したと述べているが(深沢正雪「第2章日系メディア史」『ブラジル日本移民百年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史 第3巻 生活と文化 1』2010、pp. 180-182。)それは誤りであろう。

にする。第4章では第1章で明らかにした unlearn の枠組みに基づき、トメアスーの農業を発展・展開させる契機をつくったであろう3人の篤農家による営農や自然観、しばしば劣位に置かれるブラジル人への眼差しの変遷を踏まえたうえで、unlearn を実証的に明らかにする。

## 第1章 unlearn の特徴とその可能性

本章では、まず多様な unlearn の実践が取り組まれている欧米でのその動向と特徴を明らかにする。次に、日本でも広く導入され思想や教育哲学等で議論されているガヤトリ・スピヴァクによる unlearn の概念の特徴とその可能性を提示する。そして、特に教育ないしは学習論という観点から日本独自の文脈において議論されている鶴見俊輔の unlearn、大江健三郎の unlearn と unteach、前平泰志の unlearn と〈ローカルな知〉、そして、学校教育現場での unlearn に関する議論を整理し、それぞれの特徴や共通項を探る。

### 第1節 欧米における unlearn の議論と実践

欧米における unlearn の実践は、主に（１）人種主義・白人優越主義、（２）セクシャリティー・異性愛主義、（３）先住民や移民・難民、移動民族（ジプシーやアイランドのトラベラーズ等）に対する偏見・差別の３つの文脈に整理することができる。

#### （１）人種主義・白人優越主義

まず１つは、人種主義・白人優越主義に対する unlearn である。人種主義・白人優越主義における unlearn の実践研究としては、Chara Riegel による仏教哲学や自然観、人生観を学びアメリカの人種主義を unlearn しようとした研究がある<sup>1</sup>。また、Christian Stokke は、ヨーロッパ中心主義や白人優越主義に対して「精神的奴隷からの解放」を目的とするラスタファリ運動フォーラムで実践された議論に unlearn の可能性を見出す研究などが多数ある<sup>2</sup>。例えば Marilyn Cochran-Smith は、2000 年に発表した“Blind Vision: Unlearning Racism in Teacher Education”において、教師教育で用いられる教材ないしは実践は人種主義（白人優越主義）が通底していることを明らかにしている。それを踏まえて Marilyn は自らが教師教育実践で教員を目指す生徒の人種主義（レイシズム）を unlearn しようと試みた結果、生徒に生じた誤解や不和、ないしは生徒自身の人種主義という前提の強化に至った失敗を自己の語りをもとに分析し、だからこそ教師教育においては unlearn に絶え間無く取り組む必要があると述べた<sup>3</sup>。また、Marilyn は、unlearn という行為が、自らが教師教育の実践のなかで人種、人種主義、社会正義等に関して生徒自らが持つ仮説・固定概念を批判的に探究し続ける過程であるとして、その方法論として教師と生徒が社会的・政治的視点を持ち批判的に実践から学び探究していく“Inquiry as stance”を提唱している<sup>4</sup>。

アメリカ在住の白人が自らの白人優越主義を理解するために unlearn の必要性を

---

<sup>1</sup> Riegel, Chara Joy, *Buddhist philosophy and practices as applied to unlearning racism*, Smith College School for Social Work Northampton, Massachusetts, 2008(<http://scholarworks.smith.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=2335&context=theses>) (2017 年 3 月 1 日閲覧)。

<sup>2</sup> Stokke, Christian, *Unlearning White Superiority Consciousness-raising on an online Rastafari Reasoning Forum*, Department of Social Anthropology University of Oslo, 2005(<https://www.duo.uio.no/bitstream/handle/10852/16448/Stokke2005.pdf?sequence=1&isAllowed=y>) (2017 年 3 月 1 日閲覧)。

<sup>3</sup> Marilyn Cochran-Smith, “Blind Vision: Unlearning Racism in Teacher Education”, *Harvard Educational Review*, Vol.70, 2000, pp.157-190.

<sup>4</sup> Marilyn Cochran-Smith, “Learning and unlearning: The education of teacher educators” *Teaching and Teacher Education*, No.19, 2003, pp.5-28.

述べたのは Carole Barlas らである。彼女らは学生だけで構成されるグループをつくった。そして、参加者自らが課題設定や議論方法などを検討し進める参加型協同探究手法 (Cooperative Inquiry) を用いて、参加者の白人優越主義に関する日々の意識変化を追った。具体的には、参加者同士が人種主義に関係する自らの経験をそれぞれ振り返りながら、他者とその思いを共有していく共同作業を通じて、白人と非白人間の参加者の意識と態度がいかに変化していったのかを分析したのである。本手法により、差別されていると考えていた非白人側にもその差別意識や白人優越主義が内在していた事実が明らかになっている。Carole らの論文では、白人優越主義に関わる経験や思いを学習者が他者と共有して学習していく過程を unlearn としている<sup>5</sup>。

Stéphanie Wahab と Sunshine “Sunny” T. Gibson は、自分が関わった行為や体験のナラティブなアプローチ (記述) として分析するオートエスノグラフィー (auto-ethnography) 実践を通じて unlearn を試みた。両研究者は 2 日半催されていた “Unlearning Racism” というワークショップに参加した。そこでの参加者とのやり取りを通じて、人種主義に関して自らが感じた不安や戸惑い、怒りなどを 18 カ月以上もの歳月を通じて記述し両者が共有することで、人種や白人優越主義に対する自らの考え方や自己の経験を振り返るだけではなく、社会や文化、人生そのものも概観している。以上の実践を両者は有機的・体系的な「2 枚の布地の間に羊毛・羽毛・化繊綿などの詰め物を入れ指し縫いする (Quilting) 過程」として紹介している<sup>6</sup>。

主に幼児教育を中心に取り組む反レイシズムネットワーク (Early Years Trainers Anti Racist Network) の創設者 バベット・ブラウン (Babette Brown) による unlearn 実践も特筆すべきであろう。彼女は、幼児教育において多様な差別、その中でも人種主義や白人優越思想を unlearn する必要性があるとしている<sup>78</sup>。例えばバベットは、人種主義・白人優越思想についての学習プロセスをダーマン・スパークス (Derman Sparks) の議論をもとに描き出している。その段階としては、第一段階として、奴隷制の話を持ち出すと「過去に起こった出来事をどうして穿り返すのか」や「(特に白人系の人びとは) 今を生きる私たちとは関係ない」等の「否定・抵抗

(Denial/Resistance)」感情を示すという。その際には有色・黒人とされる側の子どもたちも、「私は人種主義/差別なんて経験したことがない」「よけいなめめ事を起こさないでほしい」と主張したり、また「白人の立場性への同化/疎外感」を表すという。第二段階としては、白人の立場性に依拠する側が制度的人種主義の存在する現実を直視し、白人の立場性を再検討したり、また有色・黒人の人びとに対して何をしたいのか話すよう求める等の「戸惑い・不安定 (Disequilibrium)」があるとし

<sup>5</sup> Barlas, C. Kasl, E. Kyle, R. MacLeod, A. Paxton, D. Rosenwasser, P. and Sartor, L, *Learning to Unlearn White Supremacist Consciousness*, California Institute of Integral Studies, 2000 (2017 年 3 月 1 日閲覧)。

<sup>6</sup> Stéphanie Wahab, Sunshine “Sunny” T. Gibson, “Hybrid Chronicles: Biracial and Biethnic Perspectives on the Pedagogy of Unlearning Racism” *The Qualitative Report*, Vol.12, Number3, 2007, pp.414-429。ただし、両者は非白人である人びととの対話を通じてレイシズムを unlearn しようとする営為が、非白人の過去の辛い経験を想起させ、逆に白人の特権性、優位性を強固にしてしまうこともあると留意する必要性を述べている。そのため非白人がレイシズムによって経験した辛さ苦しみを再度味わうことなく、いかにして白人がレイシズムの存在やそのもたらす影響を理解できるようサポートするのが重要だとしている (p.426)。

<sup>7</sup> Brown, B. *Unlearning discrimination in the early years* Trentham Books, 1998.

<sup>8</sup> なお、バベットは「階級」差別についても一部言及してはいるが (p.4 等)、それを unlearn するための実践にまでは踏み込んで議論をしていない。

ている。その際の有色・黒人側の立場にいる子どもは、人種主義に基づく古い傷跡を確認したり、内面化された抑圧への気づき、白人性に依拠する人々や社会変化が緩慢なことへのいら立ちの感覚が見られるという。そして最後の段階として、「再構築 (Reconstruction)」があげられる。白人の子どもたちは、人種主義の歴史やその力学を学ぶことで、白人の特権性や制度的人種主義の存在を受け入れ始めたり、社会に対する新たな見方を構築したり、有色・黒人とされる人びととより対等で自己省察的な関係性を構築するとしている。有色・黒人とされる人びともまた、制度的な人種主義の現状を理解し、自らが関わるグループの歴史や文化について学び、人種主義を超えた連携・協力をはかることができるようになるとしている。

## (2) セクシャリティーと異性愛主義

Tamara Priestley は、異性愛者が同性愛者を認め受容するに至るまでの過程を明らかにした<sup>9</sup>。Tamara は、異性愛者の意識の根底には異性愛者主義 (ヘテロセクシュアリズム) が存在しており、それは学校において意識化され意識深くに根を下ろしているため、そうした事実を客観・批判的に学ぶ過程を unlearn と述べている。

セクシャルマイノリティーの若者らによるグループをつくり、自らのセクシャリティーやジェンダーの問題を如何に unlearn できるのか、レイブとウェンガーの「状況に埋め込まれた学習」(situated learning theory) 概念を用いて考察したのは Erin G. Cross である<sup>10,11</sup>。Erin G. Cross はこのグループを実践共同体 (community of practice) としてとらえ、クィア (Queer)<sup>12</sup>として大半を占める参加者が義務的な異性愛主義を強制されずに安心して話ができる (参加できる) ような環境の醸成を促しながら、他の参加者との学習活動と彼ら・彼女ら自身の変容過程を分析した。結果としては、いくら異性愛主義が強制されない環境の醸成を心がけたとしても、社会・歴史的にある種の普遍性として刷り込まれている異性愛主義に基づく知識や言語によって制限が加わり、異性愛主義的なルールや思考を十分に unlearn することができなかったことを明らかにしている。以上の経験を踏まえて Erin は異性愛主義と性別二元論が学習にもたらす影響の大きさと、セクシャルマイノリティーの学生たちにとって自らのアイデンティティーに関する問題を何の制約にもとらわれず自由に議論できる環境がいかに重要であるかを論じている。

## (3) 先住民や移民・難民

アメリカンインディアン (American Indian)<sup>13</sup>が自らの言語を学ぶ時に、最初に覚えた英語がいかにその学びを妨げるのかを研究したのは Veronica Carpenter であ

<sup>9</sup> Priestley, T, *Learning to Unlearn: A Case Study of the Initial Rejection and Subsequent Acceptance of Homosexuality by Heterosexuals*, Teachers College, Columbia University, 2009.

<sup>10</sup> Cross, Erin G, *Gender (in)Query: Young Adults Learning, Unlearning, and Relearning Gender in a Queer Majority Space*. 2010, Publicly accessible Penn Dissertations

Paper. (<http://repository.upenn.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1269&context=edissertations>) (2017 年 3 月 1 日閲覧)

<sup>11</sup> レイブ & ウェンガー (佐伯胖訳) 『状況に埋め込まれた学習』産業図書、1993。

<sup>12</sup> Queer とはそもそも「奇妙な」「風変わりな」「変な」を意味する言葉で同性愛者を侮辱する言葉であった。今日では、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー等の分断化されるセクシャルマイノリティーの人びとの連帯を可能する言葉だと認識されている (河口和也『クィア・スタディーズ』岩波書店、2003)。

<sup>13</sup> 原文に American Indian と記載されていたのでそのまま翻訳した。

る<sup>14</sup>。Veronica は、主に音声学・音韻論に基づき、英語とその先住民の言語の違いについて教師が教える必要性を論じた。Veronica は、このような学習過程を unlearn と述べており、教師は学習者に unlearn する方法を教える必要があるとしており、またこの手法は特に成人に対しても有効だと述べている。

カナダのブリティッシュコロンビア州教育委員会は、カナダが抱える先住民問題等について若者がよりよく考えられるよう“Unlearn Racism”というウェブサイトを開発した<sup>15</sup>。このウェブサイトでは、カナダの先住民子弟に対し教育やキリスト教化を効率的よくすすめるために設立された寄宿学校 (residential school) の功罪や、カナダハリファックスに 1812 年に建設された黒人コミュニティアフリクビル (afrierville) において 1964 年から 1967 年にかけて住民らが立ち退きを強いられた問題、様々な就労制限があり洗濯等の労働条件が厳しくカナダ市民が敬遠した仕事に就かざるを得なかった中国からの移民の事例等を通じて、現代社会にも人種主義や移民に対するステレオタイプが存在すること、そしてそれらを unlearn することの必要性をクイズ形式で分かりやすく説明している<sup>16</sup>。ウェブサイトには教員や親、ファシリテーターが教育現場で利用しやすいようにウェブサイトの取り扱いに関するガイドブックや、ゲストスピーカーのリスト、unlearn するための協働学習の方法やヒント等も記載されている。

#### (4) 欧米における unlearn に関する考察

以上、unlearn にかかる欧米の実践や研究動向を考察すると、どの実践においてもしばしば自明のものだとされるような社会状況（白人優越主義や異性愛主義、当たり前のこととして学ぶ英語、移民に対する偏見等）やそれを生み出す社会構造に対して疑問を抱き、批判的に捉え直すことを重要視している。その際に重要なのが自分自身と社会との関係である。unlearn はあくまでも自己と社会との関係性を内省的、自己省察的な営みとして問いながら進められている。つまり、社会のなかで自らが置かれた状況や社会生活を通じて得た知識・これから獲得しようとする知識を批判的に再考し、時には自らがこれまでの生涯で獲得してきた知識の解体を意図しつつ、自己や他者、そして社会全体へと働きかける試みと言えよう。なお、教師教育でも unlearn の実践がおこなわれている現状を踏まえると、学校教育においても unlearn を評価し取り入れようとする流れがあると言える。

---

<sup>14</sup> Carpenter, V, “Teaching Children to “Unlearn” the Sound of English”, *Teaching Indigenous Language* 1997, pp. 31-39. (<http://www.eric.ed.gov/PDFS/ED415062.pdf>) (2017 年 3 月 1 日閲覧)。

<sup>15</sup> “Unlearn Racism” の WEBSITE は <http://unlearnracism.ca/> (2016 年 11 月 1 日閲覧)

<sup>16</sup> カナダ政府は 2006 年に中国人移民への「人頭税」に対して公式に謝罪している。また、2008 年には先住民の子どもたちを家族から引き離し寄宿学校へ強制入学させたことに対して、2010 年にはアフリクビルからの立ち退き並びにその破壊についても謝罪している。したがって、unlearn の対象となるテーマはこうした政府の方針とも関連していると言えるだろう。なお、ボニー・マッケルヒニーはカナダのこうした謝罪の歴史を総括的に考察している。(ボニー・マッケルヒニー「ネオリベラル多文化主義とカナダの謝罪の時代」大阪大学未来戦略機構第五部門未来共生イノベーター博士課程プログラム『未来共生学』2016、pp. 33-68。)



## 第2節 ガヤトリ・スピヴァクによる unlearn

比較文学者ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク (Gayatri Chakravorty Spivak) (以下、ガヤトリ・スピヴァクないしはスピヴァクとする。) は1942年にインド西ベンガルに生まれ、現在はコロンビア大学で教鞭を取りながらポストコロニアリズムとフェミニズムの批評家として活動している。一方でスピヴァク自身は、世界で絶えず生じているサバルタン (国家が保障する権利を行使できずに排除される被抑圧者や下層民、ないしは社会的移動のラインから切り離された状態)<sup>17</sup>化にいかんにか歯止めをかけるのかという問題意識のもと、生まれ故郷である西ベンガル地方の貧しい農村地域において “the Pares Chandra and Sivani Chakravorty Memorial Rural Education Project” という非営利プロジェクトも実施している。スピヴァクは、このプロジェクトを通じて学校を組織・運営しながら、20年以上も現場で教鞭をとり、社会的排除問題としても考えられるサバルタン化と向きあっている。そんな彼女が『サバルタンは語ることができるか』において提唱した unlearn とは一体どういった概念なのか。本節では、この言葉が用いられた文脈を整理したのち、スピヴァクによる unlearn の理論的枠組みを明らかにする。

### (1) スピヴァクによる unlearn の理論的枠組み

#### ① サバルタン化をもたらす社会構造と自己との共犯関係の承認

スピヴァクは『サバルタンは語ることができるか』において、19世紀インドでヒンドゥー教徒の寡婦が亡くなった夫の火葬用の薪の上に登り、わが身を犠牲にするサティ (sati) (寡婦殉死) という儀礼に関する歴史的資料の読解を試みる。そしてスピヴァクは、当時インドの宗主国であったイギリスによってサティの廃止された史実が、イギリス人には「茶色い女性たちを茶色い男性たちから白人の男性たちが救い出した行為」と描かれ、また、インドの土着主義者らには、「女性たちは実際に死ぬことを望んでいた」と語られているとした<sup>18</sup>。その結果として、インドの女性たちは、自ら言葉を紡いでも耳を傾けられないがゆえに、発話不可能な状況におかれていると、スピヴァクは喝破したのである。つまり、スピヴァクは、インドの女性たちが植民地主義・帝国主義的言説によって「保護すべき犠牲者」として、また、家父長的言説により「女性の主体の形成・文化的英雄」として、一枚岩に客体化・表象されることで、応答責任を基礎としたサバルタン (彼女たち) による発話が成立しないことを明らかにしたのである。

本書においてスピヴァクは、第一世界の知識人とサバルタン化をもたらす社会構造との共犯関係を明らかにするため、ミシェル・フーコー (Michel Foucault) とジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) による、「知識人と権力」をめぐる対談もとりにあがる。スピヴァクは、両者がサバルタンを「自分たちの置かれている状態を語り知ることができる」と十把一絡げにし、尚且つ代弁可能であると認識することで、サバルタンは言葉を発しても耳を傾けられない状況に陥ることを指摘する<sup>19</sup>。また、スピヴァクは「イデオロギーの問題および彼ら自身が知的ならびに経済的な生産活動の歴史のなかに巻き込まれているということにまつわる問題については、(中略) これを一貫して無視し」ている点も同様に批判する<sup>20</sup>。つまり、スピヴァクによれ

<sup>17</sup> サバルタンの定義の詳細は、松田博「A・グラムシのサバルタン論の生成に関する覚書」立命館大学産業社会学会編『立命館産業社会論集』(第39巻第1号、2003、pp. 151-160) を参照。

<sup>18</sup> ガヤトリ・スピヴァク (上村忠男、本橋哲也訳)『ポストコロニアル理性批判 消え去りゆく現在の歴史の為に』月曜社、2003、pp. 415-416。

<sup>19</sup> ガヤトリ・スピヴァク、同上、2003、p. 388。

<sup>20</sup> ガヤトリ・スピヴァク、同上、2003、p. 358。

ば、第一世界が覇権を掌握する国際的分業に基づく搾取構造によってサバルタン化が進行しているにも拘わらず、両者は現状を無視し無色透明のように振る舞い、自文化中心主義を振りかざしながら、自分にとって都合の良い他者を一方的に表象しているのである。スピヴァクは、このような認識的暴力と、国際的分業の搾取構造を知識人としての両者が無視することで、サバルタン状態にある人々の声はききとられないため、両者こそがサバルタン化の片棒を担いでいると厳しく批判するのである。

したがって、スピヴァクは、サバルタンの存在が第一世界の知識人・研究者の特権による是認された無知 (sanctioned ignorance) によって作りだされることを承認したうえで、「(みずからが特権的に習得した知識を) 忘れ去ってみること

(unlearning)」の必要性を説くのである<sup>21</sup>。それは、第一世界の知識人が、サバルタンとしての第三世界の女性を一枚岩に表象・代弁することが可能な従属関係と、その支配構造の形成に「参与しているということを一もし必要ならば沈黙を測定することによって一研究の対象へと分節化」するなかで、自己の特権性を絶えず批判的に問う学習でもある<sup>22</sup>。

## ②サバルタンとの倫理的学習関係の構築に向けた想像力

スピヴァクが批判した特権的な立場にある人びとは、いかにしてサバルタンに語りかける術を学び、サバルタンをサバルタンに留めないような関係を構築できるのだろうか。スピヴァクによれば、その鍵概念は想像力であるとし、想像力を鍛える方法の1つとして、深い言語学習をあげている。なぜならスピヴァクは、一朝一夕では不可能な言語習得に向けた学習を通じて、「個々の語法(イディオム)の多様性と固有性」が、「言語の固有性を常に喚起し続ける」がゆえに、言語そのものの等価性を想像可能にすると考えるからである<sup>23</sup>。つまり、サバルタンの言語を学ぶ行為が、言語を成立させる歴史や国家、文化にしばしば付随する優位・劣位、同質・異質といった価値基準からの解放を促し、言語そのものの差異と等価性に価値をおく認識をより可能にするのである。言語学習において言語の等価性を見いだす営為とは、特権的な立場にいる知識人としての教育者・学習者らが、サバルタン状態を生み出す社会構造と共犯関係にあることを承認したうえで、不可視化・排除されるサバルタンに対し、語りかける術を学ぼうとする学習なのである。この営み自体は、最近のスピヴァクが、unlearn の同義語としてしばしば用いる “learning to learn from below” ((抑圧された状態、ないしは歴史的に沈黙させられてきたサバルタンという状態にある) 劣位におかれる人びとからどのように学ぶのかを学ぶ)」という表現からも類推可能なように、“below” の意味するサバルタンや他者に等価性を見いだしたうえで、応答責任を基礎にした学習関係を構築し、サバルタン状態からの解放に向けた倫理的関係性の問い直しをはかる営為である<sup>24</sup>。

<sup>21</sup> ガヤトリ・スピヴァク、同上、2003、p. 410。

<sup>22</sup> ガヤトリ・スピヴァク、同上、2003、p. 410。

<sup>23</sup> ガヤトリ・スピヴァク (鶴飼哲監修 本橋哲也、新田啓子、竹村和子、中井亜佐子共訳) 『スピヴァク、日本で語る』みすず書房、2009、p. 67。

<sup>24</sup> unlearn と “learning to learn from below” をスピヴァクが同義語として用いていることを指摘する資料としては、『スピヴァク、日本で語る』(2009、p. 54) や、思想家のオスカル・グアルディオラ-リベラ (Oscar Guardiola-Rivera) とのインタビュー ([www.nakedpunch.com/articles/21](http://www.nakedpunch.com/articles/21)) (2012年9月22日閲覧) でのやりとり等がある。他の研究者による指摘としては、Vanessa Andreotti, “An Ethical Engagement with the Other Spivak’s Ideas on Education” *Critical Literacy, Theories and Practices* 1(1), 2007, pp. 69-79) や、Ilan Kapoor,

“Hyper-self-reflexive development? Spivak on representing the Third World

このように、サバルタンをサバルタンたらしめる関係性の転覆を目指した学習関係においては、学校教育の「教師—生徒」や、共同学習の「学習者—学習者」といった、「今、ここ」の実践に携わる画一的な学習・教育主体だけでなく、「今、ここ」に存在しない・存在することがそもそも不可能な、サバルタン・他者へ想像力を傾けることを要する。換言すれば、このような学習関係には、サバルタン・他者との関係性の脱構築を目指した「起こりえたかもしれない歴史過程を、新たに創造するフィクショナルな想像力」<sup>25</sup>が常に求められるのである<sup>26</sup>。

一方でスピヴァクは、こうした働きかけがサバルタン・他者との学習関係構築を試みる自己を正統化する準拠枠とならぬよう注意しなければならないとしている。なぜなら、慈善や哀れみの対象としてサバルタンや他者を客体・道具と化す表象行為や他者解釈ないしは手を差し伸べようとする行為は、目には見えない相互依存関係や欺瞞をもって成立する以上、支配と従属という不均等な関係性からは逃れられず、常に自己中心的でサバルタンをサバルタンたらしめる契機を孕んでいるからである<sup>27</sup>。従属的な地位におかれる彼ら・彼女らを主体の眼差しのうちに取り込み、その言葉もまた主体の言語へと包摂してしまえば、応答責任に基づく関係は構築されない。したがって、崎山政毅が述べるように「われわれの今、ここでの言説空間を動かぬ起点として—「今ここ」の同一性に対する批判をまったく欠落させたままで—」実行される、「サバルタンのもとに出かける」といったような、サバルタン性の固定化に対する否認がまずもって重要だと言える<sup>28</sup>。

以上を踏まえてスピヴァクは、サバルタンや他者を生みだす現状の機制分析に留まることなく、知識人、教育者等の特権的な立場の自己批判的承認・解体に向けた自己の立場性に対する厳しいまでの批判的眼差しの維持、そして、そんな彼ら・彼女らに対する倫理的・能動的な働きかけを通じた学習関係の構築を目指して *unlearn* という言葉を用いている。

スピヴァクが *unlearn* を使用し始めたのは、そもそもイギリスにおけるニュー・レフト運動の指導者的立場でもあった「心から敬愛する人物」<sup>29</sup>の英文学者レイモンド・ウィリアムズ(Raymond Williams)の影響であったと考えられている<sup>30</sup>。*unlearn*

---

‘Other’”, *Third World Quarterly*, (4(25), 2004, pp. 627-647)がある。なお、Ilan Kapoor が、スピヴァクの *unlearn* が序章で取り上げたブラジルの教育学者であるパウロ・フレイレによる「被抑圧者と抑圧者（主体と客体）の弁証法」としての「意識化」に類似する点があると指摘しているのは、*unlearn* を考えるにあたって示唆に富むであろう（Ilan Kapoor、同上、p. 640）。

<sup>25</sup> 上村忠男、太田好信、本橋哲也「討議 スピヴァクあるいは発話の場のポリティクス」『現代思想』青土社、vol. 27-8、1999、p. 61。

<sup>26</sup> スピヴァクがサバルタンへの教育活動を「公的領域を求める民主主義的な行動習慣や思考」の育成であり「まだ見ぬものについて考えること」としての想像力教育であると論じている点からも理解できる（スピヴァク、前掲書、2009、p. 104）

<sup>27</sup> スピヴァクは“FEMINISM AND HUMAN RIGHTS”（N. Shaikh, *The Present as History: Critical Perspectives on Global Power*, Columbia University Press, 2007, pp. 172-201）において、グローバリゼーションによって不可避免的に生み出されるサバルタンに対し、慈悲・博愛の精神を持って *unlearn* や“learning to learn from below”して現状が解決できるほど単純ではないがゆえに、*unlearn* や“learning to learn from below”に賛同するのはたやすいが実践するのは困難であり、スピヴァク自らもそれに熟達していないことを述べている。

<sup>28</sup> 崎山政毅「文体に抗する「文体」—サバルタン研究の批判的再考のための覚書」『思想』岩波書店、1996、p. 168。

<sup>29</sup> ガヤトリ・スピヴァク、同上、2009、p. 75。

<sup>30</sup> 『ナショナリズムと想像力』を訳した鈴木英明も同様に指摘している（ガヤトリ・

は、イギリスにおける産業革命以降の社会的・経済的・政治的大変革と民主主義の発展を文化・文学論から批判的に分析した彼の著書“Culture and Society” (1958) (『文化と社会—1780 - 1950』(2008)) において印象的に用いられたものであった。本文では、当時の産業社会にある支配的モードから脱するためには古い固定概念やものの見方から脱しなければならないとして“yet still we have to unlearn, as the price of survival, the inherent dominative mode” と述べている<sup>31</sup>。

## (2) スピヴァクによる unlearn の日本での受容と展開

スピヴァクによる unlearn が日本の学术界で議論されるようになったのは、スピヴァクの著書『サバルタンは語ることができるか』(1988=1998) (その後、本論考は結論を変え改訂され、『ポストコロニアル理性批判』(Spivak 1999=2003) の第3章となった) が日本語で翻訳されて以降であろう。『サバルタンは語ることができるか』の訳を手掛けた上村忠男は以下のように訳している。

サバルタンの女性という歴史的に沈黙させられてきた主体に (耳を傾けたり、代わって語るといふよりは) 語りかけるすべを学び知ろうと努めるなかで、ポストコロニアルの知識人はみずから学び知った女性であることの特権をわざと「忘れ去ってみる (unlearn)」。このように自ら学び知った特権をわざと忘れ去ってみるということはポストコロニアルの言説をそれが供給しうる最良の道具を用いて批判するすべを学びしるということこそ意味しているのであって、ただたんに植民地化された者たちのいまは失われてしまった姿像を帝国主義的な歴史叙述に代置するという意味ではない<sup>32</sup>

スピヴァクの unlearn を「学び捨てる」と翻訳した本橋哲也は、「あらゆることに関して自分が学び知ってきたことは自らの特権のおかげであり、またその知識自体が特権であることを認めること。そのことと同時に、それが自らの損失でもあると認識し、特権によって自分が失ったものも多くあることを知ること、その知の特権を自分で解体し、いわば「学び捨てる (unlearn) こと」」(傍点は引用者) 実践であると説明している<sup>33</sup>。

スピヴァクの unlearn 概念を理解するうえで、彼女の著書を日本で紹介した上村や本橋、太田らが『現代思想』1999年7月号「スピヴァクあるいは発話の場のポリティクス」で議論している内容も参考になろう。とくに人類学における unlearn に関して言及した太田の発言は興味深い。それは「人類学において『現地の人』を無視できる特権が実は損失であり、それが当然のこととして自然化してしまった過程をときほぐす (unlearn) という作業が必要」だと述べていることだ。太田の発言を踏まえて本橋もその unlearn を無視する特権を忘れ去り「現地の人々の声が、その無視する特権を保持しているような民族誌、表象の形態をどのように作っていくか」という新しい関係性の構築、つまり、研究対象となり、「学ばせてもらった相手の自由や解放へ戦いのために、どれだけ貢献できるか」ということを何度でも学び直さな

---

スピヴァク (鈴木英明訳) 『ナショナリズムと想像力』2011、p.96)。

<sup>31</sup> レイモンド・ウィリアムズ (若松繁信・長谷川光昭訳) 『文化と社会—1780 - 1950』ミネルヴァ書房、2008。なお翻訳を手掛けた若松・長谷川らはこの文章を「それでも生存の代償として固有の支配的様式を捨て去らねばならないのである」(p.277) と訳している。

<sup>32</sup> ガヤトリ・スピヴァク (上村忠男訳) 『サバルタンは語ることができるか』みすず書房、1998、p.74。

<sup>33</sup> 本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波書店、2005、p.157。

ければいけない。それがおそらく“unlearn”ということの重要なファクターの1つである」と論じている<sup>34</sup>。

以上を踏まえると、特権を意識的に忘れ去ってみる(unlearn)ことは、自らの社会的な地位を放棄することでもなく、ましてや抑圧された他者を表象するということでもない。それはむしろ、スピヴァクや「私たち」を含む知識人階層によって、他者や自分に内在する「他者」に対して語りかけ、「対話」可能な関係を構築する試みだと考えられよう。

スピヴァクの unlearn を鍵概念にした研究も日本には多い。例えば、スピヴァクを引用して「育児」や「子育て」などのジェンダー論に対する思い込みを unlearn し、それらの社会化の必要性を説いた椎野信雄による研究がその1つである<sup>35</sup>。歴史学においては、序章で述べたように「国民主義の歴史学」や「国民国家の歴史叙述」を批判する取り組み自体を unlearn (学び捨てる・逆学習) と表現し、近代の歴史を再帰的に再歴史化する作業に取り組んだ酒井直樹による研究がある<sup>3637</sup>。教育関連で言えば、序章で指摘した朝岡による ESD (持続可能な開発のための教育) の議論だけでなく、教育思想史や国際理解教育においても、教育の孕む特権性の問題や、他者理解を問う議論がスピヴァクの unlearn を踏まえて領域横断的になされている<sup>38</sup>。

特に社会的排除の縮減や抵抗を目指す ESD においては、スピヴァクの unlearn 概念は以下の2点から有効だと言える。まず、ESD の実践場面を具体的に想定する際、ESD 実践者が不可視化されたサバルタン・他者を強く喚起することを可能にする。そもそも unlearn は、自己の特権と是認された無知がサバルタン化をもたらすという、自己と社会の共犯関係の承認を必要とする。それは例えば、社会的包摂や地域の住民参加をうたった ESD 実践において、「私自身 (ESD 実践者) は少なくともサバルタン化や社会的排除を促す片棒を担いではない」という幻想から解き放つ。そして、過酷で矛盾に満ちた現実から常にサバルタン・他者を意識化し、彼ら・彼女らとの倫理的関係性の構築を志向する立場に我々を留めさせるのである。

unlearn を媒介させることは、野元弘幸が論じる社会教育における社会的排除の問題にも示唆を与える。野元は、社会的に排除される他者を欲し包摂しようとする教育が、ときに支援・援助主義に陥り学習者を訓化・客体化することで、社会的排

<sup>34</sup> 上村忠男、太田良信、本橋哲也、同上、1999、pp. 42-67。

<sup>35</sup> 椎野信雄「育児の社会化について」『文教大学国際学部紀要』Vol. 14、No. 2、2004、pp. 113-124 (<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/lib/slib/kiyo/Int/it1402/it140209.pdf>) (2011年10月22日閲覧)。

<sup>36</sup> 酒井直樹『ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』東京大学出版会、2006。

<sup>37</sup> しかしながら、両者による unlearn 概念は「現に存在するもの・学んできたものを捨てる」としかとらえきれておらず、スピヴァクの述べる社会的に抑圧されているものとの「倫理的関係の構築」まで意識されているわけではない。それ自体は酒井も自著の中で言及し懸念しているが (酒井、同上、2006、p. 213) 両者の unlearn はスピヴァクの恐れる「被抑圧者の代弁」で完結してしまう可能性がある。

<sup>38</sup> ESD については朝岡幸彦「グローバリゼーションのもとでの環境教育・持続可能な開発のための教育 (ESD)」日本教育学会編『教育学研究』(72(4)、2005、pp. 112-125) を参照。ただし、朝岡は unlearn を学習概念として位置付けた際の、学習論の内実や既存の学習論との差異、学習主体や学習実践の変容可能性までは論じていない。なお、教育思想史においては、丸山恭司「教育という悲劇、教育における他者：教育におけるコロニアリズムを超えて」教育思想史学会編『近代教育フォーラム』(2002、pp. 1-13) を参照。国際理解教育においては、吉田直子「国際「理解」の陥穽を問う：「沖縄」という他者を手がかりに」日本国際理解教育学会編『国際理解教育』(2012、pp. 33-42) を参照。

除構造の維持・強化につながる危険性を明らかにしている<sup>39</sup>。つまり、社会的包摂を意図した教育実践では、社会的排除／包摂を単純な二項対立関係ではなく、入れ子状に錯綜する動的な関係図式として認識する必要性がある<sup>40</sup>。こうした野元の研究はESDに直接言及してはいない。しかし、unlearnを媒介することで、包摂の取組みが孕む排除論理の機制分析に留まることなく、排除可能性を有する自己への批判的眼差しの維持と、不可視化される他者やサバルタンに対する一層の喚起を可能とする。したがって、unlearnは社会的排除に抗うESDにおいても、排除の機制分析を免罪符とすることなく、排除構造と自己との共犯関係によって不可視化されるサバルタン・他者を喚起しながら、そんな彼ら・彼女らとの応答責任に基づく学習関係構築へ向けた実践を展開可能にする。

またunlearnは、ESDそのものに対しても実践変容の可能性を提示する。ESDにおいては、その教育目的・価値を検討する参加プロセスをいかに保障し育んでいくのが重要だとする、今村光章らの指摘がある<sup>41</sup>。この指摘についてもunlearnは、参加プロセスから疎外・排除される学習者の存在や、そもそも参加主体として想定されていないサバルタン・他者の意識化を可能にする。ひいてはunlearnは、参加プロセスの閉鎖性を自己（ESD実践者）との関係から把握するよう促すため、常に自己省察する環境を醸成し、サバルタンや他者の参加保障に向けた絶え間ない取り組みを可能にすると言える。

社会的排除に抗うESDにおいて、unlearnを介して他者・サバルタンを喚起することは、ESDの鍵概念としての地域を絶対的価値として普遍化せず、絶えず批判的に捉え直すことも可能にする。そうすることで、過去の暴力行為と抑圧的な制度によって声を奪われ不可視化され、忘却に曝された（ないしは今もなお曝され続けている）他者やサバルタンを喚起可能とし、過去の負の出来事につながる地域と、そこに住み生を享受する地域住民との関係性を動的かつ批判的に捉えることが可能となる。排除／包摂図式を所与とする地域が絶えず批判的に見直されることで、地域は無条件に価値化されることなく、問いに曝され、動的な変容可能性が提示されることにもなる。

動的且つ批判的に把握可能となることで生じる地域観の変容は、それ自体が他者の包摂のみならず、包摂を越えた共生を強く促すための基本原理としても機能する。なぜならば、人の出入りを地域の範疇に想定した場合、静的な地域にあっては固定化された共同空間への参入を意味する移動が、動的な地域になればその限界線や境界線が固定化されず、そもそも境界消滅が動的な地域条件にもなるからである。サバルタン・他者の包摂と歓待を前提にした地域の境界線の絶え間ない引き直しによって、地域の存立は異質な他者やサバルタン同士の集いが前提とされ、共生から協働へのプロセスへと至るのではないだろうか。それは例えば、「地域住民」という枠組みでは認知されにくいがゆえに、たびたび地域の範疇からこぼれ落ちる外国人技能実習生や、経済連携協定(EPA)に基づき来日する看護師・介護福祉士候補者等との、地域における社会的排除／包摂を踏まえた、地域づくりを目指した協働可能性という論点も積極的に提示することになる。ひいては、戦争や紛争、自然災害などの災

<sup>39</sup> 野元弘幸「外国人の子どもたちの排除の構造と対抗的教育実践の原理—日系ブラジル人の子どもたちとブラジル人学校を中心に—」日本社会教育学会編『日本社会教育学会年報(社会的排除と社会教育)』第50集、2006、pp.104-116。

<sup>40</sup> 社会的排除／包摂が入れ子状に錯綜する動的な関係図式であることを文化人類学的知見から記述したのは、内藤直樹・山北輝裕編『社会的包摂／排除の人類学—開発・難民・福祉』(昭和堂、2014)である。

<sup>41</sup> 今村光章、石川聡子、井上有一、塩川哲雄、原田智代「Bob Jicklingの「持続可能性に向けての教育(EfS)」批判」日本環境教育学会編『環境教育』13(1)、2003、pp.22-30。

禍によって、生まれ育った故郷・地域を喪失し移動を余儀なくされた移民・難民や、地域ではなく「移動」の中に住まうことしかできないような境遇にいるサバルタン・他者をも積極的に喚起し、より包摂的で協働可能な地域を目指した ESD への発展可能性へとつながるだろう。

つまり、社会的排除に抗う ESD においてスピヴァクの unlearn を受容した場合には、包摂の取組みが孕む排除の論理を常に意識化したうえで、不可視化されるサバルタンや他者に対し一層の注意や想像力を傾けることが可能となる。また、それ自体は、地域の動的・批判的把握を踏まえて境界線の絶え間ない引き直しを可能とし、地域の存立において異質な他者同士の集いが前提とされることで、地域の範疇からしばしばこぼれ落ちるサバルタン・他者との共生から協働への展開可能性も明示できる。

### 第3節 日本における unlearn の議論の特徴とその広がり

本稿では、日本で独自に議論されてきた unlearn を整理したうえで、それらの共通点・相違点を明らかにする。

#### (1) 鶴見俊輔による unlearn

unlearn (アンラーン) という言葉を日本で広く普及させたのは、「学びほぐす」と訳した哲学者の鶴見俊輔である。鶴見は、2006 年 12 月 27 日の朝日新聞朝刊 15 面に掲載されたコラム「鶴見俊輔さんと語る 生き死に 学びほぐす」や、『教育再定義への試み』(岩波現代文庫、2010)、重松清との対談『僕はこう生きている 君はどうか』(潮文庫、2016)などで unlearn をたびたび論じている。また鶴見の unlearn は教育学者に対しても影響を与えている。例えば、楠原彰は、この鶴見 unlearn を鍵概念に自らの大学での教育実践を紐解きながら、学生たちがこれまで不可視化してきた隣人や他者、世界といかに向き合い、そしてそれらから学んできたのを明らかにしている<sup>42</sup>。

unlearn について鶴見が論じる際に、必ず想起するのがヘレン・ケラーとの邂逅であろう。鶴見はハーヴァード大学の学生だった頃、ニューヨークの図書館でヘレン・ケラーと出会う。その折に、彼女は鶴見に「自分はハーヴァード大学の隣にあるラドクリフ女子大学でたくさんのことを『学んだ』が、それからたくさん『学びほぐさ』なければならなかった(I learned many things, and I had to “unlearn” many things)」と述べたという<sup>43</sup>。この言葉を耳にした鶴見は、「いや、なるほどなと思いました。ラドクリフ女子大学はハーヴァード大学の兄妹校ですから、そこでの講義は、耳が聞こえて、本が読めて、しゃべれる人が対象で、概念の組み立てもそうになっている。しかしケラーさんは、そこから離れて生きるようになって、自分の身の丈に合わせて概念を立ち直さなければならなかった。この「概念をたちなおす」、つまり“learn and unlearn”というのは、一度編んだセーターをほどく、ほどこいた同じ糸を使って自分の必要に合わせて別のものを編む」ものだとしている<sup>44</sup>。朝日新聞においても、「大学でまなぶ知識はむしろ必要だ。しかし覚えてだけでは役

<sup>42</sup> 楠原彰『学ぶ、向き合う、生きる 大学での「学びほぐし(アンラーン)」：精神の地動説のほうへ』太郎次郎社エディタス、2013。

<sup>43</sup> 鶴見俊輔「Unthink をめぐって」京都精華大学出版会編『リベラリズムの苦悶』阿吽社、1994、p. 4。なお、ヘレン・ケラーと出会った年齢について、重松清・鶴見俊輔との対談『僕はこう生きている 君はどうか』(潮文庫、2016、p. 124)では、18 歳と述べているが、『リベラリズムの苦悶』(同上、p. 4)では、1941 年の 19 歳としている。

<sup>44</sup> 鶴見俊輔、同上、1994、pp. 4-5。

に立たない。それを学びほぐしたものが血となり肉となる」と述べ、unlearnの重要性を指摘している<sup>45</sup>。

この鶴見のunlearnないしは教育論を支える背景にあるのが、学校教育における知識の在り方に対する批判である。重松清との対談で鶴見は、「アンラーン」について「学び解く」と言うほどの意味で、学校で学んだことをそのまま学術的に復唱するというのはただのラーニング（learning）で、アンラーンというのはそれを自由自在に使いこなすということなんだ。だけど日本の大学出はほとんどアンラーンしていない。そこが問題なんですよ。」とも論じている<sup>46</sup>。他にも鶴見は、学校で学んだことを自らの血と肉として自由に使いこなす、自ら問いを立て考えるためのunlearnの重要性を論じるなかで、既存の学校教育におけるlearn偏重を批判している。例えば重松との対談では、小学校しか出ていない紙芝居作家の加太こうじのとの出会いや彼の人生のエピソードを想起しながら、大学において試験で高得点をとることだけを目指した学習と、自ら問いを立てその解ないしは解決に向けて知恵を自ら活かすことの違いについて論じている<sup>47</sup>。こうした鶴見の学校教育批判は、他のunlearnを論じている論稿でも同様にみられる。例えば、『教育再定義の試み』の「学びほぐす」の項目では、西田幾多郎の事例を踏まえて唯一絶対の正解を教えることこそが役割であるかのような大学教育に疑義を呈してもいる<sup>48</sup>。本書の他の章では、大学の試験問題に鶴見の文章が出るものの、模範解答が鶴見自身の意見とは異なる点が多かったことや、問いに対する解が1つのみという思考自体も批判している<sup>49</sup>。

このように鶴見が学校教育に対し批判的である理由として根津朝彦は、「自分で問題をつくる力を抑圧し、自らの問題に向き合わない学校秀才を生み出す傾向を看取している」からだと分析している<sup>50</sup>。つまり鶴見の論じるunlearnには、学校教育で獲得した知識の再構築という意図の背景に、近代の学校教育における教育や知識の在り方に対する批判がある。換言すれば、学校教育が用意するマニュアル化された問いとそれへの解を唯一絶対とし、成績が高ければ良いとする思考方法や、自ら今をどう生きるのかといった本質的な問題を立てられなくなる・考えさせない学校教育の状況、それに起因することの生活に即した知恵の軽視に対する鋭い批判が込められている。

鶴見によるunlearnに込めた知識批判の理解を深化させるうえで、鶴見と重松清との対談は特筆すべきであろう。unlearnに関する対談の終わりに重松は以下のように鶴見へ語る。

重松：いまでも漁業とか農業の世界では、長年の経験から「もうすぐ雨になる」とか、「今年は豊作だ」という長老の一言が重みを持っていると思うんです。ところが一般の会社だと、パソコンが入ってくるとか、ハードの状況がどんどん変わっていくから、定年間際の人たちがそれまでの蓄積をなかなか生かせない。むしろ新しいことを知っている若い人の方が、つまり「アンラーン」してきた人より「ラーン」している人の方が優先されちゃうという状況があると思うんです。だからいまは「この道何十年」というのが自分のバックボーンになり得なくなっている。

<sup>45</sup> 「鶴見俊輔さんと語る生き死に学びほぐす」『朝日新聞』2006年12月27日。

<sup>46</sup> 鶴見俊輔・重松清『僕はこう生きている 君はどうか』潮文庫、2016、p.124。

<sup>47</sup> 同上、pp.126-127。

<sup>48</sup> 鶴見俊輔『教育再定義への試み』岩波現代文庫、2010、p.96。

<sup>49</sup> 鶴見俊輔、同上、岩波現代文庫、2010、pp.114-120。

<sup>50</sup> 根津朝彦「信頼の種をまく人、鶴見俊輔」『現代思想』青土社、vol.43-15、2015、pp.212-215。



鶴見：それが今の1つの問題ですね<sup>51</sup>。

つまり、重松や鶴見による unlearn の範疇においては、すぐに使用可能な「知識」やそれを獲得・暗記するだけの学習偏重に対する批判というものがあり、それ自体も鶴見が unlearn を重要視する要因だと考えられる。

鶴見の unlearn とその教育論を支える価値として重要なものの2つめに、教えるもの－教えられるもの・学ぶものの関係性がある。鶴見が論じる unlearn において、教える－教えられる関係性を問う必要があるのはなぜか。それは鶴見の考える教育がそもそも「教育は連続する過程であり、相互に乗り入れをする作業である。教える－教えられる、育つ－育てられるは同時に起こり、そして一回で終わるのでなく、その相互作用は続いていく」営みだからである<sup>52</sup>。鶴見は、教育について以下のよう具体的に定義している。

それぞれの文化の中で生き方を伝えるところみである。それは、あたらしく生まれてくるものにとっては、まえからくらしている仲間をまねることからはじまる。しかし、もっとよく見れば、まねることの基礎に、それを可能にする、自分のはたらきがある。呼吸するというようなことは、他人からならうまえからそれぞれの個人にある。もうひとつ。教えようとおとながころみるときに、相手の失敗、抵抗、逸脱などから、自分の生き方への思いなおしのいとぐちを見つけることがある。それが、教育が連続する過程であるということであり、教える－教えられるという相互的な過程であるということだ。ここではじめの言い方に限定をつけなければならない。教育は生き方をつたえるところみと書いたが、論証の矛盾なく言いおさせるためには、生き方の中にあるものとして死に方を強引にひっくるめてしまい、死に方を学ぶことでもあり、くずれてゆく過程でもあると言いたい<sup>53</sup>。

こうした鶴見による教育の定義から分かることは、鶴見にとっての教育的営みが、学校で終始しないことであろう。鶴見は教育の学校偏重・学校中心化に対して懸念を抱き、「今の日本は学校にとらわれすぎているということ。学校がなくても教育はおこなわれてきたし、これからもおこなわれるだろう。学校の番人である教師自身がそのことを心の底におけば、学校はいくらかはかわる。」とも述べている<sup>54</sup>。鶴見自身は自らの経験も踏まえ、教育を考える際に学校ではなく、非定型集団で共に学びあう環境が醸成されるサークル活動の価値を主張している。鶴見にとってサークルとは、「相互交渉によってたがいの立場が動くことも自由であり、そのことによって責任を追及されないという暗黙の約束である。このことによって、サークルは、私にとって何十年にもわたって、自分の頭蓋のように感じられて来た」のであり、「教室よりも教育的であり、教室も、サークルのようにはたらくとき、教育のはたらきをする。」としている<sup>55</sup>。鶴見の集団認識と民主主義との関係性について整理した安藤丈将によれば、鶴見はサークルを、他者の異なる見解に触れることによる自己修正、つまり「自我のくみかえ」を生じさせること、公的領域で活動する手前に準備の場を提供する等の理由から評価していたと考えられる<sup>56</sup>。

<sup>51</sup> 鶴見俊輔・重松清、同上、2016、pp. 128。

<sup>52</sup> 鶴見俊輔、同上、岩波現代文庫、2010、p. 38。

<sup>53</sup> 鶴見俊輔、同上、岩波現代文庫、2010、pp. 40-41。

<sup>54</sup> 鶴見俊輔「教育を問う」佐伯胖他編『岩波講座1 現代の教育危機と改革いま教育を問う』岩波書店、1998、p. 29。

<sup>55</sup> 鶴見俊輔、同上、岩波現代文庫、2010、p. 186。

<sup>56</sup> 安藤丈将「鶴見俊輔の小集団と民主主義」『現代思想』青土社、vol. 43-15、2015、pp. 108-117。

以上の鶴見の教育価値論についてより深く理解するために、鶴見が評価した無着成恭に注目したい。鶴見は、日本の大衆の思想をよりどころに独自の思想運動を展開したという点で、「日本の思想史の上で最も高い位置を占めている」として生活綴り方運動を評価した<sup>57</sup>。その中でも、生活綴り方運動のなかで特に子供の生活綴り方運動を捉えた『山びこ学校』とそれを実践した無着について「戦争と敗戦とを越えた人間の教育というおもむきがある。」と高く評価している<sup>58</sup>。鶴見が無着を評価する主な理由は2つあげられる。1つは、無着の教育実践には「自己の個別体験をもととして理解を一般化してゆこうと考え」<sup>59</sup>、「生徒の自問自答を養う道があった」点である<sup>60</sup>。つまり、無着による生活綴り方実践は、暮らしのなかで生徒が身につけてきた知識や経験、実感に基づき自ら問いを立て考える教育であったと言える。それ自体は、まさに鶴見が教育に希求することの日常生活や生活実感に根を張り自ら問うところから出発している点と親和性がある。

残りの1つは、無着の教育に一貫した平等主義の原則が見て取れるからである。鶴見によれば無着は、「子どもには子どもの生活があるでしょう。重い荷を背負って、山道を歩いていく。子どもたちのそんな生活に教えられるんだ。子どものほうが、無着さんより過酷な生活をしているからね。同じ状況のなかで生きているけれども、子どものほうが過酷なんだ」と考えているのだとした<sup>61</sup>。つまり、無着は子どもたちの生活実態から学び教わりながら、相互的な教育実践を積み上げていったのである。また、鶴見によれば、間違いを犯した際に生徒に謝するという無着の態度も戦前にはあり得なかったこととしたうえで、鶴見は「教師は詫びることによって常に平等の地点にかえる。人間の本来の相は平等なんだ。ところが教育をしなければならぬとか、政治をしなければならぬという、暫定的な目的のために不平等な仕組を仮に作る必要がある。しかし、その仮の不平等は、当面の目的である一つの仕事が終わると同時に、すぐにうちこわされ、撤去されねばならない。」のが無着の平等主義の原則に基づく教育方法であり、この方法が「教育に影響を与えただけでなく、ひろく思想の領域一般に影響をあたえたし、この数年のサークル運動の哲学はここに始まったと言える」ものだとして評価している<sup>62</sup>。つまり、鶴見が希求する学校教育とは、「うまれてから6年、12年、暮らしの中で生徒が身につけてきた考えと先生とがおたがいの知恵を出し合う場所」としての相互教育が可能な学習空間なのである<sup>63</sup>。

このような鶴見の教育の礎石としての相互教育や平等主義は、『教育再定義への試み』や『僕はこう生きている 君はどうか』の文章中にも多く見られる。また、例えば鶴見は、自らの過去を振り返ったうえで、学生ないしは関わった若者、周りの研究仲間・同僚から多くを学んだと述べている。具体的には、不治の病ではないとわかっていたハンセン病患者がYMCAに宿泊拒否をされた事件について、鶴見は「自分が教えている学生の中に、教師を超える人がいた」として<sup>64</sup>、そんな学生たちから何を学んだのかを説明する<sup>65</sup>。鶴見の平等主義を理解するための興味深いエピソード

<sup>57</sup> 鶴見俊輔「大衆の思想—生活綴り方・サークル運動—」藤田省三、久野収、鶴見俊輔『戦後日本の思想』岩波書店、1959、p. 110。

<sup>58</sup> 鶴見俊輔『思い出袋』岩波新書、2010、p. 144。

<sup>59</sup> 久野収、鶴見俊輔『現代日本の思想—その五つの渦』岩波書店、1956、p. 113。

<sup>60</sup> 久野収、鶴見俊輔、同上、1956、p. 145。

<sup>61</sup> 鶴見俊輔・関川夏央『日本人は何を捨ててきたのか 思想家鶴見俊輔の肉声』筑摩書房、2016、p. 210。

<sup>62</sup> 鶴見俊輔、同上、1959、p. 116。

<sup>63</sup> 鶴見俊輔、同上、岩波新書、2010、p. 144。

<sup>64</sup> 鶴見俊輔、同上、岩波文庫、2010、p. 111。

<sup>65</sup> 詳しくは木村聖哉・鶴見俊輔『「むすびの家」物語り ワークキャンプに賭けた

ードがある。鶴見は1999年に中学生と対話する機会を得た際に、生徒が受け持ちの教師に対して「あなたは、私から何を学びましたか？」と問い、両親には「あなたたちは、私から何を学びましたか」と問うことを薦めたのだという<sup>66</sup>。これらの問いは、しばしば「教える側」に固定され、「学ぶ側」との関係に上下ないしは優劣関係が生じやすい立場の教師や親という人間に対して関係性の転倒を誘発し、「ともに学びあう」という関係性の構築を意図した質問であったと言えるだろう。鶴見は以上のエピソードを踏まえて、「教室は大きいから、受けもちの教師が、ひとりひとりの子どもに、自分で満足のいく答を出すことはむずかしいだろう。しかし、そういう問いを、受けもちのひとりひとりが自分に投げかけ、自分もその問いにこたえる力をもちたたいと理想を心の中にもっていたら、教育は変わる。大学教師だったとき、私がこの問いを自分に出してみても、しっかりこたえられたとは思わない」とも述べている<sup>67</sup>。

以上、鶴見俊輔による unlearn の特徴とその背景にある教育観を考察した。その結論として、鶴見の unlearn の背景には、学校教育に対する批判の存在が理解できた。主な批判としては、教師－生徒という「教える－学ぶ」という関係性の問題、換言すれば共に学びあい相互に自己修正が可能な平等主義に基づく相互教育の陥穽についてであった。また、近代の学校教育における学歴主義や成績至上主義、今を生きるうえで本質的な親問題を考えさせない限定的な問いと解、それを踏まえた知識の均一化もその批判の対象であった<sup>68</sup>。こうした学校教育の学習環境の問題を乗り越えるため、鶴見による unlearn では特権的な知識を自らの日常生活や実体験をくぐらせたうえで自らの手で再構成し、他者との平等主義を軸にした自己教育をすすめる重要性が述べられているのである<sup>69</sup>。

## （２）大江健三郎による unteach（教え返す）と unlearn（学び返す）

大江健三郎による unlearn と unteach という言葉は、『定義集』に収録されたエッセイで「学び返す」「教え返す」と訳されたものである<sup>70</sup>。そもそも大江は、unlearn という言葉と批判的人類学として著名なジェームズ・クリフォード (James Clifford) の著書で出会ったのち、鶴見とホスピスケアを持つ診療所の徳永進医師との対話の2006年12月27日朝日新聞朝刊15面に掲載されたコラム「鶴見俊輔さんと語る 生

---

青春群像』岩波書店、1997を参照。

<sup>66</sup> 鶴見俊輔、同上、岩波現代文庫、2010、pp.173。

<sup>67</sup> 鶴見俊輔、同上、岩波現代文庫、2010、pp.174。

<sup>68</sup> この平等主義の尊重については、「ヨーロッパ語の文献を読みく<sup>へいげい</sup>だして、自分のくらしと考えをとおさずに、同時代の日本の非知識人を睥睨することができるようになった」(鶴見俊輔『鶴見俊輔座談 社会とは何だろうか』晶文社、1996、pp.441-442)という知識人に対する批判もあるだろう。

<sup>69</sup> なお、後述する松下佳代は、こうした鶴見の unlearn (学びほぐす) を「外から与えられた知識を単に内面化するのではなく、自分の必要にあわせて再構成をおこないながら我が物とすること (appropriation)」と言い換えている (松下佳代「大学における「学びの転換」とは-unlearn 概念による検討-」東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』東北大学出版会、2010、pp.5-15)。ただし、この文脈にのみ焦点をあて鶴見の unlearn を理解しようとする、鶴見が unlearn を論じた背景にある本質的な部分としての既存の学校教育批判 (教師－生徒ないしは学習者同士の対等な学習関係の欠如等) が後景化する危険性もあるだろう。

<sup>70</sup> 「大江健三郎 (定義集)」「学び返す」と「教え返す」人はいかにまなびほぐすか」『朝日新聞』2007年1月23日。朝日文庫より発刊された『定義集』(2016)では pp.47-50。

き死に「学びほぐす」で、どこかで覚えた記号としての unlearn と再会を果たしたとしている<sup>7172</sup>。大江は、ジェイムズ・クリフォードがどういった文脈で unlearn を用いたのかは述べておらず、どの論稿で unlearn という言葉に出会ったのかは確認できてはいない。しかし、例えばジェイムズ・クリフォードが編者を務めた“Writing Culture The Poetics and Politics of Ethnography” (1986)の論旨は、エスノグラフィという人類学的調査手法に対し「文化」や「他者」と、それを描こうとする権威的な立場にある「我々」という関係性への問題提起をおこなっているものである。

大江は unlearn の定義を説明する際に、鶴見による「大学でまなぶ知識はむろん必要だ。しかし覚えただけでは役に立たない。それをまなびほぐしたものが血となり肉となる。」を用いている。一方で unteach については、「(人)に既得の知識(習慣)を忘れさせる、(正しいとされていることを)正しくないと教える、……の欺瞞性(ぎまんせい)を示してやる。」というリーダーズ英和辞典の語義から定義づけている<sup>73</sup>。unlearn と unteach の関係性については、大江は以下のように述べている。

私は、教育の現場で働くという経験を(ほんのわずかな期間しか)していません。そこで、他の人間に教えることでありがちな過ちをおかすことこそ少なかったけれど、教えた相手から過ちを指摘されて、苦しく自己修正することはなかった。それをやるように、教えている相手から逆に励まされるということもなかった…実際、教師を続けてきた大学の同級生の誰かれと話していて、この経験の欠如が自分にもたらしている、本当に成熟していないところを寂しく自覚する、そういうことはしばしばあったものです(中略)。私が永年やってきたのは、「教育する場」「臨床の場」という、実際に人を相手にするのではないが、考えてみると、小説の言葉で似たことをする仕事です。そこで、unlearn と unteach を二つながら書斎で試みることをするようになり、その手法を探ってきた、とも気がつくのです<sup>74</sup>。

大江が unlearn と unteach に直接言及した作品としては、長編三部作『おかしな(スウード)、二人組(カップル)』(講談社)の終わりの巻『さようなら、私の本よ!』(2005)である。本作品では、アメリカの大学を退職し日本に戻って来た建築家の老人椿繁が、著者の分身であるかのような主人公(古義人)に対して自らの転職の契機を話す場面で印象的に用いられている。その契機とは、老人がアメリカの大学で教鞭をとるなかで、学生たちに対しアカデミズム・権威の言葉を分けもたせるこ

<sup>71</sup> なお、大江が書いた『さようなら、私の本よ!』の椿繁が大学の厄介者になっていた頃、建築学の同僚よりも「批判人類学の男」なる登場人物と付き合っていたという設定がある。その際に、「おれの話聞いてね、さきの批判人類学の男がいうんだ。西欧の人間が太平洋諸島で別種の文化を発見する、そのために役立った優秀なインフォーマントたちを学者にしてやる。そういうことに始まって、かれらと共著のモノグラフさえ出版しているが、しかし彼らを新しい人間になしえただろうか? シゲがいま感じている苦しい思いは、西欧の研究者がみな、鈍感でさえなければ同じことを嘆いてきたのじゃないか? おれは、新しくやって来る学生にね、つまり自分の島から独自の文化の言葉を持ってやって来たやつに、アカデミズムの言葉を分けもたせることだけしてきたとさとした。それがおれの変化の始まりだ」という個所がある。(大江健三郎「さようなら、私の本よ!」講談社、2006、p.148。)この「批判人類学の男」は、ジェイムズ・クリフォードであることが推測できる。

<sup>72</sup> 「大江健三郎(定義集)「学び返す」と「教え返す」人はいかにまなびほぐすか」『朝日新聞』2007年1月23日。

<sup>73</sup> 大江健三郎『定義集』朝日文庫、2016、pp.49。

<sup>74</sup> 大江健三郎、同上、2016、pp.49-50。

と、つまり、アカデミズムでの「自らのクローン人間」だけを養成してきたという事実を悟ったことだという。この経験を通じて、自らが学んできた物を忘れること（unlearn）を始め、さらには自らの学んできたことを正しくないと教えてくれる（unteach）教え子らと出会い、教室にはなかった若い教え子らとの関係が成立したと老人に語らせている<sup>7576</sup>。

このような大江の unlearn と unteach という教育表象について文学の側面から研究したのが池沢充弘である。池沢はこうした教育表象と一人称の語りとの相互関係がこれまで論じられてこなかったという問題意識を踏まえて、大江による『水死』や「死んだ犬を投げる芝居」という作中劇の語りの読解を試みる<sup>77</sup>。池沢は、語りや解釈の主導権を他人に譲り渡す主人公の古義人の立ち振る舞いから、主人公が作中の登場人物に unteach される存在であり、主人公自身、解釈される側にまわることによって自らを unlearn していく存在であると分析している。また、作中劇においては、多くの人々が「私」という一人称の主語を軸に主人公がゆるやかに他人へ語りを譲渡したり、他人と同一化したり、自分を取り戻したりを繰り返し、揺らぎ続け重なり合うなかで、そこでは誰かが何かを一方的に教え、伝えるという「教育」の形式は崩壊し、単一のイデオロギーに停留することない自由な語り＝教育を実現していると分析している。池沢は、こうした作中の背景にある教育観や大江による正岡子規とその弟子の河東碧梧桐の師弟関係論を基軸に、大江が述べる unlearn と unteach の過程は、教えそして学ぶという師弟関係を基本にした「教育」のあり方は存在せず、互いに「自己修正」し変革させていく対話関係だけが存在することを明らかにしている。

なお、大江の同様の後期の作品（レイト・ワーク）を他者論や「対話」「ネットワーク」という枠組みから分析した研究者としては、村上克尚や大澤聡があげられる<sup>7879</sup>。村上は、大江による「対話」における自己の流動性、つまり、自己自身が複数

<sup>75</sup> 大江健三郎『さようなら、私の本よ！』講談社、2006、p.148。

<sup>76</sup> 本書では、イスラエル・パレスチナ問題に関して公の場で「知識人」として真摯な発言をし続けていたことで知られる、文学研究家・文芸評論家のエドワード・サイード（Edward W. Said）や、レイモンド・ウィリアムズについても引用し、「文化」「他者」を「文脈化」するエスノグラフィーを学際的な視点から問い直している。大江とエドワード・サイードは親交があり、大江が用いる「後期の作品（レイト・ワーク）」という言葉自体はサイードの書籍のタイトルでもあることは周知の事実であるが、エドワード・サイードも『オリエンタリズム』の序説においてレイモンド・ウィリアムズの unlearn という言葉を印象的に用いている。それは、「文化的支配が作用してきた道程についての知識の深化に寄与したいと願っている。もしもこの知識がオリエントに対する新しい姿勢の確立に向けての一助となるならば、いやそれどころか「東洋」と「西洋」との双方を一挙に消滅させてしまうことができるならば、そのときこそ、我々はレイモンド・ウィリアムズが「固有の支配様式」を「棄て去ること」と述べた道筋を少しは前進したということになるだろう」と述べている部分である（エドワード・サイード（板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳）『オリエンタリズム 上』平凡社ライブラリー、1993、p.72）。以上を踏まえると、大江による unlearn と unteach はエドワード・サイードないしはレイモンド・ウィリアムズからの思想的影響を推察することができる。またそれ自体は、レイモンド・ウィリアムズに影響を受けたスピヴァクの unlearn との理論的共通点があるかもしれない。

<sup>77</sup> 池沢充弘「unlearn、unteach する「女たち」の語り：大江健三郎『水死』における憑坐と教育-言語態」言語態研究会『言語態』2015、pp.47-65。

<sup>78</sup> 村上克尚「対話のネットワークとしての「私」：大江健三郎『さようなら、私の本よ！』における諸概念の分析を通じて」東京大学大学院総合文化研究科言語情報

の他者（広範囲な対話のネットワーク）へと開かれ絶えず作り変えられていく移ろいやすい流動性があるものとし、それ自体「困惑や苛立ちと共に否定し去るのではなく、むしろ複数の他者たちへ開かれ」<sup>80</sup>ることを重要視している。大澤は、大江健三郎の〈対他的な思考形式〉から〈ネットワーク的な思考形式〉への移行、言い換えれば「個々の主体における思考・行為は複数的な思考・行為が絶えず交通しあう間主体的・間主観的な網目状の回路へと編み込まれていく」<sup>81</sup>ことで、「新たな関係性が構築される可能性へのたえざる開放」<sup>82</sup>を指摘している。つまり、大江が後期の作品（レイト・ワーク）を通じて unlearn と unteach を試みその手法を探ってきたことを踏まえると<sup>83</sup>、その鍵概念は他者へと開かれた自己と対話になるのである。つまり、自己を固定化せず可塑的なものであることを踏まえて、他者へと開かれていることの重要性や、完成には至らないため絶えず「遅れ」続けること、つまりつづられ続けること、そして、その際の他者との対話が可能な平等性が重要だと言える。

つまり、大江による unlearn 概念の大きな特徴としては、unlearn を実現する 1 つの方法として他者との関係性に基づいて成立する unteach を明示したことである。unteach されるためには学習主体ないしは教育主体が可塑的であり、且つ学習関係や対話関係を紡ぐ他者に対して常に自己変容可能性を担保し開かれていることが前提とされる。

### （３）前平泰志による unlearn と〈ローカルな知〉

〈ローカルな知〉の文脈において unlearn について述べたのは前平泰志である<sup>84</sup>。前平は〈ローカルな知〉を「人々がそれぞれの生活や仕事、その他の日常的実践や身の回りの環境について持っている知識。特定の知識や実践の現場の文脈に固有のものとして、①文脈を超えた一般性を持たず、②文脈を共有しない外部の者には通常知られていないという意味で局在的（local）な知識」<sup>85</sup>とした。この〈ローカルな知〉は「暗黙の知」「伝統的な知」「土着の知」などの言葉と親近性を保っているとするが、「科学の知」や制度化された「知」に対し何らかの一線をひくものであり、それを当事者がつくり上げる過程を自己教育過程だとしている。〈ローカルな知〉を語る上でそのローカルなる「場」とは、地理上の地域空間だけではなく〈身体〉も含まれるとも前平は述べている。そして、〈ローカルな知〉を語る上で「わたし」という学習者自身の個有性（セルフ・アイデンティティ）の自覚が意識化されたとき、「普遍的な」知をアンラーン（unlearn）するという。つまり、「わたし」という主体のなかから、このとらえどころのない〈ローカルな知〉を「いま」「ここ」で感じ・問い・学び続けていく。その自己教育過程における唯一無地の存在としての「わたし」が意識化されたとき、これまで積み上げてきた「普遍的な知」を学び捨てること（unlearn）ができると述べているのである。

前平は〈ローカルな知〉と unlearn の関係性について他で論じておらず、これ以上理解を深めるのは難しい。ただし、前平による unlearn の理解を助けるものとして

---

科学専攻『言語情報科学』2013、pp.259-275。

<sup>79</sup> 大澤聡「「対話」の条件-大江健三郎「おかしな二人組」三部作」言語対研究会『言語態』2009、pp.109-121。

<sup>80</sup> 村上克尚、同上、2013、p.269。

<sup>81</sup> 大澤聡、同上、2009、p.119。

<sup>82</sup> 大澤聡、同上、2009、p.121。

<sup>83</sup> 大江健三郎、同上、2016、p.50。

<sup>84</sup> 前平泰志「〈ローカルな知〉の可能性」日本社会教育学会編『〈ローカルな知〉の可能性 もうひとつの生涯学習を求めて』東洋館出版社、2008、pp.9-23。

<sup>85</sup> 前平泰志、同上、2008、p.10。

参考になるのが、前平がおこなった講演「大学入試を生涯学習という観点から考える」に関する朝日新聞の記事である<sup>86</sup>。この講演は、京都大学が東京品川にある「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」（朝日新聞社後援）のシリーズ10「教育を考える」の第1回であり、2013年2月6日に実施されたものである。記事によると前平は、まずノーベル医学生理学賞のガードン教授の成績は生物が学校内で最下位だったことを参加者に示した。そして、学校は評価を間違えることがあることを指摘したうえで、学校教育について以下のように述べている。

学校では、具体的なもの、経験から生ずるもの、自分の内部から湧き起こってくるものは教科から排除されています。学校は、教える側に都合が良い。何をいつどこまで教えるかは先生の側が決められる。学ぶ側の意思や動機を犠牲にすることで、成り立っています。そこからは、自立した判断能力や共感能力が育ちにくいでしょう<sup>87</sup>。

そして、そうした学校教育と「誰でも、いつでも、誰からでも学ぶ」ことが可能な生涯学習の特徴を対比し、その中でも特に重要なことが「学ぶことを学ぶ」こと、そしてそれが鶴見の unlearn（学びほぐす）に通じる言葉であるとしている。また、前平は、生涯学習において学び続けるプロセスと自分自身でそれを評価することが大切だとしている。

以上を踏まえると、前平による unlearn は鶴見の unlearn の影響を受けていることが推察できる。また、そうだとするならば、前平による〈ローカルな知〉も鶴見の unlearn と同様に、自らの知を学びつくり上げていく動的過程だと理解できるだろう。その際の学習そのものないしは学習成果については、学校や他者からの評価を気にする必要はないともしている。つまり、重要なのはあくまで自分自身がいかに学んだのかなのだ。したがって前平は、誰からの評価を気にすることなく二度とない自分自身にとっての「この時」「この場所」で感じたものを、わたしの知らないしは思想として考え、自らの血と肉にし学び続けていく自己教育それこそが、〈ローカルな知〉の文脈における unlearn を実現可能にすると考えるのである。

#### （４）学校教育における unlearn

unlearn を用いて日本の学士課程教育の課題について考察したのは松下佳代である。松下は、東北大学の学士課程教育における「受験中心型の学び」から「大学での学び」への「学びの転換」の課題について、unlearn 概念によってとらえ直そうと試みた。松下はスピヴァクや鶴見俊輔、そして未来学者として著名なアルヴィン・トフラー（Toffler, A）による unlearn の整理をおこなった唯一の日本の研究者であろう。unlearn の整理においては、鶴見による unlearn 概念が「個人の営み」ととどまっているのに対し、スピヴァクが概念が「社会や文化歴史との関係の批判的な問い直し」に迫るものとした。そして、アルヴィン・トフラー(1970)による21世紀のリテラシー(learn-unlearn-relearn)の日々の「社会の変化」にあわせ絶えず続ける学び（つまり learn-unlearn-relearn という一連のプロセス）としての unlearn 概念が、より直接的に学校教育と関係していると評価した。そのうえで、大学教育における「学びの転換」とは、高校で「学んできたことがら（知識・技能や態度、信念など）を解体し、それらのうち有用な要素を用いて、新たな別の何かを再構築することと、その再構築としての意義」<sup>88</sup>と、高校までの学習を、学ぶ内

<sup>86</sup> 「《朝日新聞デジタル》生涯学習、学ぶことを学ぼう 京大・前平教授が講演」『朝日新聞』2013年3月12日。

<sup>87</sup> 『朝日新聞』、同上。

<sup>88</sup> 松下佳代「大学における「学びの転換」とは—unlearn 概念による検討—」東北

容や問題意識と関わらせながら、学びほぐしたり、学びすてることこそが、大学での「学びの転換」の重要性だとしている<sup>89</sup>。また、その前提として、大学教育での学び自体も learn-unlearn-relearn の連続的な過程のなかでヘレン・ケラーがそうだったように将来的には unlearn されるものだという認識が重要であるとも述べている<sup>90</sup>。

子安潤は、現代の学校教育における「ナショナリズム」「能力主義」「目標管理」というメインストリームへの問題提起として unlearn を述べている。それは、「能力主義」に基づき単に「知識を増やすこと」や、それ自体が目的になっては本来の学びではないとして、以下のように unlearn（アンラーン）を定義している。

学ぶということは、ただ知識が増えるということではない。学ぶことによって思いこみ・偏見が生まれるということもある。したがって、学ぶということは、すでにある思いこみや偏見を破り捨てていくことでなければならない。単に、知識の増加ということではないのである。

そのことを表す言葉がアンラーン(unlearn)なのである。アンラーンというのは、学ぶことによって捨て去ることを意味する。勉強しないということではなくて、繋がるということとかかわって言えば、これまでの世界とのかかわり方、つながり方を捉え直し、変えていくことを意味する<sup>91</sup>。

ただし、unlearn はマニュアル化された学習では達成されないため、意識的に対話的な活動や外界との交わりを持つことが必要だとしている。松下と子安による unlearn の特徴としては、両者の検討対象とする現代の学校教育と、その学びに対する問題提起としての要素が色濃いことである。子安が「対話的な活動」の必要性を説く部分も、「知識伝達」に陥りやすい他律的な学校教育への明確な批判になっている。特筆すべき点としては、両者が学校教育の課題を議論しているにも拘わらず、その課題解決の手法や考え方が エットーレ・ジェルピの著書『生涯教育—抑圧と解放の弁証法』（1983）の翻訳を手掛けた前平がその「解説」で述べている「部分的にせよ近代公教育体型に対する破砕を意図したものであった」「生涯教育の思想」<sup>92</sup>に依拠して unlearn 概念の必要性を述べていることであろう。

それはつまり、本来の教育とは、ある特定の時間と空間の占有によって成立する学校制度と、その内部で「教えられる側」の均質化と画一化が要求されつつ展開される教育実践だけではなく、そうではない、生涯にわたって絶えず続けられる営為であることを逆説的に述べているのである。

ただし、松下による学士課程教育での unlearn には「急激に変動する社会に対処するための手段」としての側面のみが前面に出てしまっていることは否めない。それ故に、ジェルピの「制度をつくる運動や学び」といった社会運動の原理と生涯教育の原理を持ち合わせる、社会に働きかける生涯学習的な学びとして位置付けることはいささか難しい。こうした特徴を有するのにも「与える教育」という、学校教育の文脈上で語られているが故であろう。

---

大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』東北大学出版会、2010、p. 11。

<sup>89</sup> 松下佳代、同上、2010、p. 12。

<sup>90</sup> 松下佳代、同上、2010、p. 13。

<sup>91</sup> 子安潤『反・教育入門—教育課程のアンラーン』白澤社、2006、p. 182。

<sup>92</sup> エットーレ・ジェルピ（前平泰志訳）『生涯教育—抑圧と解放の弁証法』1983、p. 258。



### （５）日本で受容された unlearn とその可能性

本節では日本で主に議論されている unlearn を整理してきた。それぞれの unlearn 概念ならびに実際に unlearn の実践として学校教育で意識されているもののうち、共通している特徴としては大きく２つあげられるだろう。

まず１つは、現代社会や学校教育等を通じて自分自身が築き上げてきたものの見方や認識、あるいはそれを構成する知識の在り方に対して、unlearn の“un”が意味する「(ある行為・状態の)逆・否定・除去・奪取・解放」ところの学習を unlearn として位置付けている点であろう。それ自体は、これまで学びそして知ってきたことを単純に忘却し否定するだけではなく、まさに、それらを再構成し新たにつくり直す動態的な生成過程であると言える。こうした unlearn 概念の特徴は、「銀行型教育」ではない「課題提起教育」に基づく「対話」を基礎においたパウロ・フレイレによる教育思想を想起させる。

もう１つは、知識を獲得する、ないしは学習活動を営む際の自己と他者との関係である。どの unlearn においても、自己と他者との「対話」やその「関係性」が重要視される。前節で明らかにしたスピヴァクが論じる「いま・ここ」に存在しない不可視化された他者（サバルタン）か、鶴見や大江のように日常生活や社会のなかで「劣位」に位置付けられがちで学ぶことなどないと言われるような相手（鶴見と大江の例を踏まえれば、学校教育における生徒（学習者）であり、また、高学歴のひとに対する学歴がない、ないしは低学歴のひと）等その次元は論者によって異なるが、あくまでもそうした人びとから学ぶ関係、それが成立するための対話が可能な関係や自分自身が可塑的で他者に関われていることなどが unlearn においては特に重要だと言えるだろう。それ自体は、「わたし」という何らかの個体主義的な学習論ではなく、「他者」という存在に関かれたないしはその存在によって成立する関係主義的な学習論であると言えるだろう。ただし、松下や子安が学習論としてまとめた unlearn は、あくまでも学んだことがら（知識・技能や態度、信念など）を解体し、それらのうち有用な要素を用いて、新たな別の何かを再構築することに重きが置かれており、他の unlearn よりも「他者性」の位置づけが弱いことは否めないだろう。

### 第４節 終わりに

本章では、まず欧米で議論されている人種主義・白人優越主義、セクシャリティーと異性愛主義、先住民や移民・難民にかかる unlearn に関する実践の構造や意図する方向性を明らかにした。次に、日本でも広く導入され思想や教育哲学等で議論されているガヤトリ・スピヴァクの unlearn が、①サバルタン化をもたらす社会構造と自己との共犯関係の承認、②サバルタンとの倫理的学習関係の構築に向けた想像力を重要視しており、かつ unlearn 自体は ESD の社会的排除の文脈で有効であることを明らかにした。また、教育ないしは学習論という観点から日本独自の文脈において議論されている鶴見俊輔、大江健三郎、前平泰志、そして、学校教育現場での unlearn の議論の特徴も踏まえたうえで総括すると、unlearn には、①現代社会や学校教育等を通じて自分自身が築き上げてきたものの見方や認識、あるいはそれを構成する知識の在り方を批判的に検討し再構築する、②再構築する際には既存の社会構造や認識によって自己よりも社会的に劣位におかれる「他者」との対話から自分自身が学びそして変容していくこと、の２つが価値として共通していることを明らかにできた。

## 第2章 日系移民をめぐるフォーマル教育の諸相

本章では、ブラジルパラ州トメアスーにおける学校教育や日本語学校での教育実践に着目し、その歴史の変遷や特徴を明らかにしていく。まず、トメアスーにおける学校設立の歴史の変遷を網羅的に明らかにする。次に、トメアスーへと移住した人びとが公的な学校教育と同様に重要視した日本語教育の内実を理解するため、日本語学校の歴史の変遷を紐解く。そして最後に、日本語教育に関わった人びとの思いやその教育が意図したものを分析する。

フォーマルな教育としての学校教育と日本語学校の教育実践の歴史の変遷を明らかにするため、トメアスー開拓 50 周年祭典委員会による『みどりの大地トメアスー トメアスー開拓 50 周年史 1929-1979』（1985）やトメアスー文化協会が発刊した『トメアスー開拓 70 周年記念誌 アマゾンの自然と調和して』（2009）、第二トメアスー移住地 20 年史編集委員会『アマゾンに挑む 入植 20 年史』（1984）、『2007 年度トメアスー日本語学校要覧』（2007）等の資料や、国際協力事業団（現在の国際協力機構（JICA））等の報告書等を分析した。また、日本語教育の実践やそれが意図したものを紐解くために、日本語学校で取り組まれた作文（第二トメアスー移住地 20 年史編集委員会『アマゾンに挑む 入植 20 年史』（1984）に掲載）の内容や当時の関係者が新聞に寄稿した記事<sup>1</sup>、現地でおこなったフィールドワークでのインタビュー資料等を分析した。

### 第1節 トメアスーにおける学校教育並びに日本語学校の現状<sup>2</sup>

2016 年 9 月現在トメアスー郡には 98 の公立（群立）初等教育機関と地域ごとの生徒数増加に伴う 26 の分離新設校（ANEXO）が存在する。公立（州立）中等教育機関は州立アントニオ・ブラジル中学校（Escola Estadual de Ensino Médio Antonio Brasil）と州立 Dr. ファビオ・ルス中学校（Escola Estadual de Ensino Médio Dr. Fábio Luz）の 2 つの中学校がある。私立の学校としては初等教育並びに中等教育機関としてニッケイ学校（Escola Nikkei de Tomé Açu）が存在する<sup>3</sup>。このニッケイ学校は、トメアスーにおいてレベルの高い高校ないしは小中高の一貫校がなかったことを背景に、父兄の養育費負担減と若者の地域定着の促進等を意図して 2002 年に設立された<sup>4</sup>。当初は高校 1 年生、2 年生の計 45 名であったが 2016

<sup>1</sup> トメアスーでの新聞は、序章でも述べたように、『緑風』、『トメアスー（新聞）』、『広報』、『トメアスー組合だより』、『組合広報』、『Jornal Camta』等である。また、トメアスー文化協会が発刊した『文化協会だより』も参考になっている。

<sup>2</sup> ブラジルの学校教育制度については序章でのまとめを参照。

<sup>3</sup> 序章でも述べたように、トメアスー地域の幼稚園の現状とデカセギの児童に対する影響を整理したのは品川ひろみ（「トメアスーの教育と保育：日系関連の教育施設を中心として」北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室『調査と社会理論研究報告書』No. 26、2008、pp. 123-132）である。ただし、本報告は品川自身もことわりを入れているように詳細な調査のまとめではない。したがって、保護者がデカセギで不在であるが故に、その児童が精神的に不安定だと安易に断定している点等、議論の余地が散見される。

<sup>4</sup> ブラジルの邦字新聞『ニッケイ新聞』でトメアスーの移住 80 周年を記念して連載された記事「アマゾンを開拓＝移住 80 年今昔＝【ベレン・トメアスー編】《33》過去を顕彰する墓と森＝未来に挑戦する日系学校」2009 年 10 月 14 日（<http://www.nikkeishimbun.jp/2009/091014-72colonia.html>）（2017 年 5 月 1 日閲覧）。

<sup>5</sup> 1993 年 1 月 6 日にトメアスー総合農業協同組合の婦人部と青年部が「これからの農協活動」と題したテーマで合同座談会を実施している。その際には「日系コロニアの今後を考える場合、子供たちの愛郷

年末で6歳から17歳までの生徒が約180名在籍している。2016年現在、日系2世のタケタ・タケコ(Darcy Takeko Taketa Moreira)が校長を務め、約20名の教師が教鞭をとっている。学校の維持や運営はトメアスー文化協会(Associação Cultural e Fomento Agrícola de Tomé-Açu)(以下、文協)が実施している<sup>6</sup>。2008年にはアマゾン日本人移民80周年を記念して、日本政府から草の根無償資金が供与され、教室の拡充工事がすすめられた。2014年には日本政府の「草の根・人間の安全保障無償資金協力供与式」で体育館が建設されている。2012年からは国際協力機構の日系社会青年ボランティアを通じて小学校教諭が派遣され現地教師に協力している。

また、2012年にはパラ連邦大学(UFPA; Universidade Federal do Pará)のサテライトキャンパスが開校され、教育学部の数学科と教育学科がある。2015年には、アマゾニア連邦農牧大学(UFRA; Universidade Federal Rural da Amazônia)の分校も新設された<sup>7</sup>。今日では、文学、経営学、会計学、生物学、農業工学の5つの学部(コース)がある。このように高等教育機関ができたことで、トメアスーを離れずとも高等教育課程まで修了することが可能となった。

---

心の育成や人格形成に必要なある一定の親子のふれあい期間を保ち、早くからベレンに送らなくても子供たちを地元で安心して学ばす事のできる優れた学校の建設が絶対に必要な事である。この問題を村全体の問題としてみんなで取り組んでいきたい」という一致した意見で座談会は締めくくられている。子供たちがベレン等の都市部の学校に進学するための学費を稼ぐことも1980年代後半からトメアスーで広く始まったデカセギの要因の大きな1つだったことも考えれば、レベルの高い学校の設置はトメアスーに住む多くの人びとが切望していたことだったと推測できるだろう。(「婦人部・青年部合同部会開催」『組合広報 Jornal Camta』No. 71、1993年1月5日)

<sup>6</sup> 第二トメアスー移住地建設等による人口増加や組合の繁忙さもあり1962年にトメアスー地区連合会を設立し、当時組合がおこなっていた交通、教育、病院経営、保健・衛生(マラリア予防等)の業務等を対応することになった。そして1966年にトメアスー地区会連合会がトメアスー文化協会と改称している。1970年代には文協の傘下に野球連盟や卓球クラブ、囲碁クラブ、俳句会、婦人連合会、日本語教育父兄会等の団体があった。また当時は娯楽が少なく、文協が映画の上映会等も実施していた。

<sup>7</sup> この土地は坂口渡フランシスコ氏(当時のトメアスー総合農業協同組合理事長)が地元のアマゾニア連邦農牧大学(UFRA)に土地3240㎡を無料で提供し実現した。なお、UFRAの学長はトメアスー出身の沼沢末雄であり、彼は「トメアスーでは、たくさんの人が学問を断念した。自分が学長になったことで、故郷の助けになれば」と考えたと述べている。(「【アマゾン日本人移住85周年】トメアスーに初の大学設立＝地元出身の沼沢氏が主導＝農業工学部は来年開設へ」『ニッケイ新聞』2014年10月3日

(<http://www.nikkeishimbun.jp/2014/141001-02especial.html>) (2017年5月1日閲覧)



図1 ニッケイ学校並びに日本語学校の校舎  
(出典) 筆者撮影

2016年現在で日本語学校には教師2名で生徒が約50名在籍している。1週間に2回午後には児童が学んでおり、運動会等の行事はニッケイ学校と協働で実施している。日本語学校にもJICAの日系社会青年ボランティアが継続して派遣されており、日本語を教えている。日本語学校は、日本語教育を通じて地域への日本理解の促進並びに日系社会の地位向上に寄与したとして、2016年に外務大臣表彰を受賞している。

## 第2節 学校教育の歴史的変遷

最初にトメアスーにできた学校は第一小学校（現在のDr. ファビオ・ルス (Dr. Fabio Luz) 小学校 (Escola Municipal de Ensino Fundamental Dr. Fábio Luz)）である。南米拓殖会社（以下、南拓）の現地会社であるコンパニア・ニッポニカ (Companhia Nipponica de Plantação do Brasil S/A) は、教育部主任として丸弘毅を任命し入植後すぐに小学校整備にとりかかった。1929年11月15日に丸弘毅が南拓の千葉三郎専務取締役にあてた手紙「南拓アカラ植民地便り」には、当時の状況が以下のとおり書かれている。

（前略）小生は教育に従事することになり入植早々準備にかかり仮校舎は単独者の合宿（半分は売店）（単独者は他の建物に移転）を充用児童数三十六名（一年より高等科迄）机腰掛四十人分製作豊富な木材と美はしき木質とで立派な器物が出来上がり黒板、教壇一切出来上り十月十日社長の臨場を仰ぎ開校式挙行終わって児童に茶菓の贈興因に同日は在宅の婦人全部も集め植民地に於ける児童教育特に男は外出の場合留守を預かる夫人の責任の重大なるを力説しました<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> 丸弘毅「通商局 南拓アカラ植民地便り」外務省通商局『移民情報』1929、p. 76。また、同様の記述が丸弘毅「植民地気分横溢のアカラ植民地」日本植民通信社『植民』1930、p. 143にもある。なおこの手紙には「只今注意（トメアスー守備隊長）を頼み毎日一時間宛（づつ）伯語の教授を児童にしています中尉の云う事が分からなくて困っていると木村さんの子ども（尋三）が通訳してくれたので通じたような滑稽もあります。」という記述がある。入植当時は大人よりも子どもたちの方がポルトガル語の習得が早かったことが推測できる。

1929年9月にトメアスーでの入植が開始されたことを考えると、それから1か月後の10月に開校式というスピード感は興味深い。こうしてトメアスーにはじめて創設された学校が第一小学校（現在群立小学校と州立中学校を併設する Escola Estadual de Ensino Médio Dr. Fábio Luz の前身）である<sup>9</sup>。1931年にはトメアスー中心地からほど近いブレウ（Breu）地区に南拓による2つめの小学校（第二小学校）がつけられた。ぶゑのすあいれす丸に乗船し第9回移民として1932年8月24日に入植した對木（対木）佐玖は、こうした当時の状況について、以下のように書いている。

学校は現在ニカ所開校にて目下中等科併置の規模広大なる学校植民地の現中央に建築工事中、学校通学区約一里余位に一カ所宛日本植民地建設の大使命を持する南拓にては特に衛生、教育、交通の三点には主力を盡しあり<sup>10</sup>。

したがって、對木の言葉からもわかるように、南拓は教育に力を入れていたようだ。鐘紡を率いた武藤山治の経営理論を研究する山本長次は、南拓は鐘紡が大株主であったことから、共済組合制度や医療等の福利厚生面、そして教育訓練面の充実でも定評のあった鐘紡主義を踏襲したと分析している。こうした山本の分析を踏まえるならば、鐘紡の経営方針に沿って（学校）教育を重要視していたがゆえのスピード感だったと推測できる<sup>1112</sup>。

なお、丸の手紙には「近く師範学校を出て伯国の夫人が着任することになっています」<sup>13</sup>とあるが、実際はアカラ公証人としての赴任したアルメイダ（Francisco Pontes Almeida）とその妻のマリア（Maria）婦人と娘のニヂィア（Nídia）が5年間教師として勤務している。また、彼らがトメアスーを去った後も、公証人として訪れたブラジル人のマガリョインス（Francisco de Assis Magalhães）とその妻（Leonila da Silva Magalhães）らが教鞭をとっている。なお、第二小学校で教鞭をとっていたのも師範学校を卒業したブラジル人女性であった<sup>14</sup>。

---

<sup>9</sup> Dr. Fábio Luz 学校は1957年に州政府へ移管されている。また、1999年から中等教育としての機能も有するようになった（Escola Dr. Fábio Luz の Blog（<http://fabioluzfundamental.blogspot.jp/p/coordenacao-pedagogica.html>）より。（2017年5月1日閲覧））。

<sup>10</sup> 對木佐玖「アカラ植民地事情 其一」拓務省拓務局『ブラジル移住者便り』1934、pp. 105-106。

<sup>11</sup> 山本長次『評伝・日本の経済思想 11 武藤山治 日本の経営の祖』日本経済評論社、2013、p. 137。

<sup>12</sup> 角田房子によれば、こうして病院や学校、農事試験場などを用意して迎え入れられた移民は、サンパウロ南部で裸一貫から始めた他の移民から「甘やかされている」という意味で「温室移民」と陰口を叩かれていた（角田房子『アマゾンの歌 日本人の記録』中公文庫、1976、p. 77）。

<sup>13</sup> 丸弘毅、同上、1929、p. 76。

<sup>14</sup> 1938年12月20日に交付された外国人入国法第93条により、14歳以下の児童には学校で外国語を教えることが禁じられ、すべてポルトガル語によって教育するという法律が制定されていた。そのため、日本人ではなくブラジル人が教鞭をとっていたことが考えられる（泉靖一・斎藤廣志『アマゾン その風土と日本人』古今書院、1954、p. 155）。ただし、辻小太郎『ブラジルの同報を訪ねて』日伯教会、1931によれば「ブラジルの法律ではブラジル語が完全に離せない10歳以下の児童に外国語を教授することはできないことになっており、ブラジルの地理歴史はブラジル生まれのブラジル人の他はおしえることはできないし、ブラジル語はブラジル生まれのブラジル人またはポルトガル生まれのポルトガル人以外は教えることはできない規定とされている。日本人の今までのやり方は全部違法である」（p. 73）とあり、法律の細かい条項は不明である。

学校教育の基盤整備に力をいれていた南拓であったが、当時はパラ州の州都ベレン（Belém）にしか中学校が存在しなかったため、多くの父兄並びに児童は進学を諦めていたようである。トメアスーに第1回移民として入植した山田義一家の話を中心に、過酷な開拓初期から戦後に胡椒の一大生産地になるまでのトメアスーの歴史的変遷をまとめた記録文学『アマゾンの歌 日本人の記録』には、以下のような描写がある。

元（山田義一の息子）は小学校を卒業して以来、小さい体で父の手伝いをしてきた。山田はずばぬけて成績のいい元を中学へ進ませたいと望みはしたが、アカラ植民地の貧しい暮らしの中から、ベレンの中学校へやることは不可能であった<sup>15</sup>。

第二次世界大戦が開始されると、ブラジルと日本は敵国同志となった。そこで、パラ州政府は、第二小学校を南拓の創立委員である橋爪捨三郎の寄付金をもとにつくられたアグアブランカ地区の橋爪会館にうつし、州政府が直接管理下においた。戦後には1960年に州に移管され州立校となっている。第二小学校は戦後の入植者増加に伴い校舎等も増築され、1960年代初めに州立学校としてジオニジオ・ベントス小学校（Grupo Escolar Dr. Dionísio Bentes de Carvalho）と命名されている<sup>16</sup>。

戦後のトメアスーは、胡椒の国際相場の高騰で多くの日系人に経済的余裕があった。そこで、当時トメアスーには小学校しかなかったため、多くの父兄はベレンやサンパウロに子どもを下宿させ仕送りをしながら学校に通わせていた<sup>17</sup>。

戦後の1951年に新たにつくられたのが、イピチンガ（Escola Ipitanga）小学校である。この学校は、ボアビスタ（Boa Vista）地区とイピチンガ（Ipitinga）地区に新たに入植した家族らにとって他の小学校まで距離があったため、州政府に住民らが申請して新設された。校舎は地域住民らが建設し、机や椅子は州政府が負担した。学校教師の報酬は州政府からの給与1カ月500クルゼイロスであったが、地域住民は優秀な教師を確保するため月額1,000クルゼイロスを追加支給していた<sup>18</sup>。

また、日本海外移住振興株式会社の現地法人であるJAMIC 移植民有限持分会社（以下、JAMIC）の直営移住地として入植が開始された第二トメアスー移住地には、JAMICによって2つの小学校が建設された。1つはイピランガ小学校（Escola Reunida Ipiranga）である。第1回の日本人25家族の入植に伴い、1963年にJAMICはブラジル人教師を雇用し、移住者宿泊所を改良して寺子屋式の授業を開始した。1965年に州に移管され、州立小学校として授業が開始される。1967年にはJAMICが校舎、教員宿舎を新築している。もう1つの学校は、エスペランサ小学校（Escola Isolada Esperança）である。この学校も1967年に入植者を対象にJAMICによって開校された。なお中学校については、40-50km離れたトメ

<sup>15</sup> 角田房子、同上、1976、p. 101。

<sup>16</sup> ただし、胡椒の病気蔓延に伴う日本人の退耕や再移住、それによる生徒数の激減に伴い1999年には廃校となっている。

<sup>17</sup> 筆者が2010年のフィールドワークでお世話になった高木誠也は、トメアスーに生まれ7歳からサンパウロの小学校に通っている。ただし、経済的な理由などによりトメアスーに呼び戻され、地元の中学校を卒業している（「組合員訪問 働きものの開拓2世 高木誠也さん」『トメアスー組合だより』No. 22、1986年6月20日）。

<sup>18</sup> 泉靖一・斎藤廣志、同上、1954、p. 140。

アスー市街地に位置するため、第二トメアスーへと入植した移民たちは当時 JAMIC が当時貸与していたスクールバスで通学していた。

1960 年当時はトメアスー総合農業組合が郡立小学校の運営に携わっており<sup>19</sup>、小学校の新しい先生をベレンから招聘するための交渉もおこなっていた<sup>20</sup>。当時の公立の小学校は自治体予算だけでは運営が困難であったことから組合は学校に対して毎年助成金も交付し、児童らの学習環境の醸成に寄与している<sup>21</sup>。このような経費補助は父兄会も担っていたようで、1971 年には小学校の学務員の矢野敏夫がトメアスー新聞に「トメアスー植民地に於ける教育の諸問題について」と題して寄稿している。その内容は、公立学校でありながら、父兄の経済的負担が大きすぎる点を指摘したうえで、ブラジル人父兄の学費未納問題の解決や教員の待遇の悪さの是正等を訴えている<sup>2223</sup>。例えば表 1 は 1974 年のトメアスーの小学校別生徒数の内訳表である。

学校名	区分		
	小学校		
	日系	非日系	計
イピチンガ小学校	55	113	168
中央 (Dr. ファビオ・ルス) 小学校	98	317	415
ブレウ小学校	188	132	320
エスペランサ小学校	37	13	50
イピランガ小学校	42	40	82
計	420	615	1035

表 1 トメアスーにおける学校別生徒数内訳表 (1974 年 6 月)

(出典) トメアスー産業組合『トメアスー植民地案内』(1975、p. 42) より筆者作成

表 1 をみると、イピチンガ小学校やファビオ・ルス小学校は、ブラジル人の方が 2～3 倍多いことが分かるだろう。また、全体を見ても日系移民の子弟よりもブラジル人の子弟数の方が多いことが分かる。また、表 2 は 1991 年 2 月時点での各公立学校の生徒数の割合である。1990 年には非日系ブラジル人の児童数の方が全体の 8 割前後を占めている。

1970 年代以降の日本人移民による新たな入植自体は数に限りがある。また、次章で論じるように日系移民の農場で働くために多くのブラジル人が出稼ぎでトメアスーに移り住んだ現状を踏まえれば 1970

<sup>19</sup> 産業組合が郡より小学校管理を移管され、組合内に教育部を設置して 4 つの小学校の統一管理を実施し始めたのは 1952～1953 年頃である (トメアスー総合農業協同組合『トメアスー総合農業協同組合創立 60 年史 1949-2009』2009、p. 50)。

<sup>20</sup> 角田房子、同上、1976、p. 224。

<sup>21</sup> なお、1974 年当時は中学校に 6,500.00CR\$, 全小学校に対しては 22,500.00CR\$ を年間交付している。(トメアスー産業組合『トメアスー植民地案内』1975、pp. 42。)

<sup>22</sup> 矢野敏夫「トメアスー植民地に於ける教育の諸問題について」『トメアスー』No. 35、1971 年 6 月 12 日。

<sup>23</sup> こうした教育熱心な日本人移住者や日系人子弟が通学している小・中学校は、父兄が経費を負担し施設等の補修整備をすすめていたため、教材なども含め同地域にある学校全体よりも整備状況は良いと評価されている (国際協力事業団『移住事業国別調査報告書 (北部ブラジル)』1991、p. 15)。

年代以降から 1990 年代にかけて非日系のブラジル人の生徒数は次第に増加したことが推察でき、日系人の親の経費負担やそれに対する非日系ブラジル人への不満は大きくなっていったことが推測される。

学校名 \ 区分	小学校			中学校		
	日系	非日系	計	日系	非日系	計
Dr. ファビオ・ルス小中学校	156	537	693	208	399	607
アントニオ小中学校	19	368	387	36	502	538
エスペランサ小学校	30	131	161	－	－	－
イピランガ小学校	11	39	50	－	－	－
計	216	1075	1291	244	901	1145

表2 トメアスー移住地の日系人生徒数（1991年2月）

（出典）国際協力事業団『移住事業国別調査報告書（北部ブラジル）』（1991、p. 16）より筆者作成。

移住先で日系人が自ら学校を運営しながら行政へ移管していく過程は、ブラジルの他の農村地域でも広く一般的だったようだ。例えば、日系画壇の重鎮として活躍し且つ移民史研究にも寄与したことで知られる半田知雄によれば、「昔は、植民地の方で学校をつくりこれを公認市立としてブラジル人の先生をやとうか、郡のほうへ寄付して、郡役所を通じて学務局から先生を派遣してもらうか、二つに一つであったが、正式な先生などはなかなかえられなかった。」としている<sup>24</sup>。また、長年サンパウロの移民の教育について研究している Demartini も、日本人が入植直後に創設した多くの学校が日本人ないしは移民会社等から群や州へと移管していく過程が広く見られると述べている<sup>25</sup>。

小学校しかなかったトメアスーに中学校が創設されたのは 1963 年のことである。アントニオ・ブラジル州立中学校（Escola Estadual Antonio Brasil）と命名された中学校は、南拓が利用していた農産物倉庫が州に譲渡され校舎として改築されてできた。その後、1980 年には夜学ではあるが高等学校も併設した。また、1992 年には Dr. ファビオ・ルス（Dr. Fábio Luz）小中学校に新たに高校も設置され、ベレンまで行かずともトメアスーで学べる学習環境が醸成されていった。以上がトメアスーにおける学校教育の主な歴史的変遷である。

### 第3節 トメアスーの日本語教育の歴史的変遷

トメアスーにおける日本語教育の歴史的変遷は大きく 4 つに区分することができる<sup>26</sup>。

まず 1 つは 1929 年の入植初期から第二次世界大戦以前までである。トメアスーでの日本語教育は移民が開始された 1929 年にすでに始まった。当初は日本語学校父兄会が結成され、学校教育に貢献した丸

<sup>24</sup> 半田知雄『移民の生活の歴史—ブラジル日系人の歩んだ道』サンパウロ人文科学研究所、1970、p. 302。

<sup>25</sup> Demartini, Z. B. F., “Japoneses em São Paulo: desafios da educação na Nova Terra.” In: Demartini, Zeila B. F. e Kishimoto, Tizuko M. (Org.), *Educação e Cultura - Brasil e Japão*, EDUSP, 2012, pp. 23-46。

<sup>26</sup> この 4 つの区分はトメアスー開拓 70 周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して トメアスー開拓 70 周年祭典委員会記念誌』（2009、pp. 97-99）の第 3 部教育と保健衛生の「日本語教育」を参考にした。



弘毅らを中心に、山田義一、西尾あい、そして諏訪夫人を助手として週に3回午後に農家の倉庫を教室として用いて日本語を教えていた<sup>27</sup>。1935年には南拓の整理がすすめられたため丸が休職し一時中断されるものの、その後寄付を募り1936年には校舎が建設され、日本から平坂夫妻を招聘し新たに第二学校の運営をはじめた。その後は、紺野宗一が両学校の担任となり、千葉太刀夫を臨時手伝いとして1941年の戦争勃発前まで日本語教育に取り組んでいる。当時は「日本語をよく理解することで日本人の精神を持つようになる」と考える移民もあり、山田元は日中働いたのち夜に父親から日本の文字や歴史を学んでいたという<sup>28,29</sup>。

2つめは、戦時中から戦後移住者受け入れ前までの時代（1941-1952）である。第二次世界大戦が開始された1942年1月28日にブラジルは枢軸国家に対して国交断絶し、在留邦人は敵性国人として扱われるようになった。また、アマゾンに移住した多くの日本人が「陸の孤島」だったトメアスーに強制的に追いやられた。トメアスーに入植したひとびとはそんな彼らを同郷出身別に引き受け、しばらくのあいだ一緒に暮らしたりもした<sup>30</sup>。第二次世界大戦中は、サンパウロなどの日系ブラジル人が多く居住する地域と同様に、敵性国語としての日本語での会話はおろか日本人同士の集会も禁止された。また、教科書や日本語書籍類は全部焼却処分された。当時は、州の憲兵が日本語で書かれた文書を没収するため移住者の家宅の搜索もおこなっていたようである。その当時の状況を『アマゾンの歌 日本人の記録』のなかで角田は以下のように描写している。

山田の家にも州警兵が近づいた。靴音を聞いた山田は、とっさに机の上に手を伸ばし、日本の学校の読本数冊を、土間に積んだ野菜袋の間に押し込んだ。州警兵が入ってきたので、もうそれ以上はかくせなかった。家宅搜索が行われている間、スエノは怯える末の子を体で包むように抱きかかえ、ベッドの上に横ずわりに坐っていた。その左右から、母親を守るように上の子どもたちが身をよせていた。戸口を開け放ったまま立ち去る州系警兵のうしろ姿を、山田はくちびるを嚙んで見送っていた。彼の乏しい蔵書のほとんどが持ち去られた<sup>31</sup>。

ただし、このような状況にあっても当時は紺野宗一が密かに個々の家々を巡回して日本語を教え、また親も子どもたちに日本語を学ばせていたと言われている<sup>32</sup>。終戦を迎えたトメアスーでは、胡椒を基

<sup>27</sup> 西尾あいは、「当時植民地は困難きわまる時代であり、農家の倉庫の一室を借りての質素なものであった。日本語教育を通じての人造りはその実績をもたらし、現在、各公共団体の第一線で活躍している人達が流暢な日本語を使えるのもその賜である。」としてその功績が称えられ、トメアスー開拓50周年祭において、教育功労章を受賞している（トメアスー開拓50周年祭典委員会『みどりの大地トメアスー トメアスー開拓50周年史 1929～1979』1985、p. 223）。

<sup>28</sup> 角田房子、同上、1976、p. 101。

<sup>29</sup> 泉・斎藤によれば、当時のブラジルは「日本語を知るものは日本精神を体得し、ポルトガル語を知るものはブラジル精神を体得している」という「ことだま」的思考様式が支配的であったという（泉靖一・斎藤廣志、同上、1954、p. 141）。

<sup>30</sup> 「アマゾン日系社会を築いた草創の日系人（4）」『サンパウロ新聞』2009年1月31日。

（<http://40anos.nikkeibrasil.com.br/jp/biografia.php?cod=1353>）（2017年5月1日閲覧）

<sup>31</sup> 角田房子、同上、1976、p. 114。

<sup>32</sup> トメアスー産業組合、同上、1975、p. 49。

幹作物とした農業が軌道に乗り地域経済が安定化するにともない、日本語教育熱もまた旺盛になっていく。そしてトメアスー産業組合はサンパウロから菅道夫を招聘し、産業組合内に職籍を置き、日本語学校を再開している。1951年3月にはトメアスー産業組合がアカラ教育会を発足し会費を徴収し、当時33名の児童が教育会の経営する日本語学校に通学していた記録が残っている<sup>33</sup>。ただし、戦後すぐのトメアスーでは、公立小学校内で日本語での会話が禁止されていたのと、また、日本語を使えばポルトガル語の発音がしっかり身につかなくなるといった理由により、子どもによる家庭内での日本語の使用を避ける傾向があったとしている<sup>34</sup>。それが理由かどうかは不明だが、蒲生正男によれば、日本語教育は実際に取り組みされたが、(1) 密林の孤島的な植民地環境、(2) 野菜によって生活を得なければならなくなった時に、彼らは自身でブラジル人の顧客を見出す必要、(3) 州政府の植民地として、戦後彼らの生活手段改善には直接州政府と交渉する必要、(4) 労働環境にいる大半がポルトガル語を話すブラジル人等の理由により、生活のための言語がポルトガル語以外ありえなかったため、当時の日本語が「教養のための外国語」以上のものにならず長くは続かなかったとしている<sup>35</sup>。

3つめは、戦後移住再開から移住事業廃止の時代(1953-1985)までである。1953年の移民再開に伴い、日本で教職にあった伊藤希彦がトメアスーへと戦後移住した後、1953年に私塾というかたちで日本語と珠算を橋爪会館で子どもたちに教えていた。1966年にトメアスー文化協会が発足した後は、私塾を文化協会傘下の日本語学校とした。文化協会は、1972年に日本から北海道在住の元教師の新井亀吉、ウメ子夫妻を招聘し、南拓の旧病院を校舎として日本語教育をすすめた<sup>36</sup>。ペルーやアメリカ、シンガポール等で教鞭をとった経験がある新井亀吉は教育に熱心で、当時は日本語教育だけでなく、音楽や絵画などの情操教育や林間学校、学芸会なども実施している<sup>37,38</sup>。例えば、1975年の第2回林間学校は、

<sup>33</sup> 泉靖一・斎藤廣志、同上、1954、p. 143。ただし、このアカラ教育会がいつまで存続したのかは不明である。

<sup>34</sup> 第二トメアスー移住地20年史編集委員会『アマゾンに挑む 入植20周年史』1984、p. 32。

<sup>35</sup> 蒲生正男「アマゾニアにおける日系コロニアの同化過程—トメ・アスウ植民地—」泉靖一編『移民：ブラジル移民の実態調査』古今書院、1957、p. 518。

<sup>36</sup> 新井亀吉の息子は新井範明で1962年に妻の慶子とともにトメアスーへ先に入植している。新井範明は後に日本語学校の校長やトメアスー文化協会会長をつとめ、文化協会への福祉功労に寄与したとして、2015年には邦人叙勲を受賞している。

<sup>37</sup> 新井亀吉は1974年4月25日付の『トメアスー』(No. 44)では「教育ということ」といった論考を寄稿し、その後も「教育ということ(シリーズ)第2回「蜚」について」を1976年3月25日付の『トメアスー』(No. 61)から計4回にわたって連載し、トメアスーにとって必要な家庭教育の重要性を論じている。新井らが帰国することが急きょ決まった際には、1977年3月31日『トメアスー』において「新井日本語学校校長帰国に思う」と題した記事が寄稿された。記事には、新井が取り組んできた実践への賞賛や、またトメアスー文協、婦人会連合会、日語父兄会共催による盛大な送別会の開催とその時の演芸会や児童の発表等の模様について言及されており、新井が多くの人びとに慕われていたことがうかがえる。

<sup>38</sup> 1976年にはベレン日本国総領事が日語学校学習発表会「舌切り雀」の児童劇を観賞し、在ベレン総領事増沢幸三郎夫妻が海外の日本語学校生徒による学習発表会の中で最優秀だと賞賛している(トメアスー開拓50周年祭典委員会『みどりの大地トメアスー トメアスー開拓50周年史 1929～1979』1985、p. 222。)

7月15日から18日までの4日間行われた<sup>39</sup>。場所は1974年に第二トメアスーに建てられた公民館が利用された<sup>40</sup>。参加者は10歳から14歳までの約40名が集まり、昼間は勉強や水泳や魚釣り、夜は映画鑑賞やキャンプファイヤー、フォークダンスなどをおこなっている<sup>41</sup>。また、1975年の日本語学校は、9月から11月までの休校期間中も様々な取り組みが実施されており、そのうちの1つが情操教育であった。このときの生徒は61名おり、具体的には朝8時から11時までの3時間、子どもたちは日本語から歌や絵、折り紙、体操等を学んでいる。こうした取り組みは、林間学校開催にあたり協力した父兄等が「ブラジルの学校教育では安心できない。特に欠けている「集団の中で個人を鍛える」の教育が必要だ」といった意見や「学習面ではブラジルの学校で弱い理数科目、又芸能科目に重点を置くと良い」など発言していることから、そうした需要に応えようとしたものであったことが想像できる<sup>42</sup>。また、1975年度には、新井亀吉の考えをもとにPTAが発足され活動がすすめられている<sup>43</sup>。授業形態は、週2回（土・日）として4学級編成の2時間授業で複式学級の個別指導方式をとっており、始業式（1975年は12月14日）や終業式（8月末（但し、1976年度は11月）も実施していた。日本語教室の生徒たちは、トメアスー全地域から父兄の当番制送迎で通学していた。ただし、1974年には胡椒の水害や病害の蔓延に伴い脱耕者が相次いだため、そもそも通学自体が困難な児童も多くいたようである<sup>45</sup>。

当時は在ベレン日本国総領事館より教育助成金が毎年交付されていた。1974年には日本語教育と日本とブラジルの親善を目的として、アマゾン日語教育研究会が発足された。役員としては、汎アマゾニア日伯文化協会会長の越知栄が会長に、新井が副会長となり、顧問にはベレン総領事の増沢幸三郎と国際協力事業団ベレン所長の児島俊郎が就任している<sup>46</sup>。

<sup>39</sup> 林間学校は、1974年から1981年まで合計8回実施された。1981年を最後に終わった理由は参加者の減少である（トメアスー開拓70周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して トメアスー開拓70周年祭典委員会記念誌』2009、p.80）。なお、1978年に開催された第5回林間学校は、国際協力事業団やアマゾニア熱帯農業総合試験場等も後援し、医師からの「健康と衛生」と題する講義や熱帯農業試験場は「自然科学講座」等も実施され、生徒から好評を得ていたようである（「第5回1978年度少年少女林間学校開催される」『トメアスー』No.76、1978年9月1日）。

<sup>40</sup> 公民館は国際移住事業団等からの助成もあり、1974年に建てられた。卓球大会や領事館提供のNHK紅白歌合戦のフィルム上映、農産物の品評会場、または後述する日本語教室等で利用された。なお、戦後の日系移民の移住地に公民館が建ったのは第二トメアスーが初めてという説もある（第二トメアスー移住地20年史編集委員会『アマゾンに挑む 入植二十周年史』1984、p.94）。

<sup>41</sup> 新井亀吉「少年少女育成のための林間学校を終えて」『トメアスー』No.57、1975年9月6日や新井智紀「「林間学校」の四日間」『トメアスー』No.58、1975年10月15日等。

<sup>42</sup> 新井亀吉「少年少女育成のための林間学校を終えて（その2）」『トメアスー』No.58、1975年10月15日。

<sup>43</sup> 新井亀吉「「PTA 父母と先生の会」の誕生に寄せて」『緑風』No.50、1975年3月1日。

<sup>44</sup> なお、1976年の第1回PTAは5月14日に開催され、生徒会の結成、園芸・図書部の結成、林間学校、生徒文集発刊、生徒発表会、図書の貸し出し、校舎問題、父母のピクニック等を議論している（『トメアスー』「日語学校PTA開かれる」No.63、1976年6月1日）。

<sup>45</sup> 1974年8月25日にトメアスー文化協会とトメアスー新聞が主催で実施した座談会「トメアスーを語ろう」においての新井亀吉の発言にそれはみとれる（「特集号 トメアスーを語ろう 第1回 現在の一大危機に」『トメアスー』1974年日付なし）。

<sup>46</sup> 『トメアスー』「アマゾン日語教育研究会 日語教育日伯親善を期して発足さる」No.51、1975年4月1日。ただし、この会自体は、地理的事業と経済的不況によって機能しなかった（新井亀吉・ウメ子「お別れに当たって（第三回）」『トメアスー』No.71、1977年6月30日）。

トメアスーで日本語教育や教育全般の活性化を中心になってすすめた新井夫妻が 1977 年に帰国すると、諸石照雄、角田修司、高松志都等有志で教鞭をとった。その後も、大西保子、榎末子、伊藤栄子、松崎紀太郎、梅沢保つかさ、三宅昭子、菊川雅幸らへと引き継がれている<sup>47</sup>。新井亀吉帰国後の 1970 年代後半に開催された修了式と学芸会の様子は以下のように論じられている。

百名余の生徒に校長（大沼春夫文協会長）を除き、わずか三名の教師が小学過程四カ年までをハクラスに分け、毎週土、日曜日を利用し二月から十二月上旬まで日本語の勉強に励んだ成果を父兄の前で発表するわけである（中略）。同修了式でまず驚かされたことは、式が生徒による校歌斉唱で始まったことである。（中略）次に驚かされたことは、学芸会が単なる合掌、劇、作文の朗読、遊戯だけにとどまらず、観察記録、意見発表、研究発表までであったことである（中略）。

トメアス日本語学校では年間 160 時間しかない授業時間のうち、60 時間を情操教育の時間に当てているという。「わずかな時間数でそこまで指導する必要があるのか」「無理し過ぎる」という批判もある。しかし当地小学校教育の中で大きく不足している情操教育を日本語の勉強に左程の興味を持つに至っていない年齢の子どもたちに、興味と関心と呼び起こす手段とし、活用して日本語教育に結び付ける指導方法は非常にいい方法であるといえよう。

このトメアス日本語学校でも多くの悩みがある。その一つは、トメアス地区には高等学校以上の学校がないため、小学過程四年までの日本語教育を八年間教えても、それ以上のことが出来ないこと。そして日本語の指導に当たっておられる先生には奉仕の気持ちで大任をお願いしなければならないことである。そのほか、教材、教具の不足など数多くの問題がある<sup>48</sup>。

以上の当時の状況から、日本語学校の運営は教員の裁量並びに負担が大きかった一方で、教員らは熱心に日本語教育に取り組んでいたことがわかるだろう。以前から懸案事項であった校舎の問題は、1979 年の入植 50 周年記念事業として国際協力事業団の助成を受け、753m<sup>2</sup> の木造二階建て造りの学生寮と日本語教室の校舎が新設されたことで解決している。

こうしてトメアスー文化協会を中心に日本語教育の環境が醸成される一方で、日本語学校から 30-45km 程度離れた第二トメアスーに住む父兄にとっては、各自で児童を送迎する負担は大きかった。そこで 1980 年 1 月 6 日に第二トメアスーに山根緑による自宅を開放した「山根学級」が開校される。山根は生徒 28 名に週 2 日間（土・日）の授業をおこなっていた。1981 年には生徒数が 40 名となり、地区会では旧収容所建物を補修し充当することにし、内部は父兄が改造し教師も 1 名増員された<sup>49</sup>。1982

<sup>47</sup> 鍋木功によれば、移住先国側に対する配慮から 1977 年度までは隔年で教科書のみが助成されていたが、1978 年度から現地日語教師への謝金、教材教具の一部助成、および隣国へ派遣している日本語指導教師の巡回指導派遣（年 1 回）が実施されるようになった。1979 年以降は、現地日本語教師の日本研修（各支部から 1 名程度が約 3 か月間研修）が制度化された（鍋木功「日語学校児童生徒の意識について -アマゾン日系 2、3 世児童生徒の日本語学習への関心度-」国際協力事業団『移住研究』No. 18、1981、pp. 28-42。）。

<sup>48</sup> 国際協力事業団「現地の動き 移住地と共に歩んだトメアス日本語学校」国際協力事業団『海外移住』384 号、1980、pp. 14-15。

<sup>49</sup> 第二トメアスー移住地 20 年史編集委員会『アマゾンに挑む 入植二十周年史』1984、p. 32。

年にはさらに1つの教室を増築し、後に第二センター公民館に移転して池上良子、渡辺多喜子、菅谷美智代が教師として関わった。これらの取り組みはJAMICの助成対象校として公認され、「第二トメアスー日本語教室エスペランサ分校」という名称に変わった。

国際協力事業団移住事業部は、1983年並びに1984年に第一、第二トメアスーの日本語学校を視察し、その結果を『ブラジルにおける日本語学校巡回指導報告書』（1986）にまとめている。報告書によれば、例えば第二トメアスーは日常生活のなかで日本語を使う家庭が多い一方で、第一トメアスーは、ポルトガル語が日常会話として主流になりつつあるという違いを指摘している。つまり、第一トメアスーはこのときも戦後すぐと同様に日本語教育の性質が日常会話で用いられない外国語として変容するなかで、いかに日本語を教えるかということに焦点が変化していったときだと言えるであろう。第二トメアスーが抱える問題点としては、電気が通っていないために教材利用や教材作製に苦労している点や、やはり第一トメアスーから距離があり道路も悪いことが指摘されている。第一トメアスーにおいては、教師らは週2日でわずか月6万クルゼイロ（日本円で4,000円）で教師のボランティアに頼る結果になり教員側の苦労が多い点を指摘している<sup>50</sup>。

このように日本語教師の負担は大きかったわけだが、それでも、1982年にはイピランガ分校に久保美恵子、谷澤喜巳雄の両氏が教師として就任している。また、新井慶子は1982年よりブレウ地区で農家の倉庫を借り受け、低学年の通学の便を考慮し「ブレウ日本語学校分校」を開校（1990年に本校と統合）している。ブレウ日本語学校分校では、新井慶子以外にも、佐々木敬雄、原屋敷緑、原屋敷幸枝、加藤広行等が教鞭をとった。ちょうどこの頃から、国際協力事業団により「移住者指定の教育向上と日本語教師のレベルアップ、日本語普及をはかるべく人材の育成」を目的とした現地日本語教育本邦研修が開始され<sup>51</sup>、1979年から1986年のあいだに大西保子、松崎紀太郎、榎末子、山根緑、新井慶子の5名が参加している。

当時の日本語学校で教鞭をとっていた教師からは「生徒は低学年が多いが、学校が遠いため、来れなくなるケースが多い」「授業料より交通費がかかる」等の意見があがっている<sup>53</sup>。先述したように、トメアスーには1980年に高校が創設されたものの、大半は大学進学を考慮しベレンにあるレベルの高い高校へ進学するため、多くが最高小学4、5年までで日本語学習が中断していた<sup>54</sup>。日本語を学ぶ学習教材としての少年少女雑誌や漫画は、鈴木によれば、単行本を個人で購入すると日本の定価の2.5倍にま

<sup>50</sup> 国際協力事業団移住事業部『ブラジルにおける日本語学校巡回指導報告書』1986、pp. 39-40。

<sup>51</sup> 国際協力事業団、同上、1991、p. 92。

<sup>52</sup> なお、1991年の国際協力事業団の調査によれば本研修参加者の内1名サンパウロ転住を除き、全員現職として活躍中しているものの、うち3名は夏季休校中のみ日本へ出稼ぎに出ているとのことだった（国際協力事業団、同上、1991、p. 85）。

<sup>53</sup> 国際協力事業団『南米（主としてブラジル）における日語教育事情調査指導報告書』1982、p. 21。

<sup>54</sup> なお、森幸一も述べているように、一定程度の資本がある日系農家は、胡椒価格が高騰した際に投資目的でベレン市に住宅を購入しており、そこから通学するという形態も多くみられている（森幸一「日系集団地にとっての「出稼ぎ」のもつ意味」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人（上）論文篇・就労と生活』明石書店、1995、p. 554）。筆者がブラジルトメアスー滞在中にお世話になった日系農家も同様にベレン市内にマンションを有しており、筆者も何度かそうしたマンションを利用した。

でなったとしている<sup>55</sup>。つまりこの当時のトメアスーでは、子どもたちが日本語を学ぶには親の理解や経済的余裕が不可欠であった<sup>56</sup>。たとえば、鐔木がパラ州ベレン市近郊の6つの日本語学校で実施したアンケート結果によれば、調査児童生徒のうち14歳以上の生徒数の割合が全体の15%以下となっている。鐔木の調査によれば、トメアスーでは大学などの高等学校機関への進学を目指す子弟の多くが地元を離れ、ベレンやサントイザベル（Santa Izabel）、カスタンニャール（Castanhal）市内に寄宿通学することになる<sup>57</sup>。しかし、進学すると学業が忙しくなるのと、サントイザベルやカスタンニャールにおいては少年少女のスポーツ（野球やバレーボール）が当時盛んだったため、日本語学校の授業日と重なるといった理由が、日本語学校から児童が疎遠になる要因だと考えられる<sup>58</sup>。

4つめは、出稼ぎと日本語の外国語化・国際化の時代（1985-1999年）である。1980年代前半の農産物の不作によって再度経済的危機に陥っていたトメアスーであったが、1984年からまた胡椒価格が高騰しはじめ、1985年に長年経済的な不況で苦しめられてきた組合自体は黒字決算に転じている。ただし、この胡椒価格の恩恵にあずかることができた農家と、胡椒を植栽していなかった、ないしは販売する胡椒を有していなかった農家とのあいだに大きな経済格差が生じた。また、1988年下半期に胡椒価格は再度暴落したため、農業融資の利子返済などができずに窮する事態に陥った農家が多くでた。さらに、パラ州政府とJICAとの共同計画で取り組まれていたトメアスーの農村電化事業は、個別農家一軒あたり3,500USドルほどの自己負担金を支出させることとなり、まとまったお金を準備できない農家の出稼ぎを助長した<sup>59</sup>。こうして日本への出稼ぎの増加とともに日本語教師の入れ替え・不足も急激に加速化していった。国際協力事業団によれば、1991年2月1日現在でトメアスーに居住する日系ブラジル人1,606

<sup>55</sup> 鐔木功、同上、1981、p. 37。

<sup>56</sup> 父兄や日本語教師が様々な思いをもって日本語の授業に取り組むなかで、鐔木が指摘するように、当時の子どもたちは圍場が広大で隣近所までかなりの距離があるため、隣近所の友達と自由に遊ぶ機会が少なかった。そこで児童生徒の大半は、友達と遊ぶことが日本語学校へと足を運ぶ大きな理由の1つになっていたようだ（鐔木功、同上、1981、p. 35。）

<sup>57</sup> カスタンニャール郡はベレンから東方68km地点に所在し、自家用車でおおよそ1時間という立地条件にあり、いわゆる都市近郊型のまちである。ここはトメアスーのように集団移住地として日系移民が形式的に入植したわけではなく、日本人が徐々に集まってできたコミュニティーと言って良いだろう。1995年には約150の日系の家族が居住している。このカスタンニャールにある日伯文化協会が1995年におこなった日系人の日本語教育やブラジル公教育に関する意識調査によれば、やはり多くの日系人の親たちは学費が無料の公立の学校よりも、授業料が高くても質の良い私立校を選択する傾向にあり、1995年時点は地元で学習環境が醸成されている私立高校があり、高校3年時の進学コースの授業の月額が最高120レアル（約130USドル）支払うことになっても多くがそこで学ばせていたという。なお、地元の良い高校や進学コースがなかった時代は、カスタンニャールの親らも子どもたちをベレンに移転させ通学させていたが、その時には現在の3倍の費用がかかったとされている。したがって、カスタンニャールでも親の子どもに対する教育への投資への思いと、それに係る費用が家計にとって大きな負担であったことは容易に想像できるだろう。（カスタンニャール日伯文化協会「日系人の教育意識（日本語教育・ブラジル公教育）についての一考察ーブラジル・カスタンニャール郡における教育意識調査よりー」国際協力事業団『移住研究』No. 33、1996、pp. 89-115。）

<sup>58</sup> 鐔木功、同上、1981、p. 37。

<sup>59</sup> 森幸一「日系集団地にとっての「出稼ぎ」のもつ意味」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人（上）論文篇・就労と生活』明石書店、1995、p. 560。

人のうち、日本への出稼ぎ者が 386 名（約 24%）おり、特に 1、2 世の男子が多い<sup>60</sup>。主な出稼ぎの理由として、国際協力事業団報告書には以下のように記載されている。

出稼ぎの理由は、農業経営の不振に伴う所得の確保及び営農資金の確保が主なものであるが、若い青年層のデカセギはそのようなことではなく、父母の生まれた日本での生活を体験したいということを動機とするものがほとんどで、これを一世世代から見ると気軽に遊び気分に出稼ぎに出て行っていると表現されているが、その一方で若手層の出稼ぎは、日本人の勤勉さ等の日本的アイデンティティの取得に大いに役立つなどのプラス面の評価をする人が多い<sup>61</sup>。

こうした状況において文化協会は日本語教育の環境整備をすすめるため、3つの分校を統合し日本語学校の全教師と父兄会役員、文化協会担当理事で構成される「日本語学校運営委員会」を結成した。当時も日曜学校として授業は運営されており、年間 160 時間を課していた。また、継続して学校行事として始業式、ピクニック、研修旅行、お話弁論大会など実施している。

国際協力事業団の『移住事業国別調査報告書（北部ブラジル）』（1991）によれば、第一トメアスー移住地の十字路の学校には 71 名、ブレウ校に 40 名、第二トメアスー移住地のイピランガ校 9 名、エスペランサ校には 28 名在籍者がいたとしている<sup>62</sup>。トメアスー文化協会が 1992 年 6 月に発刊した『文化協会だより』第 1 号の新井範明による「トメアスー日本語学校の今後の課題」には以下のような記述がある。

今年度も日本語を勉強しようとする学童が 160 人も集まって来ています。日本人の顔、ブラジル人の顔と混じっています。以前のような日本人子弟だけの学校とは違い国際色豊かになりました（中略）。日本語を学ぶ目的は、以前は日本人の親が子どもに母国語ぐらい読み書きできるように願って通学させましたが、最近では日本が経済・文化大国に成長して、生活水準や教育内容が世界のトップをいくようになり、全人教育の必要性がクローズアップして来ました。従って日本の事情を知りたがる傾向にあり、英語、フランス語、スペイン語同様日本語のシェアが大きくなってきました。一方、最近の出稼ぎブームの波にのり、日本に行こうとする若者たちの間でも日本語熱が高まっています。植民地の母国語としての日本語教育から、外国人に教える外国語としての日本語に転換している現在、新たに教育指導方法や教材開発が現状に適合するよう迫られてきています<sup>63</sup>。

つまり、このころから日本文化を継承するための母国語としての日本語教育から、日本の経済発展とそれに伴う就労を目的とした外国語としての日本語教育への変容が加速度的に進んだことがみてとれる<sup>64</sup>。また、日本語教師も移民 1 世から 2 世、3 世への世代交代も進んでいった。

<sup>60</sup> 国際協力事業団、同上、1991、p. 50。

<sup>61</sup> 国際協力事業団、同上、1991、p. 50。

<sup>62</sup> 国際協力事業団、同上、1991、p. 22。

<sup>63</sup> 新井範明「トメアスー日本語学校の今後の課題」『文化協会だより』No. 1、1992 年 6 月。

<sup>64</sup> このような状況は中南米全般にも該当したようである。長野正は「出稼ぎ」等を要因とする成人の日本語学習者の急激な増加と年少者の学習者の一定数の需要に対し、子どもと成人のそれぞれの言語学習

こうした日本語教育の変化への適応と専門性の向上を目的に、日本語教育を学ぶため来日する人びともいた。例えば、トメアスー文化協会が1992年12月21日に発行した「文化協会だより」第3号によれば、佐々木敬雄は6月15日から9月12日までの3ヶ月間日本語教師本邦研修生として訪日している。日本では、玉川大学国際教室や新宿日本語学校センターを中心に24教科（教育概論、教授法概論、日本語の歴史、身体表現研究、文法、音声論）を33名の専門家から講義を受けて学んでいる。JICAが現在も取り組んでいる日系継承教育（旧継承日本語教育教師）研修については、1998年、1999年、2004年、2013年、2015年、2016年に毎年1名ずつ文化協会から派遣している<sup>65</sup>。また、日本語教師の強化をすすめるため、トメアスー文化協会は1989年から現在まで以下のJICAの日系青年並びに日系シニアボランティアを受け入れ、日本語教育を継続して取り組んでいる。

隊員区分	職種名称	活動期間（自）	活動期間（至）	配属先
日系青年	日本語教師	1989/2/17	1992/2/17	トメアスー文化協会
日系シニア	日本語教育	1993/1/22	1995/1/21	トメアスー文化協会
日系シニア	日本語教育	1996/7/10	1998/7/9	トメアスー文化協会
日系青年	日本語教師	2000/3/10	2002/3/4	トメアスー文化協会
日系シニア	日本語教育	2002/7/5	2004/9/29	トメアスー文化協会
日系青年	日本語教師	2005/7/1	2007/6/24	トメアスー文化協会
日系青年	日本語教師	2007/7/6	2009/6/30	トメアスー文化協会
日系青年	日系日本語学校教師	2009/7/4	2011/6/28	トメアスー日本語学校
日系青年	小学校教諭	2012/7/4	2014/3/18	①トメアスー日系学校、②トメアスー日本語学校
日系青年	小学校教育	2015/7/2	2017/3/17	①トメアスー日系学校 ②トメアスー日本語学校
日系青年	青少年活動	2016/6/29	2018/6/23（予定）	トメアスー文化農業振興協会
日系青年	小学校教育	2017/7/6	2019/3/18（予定）	①トメアスー日系学校 ②トメアスー日本語学校

表3 トメアスーの日本語学校に派遣されたJICAボランティア

（出典）JICA 青年海外協力隊事務局からのトメアスー移住地に派遣されたボランティア情報リストを基に筆者作成<sup>66</sup>

過程を検討・識別しながら、それぞれに適した外国語としての日本語の教育方法を検討する必要があると述べている（長野正「中南米における日本語教育の課題」国際協力事業団『移住研究』No. 32、1995、pp. 61-91。）

<sup>65</sup> 日系継承教育研修参加者の数字は2017年4月2日にJICAに直接問い合わせた。

<sup>66</sup> なお、2016年の「青少年活動」は「野球の技術・ルール・礼儀・トレーニング方法などの指導やラジオ体操を定着させる活動などを行う。」ことを目的としてトメアスー文化農業振興協会に派遣されているが、日本語学校でも体育の授業を担当しているため追記した。



#### 第4節 日本語教育の内実—1980年代前半の日本語学校生徒の作文を事例に—

これまでトメアスーにおける日本語教育の歴史的変遷を概観した。次にこうした日本語教育が児童に対してどのような影響を与えたのかを分析するため、第二トメアスー移住地20年史編集委員会の『アマゾンに挑む入植20年史 第二トメアスー自治会』（1984）を見たい。これは文字通り第二トメアスーの入植20年を祝うため1984年に編纂されたものである。本書には当時第二トメアスーの日本語学校に通っていた児童25名による作文が掲載されている。そこで本節ではこの作文の分析を踏まえたうえで、主に日本語を学んでいた児童らの日本と生まれ育ったブラジルやアマゾンに対する想い、家族との関係性などを明らかにしたい。

この25の作文は、主にピクニックや野球、畑での農作業や幼い妹弟の子守りの手伝い等の日常生活に関するものと、日本語教室で学んだことやそれに関しての日本語（特に漢字習得）の難しさに関するもの、またそれらが全て1つの作文のなかで書かれているものなどが大半をしめている。一方で、それ以外に日本を「素晴らしい」「美しい」「先進的な国」と評し、日本へ行くために日本語を勉強していると書く作文が8つある。例えば、太田みさとは「日本語と私」と題した作文で以下のように述べている。

私は日本語学校がだいすきです。いつも学校にかよって二年の下を勉強しています。私のお父さんと、お母さんは、いっしょうけんめいにわたしたちのためにはたらいしています。私はいつも、日本とブラジルが手をつなぐのに、やくに立つ人間になりたいと思っています。私は大きくなったら日本に行きたいと思っています。日本にいったらいっしょうけんめい勉強したいと思います。私のお父さんやお母さんが、いつも私に日本のことを話してくれます。日本はとてもきれいですばらしい国だという話です。日本でいっしょうけんめいべん強して、お父さんやお母さんによるこんでもらいたいと思います。お父さんの話によると、日本ではどこまでも、道ろがきれいでゴミ一つおちていないということです。私はどうして日本とブラジルがそんなにさがあるのか、わかりません。おそらくほかのことも、もっといろんなことでちがいがあると思います。

私はずっと前から日本へ行って見たいというゆめをもっていました。そのゆめがかなえられるまで、これからもずっと日本語のべん強をつづけて行きたいと思っています。

日本のことがもっと知りたくなりました。日本の国が色々なことで他の国よりすすんでいるということを、よく聞くからです。そしていつか、お父さんやお母さんの生まれた国、いとこたちのすむ日本へ行って見たいと思います。私は日本語で話せるようになるためにがんばっています<sup>67</sup>。

また、以下は笹原邦一の作文である。

ぼくは日本へ、でん気かんけいのことで、べんきょうしに行きたいと思っています。

日本とブラジルをくらべてみると、日本はずっとすすんでいると思います。そして日本のべん強も、ずっとすすんでいると思います。ぼくは日本の子どもたちと文通をしているけれど、日本の子どもたちはブラジルの子どもたちよりも進んでいます。（中略）。日本の国は、ブラジルよりも小さいけれど、ブ

<sup>67</sup> 第二トメアスー移住地20年史編集委員会、同上、1984、p. 118。

ラジルの町へ行って見ると、よく、こじきがすわっています、こじきになるのならすこしでもはたらけば、お金がはいると思います。どうしてブラジル人は、はたらかないのかなと思います<sup>68</sup>。

室井なおみは以下のように述べている。

(中略) 私は大きくなったら日本に行きたいと思ってばかりいます。もっとべん強して、はいしゃさんになりたいと思っています。みんなのはをきれいになおしたいと思う。日本はブラジルよりも、もっとすすんでいるから、もっといいものをべん強したいと思っています<sup>69</sup>。

これらの3つに共通しているのは、日本がブラジルよりも進んでおり、優れているからこそ、将来は日本で学びたいという想いである。太田みさとの作文からは、日本に行くことで両親を喜ばせることができる、つまり両親が日本に行くことを希望しているということも読める。こうして単純に日本へ行きたいという想いだけでなく、日本で勉強したのち、故郷のブラジルトメアスーに帰ってきたいという作文を書いた児童もいる。例えば、わださちよは「日本語と私」と題した作文で以下のように語っている。

(前略) おとうさんがいつもわたしたちにいっています。「ぼくらみたいにならないで、しっかりべんきょうをしなさい。ぼくはブラジル生まれだから、なんにも日本語のべんきょうはできません。」とわたしたちに言います。

わたしはいっしょうけんめいべんきょうして、おばあちゃんの国へ行きたいと思います。日本でいっしょうけんめいべんきょうして大きくなったらトメアスーの日本語の先生に、なりたいと思います<sup>70</sup>。

また、久保百合は以下のような作文を書いている。

お父さん、お母さんがすんでいた日本とくらべると、ブラジルはまだまだおくらしている国です。今、おじいちゃんがすんでいる日本は、とてもすばらしく、国道にはごみ一つもおちていません。日本はとてもすばらしくするために、むかしからえらい人たちががんばっている。ブラジルは今から、2、3世の人たちやブラジル人たちが、がんばって勉強し、よその国のいろいろなことをけんきゅうして、今よりもますますすばらしい国にしなければいけないと思います。

お父さんはときどき日本のはがきやしゃしんを見せてくれます。そのほかに日本の話もたくさんしてくれます、日本の国のはなしを聞くと日本というところはとてもすばらしい国だと思います。(中略)

私は今からたくさん勉強をして日本語もたっしやになり、いろいろなことをたくさんしりたいと思います。

日本語を勉強して日本で勉強してから、ブラジルへ帰って来てブラジルの国をすばらしい国にするようにがんばりたいと思っています。私は日本の友だちをつくって、日本人とブラジル人がなかよく手を

<sup>68</sup> 第二トメアスー移住地 20 年史編集委員会、同上、1984、p. 120。

<sup>69</sup> 第二トメアスー移住地 20 年史編集委員会、同上、1984、p. 121。

<sup>70</sup> 第二トメアスー移住地 20 年史編集委員会、同上、1984、p. 119。

つなげば、すばらしい国になると思います。日本とブラジルをつなぐはしになり、ちしきをみがいてわざをねって、今から私たちががんばってすばらしい、ブラジルの国をつくりましょう<sup>71</sup>。

ニッ森康二は「僕の主張」と題した作文を書いている。

朝四時に起きて、五時少し過ぎのバスに乗って、トメアスーの学校に通っています。家では、農業をしております。学校から帰って来てから、土曜日、日曜日は、家の手伝いをしています。トラットールを運転して、ホッサデーラや、ジスコをかけます。父のようににはできませんが、どうにか、自分の思うようにかけれるようになりました。そんな時は、とっても気分がいいです。この後、ひ料を入れ、またジスコをかけて、平らにしてから、フェイジョンと、ミーリョの種まきをしました。何回か、カップピナをしました。ひ料も入れました。そうして、収かくの時が来ました。少しの種から、こんなにたくさんの実が取れると思うと、不思議でなりません。これもみんな、神様がくださった自然のめぐみのおかげだと思います。

ぼくは、学校を卒業してから、作物のこと、農業機械のことを、いろいろと覚え、こく物が、たくさん収かく出来るようにするにはどうしたらいいか、又、機械を能りつよく使い、仕事をはかどるように、いろいろのことを学び、父を手伝いたいと思っております。そのためには、できましたら、日本に行き、作物のことや機械を組み立てあり、修理する技術を勉強して、大人になった時、小さな力かもしれませんが、ブラジルの農業の進歩にお手伝いしたいと思っております<sup>72</sup>。

これらの作文に共通するのは、自分たちが生まれ育ったブラジルの発展のために貢献したい、そのためにすでに発展している日本で学ぶという考えだろう。ただ、ニッ森の作文を除き本稿で取り上げた全ての作文に共通するのは、自らがいまここで生活しているブラジルアマゾンには日本よりも発展していない、劣位なのだという発想である。こうした作文は日本語を学ぶ教室で書かれた可能性がある。また、本編集委員らの目にとまり編集された、ないしは教師の助言を受けて修正されたことも考えられる。したがって、そうした親や大人の眼差しを意識した作文であることは想像に難くない。また、文中にあるように家族や親や教師から「ブラジルよりも」日本は良い、素晴らしい国だ」だと言われ続けていたことも想像できよう。例えば、トメアスーの日本語教育に大きく貢献した新井亀吉も、帰国時に日語学校の生徒に対し以下のメッセージを残している。

お父さんやお母さんから日本人の優れた点をよく学びとってブラジルの社会に生かしてください。又より立派になるために、できれば日本へ留学して日本の進んだ科学や技術を学ぶことも是非実行して貰いたいと思います<sup>73</sup>。

<sup>71</sup> 第二トメアスー移住地 20 年史編集委員会、同上、1984、p. 121。

<sup>72</sup> 第二トメアスー移住地 20 年史編集委員会、同上、1984、p. 125。

<sup>73</sup> 新井亀吉「お別れに当たって（第三回）」『トメアスー』No. 71、1977 年 6 月 30 日。

また、当時トメアスー野球連盟の会長だった戸田子朗が「トメアスー村 50 年を顧みて」と題して『トメアスー』に寄稿した文章には以下のように書かれている<sup>74</sup>。

日本語の必要性 私達日本人が伯国発展のために貢献している事は偉大なものであり、とりもなおさず日本人の優秀さを物語っております。この優秀なレベルの高い教養、技術、文化を吸収させてこそ、私たちの後継者として伯国発展のため活躍できると信じます。今後、日本語の読み書きを習得させる事が目下の急務だと思う。日本語による読書、会話が出来なくてどうして文化が吸収出来ましょう。

目下アマゾンにも日本の企業が続々と進出して来ております。日本との交流も、日増しに盛んになるでしょう。日本語のできる二世、三世の活躍の世界は無限と思われれます。七十年の歴史を持つコロニヤ、サンパウロのコチア、スールブラジルの二大産組でさえ、書物の大半は日本語が占めている現状です。当地組合にしても同様です。日本語の読み書きができないばかりに随分不自由をしている二、三世が多いと思います。孫、子の代をも日本語を習得させる必要性を痛感致します<sup>75</sup>。

新井と戸田の両者に共通しているのは、当時の日本の科学技術の進歩や経済成長への認識であろう。特に戸田の文章で注目したいのは「日本企業の進出」といった文言である。当時のブラジルは、ハイパーインフレと農作物の長期間にわたる価格低迷により経済的に停滞していた。一方で日本は好景気に湧き、1967 年 2 月 28 日にマナウス・フリーゾーンが制定されたことで、1970 年代以降になると日本企業がマナウスにも多く進出している<sup>76</sup>。そこで戸田は、日本語を学ぶ意義として日本文化の継承以外に、こうした経済的関係性までを視野に入れている。つまり、1970 年代後半から 1980 年代初頭にかけて当時のトメアスーで取り組まれた日本語教育は、文化継承という意図だけでなく、こうした経済的な日本の優位性も視野に入れたうえで進められたことが考えられる。したがって、日本語教育実践そのものが、日本への強い憧れを喚起したと同時に、ブラジルアマゾンでの生活を劣位におくような思考を植え付ける一助となった可能性があるのだ。

<sup>74</sup> トメアスーの野球の歴史は、サンパウロのアリアンサチーム（ノロエステ線アリアンサ移住地）の草創時代（1926 年）に名投手として知られた鎌田讃が、南拓の運輸部植民地耕地係として勤務するかたわら職員や青年に野球を教え始めたことに端を発する。詳細については、トメアスー野球連盟会長戸田子朗のトメアスー開拓 50 周年祭典委員会『みどりの大地トメアスー トメアスー開拓 50 周年史 1929～1979』1985、や『トメアスー開拓 70 周年記念誌 アマゾンの自然と調和して』2009 を参照。

<sup>75</sup> 戸田子朗「トメアスー村 50 年を顧みて」『トメアスー』No. 78、1979 年 5 月 7 日。

<sup>76</sup> 例えば、1971 年にはシャープが先ず進出し次いで 73 年にサンヨー、77 年には家電メーカーのセンプ社に東芝が出資、技術提供を骨子にセンプ東芝が生産を開始している。1980 年代に入ると、パナソニック、ソニー、ムラタ、オムロン、ヤマハ、メタルフィーノ、ショーワ等の進出が続く。1987 年にはアマゾナス日系商工会議所も設立され日系企業のアマゾンでの存在感は大きかったに違いない（山岸照「マナウス・フリーゾーン」アマゾナス日系商工会議所『ブラジル特報』2007（一般社団法人日本ブラジル中央協会の website (<http://nipo-brasil.org/archives/710/>) より。 (2017 年 5 月 1 日閲覧)。なお、2016 年時点でブラジルの二輪のシェア 8 割を超えるホンダは、1976 年 11 月に二輪工場を建設し生産を開始している。

## 第5節 終わりに

本章では、トメアスーにおける公立学校の概要と日本語教育の変遷並びに 1980 年代前半において取り組まれた日本語教育の実践の内実を明らかにした。明らかになったことは、トメアスーの入植当初は南拓が中心になって学校の基盤整備を進めたが、南拓が撤退して以降は移住した人びと自らが学校教育の基盤を整備し多様な教育実践を展開してきた事実である。また、そうした彼ら・彼女らを支えるために、組合や日本の政府機関なども支援をおこなっていたことが明らかになった。また、1970 年代後半から 1980 年代にかけて日本語を学ぶ児童らによって書かれた作文の分析を通じて明らかになったことは、ブラジリアマゾンが劣位であるが故に、経済・文化的に発展している日本へ留学することが価値として志向されていた可能性があるという点であろう。

こうしたブラジリアマゾンと日本の関係ないしはアマゾンに住みカボクロや先住民と表象されるようなブラジル人と日本人の不均衡な関係性については、トメアスーには長らくあったものと言える。例えば、第二次世界大戦後に戸田が中心になって組織したアカラ農民同志会によるアカラ産業組合宛の意見書に触れたい。この意見書は、当時のアカラ産業組合が経済的制約をかけ続ける CETA に対し直接交渉せず日和見主義的であると不満を抱いた青年移住者 13 名がアカラ農民同志会を組織しそして組合宛にあてた文書である。文書の目的は以下のとおりである。

世界大戦も終戦を告げ、我々アカラ在住日本人も独立独歩しなければならない秋が来た。祖国日本の勢力資本の力もここ数年あるいは十数年あるいは数十年期待することは困難と覚悟しなければならぬ。今後我々の進むべき道は我々の手自らによって打開していかなければならぬ。為には伯語を理解し、伯国人の社会に突入するに適している我々若人の力を発揮しなければならぬ時が来たと確信す。かかる情勢の折思いをアカラ植民地に及ぼすとき、我々日本人苦楽を共にすることと十有五年ここを我等の第二の故郷とし悠久の平和郷とするには従来の種々雑多のわだかまりを一掃し、気分を一新し我利我欲に走らず滅私奉公真に相互扶助の精神を発揮し新たな構想のもとに、民福増進を計らなければ伯国奥地の例にならぬ一資本家の奴隷となり、我々の子孫は永久に文化の恩点に浴することなく所謂「カボッコ」として世を送らねばならなくなるのは必然の事と推思す。ここに思いを回らす時一日も早く新しい理想郷に向かって突進すべく我々有志は一致団結しあらゆる難関を突破し、勇往邁進するものである<sup>77</sup>。

アカラ農民同志会のこの意見書でも、大資本家に搾取される奴隷のようなカボッコ（カボクロ）にはなってはいけなと、自分たちと関係において劣位の人びとを創造することで、自らを奮い立たせている文章だと言えよう。

また、蒲生正男は、トメアスーの農業の歴史的変遷を踏まえたうえで、アマゾンでの適正作物胡椒の発見とその成功がブラジル人に対する「優越意識」を助長させ「同化」に対して消極的ならしめる条件の 1 つになりえたことを示唆している<sup>78</sup>。そうした背景があつてかどうかは不明だが、前田隆は 1982 年に発刊した『「移民の日本回帰運動」』NHK ブックスにおいて「アマゾン地方では、今日でも日本人たち

<sup>77</sup> 泉靖一・斎藤廣志、同上、1954、pp. 120-121。

<sup>78</sup> 蒲生正男「アマゾニアにおける日系コロニアの同化過程—トメ・アスウ植民地—」泉靖一編『移民：ブラジル移民の実態調査』古今書院、1957、p. 478。

は土地のカボクロたちを「ドジン」と呼んでいる」<sup>79</sup>とし、ブラジル文化への同化はカボクロ化と広く見なされていると述べている。

カボクロを Zeila de Brito Fabri Demartini によれば、サンパウロにおいても日本人の父兄は子どもにはカボクロにはなあってほしくはなかったとして、自ら学校を建設し日本人子弟への教育を充実させたことを明らかにしている<sup>8182</sup>。したがって、1980年代のトメアスーにおける日本語教育は、そうしたブラジルないしはアマゾンの日系社会に地下水のように脈々と存在し続けてきたブラジルアマゾン対日本、ブラジル人、カボクロ対日本人といった不均衡な二分法的思考をより強固にする側面を有した教育だったと言えるのではないだろうか。

また、こうした思考を育む一助となった日本語教育が、1980年代後半からトメアスーで加速度的に進み地域の大きな課題として認識されることになる「出稼ぎ」や、さらには彼らが日本から戻ってこなかった状況をつくる一助となった可能性も否めないだろう。たとえば、トメアスーからの出稼ぎ現象の特徴について研究した石川雅典は、「1世の人たちが期待する「日本に学ぶ」的な一種の社会的圧力をも

<sup>79</sup> 前田隆『移民の日本回帰運動』NHK ブックス、1982、p. 104。

<sup>80</sup> カボクロ (caboclo) とは、辞書の定義によれば白人とインディオの混血児、原住民の古称、奥地の人、文明化したインディオ、田舎者を意味するが、前山は「おもに下層の、無知な田舎者を指す。トゥピ語の caá-bóc (森から出てきた者の意) から出た言葉で、もともと混血者の意味はない。古くはインディオ自体や、特に白人社会に接触し、奴隷化され、キリスト教になじんだインディオを指し、やがては白人の土着した者やインディオの混血者をも意味するようになった。元来軽蔑の意味がある」と述べている (前山隆「カボクロ」大貫良夫 (編)『ラテン・アメリカを知る事典』平凡社、1999、p. 113。)。また、日系移民を代表する知識人として知られた半田知雄も、カボクロを「(前略) 彼らは商品生産に意をもちいず、自給自足の原始的生活に甘んじている。だが、近来はだんだん流通経済のなかにひきこまれていく。」としたうえで、日本人の発展を考察する文章では「カボクロ化」を発展とは対概念として用いている (半田知雄、同上、1970、p. 783 と p. 789。)。斎藤廣志はアマゾンのロライマ州 (Roraima) のリオ・ブランコに移住した人びとに関する調査で「この地方に移住した東北部住民は、インディアン系住民を区別するために、自らを「シヴィリザード (文明人)」と呼び、インディアン系住民を「カボクロ」とよんでいるが、生活様式においても、生活水準においても、両者のあいだにはさして懸隔のみられないことが多い」と述べている。(斎藤廣志「アマゾン辺境の移住者—リオ・ブランコ直轄領タイオーン植民地」多田文男編『アマゾンの自然と社会』東京大学出版会、1957、pp. 125)。したがって、カボクロという言葉は、前田が述べるようにブラジル人を軽蔑したうえで日系移民としての自己とそうではないブラジル人とのあいだに優劣の関係性をうむための言葉だと認識できるだろう。なお、アマゾンにおけるカボクロ像に関する研究は、瀧藤千恵美の「ボイブンバに見るアマゾンの描かれ方—トアーダに登場する理想かされたカボクロ像」(名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』2004、pp. 203-215) を参照されたい。

<sup>81</sup> Zeila de Brito Fabri Demartini, “Memórias de velhos mestres da cidade de São Paulo e seus arredores”, *Relatório de pesquisa*, São Paulo: Ceru, 1988.

<sup>82</sup> アマゾンに移住した日本人移民のルポを書いた作家の御荘金吾は、1938年に大阪 YMCA が入植したモンテ・アレグレ移住地の対岸に住みブラジル人女性と結婚した上野という男性と会った。その際に、上野は「ここじゃろくな教育もできませんので、サンタレンの学校へやるわけですが、ブラジル人は日本人と違って、教育には無関心なんです。私の女房など全然教育には興味を持っていません。アマゾンのカボクロは、カボクロであることに幸せを感じているのかもしれない。今さらそれを文明人の気持で責めても仕方のないことです」と言い、5人のうちの3人をやはり他の地域の学校へ通わせていると記録している (御荘金吾『アマゾンは流れる 日本人苦闘史』家の光協会、1976、p. 110)。

って2世や3世などが参入するように、トメアスーの出稼ぎ送出をめぐることは、かなり社会的文化的な要素がダイナミックに作用している労働力移動現象として解釈することができる」と分析している<sup>83</sup>。

トメアスーで日本語教師としても教鞭をとったことのある日本人男性S氏（70代）は、子どもたちが幼かったころ「どうして日本のことばかり言うのか、なぜブラジルに住んでて日本語を勉強しないといけないんだ」「日本人とブラジル人とで比較されるんだ。」といったような反発があったと筆者に述べている<sup>84</sup>。子どもたちに生まれそして育つ場所を選ぶ権利はない。子どもたちにとっては生まれた場所こそが故郷であり、それは唯一無二であろう。

安田浩一は『ルポ 差別と貧困の外国人労働者』（2010）のなかで、出稼ぎのために来日し、そしてトメアスーに帰った人びとの生の声を記録している<sup>85</sup>。本書のなかで、2010年当時トメアスーに住む30代半ばの人たちが、10代のころ出稼ぎに出た同級生のほとんどがトメアスーに帰ってこなかったと発言している<sup>86</sup>。彼らは1970年代半ばの生まれであることから、本章で扱った日本語教育が大変熱心に取り組まれていた時期にその恩恵を受けた世代かもしれない。つまり、当時の日本語教育がブラジルよりも日本は素晴らしい、ブラジル人よりも日本人が優れているといった優劣に基づく二分法的思考を促し、ブラジリアマゾンという地域を、いま・ここを捨てることを助長した可能性はやはり否めないだろう。

ただし、本研究はトメアスーで取り組まれた日本語教育やそれを担った人びとによる努力を否定するものではない。出稼ぎを通じて資本を獲得し農業収入の拡大に成功したものや、トメアスーへと戻ってから商店を経営できたもの、階層上昇を経験しトメアスーで安定した生活を送っているものも少なからずいる<sup>88</sup>。

また、こうした日本語教育の意図する方向性ないしは解釈に検討を迫るような事例がないわけではない。例えば新井亀吉は先に引用した日本語学校の生徒に向けたお別れの言葉のなかで、実は以下のような言葉も残しているのだ。

私はこのアマゾンの僅かな生活から数多くのことを教えられましたが、最も強く心に響いたものは、「人間よ、うぬぼれるな。己に心を集中して深く見よ。そこに助け合いとバランスのあることが分かるだろう」という自然の言葉です。（中略）こんな楽園が今の地球上にこのアマゾンをおいて何処に在るのでしょうか。しみじみとアマゾンに生きている自分の幸を想いました。舌を楽しませてくれる珍果、目

<sup>83</sup> 石川雅典「出稼ぎ創出の実態と家庭・地域生活—アマゾン地区日経集団地の留守家族、出稼ぎ経験者の調査から—」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人（上）論文篇・就労と生活』明石書店、1995、p. 598。

<sup>84</sup> 2016年9月7日にトメアスーでおこなったインタビューより。

<sup>85</sup> S氏の子どもたちはいま40代で1970年半ばに生まれ育ったことを考えると、ちょうどこの文集に投稿した児童らと同じ世代である。S氏の息子も日本へ出稼ぎに行き30代でブラジルトメアスーに戻った。

<sup>86</sup> なお、安田は南部尚の発話をそのまま引用しトメアスーには今でも高校がないような書き方をしているが、それは前述のとおり誤りである（安田浩一『ルポ 差別と貧困の外国人労働者』光文社新書、2010、p. 270）。

<sup>87</sup> 安田浩一、同上、2010、p. 275。

<sup>88</sup> 新藤慶、小野寺理佳、濱田国佑「僻地農村におけるデカセギの影響」北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室『日系ブラジル人のトランスナショナルな移動と定住（外国人集住地域の社会学的総合研究；その8）』2009、pp. 281-312。

を喜ばせてくれるいろいろな花、蝶、鳥たちの奏する平和のシンホニー、甘い空気。コロニアの皆様も、毎日この恵のなかに生きているのです（中略）。この大自然との調和ある生活、人間の和との努力、そして生活を楽しみながらの前進、此の理想的な生き方のできる地がトメアスーだと思います<sup>89</sup>。

したがって、教師が日本語教育を実践するうえで、日本とブラジルを単純な二分法的思考で判断していたと言い切ることはできない可能性もある。

また、時期区分は大きく異なり且つ教育実践とは直結しないが、例えばアマゾン調査を実施し南拓の社長となった福原八郎は、文部省が開催した移植民教育の講習会において、「アマゾン流域の開発」とする講演会をおこなっている。その際に「アマゾン流域とインディアン」と題して先住民について言及する部分がある。

能く欧羅巴（ヨーロッパ）などに行くとインディアンは首を斬る外、何も知らない無知蒙昧であるというふうに悪口をいうがそう馬鹿にしたものではないと思う。この間倫敦（ロンドン）の何かのプロフツソルがアマゾン流域に来て視察して帰って自分の意見を發表したのを讀んだことがあるが、アマゾン流域のインディアンは馬鹿で無知も甚だしいということを書いている（中略）。文明人が野蛮人を見ると裸体だから野蛮だとか、始めて物を見たときに物を知らなかったから野蛮だと言って嘲るが、あれは酷評であります。それを畏怖ならば日本も野蛮だと言わなければならぬ。華盛頓（ワシントン）のホテルに行くときシンガーミシンを廻しているのを見て日本の使節が驚いている事実がある、それを初めてみた機械だから驚いたのはもともとで、それと同じでアマゾンの土人に蓄音機を見せる、飛行機を見せたら屹驚したということをして文化の度がどうか馬鹿だということは酷評であると思う。土人と色々話していると相当に考えを持っている土人がたくさんある、

土人等に会って見るとアマゾン是我々の舞臺（舞台）であつたのを欧羅巴人が勝手にやってきて蹂躪する。我々は将来立派になつていかなければならぬということをする土人があるのでありますから、決して馬鹿にしたものではないと思います<sup>90</sup>。

この発言からだけでは、福原がブラジル対日本ないしは日本人対ブラジル人・先住民といった二分法的発想を有していなかった、ないしは差別をするような人間ではなかったとは言い切れない。しかし、少なくとも多くの日本人移民を受け入れトメアスーの開拓を推し進めた南拓社長がこのような考えを持っていたということはいえる。そうしたトメアスー開拓をすすめた先駆者の発想のもとで前述したように重要視されていた学校教育ないしは日本語教育は、どのような方向性や価値を持ってすすめられた実践だったのか。以上を踏まえると、トメアスーのより総合的な学校教育や日本語教育の意図性を明らかにするならば、当時の教育にたずさわった元教師やその教えを受けてきた人びとへの聞き取り等を通じた研究は今後の課題だと言えるだろう。

<sup>89</sup> 新井亀吉「お別れに当たって（最終回）」『トメアスー』No. 72、1977年8月4日。

<sup>90</sup> 福原八郎「アマゾン流域の開発」文部省実業学務局編『移植民教育』1929、pp. 246-247。



### 第3章 アマゾントメアスーにおける農業発展とノンフォーマル教育

本章では、まずブラジルアマゾンにおける日本人移民の歴史と営農の変遷をたどり、今日注目されているトメアスーのアグロフォレストリーの形成にいたった歴史的経緯を述べる。次に、トメアスーにおけるアグロフォレストリーをめぐる現状を整理する。そして最後に、日系移民がトメアスーで営農できるように取り組まれた主要なノンフォーマル教育の実践を明らかにする。

#### 第1節 アマゾン開拓と移民

##### (1) アマゾン開拓の始まり

アマゾンにおける開拓の歴史は、林丈一によればポルトガルによる植民地化が開始された1616年フランシスコ・カルデイラ・カステロ・ブランコ(Francisco Caldeira Castelo Branco)将軍がパラ(Pará)州の現在の州都であるベレン(Belém)市を制定したことから始まる<sup>1</sup>。1637年から1639年にかけて彼らはアマゾン川流域地方を探索した。探索の目的は先住民の奴隷化とブラジルナッツ(Castanha do Brasil; *Bertholletia excelsa*)やカカオ(Cacau; *Theobroma cacao*)、バニラエッセンス(Baunilha; *Vanilla planifolia*)、シナモン(Canela; *Cinnamomum zeylanicum*)などのアマゾン奥地で生産される香辛料や薬種を採取することであった。この奥地探検には修道会やイエズス会も同行し、先住民に普及活動をおこなった。これを前後に17世紀から18世紀にかけてカカオ、コーヒー、綿、米、サトウキビ、タバコ等の栽培が推進されポルトガル領のアソーレス諸島(Açores)から数十世帯の家族が移住し牧畜も開始された<sup>2</sup>。カカオはブラジル最大の産地として永年輸出品の首位を占めるほどに普及する。しかし19世紀後半からの自転車や自動車の発明・発達により、アマゾンは未曾有のゴム(Seringueira; *Hevea brasiliensis*)景気に沸くことになる<sup>3</sup>。このゴムブームをうけて、周期的な干ばつや飢饉に苦しんでいたブラジル北東部から多くの人が押し寄せる<sup>4</sup>。ブラジルの社会学者セルソ・フルタード(Celso Furtado)は「1872年から1900年の間にパラ州とアマゾナス州において約35万人の人口増加が見られた」と述べている<sup>5</sup>。

<sup>1</sup> 林丈一「略説・アマゾンの農業」国際協力事業団『移住研究』No. 14、1977、pp. 80-92。

<sup>2</sup> Alfredo Kingo Oyama Homma, *História da agricultura na Amazônia, da era pré-colombiana ao terceiro milênio*, Embrapa Informação Tecnológica, 2003, p. 24.

<sup>3</sup> ゴム採取に従事するものをセリンゲイロ(Seringueiro)と呼ぶ。これはゴムが採取可能なゴムの木(*Hevea brasiliensis*)のポルトガル語がセリンゲイラ(Seringueira)と呼ばれることに由来する。ゴムブームが到来した1877年から1879年にかけてブラジル北東部を襲った旱魃で大量の難民が生まれた。そこで多くの北東部の住人がアマゾンへと移住し天然林からのゴム樹脂採取に従事することになる。

<sup>4</sup> 特に1877年にセアラ州(Ceará)で発生した深刻な旱魃は、アマゾン流域への大移動を加速させたといわれている(ジョン・ヘミング(国本伊代・国本和孝訳)『アマゾン：民族・征服・環境の歴史』東洋書林、2010、p. 295)。

<sup>5</sup> Celso Furtado, *Formação Econômica do Brasil*, Companhia das Letras, 2007, p. 192.

## (2) 日本人移民によるアマゾン開拓

1905年（一説には1907年）頃には、日本人がゴム樹液採取のためアンデス山脈を越えてペルーからボリビアを横切りはじめてブラジル領アマゾンに入ったといわれる<sup>6</sup>。彼らは「アマゾン下り」または「ペルー下り」と呼ばれ、1910年代後半までに400人から500人を数えた。彼らの中にはアマゾンの各地で野菜栽培に従事するものや船頭、鉄道建設工、行商等として働くものもいた<sup>7</sup>。

ところが、1876年にイギリス人により密かにアマゾンから持ちだされたゴムの苗木が南・東南アジアのプランテーションで栽培されることで、アマゾンはゴムの世界市場を奪われ衰退の一途をたどる。そこで、天然林採取ゴムに依存した地域経済の状況に憂慮したパラ州とアマゾナス州政府は、外国移民による農業開発に活路を見出し各国に州有地のコンセッション（期日までに土地を調査・選定し境界を確定することを条件とした無償譲与）を続々とおこなっていった。アメリカのフォード社はパラ州で100万から240万haものコンセッションを確保しタパジヨス川（Tapajós）流域の土地契約を結び1928年から開発事業に着手している。こうした政策によりベレン市近郊にも入植地が設立され多くの日本人移民集団地の基礎となった。

当時のパラ州統領のディオニジオ・ベンテス（Dionísio Bentes）はサンパウロ州方面の日本人移民の功績を高く評価している親日家であった。彼はリオデジャネイロ首府からパラ州へ赴任するさい日本大使館の田村駐伯大使へ「パラ州も日本人によって開発したい」と希望する書面を送った。

そんななかで1923年に連邦議員のフィデリス・ヘイス（Fidélis Reis）による法案がブラジルの連邦下院に提出される。この法案は黒人移民の入国禁止ならびに黄色人種の入国制限に関するもので、黄色人種入国制限は当該人種でブラジルに現住する者の総数の5%に相当する数の入国を認める内容だった。そこで田村駐伯大使は、サンパウロ州と近隣の州への移民の集中が日本人排斥の原因となると考え、日本人の入植をこれら以外の地域に求めるべきだとして、1924年に野田良治書記官をアマゾンの調査に派遣した。当時の日本では人口問題や失業問題、さらには1923年に発生した関東大震災により移民需要が拡大していたのも調査に前向きだった要因でもある<sup>8</sup>。その翌年、外務省は木綿産業に関する調査のため、農業技師の芦澤安平をサンパウロ方面からパラ州へ派遣する。その際に調査に協力したのが柔道家の前田光世（コンデ・コマ）（1878-1941）であった。彼はアメリカから中南米諸国を

---

<sup>6</sup> 南米諸国のうち日本と国交を樹立した最初の国がペルーである。ペルーは1873年に日秘和親貿易航海仮条約の署名により国交が結ばれ、1899年には第1回日本人契約移民790名がペルーへと渡航した。1922年の第75次航海まで契約移民の渡航が続き、1923年に契約移民自体が禁止された後、1936年までは呼び寄せ移民として日本人が渡っている。

<sup>7</sup> Masaaki Yamada, *Japanese immigrant agroforestry in the Brazilian Amazon : a case study of sustainable rural development in the tropics*, PhD Dissertation, University of Florida, 1999, p. 132.

<sup>8</sup> 関東大震災被災者のうちブラジル移住希望者に対しては、移住にかかる費用の全額が国より補助された。1932年の北海道及び青森県北部を襲った冷害により収穫の目途が立たなかった農民に対しても、移住を希望者すれば移住支度金として船賃などを政府が補助していた。（長尾武雄「昭和初期の海外移住民事業」海外移住事業団『移住研究』No. 6、1970、pp. 21-22。

巡り、1922年にはベレンに定住し柔道師範として地元の名士となっていた。前田は自身が培ったパラ州の要人との人脈によりその後の日本人によるアマゾン開発に重大な役割を果たすことになった。

この調査で非常に好感触を得た大使館側は、当時外相だった幣原喜重郎に公文を送り調査団派遣を計画した。しかし、日本政府は予算を捻出できなかった。そこでアメリカ留学経験もあり、ブラジルを綿花の配給地として注目していた鐘淵紡績株式会社の武藤山治社長に相談した。そして武藤は1926年鐘紡取締役で東京本店工場長だった福原八郎を団長にして、農・鉱・土木・医学等の専門家を揃えた他9名の調査団を編成しアマゾンへ送る。そのさいにはアマゾナス州統領のエフィジェニオ・サーレス（Efigênio Salles）の田付大使に対する事前の懇願もあり、彼らはパラ州だけでなくアマゾナス州等、約半年かけて踏査する。

1928年の調査後、アマゾンへの移民に関心を持った福原が社長となり、南米拓殖株式会社（以下、南拓）が創設される。南拓は、アマゾン大河南部のパラ州アカラー（Acará）（現在のトメアスー）に60万ha、パラ州北部のモンテ・アレグレ（Monte Alegre）<sup>9</sup>に40万ha、別に同州内のマラバ（Marabá）コンセイソン・ド・アラグワイア（Conceição do Araguaia）、ブラガンサ（Bragança）の3カ所に1万haの州有地のコンセッションをうけることにして契約を結んだ。翌1929年1月には南拓はブラジルに現地法人株式会社（コンパニア・ニッポニカ；Companhia Nipônica de Plantação do Brasil S,A）を設立し、同社に契約を移転し日本人移民によるパラ州開拓が開始される。

アマゾナス州のエフィジェニオ・サーレス州統領は、その後日本の大使館に対し正式に日本人移民を依頼する。そして1927年に東京の青年実業家山西源三郎とリオデジャネイロに住んでいた栗津金六が100万haものコンセッションを獲得する。彼らは契約期間2年のうちに会社を設立しブラジル国内の営業許可を受ける必要があったため一時帰国するが、資金を調達することができなかった。そこで上塚周平（1876-1935）<sup>10</sup>の従弟であった衆議院議員として活躍する上塚司（1890-1978）に依頼する。そしてその上塚が所長となり「アマゾニア産業研究所」（1935年にアマゾニア産業株式会社に改組）（以下、アマ産）が設置されアマゾナス州でも開拓が始まる。

モンテ・アレグレには、南拓の福原八郎社長と共にアマゾン調査に随行した五反田貴巳の指導する「アマゾン開拓青年団」が入植した。五反田は1929年に大阪YMCA海外協会を設立し「南米アマゾン開拓青年練習生」を養成する。1931年には五反田を団長に、後述する平賀練吉（1902-1985）農学士を副団長として47名の卒業生が移住した。入植当初は100haの原生林開拓を始め、タバコや綿等の栽培に全力を注いだ。しかし移住者らによる団長排斥運動に端を発し、相互の意見の衝突など不安定な状況が

<sup>9</sup> 1800年ごろ既にスペイン人が多数入植したマノエルバラータ（Manuel Barata）植民地が建設されていた。しかし入植後のマラリア蔓延とアマゾン奥地に起きたこのゴム景気の余波を受けて移民は分散してしまっている。

<sup>10</sup> 上塚周平（1876-1935）とは1908年から開始されたブラジル移住の第1回ブラジル移民船「笠戸丸」を皇国植民会社社長水野龍と共に引率して渡伯した同社ブラジル業務代理人である。後にサンパウロの内陸に上塚第一・第二植民地を設立する。植民地造成中に倒れた。上塚は終始移民の苦を自らの苦とした人として「ブラジル移民の父」と称された。

影響して脱耕するものが増え開拓に失敗する。平賀は前田（コンデ・コマ）の要請を受け農業技師としてトメアスー植民地に赴任し、他の団員はアマゾン下流各地で活躍することになる。

1928年には、アマゾン興業株式会社が設立されアマゾナス州マウエス（Maués）でガラナ（Guaraná; *Paullinia cupana*）栽培が取り組まれた。しかし、1930年第2回植民を入植させた後アマゾン興業株式会社は資金欠乏等で経営破綻する。東京世田谷にあった海外植民学校の本分校（海外植民学校南米分校）設立が当地に決まるも、マラリアの蔓延により残された移民は1930年にアマゾナス州パリンチンス（Parintins）に100万haのコンセッションを得て開拓を始めていたアマ産と合流することになる<sup>11</sup>。

他にも前田の労に報いるためパラ州政府が土地を贈与したオウレン（Ourém）（現在のカピトン・ポッソ（Capitão Poço））を含め、日本の団体・個人がアマゾン両州に得た面積は250万haに及び、第二次世界大戦前には約3,000人の農業移民が日本から導入された<sup>12</sup>。

満州問題に取り組んでいた上塚は、かねてから日本人の海外発展について関心を持ち「模範植民地」の建設を構想していた。そのため、困難な初期開拓においてアマゾン開拓指導的中堅人物を養成する目的で、上塚司は国士館高等拓殖学校（後の日本高等拓殖学校）を1930年に設立する。1931年には本校の卒業生（以下、これらの卒業生を高拓生）1期生48人が入植し米、野菜をはじめ、マンジョッカ（mandioca; *Maihot esulenta* Cranz）、カカオ、ガラナ、ゴム、ブラジルナッツなどの試作とともにジュート栽培が取り組まれた。アマゾン開拓先駆者を目指す高拓生は、その後7回の入植を数え入植者は300人を数えることになる。彼らはジュート試植のためにカルカッタから種子を取り寄せ、取れたジュートの繊維だけを日本の東洋紡績会社へ送るなどして試作を試みる。しかし、小枝が派生し全体に細小で商品にならず長年の間苦杯を嘗める。

1934年にアマ産は最後のジュート試作に取り組む。そのさい1933年に岡山県出身の尾山良太の耕地内に2本の新品種を発見する。このうちの1本は3mにも達し、この1本の幹から10粒の種子を採った。その7ヶ月後には最高3m65cm、平均3mというジュートを収穫しこれを研究所が試験栽培をおこなって年々生産量は増大する。後に「尾山種」と名付けられたこのジュートの発見と増産の成功により、入植者の多くもジュート生産に力を傾けることになる。

当時のブラジルはジュートをイギリスから買い入れていたが、アマゾンで生産が軌道にのってからは国内消費をまかなうどころか輸出するようになった。それは、膨大な外貨流出を防ぐだけでなく、外貨を稼ぐようになったことを意味した。こうした日本人移民による功績は、ブラジルの有力紙にも取り上げられ「死のアマゾンをよみがえらせた」や「緑の地獄から黄金を生んだ」と称賛された。1940年には

---

<sup>11</sup> 長尾武雄「アマゾン開拓の先駆者たち」海外移住事業団『移住研究』No. 8、1972、pp. 59-65。

<sup>12</sup> オウレンに入植した山田義男については Masaaki Yamada の *Japanese immigrant agroforestry in the Brazilian Amazon : a case study of sustainable rural development in the tropics*, PhD Dissertation, University of Florida, 1999, pp. 178-181 を参照。

ブラジル大統領ジェトゥーリオ・ヴァルガス (Getúlio D Vargas) (任期:1930-1945、1951-1954) も彼らの移住地を表敬訪問している<sup>13</sup>。

第二次世界大戦により、アマ産の資産は凍結・没収されてしまうものの、日本人のジュート栽培者はトメアスーに收容されることなく、サンパウロ州タウバテ (Taubaté) のブラジル製麻資本のもとに組織化された。また、彼らは農業生産資材や生活用品、ないしは現金を前借し収穫現物を高利返済するアヴィアード (Aviamento) 制度にもとづきジュート仲買に従事しながら、アマゾンの河沿いに展開し現地住民を指導しジュート生産につとめた<sup>14</sup>。戦後も1980年代までブラジルは世界五大ジュート生産国の1つであった<sup>15</sup>。



図1 入植初期の原生林伐採風景

(出典) 伯国東京農大会北伯分会『東京農大卒業生アマゾン移住50周年記念誌』2008。

<sup>13</sup> 黒田公男「アマゾン・ジュートにかけた青春—高島義雄元アマゾニア産業研究所員—」国際協力事業団『移住研究』No. 12、1976、p. 23

<sup>14</sup> アヴィアメントとはポルトガル語の動詞アヴィアル (aviar) の名詞系でアヴィアル自体は「(ゴムとの交換に商品を) ついで売る」や「(取引を) 締結する」「送る」等の意味を有している。このアヴィアメント制度は、アマゾンに多くの資本をもたらしたゴム産業の経済構造の根幹に埋め込まれていた。制度の詳細は大野盛雄・宮崎信江「アマゾンにおける仕込について—ジュート生産の場合—」多田文男『アマゾンの自然と社会』東京大学出版会、1957、pp. 265-317等を参照。

<sup>15</sup> ジュート栽培の歴史やそれにたずさわった人びとの当時の状況等については、御荘金吾『アマゾンは流れる 日本人苦闘史』(家の光協会、1976) に詳しい。高拓生らの歴史と彼ら家族の現状やそれぞれの歴史をまとめたものに ASSOCIAÇÃO KOTAKU DO AMAZONAS, *A SAGA dos KOUTAKUSEIS no AMAZONAS Uma história de pioneirismo, sofrimento, perseverança e SUCESSO*, 2011がある。

## 第2節 トメアスーにおける日本人移民史と農業発展

### (1) 入植初期の試験的多品種植付けと野菜栽培

南拓は1929年に第1回43家族、単独渡航者9名を含む189名をモンテビデオ丸で神戸港よりトメアスーへ入植させる。南拓は分益小作として移民を導入していた。具体的には、南拓は移民に対しまず分配した25haの区画のうち5haだけ原始林を伐採し陸稲を植えさせた。その後、カカオを主要作物として栽培させ、その収穫物の7割を移民の所得とし、残りの3割を南拓に納付させた<sup>16</sup>。カカオ栽培を推奨した理由は、アマゾンに由来するフォラステロ（Forastero）型のカカオの原産地であったためアマゾンに適した主力商品とみていたことと、福原がアメリカのチョコレート市場の可能性に展望を見出していたからであった<sup>17</sup>。1935年までに23万2000本以上のカカオの苗が植えられた。一方でカカオ栽培以外にも胡椒や養蚕や製糖、マンジョカ栽培と製粉事業など、会社の直営農場を中心に入植者の適正作物の試作選定にも努力した。しかし、①カメタ（Cametá）のヴァルゼア（Várzea）地帯<sup>18</sup>に適応したフォラステロ型を比較的長い乾期を有する台地（Terra Firme）に植栽したこと、②被陰樹や植付け間隔、病害虫に関する情報不足、③3年間の除草施肥、剪枝等に追われ収入がなく大きな負担であった、④カカオの価格が高騰せず栽培意欲が上がらなかった等の理由により、カカオ栽培は失敗する<sup>19</sup>。当時はマラリアなどの風土病も猛威をふるい、トメアスーは多くの死亡者や脱耕者を出すことになる。

こうした状況に抗うため、移民たちは南拓に対して分益小作制の撤廃を要求した小作争議を起こし勝利する。また、小作争議の年の1931年には南拓の許可のもとアカラ野菜組合（現在のトメアスー総合農業協同組合）を結成し、そこで自給自足の体制を整えるよう努力する。彼らはカカオ栽培から米や雑穀・野菜の生産に転換し、組合を通じて販売していくことになる。

またアカラ野菜組合は、肥料、種子、出荷品質の統制をおこない、年に1回は蔬菜品評会を開くなどして品質の向上にも努め出荷量は激増していく。こうして栽培された野菜は、野菜の消費量が非常に低かったベレン市場へと広く流通していく。常時市場に搬出されたのはトマトや大根、ピーマン、茄子、胡瓜等でとりわけ大根が多かった。ベレンでは日本人をポルトガル語で「日本人」という意味

<sup>16</sup> 田中規子「アマゾン地域における日系移民の農業展開と協同組合の役割：—トメアスー総合農業協同組合を事例として—」『酪農学園大学紀要 人文・社会科学編』24(2)、2000、pp. 289-340。

<sup>17</sup> なお福原はカカオを選んだ理由として、永年作物の楽しみも挙げている。具体的には「年々の作物は楽しみが少ない。5年とか6年とか7年で出来る物を作ると楽しみがある。もう帰ろうと思う時に実り出すからもう少し留まってみようというような感があって楽しみがある（中略）もう2、3年辛抱しようではないかということになると10年になり15年経ってどうしても移りたくないようになり安定をする、どうしても何所の植民政策を見ても年々の収穫物の外に多年生の植物をやらなければならぬということをおっしゃいますから我々の所でもそういうものをやってみたいと思います。」と述べている。（福原八郎「アマゾン流域の開発」文部省実業学務局編『移植民教育』1929、p. 236。）

<sup>18</sup> アマゾン川は全体的に海面からの高低差が小さく河口から1,600km遡っても高度は80~90mしかない。そのため雨季は中流域で水深が5~10m増水し川沿いの至るところに周期的に氾濫原ができる。これをヴァルゼア（Várzea）と呼ぶ。周期的に冠水し養分の高い土壌が堆積するため、農耕に適しておりまた多様な魚類の産卵場所、稚魚の育成場所になり、森林と河川による特別な生態系が形成される。

<sup>19</sup> 栄田剛「トメアスー農業の動向概観」国際協力事業団『移住研究』No. 14、1977、pp. 93-109。



の「ジャポネス (japonês)」と呼ぶ代わりにポルトガル語で大根の意の「ナーボ (nabo)」と呼ばれることも珍しくなかったという<sup>20</sup>。こうして初期の日本人移民は野菜と米の収穫で生計を維持することになる。



図2 日本人移民による市場での野菜販売

(出典) 伯国東京農大会北伯分会『東京農大卒業生アマゾン移住50周年記念誌』2008。

こうした戦前日本人移民の努力により、ベレン市は蔬菜類消費の高い都市へと変貌する。そのおかげで戦後の日本人移民らは入植地から脱耕してもベレン市郊外に出さえすれば、蔬菜栽培によって経済基盤を形成していくことができた。

カカオ栽培の失敗等の理由で経営難に陥ったコンパニア・ニッポニカには、本社の南拓より縮小改革の命令がくだされ、1935年には直営農場の閉鎖と小作制度の解消、そして農業試験場の廃止に至る。第4回移民がトメアスーへ入植した際には全員がこの地を離れるほど散々たる生活・営農環境であった。南拓が植民地事業を断念した1942年までの入植者の多くもこの土地を離れ、経済的理由で退耕・移住の不可能な人々、女性子供が多く働き手が少ない家族等が結局この地に留まることになる<sup>21</sup>。南拓は撤退を契機に、物品販売所等をアカラ野菜組合へ譲渡した。そして組合は米の販売取り扱いと購買事業に加え、販売購買組合へと事業拡大を進めることになる。

その後の1942年から1945年のあいだは第二次世界大戦によるブラジル（連合国）と日本(枢軸国)の敵対関係に基づき、トメアスーは州政府の管理下におかれる。枢軸国民保護の名目でアマゾン各地の

<sup>20</sup> 御荘金吾、同上、1976、p. 67-68。

<sup>21</sup> 1935年から1942年までのあいだに352家族(2,104名)が入植したが、そのうちの276家族(1,603名)が退耕している。(トメアスー開拓70周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して トメアスー開拓70周年祭典委員会記念誌』2009、p. 31。)

日本人をはじめドイツ人、イタリア人がトメアスーに軟禁された。州の管理下に設けられたトメアスー植民地管理局（CETA ; Colonia Estadual de Tomé-Açu）は、当時アカラ野菜組合から名称を変更したアカラ産業組合の財産を没収しベレン市への生産物の運輸権すら奪った。終戦後もコンパニア・ニッポニカの機能はCETAによって引き続き停止され、アカラ産業組合の生産物の売値も不当に低くされた。そこでトメアスーの青年層が1946年に「アカラ農民同志会」を結成し、生産物の販売権などの回復を州に訴えCETAの管理下から脱する運動を展開する。また当時はCETAがベレンまでの搬出権も有していたが渋滞や遅延も多かったため、彼らはベレンまでの水路で自らが商品を運ぶべく18tの木造船「ユニベルサル（Universal）号」を造った。こうしてアカラ農民同志会はベレンーアカラ間の流通網を確保し、これを契機に商取引の直接行使権をCETAから産業組合にうつす運動を起こし成功することになる。

この後アカラ植民地の経済活動等は組合が中心に実施することになり、1949年には公認産業組合としてトメアスー総合農業協同組合（Cooperativa Agrícola Mista de Tomé-Açu、以下CAMTA）と改称登録し、本格的な組合機構として始動していく。

## （2）胡椒ブームの到来と単一大規模栽培化

トメアスーではカカオ栽培がうまくいかない一方でその他様々な作物の研究が試みられた。そのうちの1つがポルトガル語で「唐辛子の王様」とよばれる胡椒（ピメンタ）（*pimenta do reino ; piper nigrum*）である。胡椒はアマゾンにおいて先住民が在来種を自家用に植えており、南拓もカスタンヤール（Castanhal）農場で改良種を編み出そうと栽培研究していた作物であった。胡椒栽培の成功は1933年に南拓職員であった臼井牧之助が移民監督官としてアマゾンに赴く途中にシンガポールで南洋種胡椒20本を偶然見つけ購入したことから始まる。臼井はトメアスーにあった試験場へ移植したものの試験場で根付いたのはわずか2本にすぎなかった。この試験場が閉鎖されたさい試験用の胡椒の木から挿木苗各30本を加藤友治と斎藤円治の2人が譲り受け、丹念に育て上げ胡椒を少しずつ増やしていた。

戦時中は東南アジアの産地が戦禍で被害を受けたため、ブラジルへの胡椒輸入が途絶えた。そこで胡椒はブラジル国内外市場で着々と価格を上げ、1950年代に暴騰する。この胡椒価格の高騰が農家を胡椒生産へと向かわせることになる。当時の胡椒は「黒ダイヤ」とも呼ばれ、移民が居住していた掘っ立て小屋も胡椒によって得た資本を用いて次第に大邸宅へと変わり「ピメンタ（胡椒）御殿」なるものも出現する。これがトメアスーの黒ダイヤブームの始まりであった。CAMTAは世界市場を睨み、サンパウロ出張所も開設する。1950年にはCAMTAの売上高の1位に米を凌いで胡椒がのし上がる。

1959年にはトメアスーはアカラ郡からの独立も果たし、胡椒販売による納税額は州都のベレン市等に次ぐ程度の額となる。こうしてパラ州全域でトメアスーの胡椒の存在が知られるようになり、ベレン近郊や野菜配給で生計を立てていた日本人移民にも胡椒栽培が広がっていく。1940年以降はトカンチンス（Tocantins）川流域にあるカメタやバイアオ（Baião）、モカジュバ（Mocajuba）等から多くのブラジル人が日系移民の経営する胡椒農園で働くためにトメアスーへ訪れた。出稼ぎにきた彼ら



は胡椒の栽培方法を学び自らが住む土地に苗木やその栽培技術を持ち帰ることで胡椒栽培がパラ州で本格的に広がることになる<sup>22</sup>。パラ州一帯の胡椒栽培農家が集まり共倒れや過当競争を避けることと、生産者権益を擁護するため「パラ州胡椒栽培中央組合」も結成される<sup>23</sup>。こうしてパラ州全土で胡椒増産体制が築かれていく。1980年にはブラジルは世界最大の胡椒輸出・生産国となる。仁科雅夫は「ブラジルにおける急速な胡椒の増産は、政府の奨励策（植付融資）に支えられたものであったが、全生産量の40%は零細農（かつては、こしょう胡椒園の労働者であった人々）に支えられている」と論じている<sup>24,25</sup>。つまり、日本人移民だけの栽培だった胡椒が急速にブラジル人農家らにも広がり、パラ州全体で生産量が増大していったのである。

胡椒栽培の成功は、アマゾンにおける戦後日系社会の拡大をもたらした。1952年に日本政府とブラジル政府によって「移住及び植民に関する協定」が締結され、その翌年の1953年に移住政策が再開されると1960年までに呼寄せ移民制度が導入され、130余りの家族が新たにトメアスーへ移り住むこととなる。日本から直接入植した人びとだけではなく、他の植民地に入るのを失敗した脱耕者や戦前の移住者でそれまでの土地に見切りをつけた者が胡椒の華々しい噂をききつけトメアスーへと集まった。多くの農家が胡椒栽培に従事し生産量を増大させていくことで、トメアスーは胡椒の里としてブラジル国内に留まらず広く諸外国にも名を知られるまでに成長する。寺神戸曠によれば、トメアスーで一時大成功を収めた「黒いダイヤモンド」の噂は1956年から移民政策が開始されたボリビアのサンフアン（San Juan）入植地まで広まり、サンフアンでも胡椒やジュートの栽培が一時取り組まれていた<sup>26</sup>。

日本からの呼び寄せ移民を奨励したり、また胡椒栽培に引き付けられた移民を受け入れ続けていたトメアスーは、1959年の移住30周年を迎えるにあたり記念事業としての第二の村づくりを目的とし「トメアスー第二植民地建設委員会」を発足する。外務省移住局長が1959年にトメアスーを来訪した際には、ベレン総領事とJAMIC移住振興会社（現在の国際協力機構（JICA））及びCAMTA幹部が会談し、パ

---

<sup>22</sup> Prefeitura Municipal de Tomé-Açu, *Autodiagnóstico e Plano de Desenvolvimento Municipal de Tomé-Açu*, 1991, p. 12.

<sup>23</sup> CAMTA は「パラ州胡椒栽培者中央組合」を成功させるためブラジル全土に配置した販売網と世界各国の代理店を本組合に移管し販売権も譲渡した。しかし、組合員の中には積極的に盛りたてて行こうとする人が少なく内部統制等が上手くいかなかったため設立の2年後にはCAMTAは脱退届を提出し中央組合の存続が不可能となり解散に至る。組合の結成から解散までの詳細については、トメアスー産業組合『トメアスー産業組合三十年史』（1961、p. 16）を参照。

<sup>24</sup> 仁科雅夫「“こしょう”の需給事情」国際協力事業団『移住研究』No. 20、1983、p. 85。

<sup>25</sup> なお、筆者が2010年12月末にカメタを訪問した際には、トメアスーで日常的に目にするような胡椒農園を多く見かけた。また、市街地に住む人びと数名に話を聞いたところ、カメタに住む50代男性の多くがトメアスーへ出稼ぎに行った経験があるということも耳にした。

<sup>26</sup> 寺神戸曠『ボリビア移民の真実』芙蓉書房、2009、pp. 147-151。なお、寺神戸はボリビアサンフアンで任務を終えたのち、1969年から3年半ものあいだ第二トメアスー試験農場（1974年以降は、アマゾン熱帯総合試験場（INATAM; Instituto Experimental Agrícola Tropical da Amazônia）（以下、INATAM））に赴任している。

ラ州より確約をつけ約3万haに日系人、非日系ブラジル人の800家族入植が計画される。日本政府は移住30周年記念祭のうちに、千葉三郎代議士を団長とする使節団を派遣して現地視察も実施している。こうした胡椒生産の伸びと価格変動のなかでトメアスーは空港の建設や州立中学校の開校などインフラ整備にも取り組んでいく。

しかし、1960年代前半からトメアスーの一部の胡椒園において根が腐る病害が発生する。当時は決定的な防除策が確立されぬまま、胡椒栽培者は当面の策として現栽培地より遠く離れた病気の無い原始林地帯へと移動し継続して栽培に取り組んだ。CAMTAは、農家の95%以上が胡椒に頼っていた50年代初頭に単作と市場価格の変動のリスクを避けるため、農業の多角化を促進してはいたものの、病害の出現が加わり益々その必要に迫られた<sup>27</sup>。当時はトメアスー—ベレン間の陸路がなく、船舶でベレンまで15時間かけていた。したがって、多角化の品目としては、胡椒同様に運搬が比較手簡易で高価格な貿易熱帯産品である香辛料や産業用材用の植林、薬用植物などが検討された。その例として、1962年からはトメアスーと縁のあった鐘紡や高砂香料による胡椒抽出油（オレオロジン）やアマゾンの香料資源の研究が第二トメアスーですすめられた。しかし、香料作物はブラジル北東部のバイーア州が適地であったため、高砂香料は研究先をバイーアに移し研究自体が先細りにしていく。1960年代前半は、胡椒病害がまだ深刻な状況ではなかったためCAMTAの農事部は農事試験場での試作にとどまり、商品化までには至らなかった。

### （3）遷移型アグロフォレストリーへの展開

しかし、1960年代後半になるとトメアスーでフザリウム（Fusarium）病が本格的に蔓延し始め、数千本の胡椒が一夜にして壊滅し、移住地の農業景観を一変させるほどの猛威を極めた。1970年には、CAMTAにはピメンタ病害対策委員会が結成され、同年には州農務局により胡椒の病害管理を徹底するための胡椒の苗の持ち出しや接木を禁止する告示も出されるまでに至る。

そこで、それまで胡椒の単作で生計を立てていた農家は、改良資材と肥料を施したコショウ植え穴にパッションフルーツ（Maracujá; *Passiflora edulis*）などの後継作物を植えこんでいき1970年代から経営多角化へ乗り出した。パッションフルーツは、①植付け後に1年以内で最初の収穫があること、②植付け以後少なくとも2年間は周年収穫があるので換金作物として手っ取り早い、③胡椒の古い支柱を利用できること、④防風もしくは被陰樹としてカカオやガラナ等の幼木を保護する、などの役割

<sup>27</sup> 当初の胡椒の栽培方法は山焼きの後にたこつぼ型の大きな穴を掘りそこに有機質を投入した。そして表土の埋め戻しをやり定植させており、毎年方向を変えて周囲に施肥穴を掘って追肥をおこなっていた。したがって一戸当たりの植付け本数も7,000～8,000本であった。しかし「胡椒価格の高騰以降は、一戸当たり2万～3万と植えるようになり、植穴も支柱が立てば良い程度のもになり、有機質を入れる等の管理がおろそかになってしまった」と仁科は述べている（仁科雅夫「アマゾン日系農家の現状と問題点」日本熱帯農業学会『熱帯農業』No. 3、1983、pp. 198-204.）。

が評価されていた<sup>28</sup>。1977年から1978年の最盛期には組合だけで7,000tの取扱量をあげ、遠く北東部のペルナンブーコ (Pernambuco) 州のレシフェ (Recife) 市やミナスジェライス州、サンパウロ等の工場にも送り出していたほどである<sup>29</sup>。

当時のCAMTA理事であった坂口隆は、胡椒の代替作物として南拓がトメアスー入植当初に試みたカカオ栽培を提案し、カカオの再導入・普及が始まることになる。坂口は、1970年から1972年にかけて16haの圃場に1万本のカカオを植え、その後1973年から1975年にかけてコーヒー、ゴムの木、アンジローバ (Andiroba; *Carapa guianensis*)、スマウーマ (Sumaúma; *Ceiba pentandra*)、ガラナ、パリテイラ (Pariteira; *Clitoria racemosa*)、エリトリーナ (Eritorina; *Erythrina poeppigiana*) をカカオに混植する<sup>30</sup>。1974年には胡椒病害に追い打ちをかけるように大水害とそれに続く乾燥がトメアスーを襲い胡椒は更なる被害を受けるものの、1976年にはカカオ価格が高騰し1970年代はカカオ景気により胡椒で生じた負債を返済することができるまでになった。

当初のカカオ栽培は、ブラジル政府機関でカカオ栽培を奨励・指導研究を行うカカオ院 (CEPLAC; Comissão Executiva de Planejamento da Lavoura Cacaueira) の指導により、永久被陰樹としてマメ科のエリトリーナやパリテイラなどを窒素固定のために混植させていた。しかしこれらの高木樹種は窒素固定以外の用途に乏しいため、日系農家はゴムやアンジローバなどの多目的高木樹種に切り替えていく。一部の農家はカカオの代わりに同属のクプアスー (Cupuaçu; *Theobroma grandiflorum*) を植えていった。蔓性木本作物の苗が小さいうちは太陽光が充分地面に届くため、ウリ科の商品用短期作物であるカボチャやスイカ、メロン等を地這い間作する場合もあった。

1970年以降はアマゾン横断道路 (トランスアマゾニカ) (Transamazônica) の開通やマナウスの自由港化により道路状況は急速に改善された。それは、農産物や人の移動にも大きな変化をもたらした。特にベレン近郊の蔬菜栽培や養鶏はサンパウロ等からベレン市への流入により成立が難しくなった。しかし、逆にこのルートを利用することでメロン、ハワイパパイヤ (Mamão Havaí; *Carica papaya*) やパッションフルーツ等を積極的にサンパウロ市場へ出荷することができるようになり<sup>31</sup>、短期・中期作物との混植が加速度的に増加していく。またJICAの融資を受けて1984年に建設された冷凍ジュース加工工場の稼働にともない果樹栽培も盛んになった<sup>32</sup>。工場が機能し始めた1980年代後半には組合農事部が中心となり

<sup>28</sup> 栄田剛、同上、1977、p. 102。

<sup>29</sup> なお、アマゾンのマラクジャ栽培に目をつけたブラジル政府は市場調査や加工上の処理能力調査等を実施せずにブラジル北東部の零細農家対策として低利のマラクジャ植付け融資を進めた。その結果、大増産となり処理能力を大幅に超え 1978-81 年にはマラクジャ価格の暴落が生じた。このため同地方は全面的に栽培を放棄し、1980 年代後半には逆に原料不足を引き起こした。(国際協力事業団『アマゾン地域の農産業と日本人 (集団地のその農業)』1988、p. 61。)

<sup>30</sup> Masaaki Yamada, 同上、1999、p. 371。

<sup>31</sup> 仁科雅夫、同上、1983、p. 200。

<sup>32</sup> ジュース加工場建設計画は、トメアスーの営農改善対策推進案に盛り込まれており、JICA からは 4,253 万円の助成を受けて着工された。当初の計画としては、マラクジャを原料主体として、その他クプアスーやアセロラなどを搾汁する計画であった。工場計画の詳細については、国際協力事業団『トメ

胡椒とパッションフルーツの後作としてのカカオやクプアスーの病害に強い接ぎ木苗の育成や技術普及も実施された。このようにして、序章で説明した遷移型アグロフォレストリーによる経営多角化が進展していく。山田は1996年に200戸の日系農家を対象とした調査で、6,600haにおいて70種の木本作物が300通りの組み合わせで植付けられていたことを明らかにしている<sup>33</sup>。こうして日系農家個人やCAMTA、移住者支援機関等の各レベルにおいての努力が実を結んだ結果、混植による作物の垂直的複合と小面積作付けによる水平的複合が農業生態系の多様化と農業経営の多様化をもたらし、より持続的なアグロフォレストリーを実現している。

### 第3節 トメアスーにおける農業開発の現状とその課題

2010年現在のトメアスーでは約15種類もの熱帯果樹を扱っているCAMTAを原動力としてアグロフォレストリーを実践する農家は非常に多い。本節ではトメアスーにおけるこのアグロフォレストリーの現状とその課題を明らかにする。

#### (1) カカオ栽培を基幹とするアグロフォレストリーの広がり

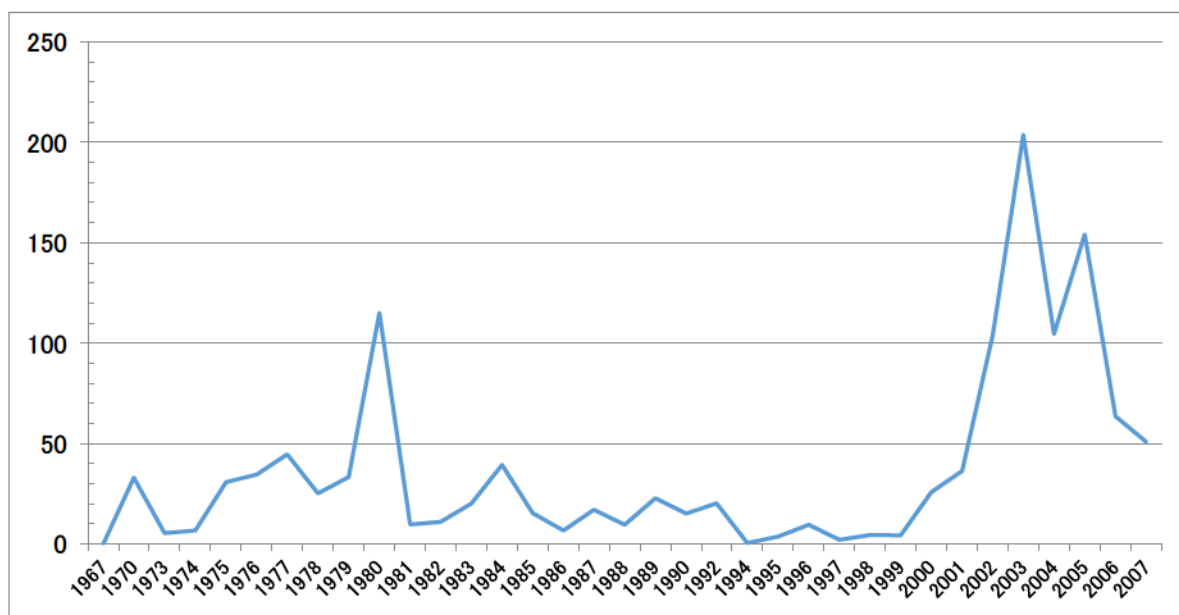


図3 CAMTA組合員のカカオの植付け総数の推移(1967-2007) (単位: 1,000 本)

(出典) CAMTA *Relatório da Diretoria-Exercício 2006* より筆者作成

アスー移住地マラクジャー・ジュース加工対策事業報告書』1991を参照。

<sup>33</sup> 山田祐彰「日系人のアマゾン開発とアグロフォレストリー」『アマゾン—保全と開発—』朝倉書店、2005、pp. 125-126。

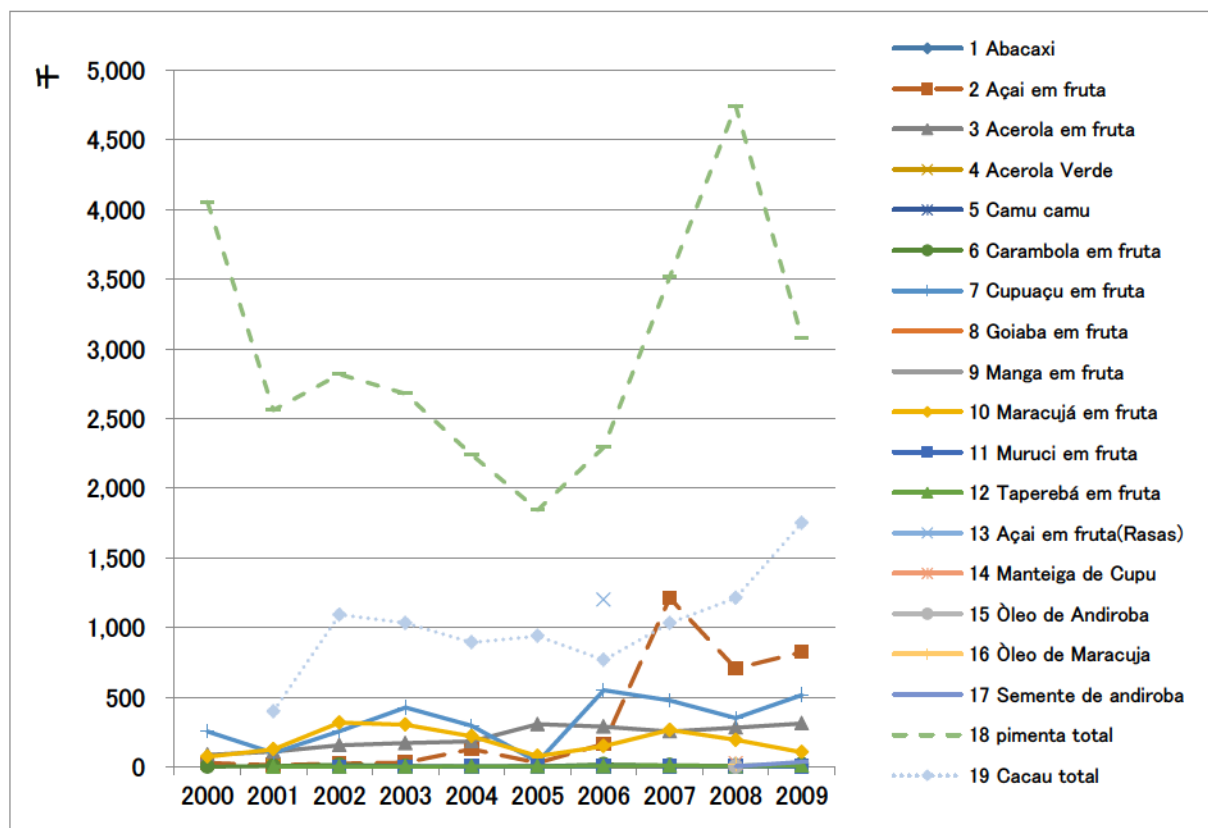


図4 CAMTA 組合員による出荷額の推移 (2000~2009) (単位: 1,000 レアル (real))

(出典) CAMTA *Recebimento de Produtos*(2000-2009)より筆者が作成

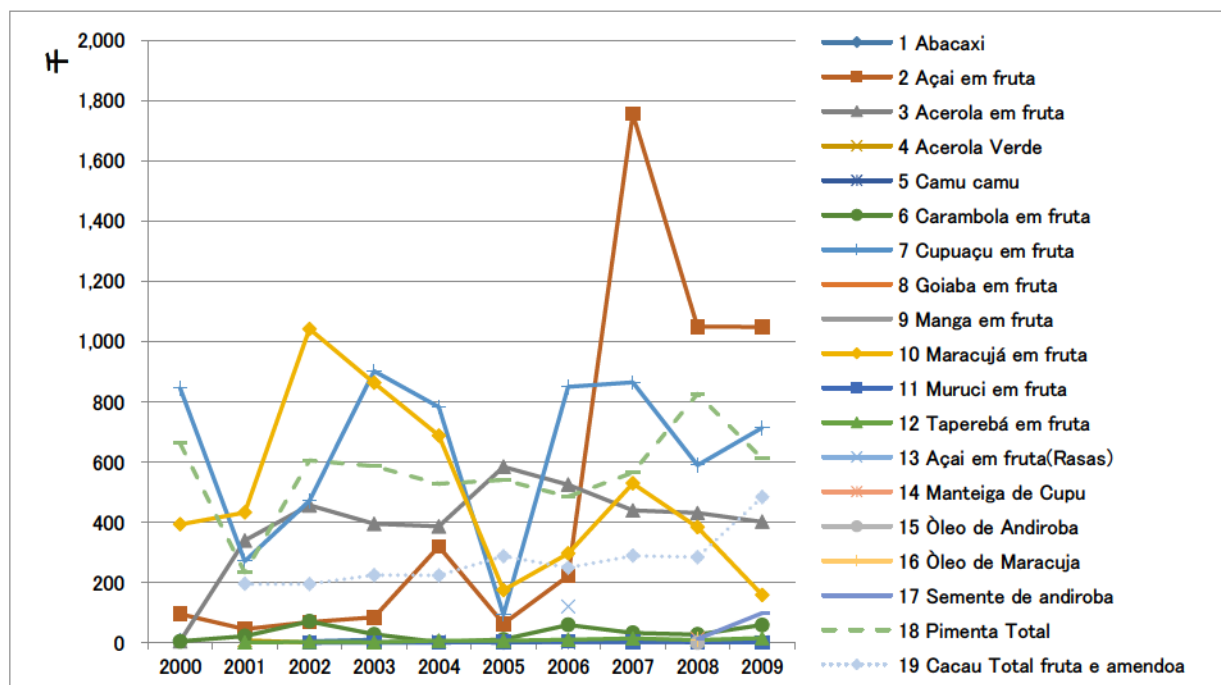


図5 CAMTA 組合員の出荷量の推移 (2000~2009) (単位: 1,000kg)

(出典) CAMTA *Recebimento de Produtos*(2000-2009)より筆者が作成

2002年にはカカオの値段が高騰し、収穫初期には6レアルだったが年末には10レアルに高騰したため、図3を見るとCAMTAの組合員における植付け本数は増加している。また2005年には60年に一度の強烈な旱魃がアマゾンに襲ったため、例えば「図4 CAMTA組合員による出荷額の推移（2000～2009）」ならびに「図5 CAMTA組合員の出荷量の推移（2000～2009）」を見るとクプアスー（図の番号7）やパッションフルーツ（図の番号10）等多くが減産している。一方で植付けから約3年で収穫が可能となるカカオ（図の番号19）は、2002年に植え付けられたものが収穫されることで「図5 CAMTAの組合員が出荷する出荷量の推移」における2005年時点を見ても出荷量自体は安定している。

また日本の製菓会社である明治製菓が5年間の購入契約で2009年よりCAMTAからカカオの買い付けを始めた事実は言及すべきであろう。明治製菓は日本国内では2011年にトメアスー産のカカオを100%使った新製品のチョコレート販売を手掛けた。また、2010年にパリで開かれたチョコレートの展示会であるサロン・ド・ショコラ (Salon du Chocolat) では「世界で最良のカカオ50」に送られる“Cocoa of Excellence”という賞をCAMTAの出品したカカオが受賞するに至った。以上を踏まえると、ここ5年間のあいだ大きな価格変動が生じることなく安定しているカカオを基幹作物としたアグロフォレストリーは今後さらに拡大することが考えられる。

## （2）アサイ（Açaí; *Euterpe oleracea*）の需要増加とリスク管理

カカオ以外ではアサイ（Açaí; *Euterpe oleracea*）（図の番号2）も増産傾向にある。昨今ではアサイの実がポリフェノールや食物繊維、カルシウム等の栄養価に富んでいることから世界的に注目されている。

年	ブラジル 全土	ロンドニア (Rondônia)	アクレ (Acre)	アマゾナス (Amazonas)	パラ (Pará)	アマパ (Amapá)	マラニョン (Maranhão)
1990	120,795	65	329	—	113,292	3,080	4,030
1995	108,922	416	381	64	102,574	2,565	2,922
2000	121,800	—	431	932	112,676	1,825	5,936
2005	104,874	65	907	1,149	92,088	1,284	9,380
2009	115,947	347	1,658	1,576	101,375	1,337	9,471

表1 ブラジルにおける州ごとのアサイ生産量の推移（1990～2009）（単位:t）

（出典）IBGE - Produção Agrícola Municipal (2009)とBanco do Brasil, *Desenvolvimento Regional Sustentável Série cadernos de propostas para atuação em cadeias produtivas Volume 2 - Fruticultura: Açaí*, 2010をもとに筆者が作成

図5を見てもCAMTAのアサイ出荷量にも増加傾向がみられる。これは2005年にCAMTAのジュース加工工場に2,000tの冷凍施設が建設されたことと2006年には日本企業との取引量が前年度の385tから650tに

契約が増加したことが要因としてあげられる。これに伴い同年にはアサイのみを出荷する組合員5名がCAMTAに加入し彼らが毎年アサイ生産を支えている。CAMTAはアサイの輸出事業にも本格的に取り組んでおり、2007年にはEUや北米、日本への輸出に不可欠なアサイのオーガニック認証(IMO ; Institute for Marketecology)を取得した。同年には米国国際開発庁(USAID ; United States Agency for International Development)による資金援助を受け、CAMTAの理事がアサイの市場調査のため訪米している<sup>34</sup>。

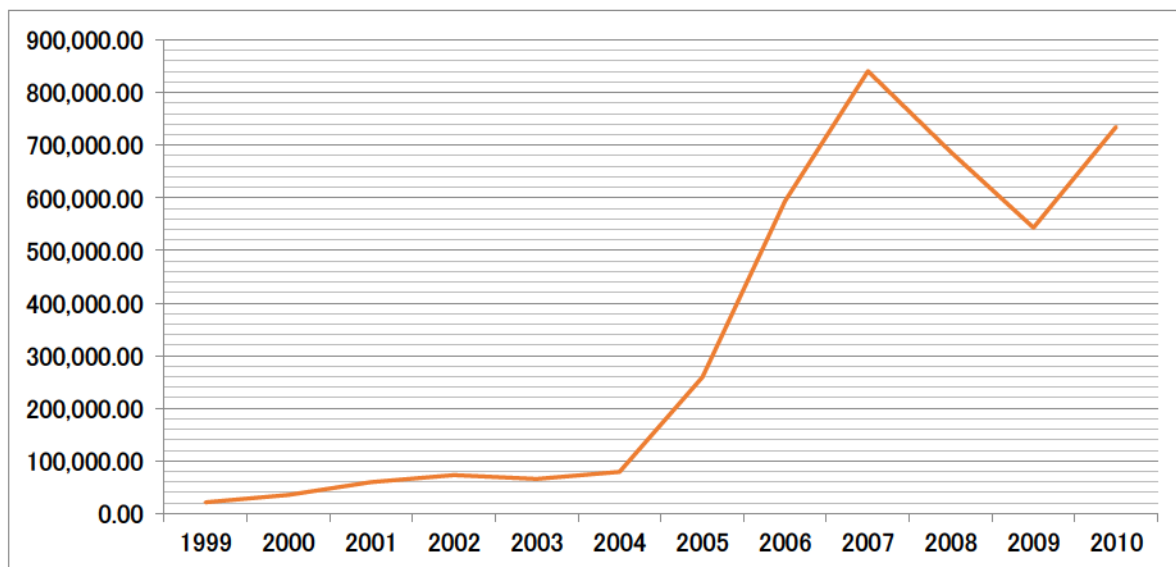


図6 FATES (社会教育技術基金) の推移 (単位: レアル)

(出典) CAMTA *Relatório da Diretoria - Exercício*(2000-2010) より筆者が作成

ただし、アサイーの増産に関連して興味深い点もあげられる。図6はCAMTAの「社会教育技術基金(FATES ; Fundo de Assistência Técnica Educacional e Social)」の推移である。FATESとはブラジルの法律において組合が設置を義務付けられている基金である。第三者取引で得た利益の100%と剰余金の5%、他者からの贈与金はこの基金に全て積み立てられ組合員やその家族、組合で働く職員の福利厚生等に充てられることになっている。図6を見ると、2004年以降のFATESの推移がアサイの推移と酷似していることがわかる。これは当時のアサイパルプの海外需要の増加と他の熱帯果樹パルプの国内需要の増加による第三者からの購入の増加が1つの要因として考えられる。つまり主に海外からの需要に追いつかず、トメアスーに住む組合員だけのアサイの生産状況では補えていない現状がある。そこでCAMTAは主にパラ州の中でもアサイの一大生産地であるイガラペ・ミリ (Igarapé-Miri) やカメタから買い付

<sup>34</sup> United States Agency for International Development, *USAID/BRAZIL MICRO AND SMALL ENTERPRISE TRADE-LED GROWTH PROGRAM TRIP REPORT ON TRADE MISSION TO NEW YORK / NEW JERSEY AND THE MIAMI, FLORIDA AREA*, MAY 2007. ([http://pdf.usaid.gov/pdf\\_docs/Pdac1731.pdf](http://pdf.usaid.gov/pdf_docs/Pdac1731.pdf)) (2011年10月20日閲覧)



けている。ブラジルの国内企業やアメリカの企業もアサイのプランテーションや買い付けに奔走している。

こうした国外市場の需要の高まりは、2010年から2011年にかけてこれまでにない国内でのアサイ価格の高騰をもたらしている。アサイは昔から川や湖などの近くに住む農村住民のヒベイリーニョ

(Ribeirinho) の主食とされ“Comida Pobre” (貧しいものの食べ物) と呼ばれていたが、2010年現在は“Comida Nobre” (高貴な人間の食べ物) と揶揄されている。こうしたアサイの高騰に鑑みて、Andréa Vieiraはトメアスーでの更なるアサイの増産の必要性を論じている<sup>35</sup>。またブラジルの農業経済学者であるアルフレッド・ホンマ (Alfredo Homma) は、「アサイの価格の高騰と大量の輸出増加は、ヴァルゼアにおける天然林の伐採とアサイ単一栽培を助長する可能性がありその一助をCAMTAが担っていると疑われかねないとして組合員によるアサイの増産をさらに推奨すべきだ」と話している<sup>36</sup>。

### (3) アブラヤシ (デンデ) (*Dendê; Elaeis guineensis*) 栽培の拡大

CAMTAは1980年代後半に、再建十ヵ年計画の五大重点作物としてアブラヤシを取り上げた。JICAも積極的に奨励したこともあり、1985年にはデンデ栽培の技術研究や先進栽培地の視察・調査等を目的としてデンデ栽培協力者グループが組合内部に結成されてもいる<sup>37</sup>。ただし、永年作物であったこととアブラヤシ搾油工場が遠く採算性に合わないという理由から、CAMTAとしても積極的に扱ってこなかった<sup>39</sup>。しかし1990年代後半以降は企業主導のもとアブラヤシ栽培が拡大しつつある。基本的には初期費用 (苗や土地整備代) の融資、肥料・除草剤の現物支給のほか、アブラヤシ栽培の専門家から営農指導等も受けることができる。2010年はブラジルの国営石油会社ペトロブラス (Petrobras) とポルトガルの石油・ガス会社ガウピ (Galp Energia SGPS, SA) が提携したベレンプロジェクト (Projeto Belém) というアブラヤシ栽培計画が開始された。2010年10月22日にトメアスーで催されたペトロブラスによる農家への説明会によれば、2010年から2018年の実施計画でトメアスー以外にも近隣の7つの郡を含めて5万haの

<sup>35</sup> Andréa Vieira Lourenço de Barros, *EVOLUÇÃO DOS SISTEMAS AGROFLORESTAIS DESENVOLVIDOS PELOS AGRICULTORES NIPO-BRASILEIROS DO MUNICÍPIO DE TOMÉ-AÇU, PARÁ, BRASIL*, Tese apresentada ao Curso de Pós-Graduação em Ciências Agrárias/Agroecossistemas da Amazônia, da Universidade Federal Rural da Amazônia - UFRA e Empresa Brasileira de Pesquisa Agropecuária - Embrapa Amazônia Oriental, 2009.

<sup>36</sup> 2010年7月22日におこなったインタビューより。

<sup>37</sup> 南部尚「デンデ栽培者グループ結成によせて」『広報』No. 12、1985年8月20日。

<sup>38</sup> 2010年現在にデンデ栽培農家の1人である柴田シルヴィオは、何の組織が主催した研修かは不明だが、1986年の11月からコスタリカでアメリカ資本の会社が経営しているデンデ圃場を見てまわり、デンデ栽培の可能性に確信を持っている (柴田シルヴィオ「将来性あるデンデ栽培コスタリカで技術研修」『トメアスー組合だより』No. 27、1986年11月30日)。

<sup>39</sup> デンデ自体は1960年代頃のCAMTAにおいても永年作物として有望視されており、実験栽培でも好成績はあげていたという。ただし、当時は搾油工場がなかったため、大々的な栽培が実施できない状態だった (トメアスー産業組合『トメアスー30年史』1961、p. 75)。



土地に単一栽培のアブラヤシを栽植し年間30万tのアブラヤシ生産等を計画しており5,000人の直接雇用の創出を見込んでいる。

トメアスーにおいて上記のような単一栽培によるアブラヤシの本格的な導入が進められるなかで、CAMTAとブラジル農牧研究公社、ブラジルの大手化粧品会社Natura社の研究機関（Natura Inovação e Tecnologia de Produtos Ltda）による、アグロフォレストリーのアブラヤシ栽培協同研究が実施されていることは興味深い。アブラヤシは単一栽培が一般的であるが本研究ではアブラヤシを図7のように東西に三角形を描くように植え付けられている。こうすることで、ほぼ赤道直下に位置するトメアスーでは、アブラヤシが相互に日射遮蔽することなく成長することができる。この共同研究では、アグロフォレストリーにおけるアブラヤシ栽培植付けの圃場準備と混植の配置などをいくつかに分けそれらの炭素と栄養循環、土壌の質、受粉と動植物の多様性に関する比較研究を実施している。CAMTAは組合員3名の圃場を提供し、農事部が常に管理・調査をおこなっている。2010年の研究報告では、アグロフォレストリーであっても経済的に見合った生産量を維持し、持続可能なアブラヤシの生産になる可能性がある」と論じられた<sup>40</sup>。Natura社はトメアスーのアブラヤシを扱う企業から油脂を購入することが決まっているため、CSR（企業の社会的責任）活動として本プロジェクトを支援するとの見方もあるが、今後のアグロフォレストリーにおける永年作物としてのアブラヤシの可能性を示唆する研究として興味深い取り組みだと言えるだろう。

---

<sup>40</sup> Castellani, D.C.; Monteiro, R.E.; Takamatsu, J.A.; Kato, O.R.; Rodrigues, M.R.L.; Miccolis, A.; Costa, M.; Casara, J, *Estudo de sistemas agrossilviculturais para produção de dendê (Elaeis guianensis) em propriedades rurais de Tomé-Açu (PA)*, CONGRESSO BRASILEIRO DE SISTEMAS AGROFLORESTAIS, 7, 2009 (<http://www.alice.cnptia.embrapa.br/handle/doc/657675>) (2011年10月20日閲覧)

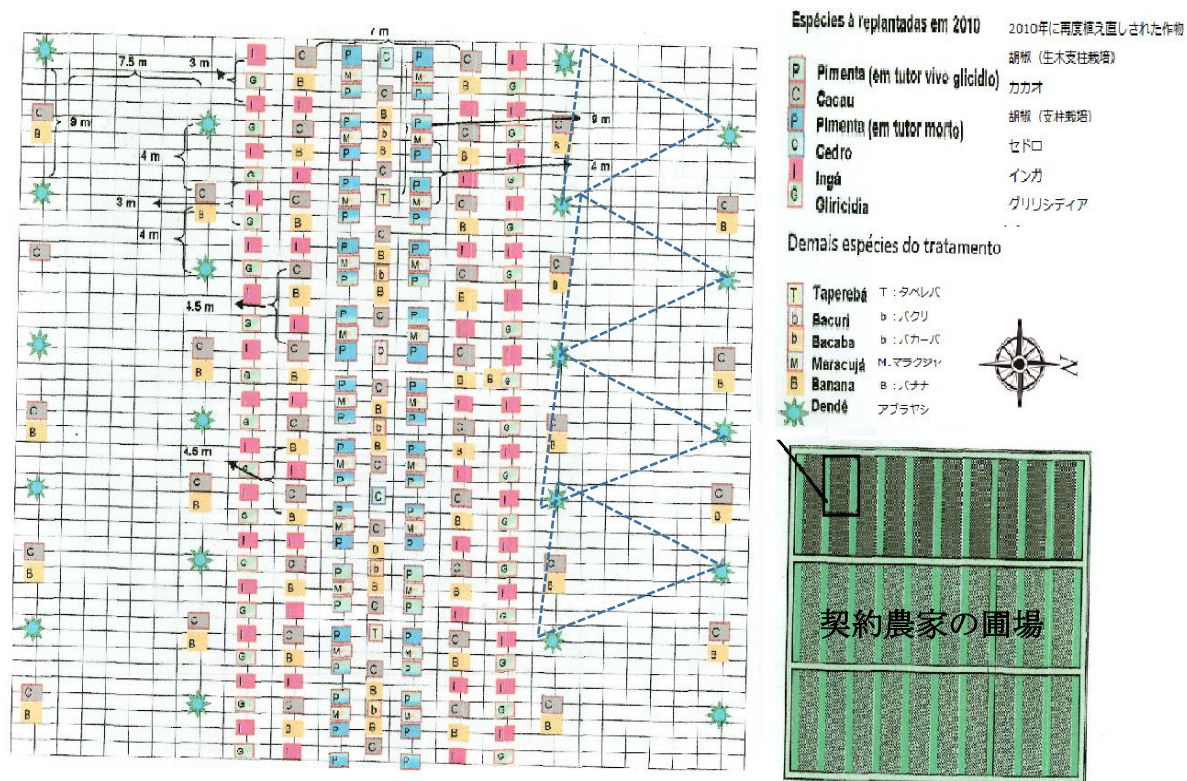


図7 アブラヤシのアグロフォレストリー試験栽培の図

(出典) Natura の研究者より提供されたデータをもとに筆者が作成



図8 図7のアブラヤシのアグロフォレストリー栽培

(出典) 筆者撮影

#### (4) アグロフォレストリーの普及と発展

2000年以降のトメアスーでは、アグロフォレストリーの普及・発展を目的とした、政府や研究機関等の事業が取り組まれている。表2は、2000年以降にトメアスーでアグロフォレストリーの発展に関わる主な日本の組織の支援や働きかけのリストである。

時期	実施主体	主な事業内容
1999-2004	JICA	「東部アマゾン持続的農業技術開発計画」を実施。現地の実情にあった選定熱帯果樹及び胡椒を含む持続的農業技術の開発 <sup>41</sup>
2003	EMBRAPA、JICA、 地元のNGO、郡政 府等	小農家の子弟を対象とした全寮1年生の農業学校を開校し58名が卒業。CAMTAの技術師らも参加
2003-2006	NGO「野生生物を 調査研究する 会」(WRS)	JICAの「草の根技術協力事業(支援型)」の採択を受け、「アマゾン自然学校プロジェクト」を実施。トメアスーの自然環境に即した環境教育テキストの作成や、環境教育インストラクターを養成
2005-2006	JICA	JICA派遣青年ボランティアの指導により、クプアスー、マラクジャ、グァバのジャムの製品化に成功
2006~	EMBRAPAやJICA 等	第三国研修「アグロフォレストリーコース」プロジェクトを通じてトメアスーの日系農場を実地のモデルとし、国内外の農家へ技術を移転
2009-2012	WRS	三井物産環境基金に採択され、「ブラジリアマゾンにおけるアグロフォレストリーによる河畔林再生植林活動と産学官ネットワーク化事業」を実施
2011	WRS	緑の募金事業に採択され、「小農家へのアグロフォレストリー推進支援による森林回復と荒廃地回復植林事業」を実施 <sup>42</sup>
2011-2016	国立大学法人 東京農工大学	JICAの「草の根技術協力」の採択を受け、ブラジリアマゾンの農村所得向上と環境保全修復のための日系遷移型アグロフォレストリー普及認証計画

表2 2000年以降のトメアスーにおけるアグロフォレストリーに関わる主な日本の組織による支援や働きかけ

(出典) JICAのホームページ並びに『トメアスー総合農業協同組会創立60年史』(2009)等を基に筆者作成

<sup>41</sup> 「東部アマゾン持続的農業技術開発計画」プロジェクトの詳細はJICAの報告書を参照。  
(<http://libopac.jica.go.jp/images/report/P0000001900.html>) (2017年5月1日閲覧)

<sup>42</sup> 詳細は野生生物を調査研究する会「植林NGO奮闘記 「現地のニーズを掘り起し、現地リソースを活用し、現実にあった活動を！」(公益財団法人国際緑化推進センター『緑の地球』通巻109号、2014、pp.6-9)を参照。

([http://www.jifpro.or.jp/Activities/Information/Green\\_Earth/disclosure\\_Green\\_Earth/Green\\_Earth109.pdf](http://www.jifpro.or.jp/Activities/Information/Green_Earth/disclosure_Green_Earth/Green_Earth109.pdf)) (2017年5月1日閲覧)

例えば、JICAが取り組んだ「東部アマゾン持続的農業技術開発計画」（1999-2004）では、胡椒の支柱になるアカプ（Acapu ; *Vouacapoua americana*）などの有用樹種が森林伐採の規制強化によって入手困難になり高騰していることから、安価で入手可能なグリリシディア（*Gliricidia sepium*）を支柱木として利用する胡椒生木支柱栽培法を導入し、小農家への普及を試みた。また、CAMTAも2000年後半から非日系の小農家に対して組織的な営農支援をすすめている。その取り組みが日本のNGOの「野生生物を調査研究する会」（WRS）と進めた「小農家へのアグロフォレストリー推進支援による森林回復と荒廃地回復植林事業」や「ブラジルアマゾンにおけるアグロフォレストリーによる河畔林再生植活動と産学官ネットワーク化事業」等である。これらのプロジェクトでは、非日系の小農家が他から苗を購入することなく、自律的な経営が可能になることを目的に、WRSと協働して小農家の生産者協会を対象にコミュニティで維持管理するモデル圃場や苗畑づくりを進めた。また、この協会の非日系小農家らは、自分たちで資金を出して苗を育て管理し、他への分配・販売もおこなっている。

また、CAMTAは、組合員ではない小農家に対し準組合員証（Carteira de Produtor Rural）を発行し、農協準組合員資格を付与することで、彼らから熱帯果樹や胡椒を直接購入している。主な理由としては、生産物不足による熱帯果樹加工工場の稼働停止を防ぐことと、日系社会の発展には主に非日系の小農家との共存共栄が不可欠という考えに基づき、非組合員の小農家に対し生産物の販売販路を保証するという2つがあげられる。準組合員資格を有する小農家は、2010年11月に200名を超えている。



図9 準組合員証

（出典）2010年に筆者撮影

このように、日系移民が営みそして発展させてきたトメアスーのアグロフォレストリーは、ブラジル人の小農家らも経済・社会的に包摂しながら、トメアスーの経済・社会の持続可能性に寄与するかたちで展開している。こうしたトメアスーでの取り組みは、ブラジル国内でも高く評価されている。例えば、CAMTAは2010年にブラジル国家統合省（Ministério da Integração Nacional）による「地域発展国家表彰」（Celso Furtado）第2部門賞を受賞している。同年には、環境省による「環境シコ・メンデス賞」の「持続可能なビジネス」部門において表彰された。2012年の「国連持続可能な開発会議」（リオ+20）



では、CAMTAは第1回ブラジル・グリーンプロジェクト賞を受賞している。2014年には、科学技術省の所管法人である調査・研究事業融資機構（FINEP）より社会技術部門の優秀賞を受賞している。

#### 第4節 トメアスーの農業発展とノンフォーマル教育

以上のようにトメアスーの農業が発展する過程において、どのようなノンフォーマル教育が取り組まれてきたのか。本稿では、ノンフォーマル教育に関係する資料が現存する海外移住事業団（1974年に国際協力事業団に改組され現在のJICA）、CAMTA、そして日系移民の中心となる篤農家による教育活動に着目しそれらの内実を明らかにしたい。

##### （1）移住支援機関による教育

国際協力事業団（現在のJICA）は、トメアスーの農業発展に寄与した組織の1つである。彼らは、研究者・専門家のトメアスーへの招聘や彼らによる講習会の開催、トメアスーの農業関係者の研修機会の醸成等を積極的に取り組んでいる<sup>4344</sup>。例えば1974年に設立されたアマゾニア熱帯農業総合試験場

（INATAM；Instituto Experimental Agrícola Tropical da Amazônia）<sup>45</sup>は、「病虫害試験」「第二作物の開発」「作物栽培試験」「土壌肥料試験」「営農指導」を目的として、病理や土壌、果樹等の日本人専門家を招へいし、調査研究を進めその調査成果を日系移住者に対して還元するなどの活動に取り組んでいた。

---

<sup>43</sup> JICAは組合員に対して多くの研修機会を提供している。例えばトメアスーのジュース工場の問題点を改善するため、1993年10月25日から11月5日にかけて日本のみかんジュース工場等を南部尚が視察しているが、JICAが財政的に支援している（南部尚「研修報告日本におけるジュース産業の現状と当地のジュース産業について」『組合広報 Jornal Camta』No. 82、1993年12月15日）。また、1993年10月13日から11月13日には、組合営農指導部のJanete Andradeがサンパウロのマラクジャ栽培を学ぶ視察研修に参加したり（Janete Andrade「視察研修報告」、同上）、1987年には当時の理事らがサンパウロのコチア組合で組合経営者研修をおこなっている。（上杉嘉幸「組合と組合員の協力体制を！組合経営者研究に参加して」『トメアスー組合だより』No. 37、1987年9月30日）。1992年には、加工委員長だった真木卓郎がサンパウロにあるヤクルトのジュース工場とコチア食品加工工場を視察し、トメアスーのジュース工場をどうすべきか検討する機会を作っている（真木卓郎「先輩工場を見て考えること―出張報告―」『組合広報 Jornal Camta』No. 70、1992年12月3日）。また国際協力事業団の推薦を受けて、海谷英雄は1986年7月から11月まで山形市農協で総務や購買等の農協業務全般の研修を実施している（「日本の農協見聞―組織優先の信用事業―」『トメアスー組合だより』No. 30、1987年2月28日）。

<sup>44</sup> なお、コチア産業組合、スールブラジル農業協同組合、サンパウロ農業協同組合中央会、バンデイランテ産業組合が中核となり、1957年に創立したブラジル農業拓殖協同組合中央会（以下、農拓協）等も、JICAによる営農普及事業や、農業後継者育成コース、農村指導者コース等の日本の農家や農協での研修等にも取り組んでいたが、農拓協に関する調査が困難であったため、本論では言及していない。

<sup>45</sup> 1981年にJAMICが国際協力事業団に吸収されたことがブラジルの法律違反であるとブラジル政府から指摘されたことで、1981年にJAMICは閉鎖を余儀なくされる。そして1986年にこの農場はEMBRAPAへと無償譲渡されることになる。

### ①農事講習会

移住・支援機関団体による取組みの1つがアマゾン入植者を対象にした「青少年営農訓練講習会」（農事講習会）である。第1回は、海外移住事業団ベレン市部の主催で1961年1月14日から3日間の合宿形式で開催された。講習会後にはトメアスーで胡椒に関する実地指導が組まれていた<sup>46</sup>。講習会の主な内容は、平賀練吉「胡椒栽培について」、上村延太郎（アマゾン支部）「柑橘栽培について」、伊関治朗（モンテ・アレグレ農場長）「熱帯農業について」、仁科雅夫（移住振興ベレン支店）「香辛料について」、佐藤信市（カスタニャル在住）「養鶏について」であった。講習会を受講した上村昌司は、「見聞を広め、移住地間、相互の理解を深めると共にアマゾン各地に広く知己を得ることになった」と述べている<sup>47</sup>。

講習会は、移住地間の相互理解を深め評判を得たことから2回目以降も催されることになる。2回目以降は、北伯農牧実験調査研究所（IPEAN; Instituto de Pesquisas e Experimentação Agropecuárias do Norte（現在のブラジル農牧研究公社（EMBRAPA））が開催場所となる。当時IPEANはゴム研究が主で胡椒に関する研究はほぼ皆無であった。そこで、第2回講習会を契機として同研究所においても胡椒根腐病の研究が開始されることになり、日本から専門家を招へいし日伯協同研究も進められるようになる。こうした学習機会は、最新の農業技術や営農方法について知り考える重要な場であった<sup>48</sup>。1974年の講習会は表3のようなスケジュールで実施されており、胡椒の栽培方法や施肥方法、病害対策、第二作物、カカオの栽培方法、熱帯果樹、肉牛と牧草、労働法等の多様なテーマを扱った講義が実施されている。

特に注目したいのは国際協力事業団から派遣され作物栽培研究に従事していた寺田による「熱帯農業と有機質肥料」というテーマの講演である。講演では、アマゾンの土壌は元来肥沃ではなく有機質が微生物を増やし微生物が鉱物を食物にとらせる働きをするため、森林の生態を作物栽培に応用して有機質を施与することが何よりも重要であるとのことだった。

寺田の講習をうけた平賀は、トメアスーで発刊されていた新聞『トメアスー』に「ピメンタ栽培に関する一考察」と題する記事を寄稿している。そのなかで平賀は講習で学んだ岩佐と寺田の議論を引用し、アマゾンの原始林では落葉、枯枝等の有機物が堆積しそれが土壌をつくっているとの前提を踏まえた上で農業の基本は土づくりであるとして、化学・物理・生物的に土壌保全を考え土壌の安定化に専心すべきだと述べている<sup>49</sup>。

<sup>46</sup> 上村昌司「アマゾンにおける営農指導について－上村延太郎氏の功績とその背景－」国際協力事業団『移住研究』No. 21、1984、pp36-42。なお、この講習会は、受講者は各移住地域から代表として1名の参加と限定し、講習会の成果を他者へとひろく還元するため、受講者は移住地へ帰った後受講内容を他の入植者に講習する義務を負っていた。（上村昌司、同上、1984、p. 37。）

<sup>47</sup> 上村昌司、同上、1984、p. 37。

<sup>48</sup> 上村昌司、同上、1984、p. 37-38。

<sup>49</sup> 平賀練吉「ピメンタ栽培に関する一考察」『トメアスー』No. 51、1975年4月1日。

	1974年の講習会内容
1 日目	開会式、「ピメンタ栽培と市場問題」（平賀練吉）、「土壌と肥料」（IPEAN 岩佐安）「農村労働者雇用と労働法」（小山次男弁護士）、「最近の営農問題」に関する座談会、国際協力事業団の改租に関する説明、各植民地代表の植民地事情
2 日目	「肉牛肥育」（Dr. クリスト・ナシメント）、「牧草」の講義（Dr. カルロス・ゴンサルベ）、パラ農科大学農場施設見学、映画上映会
3 日目	「熱帯果樹栽培」（Dr. ペドロ・ジェヌー）、「カカオ栽培」（Dr. アントニオ・コスタ）、「これからの農業経営」のテーマの座談会、事業団の各部門とのやりとり
4 日目	「ピメンタの病害について」（Dra. ライムンダ・ペレイラ）、「果汁について」（IPEAN 永田巖）、「ピメンタの病害と農薬散布実験」（IPEAN馬淵信宏）、映画上映会
5 日目	「アマゾン地域の土壌について」（Dr. エルネスト・セルバフレエレ）、「熱帯農業と有機肥料」「JAMICトメアスー試験農場実験概況」（IPEAN寺田慎一）、閉会式

表3 青少年営農訓練講習会のスケジュール

（出典）平賀練吉「青少年営農訓練講習会 IPEAN講堂にて」『トメアスー』（No. 45、1974年5月25日）より筆者作成。

## ②青年学級・婦人学級

1970年には、海外移住事業団主催の「青年学級」が開催される。開催の趣旨は以下のとおりである。

戦後移住された子弟の多くは内地初等教育も未了のまま、トメアスに入られたわけですが、開拓初期の営農のきびしさから、つい親子共に労働に従事せざるを得ず、ために現地の教育を受ける機会にも恵まれず、結局日伯両校の言葉、文化も身につけていない中途半端な人間として成人しつつあるのが一般である。しかし、これら青年子女の若者はブラジル社会に融合しがたい親達一世と、母国の文化をはなれて完全にブラジル社会に溶け込んでいる二世達、この橋渡しの世代であり、しかも今後の日系社会を担う有為な青年子女であるので、ここに彼等に最低限の生活指針を与えることを主眼にして三か年計画で青年学級を実施するものである<sup>50</sup>。

この講座は、第二トメアスーイピチング小学校にて11月7日より毎週土・日の4時半から4時間、2時間をもって1つの講座とされ、全コース60講座が開設されている。講座内容は、人生の問題や衛生知識、法律、文化鑑賞、算盤簿記、スポーツ、フォークダンス、手芸、料理、被服、電気などがあり、受講費用は無料としている。またJAMICでは、1975年度から営農研究のための婦人学級が開催されている。

<sup>50</sup> 「「青年学級」の開講 日系社会全体のレベルアップが目的トメアスー事業団八川所長語る」『緑風』No. 33、1970年12月5日。

第1回はパラゴミナス（Paragominas）視察、第2回はベレン近郊視察、第3回はINATANでの研修会と継続されている。記録として残っている第4回の研修内容は、①農場の設備見学、②講演「これからのピメンタ栽培」（吉田農場長）、③講演「安定した農家とは」（高橋JAMIC所長）、④講演「農家の健康管理」（生田医師）、⑤昼食（普段外食する機会の少ない布陣をねぎらうためにシュラスコやビール等）、⑥健全な農業経営のための懇談会、という流れであった<sup>51</sup>。

また、1972年から約2年間のあいだ第二トメアスーの試験場（のちのINATAM）に赴任した小菅伊之彦は、農場において試験展示業務や営農情報を提供する業務（普及業務）等をおこなった。小菅は試験場の普及業務のなかに、農家の巡回の営農相談、技術普及、営農情報の提供などがあったが、個別に巡回することが難しかったため、第一と第二トメアスーに農事グループをつくり、普及業務をおこなっている。また、普及業務で足りない部分は営農通信を発刊し情報を流すよう心掛けたという。小菅は当時の普及業務について、『アマゾンに挑む第二トメアスー入植20周年史』において以下のように回想している。

今印象に残っていることは、農場を集会所にして、圃場を見学しながら研究会を開いたこと、第一センターのグループには、約一年間位、毎週一回、一九時ごろから二時ごろまで農業簿記を教えたこと、一日の多忙な仕事を終えて疲れた体をいやす間もなく、毎回十名近くの会員が参加して、真剣にメモをとり、聞いてくれたことに大変喜びを感じたものです。第二センターのグループは、毎月一回会員持ち回りで、会員宅で、研究会を十九時頃から開き、遅い時には午前二～三時まで討議したこと等々が懐かしく思い出されます<sup>52</sup>。

こうしたJICAらの移住機関による学習機会の提供を通じて、トメアスーの農家らは農業簿記や営農方法などを学んだに違いない。そうした農業に関する基礎的知識をもとに自ら営農をすすめ、トメアスーの農業の発展に寄与したといえるだろう。

## （2）トメアスー総合農業協同組合による教育

CAMTAもトメアスーを代表してノンフォーマルな教育をすすめた組織の1つである。特にその中心となったのが、1970年に結成されたCAMTAの教育委員である<sup>53</sup>。教育委員会が創設された際にその委員長を務めたのは平賀練吉であった。ただし当時の教育委員会は具体的な活動を進めることなく活動は停滞していた。1984年に教育委員長として組合理事の南部尚が就任すると、広報活動の促進やそれを通じた協同組合精神の理解の普及、そして2世の農業後継者・指導者の発掘と育成を掲げ、教育委員会としての

<sup>51</sup> Y・N「研修旅行」『トメアスー』No. 69、1977年4月27日。

<sup>52</sup> 第二トメアスー移住地20年史編集委員会『アマゾンに挑む第二トメアスー入植20周年史』1984、pp. 73-74。

<sup>53</sup> 1971年には、技術、教育、福祉委員に改称している（トメアスー開拓70周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して』2009、p. 72。）。



活動を展開していった。広報活動では、協同組合の定義や組合員としての考え等について、教育委員会が発刊した『トメアスー組合だより』に連載している<sup>54</sup>。また、若手後継者の発掘と情報発信を目的とした「我らが後継者」特集<sup>55</sup>なども数多く取り組み、後継者の可視化やその育成にも努めた。1985年には、教育委員会の傘下に青年部を位置付け、青年たちの先進地域への視察や営農活動を推奨した<sup>56</sup>。1987年1月24日には青年部9名と当時のトメアスー郡長と「トメアスーの展望」と題する座談会を開催し、トメアスーの若者が考えていることを直に郡長へ伝える場なども設けている<sup>58</sup>。

その取り組みの1つの事例としてあげられるのが1986年に教育委員主催でおこなった若手組合員対象のセラード（Cerrado）等先進農業地帯研修だろう<sup>59</sup>。この研修には、34名のトメアスーの組合青年が参加し、11月17日から12日間の日程で日本政府とブラジル政府の協働官民プロジェクトが進められているミナス・ジェライス州（Minas Gerais）のセラード地帯やサンパウロ近郊、ブラジル南東部で日本人の農業発展を支えた日系の巨大農協コチア産業組合中央会（以下、コチア組合）と南伯農業協同組合中央会（スール・ブラジル）（Sul Brasil）本部、他州の先駆的な胡椒栽培地域やバイーア州のパパイ

<sup>54</sup> 例えば1985年5月から1986年1月までのCAMTAが発刊していた『広報』では、教育委員が主体となって、協同組合の歴史や、農協と株式会社の違い、協同組合の原則としての加入脱退の自由や、民主的運営の原則、日本の農協の歩み、協同組合の正組合員の資格・準組合員の資格の違いなどを連載している。

<sup>55</sup> 教育委員が広報誌で連載していた「我らが後継者」（のちに「後継者登場」と変更）において取り上げられた後継者は23名いる。

<sup>56</sup> 1983年から1990年まで組合の理事・教育委員委員長を務めた南部尚は、筆者が2010年12月7日におこなったインタビューで、当時を振り返りながら「戦前移民と戦後移民とのあいだに戦前移民の2世が入ることの重要性」や「トメアスー以外を知ったうえでトメアスーに誇りを持って生きられるような課外活動の重要性」「組合員がもっと家族的にならないといけない」という問題意識を持っていたと話している。したがって、こうした後継者育成を目的とした研修事業や座談会等の組合員同士が膝を突き合わせて対話する場づくりに率先して取り組んだと言えるだろう。

<sup>57</sup> 例えば1986年にはコチア産業組合の研修生を募集し、参加費用の一部を組合が負担している。なお、この研修には新井智紀と小長野道則が参加している。（「コチア産業協同組合へ研修生募集」『トメアスー組合だより』No. 19、1986年3月20日。）

<sup>58</sup> 「新春座談会「トメアスー地域の展望」日系青年層の行動力に期待 トメアスー郡長が強調」『トメアスー組合だより』No. 29、1987年1月31日。座談会出席者は、坂口渡、大貫光春、船木ワカナ、斎木イバン、鈴木エルネスト、長井幹男、伊藤ジョージ、柴田シルヴィオ、小長野道則の9名で、郡長に対してゴミの問題や、ベレンの学校で学んだ若者が帰ってこない現状を踏まえ、若者が働ける場や雇用を創出するよう求めている（同上）。

<sup>59</sup> セラード（Cerrado）はブラジル中西部の約2億haをしめる、草原地帯の植生の名称である。この地域は降水量が少なく、大きな河川もないため農業には適していない土地だと認識されていた。しかし、1975年からブラジル政府が開発に乗り出し、日本も技術と資金面から協力を開始した結果、現在は世界有数の穀倉地帯に変化した。今日では大豆や綿花、珈琲、トウモロコシ、牛肉などが盛んである。詳細は本郷豊・細野昭雄『ブラジルの不毛の大地「セラード」開発の奇跡』（ダイヤモンド社、2012）や青木公『甦る大地セラード 日本とブラジルの国際協力』（国際協力出版会、1995）を参照。

<sup>60</sup> 先進地農業研修は、JICAがアルゼンチン、パラグアイ、ボリビア、ブラジル等にある日本人移住地の農業の近代化、技術向上、経営改善を目的として農業先進地域で農業技術や農産物の流通機構等について学ぶ研修に対し助成する制度である。1978年に開始され2009年に終了している。ただ、当時のCAMTAがどのようにJICAから助成を受けて実施していたかや、その補助金額等の詳細については不明である。

ヤ栽培等を視察した。研修後には、教育委員会が研修に参加した青年部を集め「セラード研修で得たもの」と題した座談会を開催している。座談会に参加した青年部の若者からは、かん水による栽培法や土地づくりの方法、農業における創意工夫、営農指導や後継者育成のための教育の重要性、こうした研修を通じてトメアスーを客観視して検討する機会の重要性等の意見が出された<sup>61</sup>。ほかにも「農業事情が悪くなったらすぐに新しい土地に移動すればいいという考え方には疑問を感じる。トメアスーも南伯地域にないものを持っており、けっして他地域に負けないと確信する。」というジブシー農業に対する批判も出ている<sup>62</sup>。このような研修は不定期ではあったが継続して実施されている。例えば、1987年にはアマゾン研修旅行として、日本人移民が入植したサンタレン（Santarém）やモンテ・アレグレ、その他マナウスのホンダ工場等を視察している<sup>63</sup>。1991年にもサンパウロのオランブラ（Holambra）農協で業務体制や職業教育、組合事業等を学ぶことを目的とした研修が実施された<sup>64</sup>。また、1994年にはJICA先進地農業研修として、1月23日から29日までのブラジル北東部のパッションフルーツ産地研修に高木誠也と非組合員の松永邦夫が参加している。また、同年にはJICAの支援を通じて村上直彦と関克彦が2月21日から成果物の流通機構調査視察等でサンパウロに赴いている<sup>65</sup>。

青年層の先進地研修参加に対する組合上層部の思いは、1979年から1996年まで間、組合理事や専務理事長等を歴任した峰下興三郎の『組合広報 Jornal Camta』（1992年12月3日 No. 70）への寄稿文「強敵と会わせたい」から読みとれるだろう。以下の文章は、1992年11月23日から28日にかけて当時教育委員長だった高松寿彦と、アセロラ作物部長だった稲田洋一、マラクジャ作物部長の小長野道則、青年部長の峰下興司青年部長の4名によりブラジル北東部で実施したアセロラ栽培調査に関して書かれたものである。

苦しい財政の中で、四人の組合員がアセロラの産地調査に行って来た。調査旅行とは大変贅沢なもので、わずか数時間の目的地滞在のために場合によっては三日も四日もかかることがある。（中略）今は情報化の時代である。と言っても、自分にその情報を利用する意欲が無ければ、どんな高価な情報でも猫に小判と云う事になるだろう。その点、自分がそれで飯を食っていることにかんしてならば、知識にも意欲にも欠くはずはない。これが農業者による産地調査旅行というものであり、その成果は大なり小なり

<sup>61</sup> 「座談会「セラード研修で得たもの」もっと営農指導の徹底を！」『トメアスー組合だより』No. 28、1986年12月31日。座談会には新井智紀、太田豊二、小長野道則、室井光一、大貫光春、山内修二、花輪アメリヤ、南部尚（司会）が参加した。

<sup>62</sup> 同上、1986年12月31日。

<sup>63</sup> 南部尚「アマゾン研修旅行の企画に当たって」『トメアスー組合だより』No. 38、1987年11月30日。なお、研修での成果は参加した梅沢保司が「アマゾン研修旅行に参加して」（『トメアスー組合だより』No. 39 1987年12月10日）にまとめている。

<sup>64</sup> サンパウロ州にあるオランブラは、戦後オランダ人が入植してできた町である。今もなおオランダの街並みが残っており観光客も多く訪れる。1960年にオランブラ農協が創立し2010年現在も組合活動が盛んなことで知られている。

<sup>65</sup> 「JICA 先進地農業研修」『組合広報 Jornal Camta』No. 84、1994年3月8日。

り仕事に対して、そしてもっと大袈裟に言えば、当人の人生の在り方にさえも影響を与えるものであると確信する。

私も1986年にはじめて訪日したおり、組合の経費で東南アジアのピメンタ生産地を歩かせてもらったことがある。この旅行はピメンタ栽培者として私の一生の念願であったし、人生をかけて取り組んできた同じ作物を遥かインドやインドネシアの彼方で見たときの感激は、今でも忘れることはできない。以後、誰からどんなことを言われようがこの機会を与えてくれた組合には決して背を向けるようなことはできない。この旅行の私に与えてくれた影響はそれほどまでに大きかったのである。(中略)この種の旅行への参加には人生の黄昏を迎えた年齢ではすでに遅すぎる。今からどんどん増産できる若い人に行ってもらってこそ意味がある。この種の投資も否、これこそ、組合には勿論、本人にとっても、一番大切な先行投資ではなかろうか。財政が許そうが許すまいが(多少、言い過ぎかもしれないが…)、無理してでも、一人でも多くの組合員をよその強敵と合わせてやりたいと思っている<sup>66</sup>。

以上の文章から、峰下は自分自身がCAMTAの研修を通じて学んだことの意義やその価値を認識していたと言える。また、研修の意義を分かっているからこそ、経費が発生しようともトメアスーの青年らが育つためにこうした研修を継続する必要があると述べているのである。

CAMTAの教育委員会は、上記の研修で組合青年部から指摘されていた営農指導にも力を入れている。例えば、1986年3月に発刊された『トメアスー組合だより』によれば、教育委員会は1986年3月11日、12日にわたり外部講師を招いて接ぎ木講習をおこなっている<sup>67</sup>。1987年には営農相談巡回指導が開始された。当時から農事部の技師として働いていた小早川利次(1914-1995)による営農相談巡回指導への貢献は特筆すべきであろう。サンパウロの農薬会社で働いていた小早川利次は、坂口陞に招かれ1982年から1994年まで組合の農事部で働いた。彼はジッコ先生の愛称で組合農家から親しまれ、毎日組合農家の圃場をみて営農指導に従事した。

そんな小早川は『トメアスー組合だより』の1987年11月30日(No. 38)、同年12月30日(No. 40)、1988年1月30日(No. 41)に「熱帯農業を考える」というテーマで彼の考える熱帯農業について整理している。そこで小早川は「大規模な焼畑や小規模だとしても自然休閑期間の短い焼畑などは地力を低下させる一方となり略奪農業となる」、「熱帯の生態系は微妙なバランスによって維持されており、ひとつの要因が欠けても生態系が崩れる恐れがある」、ゆえに「土壌の肥沃度を保ち、特に有機物を補給する必要がある、化学成分と共に土地の改善を計らなければならない。裸地を続けることは劣悪化にスピードをつけることで、林木農業が必要である」としている。その過程として「伐採、短期作を1～2作続いて林木農業にもっていくことであり、この場合植被を維持するために混作(ゴムやカカオ、胡椒、アブラヤシ)または緑肥を植えることが大切であろう」として「材木としての作物、それに混植する作物、

<sup>66</sup> 峰下興三郎「強敵と会わせたい」『組合広報 Jornal Camta』No. 70、1992年12月3日。

<sup>67</sup> 第一トメアスーからは30人、第二トメアスーからは17人の参加者があり、特に女性(婦人)の参加が多かった。(「婦人も多数参加接木講習会開く」『トメアスー組合だより』No. 19 1986年3月20日。)

地表を覆う植物の選定、その栽植方法をそれぞれ探究し、自己の規模を考えて営農すべきであろう」<sup>68</sup>と述べている。この「熱帯農業を考える」は合計13回の連載を数え1990年2月28日（No. 56）の『トメアスー組合だより』まで続いた。これらの投稿に一貫しているのは、土壌づくりとそのための混作/混植林の必要性和、生態系をよく把握するために原生林から学ぶことの必要性、そして「その地形、耕土の深さ、管理のし易さ、いずれ草生栽培か緑肥を混作する前から考えておくべきでしょう。永年作は十分に良く考えてから着手して下さい」と農家自身が圃場や家族形態等を丁寧に踏まえたうえで営農する必要性を強調して述べている<sup>69</sup>。

小早川は組合員の農業技術の向上に努力したが、中でも教育委員会の傘下に創設された農産物加工委員会の活動も興味深い。本委員会は小早川技師と当時組合の理事だった坂口陸、室井洋、高松寿彦、渡辺勝利、そして、その他に上森夫人、横山夫人の2名の計7名で構成され、①地域の特産物を原料とする新加工品の研究開発、②地域の伝統的加工物や一部の農家でおこなわれているがまだ一般的には知られていない加工調理方法の発掘と改良研究、③すでに世界で広く行われている一般的加工技術を含め上記の活動により得られた技術を組合員家族全員が学ぶための情報提供及び講習会・品評会開催等の企画の実現、④加工品に関する市場調査、包装、一連のマーケティングの研究開発を行う目的で1987年に設立された。本委員会の特徴としては、Yamadaも論じるように組合員だけでなくその家族をも巻き込んで設立した点である<sup>70</sup>。

高松寿彦はこうした加工品に対する取組みを踏まえて「まず家庭の食生活の向上、余った農産物の利用を考えて研究し、その中で商品化できるものが出たら中間工業試験を行い、付加価値を高めてその利潤を生産者に還元」する狙いを持っていると述べている<sup>71</sup>。主な加工品の研究対象には、胡椒、パッションフルーツ、カカオ、クプアスー、グラビオオーラ (*Graviola; Annona muricata*)、アセロラが選ばれ、ジャムやゼリー、ジュース等の加工方法を視野にいれていた。同年9月には小早川らがEMBRAPAへ赴き農産加工の専門家らから指導を仰ぐなどして加工品についての2日間の研修も実施している<sup>72</sup>。また小早川は1987年2月11日、12日に「掘り出し調査」にも取り組んでいる。これは組合員の圃場へと出かけカカオやクプアスーの抗病種や多収穫種を探す調査であった。こうした調査を通じて良い品種の発見だけでなく、接ぎ木等の技術の普及も併せておこなっている<sup>73</sup>。

こうしてCAMTAの農事部でトメアスーの農業の発展に寄与しようとした小早川であったが、アセロラ (*Acerola; Malphigia glabra*) の開発研究に取り組み、後にブラジル全土に広まるInada種を発見

<sup>68</sup> 小早川利次「熱帯農業を考える③」『トメアスー組合だより』No. 41、1988年1月30日。

<sup>69</sup> 小早川利次「熱帯農業を考える 13」『トメアスー組合だより』No. 56、1990年2月28日。

<sup>70</sup> Masaaki Yamada、同上、1999、p. 403。

<sup>71</sup> 高松寿彦「農産加工部門の振興を！農産加工委員会の発足に当たり」『トメアスー組合だより』No. 32、1987年4月30日

<sup>72</sup> 小早川利次「加工委員会だより EMBRAPA での研修報告」『トメアスー組合だより』No. 37、1987年9月30日。

<sup>73</sup> 「第一回掘り出し調査」『トメアスーだより』No. 33、1987年5月31日。

した組合員の稲田洋一も、筆者に「小早川さんが研究場の帰りに家によりカフェを飲んで色々とお話を聞かせてくれた。小早川さんは私の先生である」と述べている<sup>74</sup>。

1994年から組合は新体制となり、教育委員会及び企画担当理事を高松寿彦が担当することとなった。委員会時代の業務は、婦人部や青年部活動の誘導や長期目標達成のための組合運営に係る短中期計画の立案などである。この当時も教育委員会主催の農場研修等を度々実施している<sup>75</sup>。そのなかでも特筆すべきは、青年による農場訪問事業である。例えば、夏休み期間中に帰省している青年らを集め、トメアスーで活躍している農家（小長野道則、峰下コウシ、鈴木エルネスト）らの農園を訪問し、農業の実情理解や農業の魅力を伝える活動をおこなっている<sup>76</sup>。また、教育委員会と増産委員会共催で、組合員向けの見本農場見学等もおこなっている。1995年5月16日におこなわれた農場見学では、参加者が30～40代の青年組合員や後継者がほとんどを占め、28名もが参加しそれぞれの優良な成果を出している農場を巡ったという<sup>77</sup>。このころから日系2世ないしは3世が主役になることを考え、組合が発刊する情報誌も以前以上にポルトガル語に翻訳され始めている。

経営危機に瀕していた1996年に教育委員は一旦廃止されるが、2000年に営農指導教育社会委員会（CATES ; Comitê de Assistência Técnica, Educacional e Social）の名で改めて動き出している。2003年に営農指導教育社会委員会の理事として小長野道則が就任し、その傘下に入る農事部（ATEA ; Assistência Técnica Agrícola）に2002年11月からサンパウロ大学農学部でアグロフォレストリーや有機農業について学んだ高松ジャイルソン（Jailson Akihiro Takamatsu）が農業技師として働き始めて以降、土壌分析や葉分析などによる新しい施肥技術が導入されている。2010年現在の農事部には小長野と高松の2名以外に3名のアシスタント（農業高校卒以上（ブラジルではテクニコと呼ばれる））がいた。

2010年現在は「ヂーア・デ・カンポ（Dia de Campo）」（圃場の日）という圃場見学会を農事部が定期的実施している。この取り組みでは、CAMTAの農業技師や他の組合員らと共に組合員の圃場へ出かけそこで果樹の選定方法や農薬散布の仕方を農業技師が教える。ただし、新しく雇われたテクニコのなかには農業・営農経験が浅いものもいるため、組合員が自らの経験にもとづいて彼らにカカオの選定方法や施肥の仕方といった営農指導を実施したりもしていた。この圃場見学会は単なる営農に関する情報共有に限らず、トメアスーでも遠方に住み頻繁に会うことのできない農家らの交流の場にもなっている<sup>78</sup>。

---

<sup>74</sup> 2010年12月10日のインタビューより。

<sup>75</sup> 例えば、1994年5月30、31日に「有畜化による有機農法と高反収農業を学ぶ」ことを目的として実施した郊外農場研修等がある（「有意義だった郊外農場研修」『Jornal Camta』1994年6月14日）。

<sup>76</sup> 「若者たち村を巡る」『Jornal Camta』1994年8月10日。

<sup>77</sup> 「盛況だった農場見学」『Jornal Camta』1995年5月。

<sup>78</sup> 2010年11月11日に筆者が圃場見学会に参加した際、興味深い出来事があった。ある日系農家が農業技師から「台地でのカカオとアサイの混植は良くない」と以前に指摘されたので、言われた通りにアサイを伐採したという。するとその翌年にはアサイの価格が高騰し、尚且つ他の組合員のアサイとカカオの混植が上手くいき非常に多く収穫できたということで筆者に不満をもらしていたのだ。他にも「農業技師の指導が良くない」や「CAMTAの農業技師らは私の圃場を見て説明することが皆違う。誰を信じて良いのか分からない」というような意見もトメアスーに滞在した際にしばしば耳にした。これらの事

### (3) 指導者による教育とその思想（平賀練吉）

トメアスーの地域づくりや、アグロフォレストリー農法に影響・寄与したと考えられる1人が平賀練吉(1902-1985)である。平賀は1902年に阪急電鉄初代社長・鐘紡重役の平賀敏の四男として大阪市に生まれる。東京帝国大学農学部林学科の駒場農学校を卒業後、農林省に入省する。しかし、父親の勧めもあり、五反田貴己が1929年に設立した独身青年の海外雄飛を目的とする「大阪YMCA海外協会」主催のアマゾン開発青年団の副団長として、1931年パラ州モンテ・アレグレ植民地に団員47名とともに入植する。入植当初は主に綿花を栽培していたが米の値段が安価だったこともあり、団長を排斥する運動が発生し団員は各地に散っていった。また、タバコや麻の栽培をおこなってもいたが、成果を出すことはなかった。そこで、南米拓殖株式会社（南拓）は1935年に同植民地を閉鎖したが、副団長であった平賀は他の団員2名と共に同地に残った<sup>79</sup>。このあいだに農耕から牧畜へと手がけ収益をあげられるようになった平賀はすべての団員に資材を譲り渡しベレンへと移り住む。その結果を知ったコンデ・コマは平賀の経験や人柄を見込み、農業技師としてトメアスーへ赴任するよう要請し、1939年当時465名もの退耕者を出していた年に平賀は妻の清子とトメアスーへ再移住する。

第二次世界大戦中は、平賀練吉はポルトガル語ができたことからCETAに勤務し、1945年8月15日の日本の敗戦は平賀から植民地に住む人びとへ伝えられたという<sup>80</sup>。平賀は1951年から1957年のあいだCAMTAの理事長を務め、1958年からは相談役、1970年には顧問相談役となる。1956、1957年に胡椒価格が暴落した際には平賀が胡椒に関する抜本的な調査を進め、胡椒の値動きが14年ぐらいの周期で動いていることを明らかにしている<sup>81</sup>。1959年11月8日のトメアスー植民地開拓30年祭では、祭典の総裁を務めている。また、平賀は1950年代のトメアスーにおいては、夫妻で当時の結婚の仲人も担当していたとう<sup>82</sup>。こうした平賀に対する信頼はトメアスー内外でも大変大きいものだったといえる<sup>8384</sup>。1957年にトメアス

---

例は小早川や平賀らが伝えようとしていた「自然を観察し自らで考え営農することの重要性」とは相反するものだろう。

<sup>79</sup> 当時平賀は入植地で「二十五町歩の土地を利用して作物の面白い研究をしている。」という記述が残っている。（「移民および植民(19-065)」『時事新報』1933年12月23日（神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫））。

<sup>80</sup> 泉晴一・斎藤廣志、同上、1954、p. 119。

<sup>81</sup> 角田房子、同上、1976、p. 208。

<sup>82</sup> 泉晴一・斎藤廣志、同上、1954、pp. 148-149。

<sup>83</sup> 西藤雅夫がトメアスーに調査で訪問した際には平賀がトメアスーを案内し、トメアスーの組合の問題点を西藤と議論している（西藤雅夫「アマゾンにおけるアヴィアードと産業組合（〈特集〉経済学）」滋賀大学経済学会『彦根論叢』1961、p. 144）。

<sup>84</sup> 日本海外協会連合会や後の海外移住事業等の関係者でいえば、上村昌司は「1960年12月、海協連アマゾン支部に赴任するに当たって、現地からの報告など資料を読みながら、この方には是非現地でご指導を仰ぎたいと思ったのが平賀練吉先生でした」（上村昌司「娘の生まれ故郷トメアスー」トメアスー開拓70周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して』2009、p. 125）と述べている。また、柴田剛も平賀が終生トメアスーの発展を願い、指導者・教育者として取り組んできた功績を称えている（柴田剛「平賀練吉青年の渡伯出航前夜の亡父追懷録を読む」トメアスー開拓70周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して』2009、p. 130）。また、後述するが『アマゾンの自然と調和して』

一を訪問した渋沢敬三は、平賀について「円満な人格と学識はトメアスの各位の間に入ってリンファ液の作用をしている」と評している<sup>85</sup>。

平賀はトメアスーの農業分野で大きな影響を与えている。例えば、1959年3月16日から17日にかけてベレン総領事館会議室で行われた日本海外協会連合会アマゾン支部による「第2回海協連アマゾン支部指導員連絡協議会」にもオブザーバーとして参加しているが<sup>86</sup>、協議会の議事録によれば平賀は以下のように発言している。

どうやら今食べて行けるという点ではどの植民地も同じである。しかも今日の大きな関心は永年作物であって、現状に於ては1～2植民地を除いてはゴムが良いことは間違いない。各個人に考え方があるのだから、色々とだまっておくことだ。良いものが発見されれば我々も止めても植付けを初めるものだ<sup>87</sup>。

つまり、他のアマゾンの植民地の植付け状況を踏まえ、永年作物、主要作物を選ぶ必要性をあげている。また、同様の会議で以下のような発言もしている。

人口密度が疎である地方に入って、食料増産に努めることは限度がある。そこで少量で輸送が便利で、価格のあるものを栽培せねばならぬ。目下はピメンタが良いと考える。そこで永年作物は何が良いかということになるが、まだ手探りの状態である。色々と試作して見なければならぬ。しかしこれらを慎重にやらねば、一回販売するともうそれは駄目だと考えて非常に危険である。土地の選定も大切であるが、有機質を絶えず混入して土地を肥やすことが大切である。どんな良い土地でも4、5年すれば地力が衰えて肥料がいる様に成る。このため各地とも緑肥の研究はもちろん、有畜農業に移る様に指導せねばならぬ。金肥を使用することは採算が取れぬだろう。そのために油脂用作物、香辛料等の栽培を研究することが有利であると信じている（後略）<sup>88</sup>。

こうしてみると平賀は一定の土地に根をはり農業を営み続けるための「土づくり」の重要性を訴えていたと言えるだろう。平賀はアマゾン地域における日系ブラジル人の農業発展への貢献が称えられ、1969年には山本喜誉司賞を受賞している<sup>89</sup>。1970年には、CAMTAに教育委員会創設し顧問に就任し1971

---

における南部尚や伊藤民雄らの寄稿文を踏まえても、平賀が移住者へ与えた影響を読み取ることができる（トメアスー開拓70周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して』2009、pp. 137-139）。

<sup>85</sup> 渋沢史料館『企画展図録 日本人を南米に発展せしむ 日本人のブラジル移住と渋沢栄一』2008、p. 32。

<sup>86</sup> 日本海外協会連合会アマゾン支部「第二回海協連アマゾン支部指導員連絡協議会議事録」1959、p. 5。

<sup>87</sup> 日本海外協会連合会アマゾン支部、同上、1959、p. 11。

<sup>88</sup> 日本海外協会連合会アマゾン支部、同上、1959、pp. 23-24。

<sup>89</sup> 山本喜誉司（1892-1963）は、日系ブラジル人社会で活躍した農業家である。三菱に入社後、1926年に来伯し三菱の管理する東山農場でコーヒー栽培や農場の経営等に従事した。コーヒー害虫駆除に有効

年には農事部に勤務していた農業技師が病に倒れ仕事を継続することができなくなったことから、農事部の責任者となる。また、1971年には日本文化に寄与した功績が讃えられ吉川英治賞を受賞している。1974年の入植45周年記念祭典では、開拓功労章も受章、1979年に開催されたトメアスー入植50周年記念祭では副総裁としての任務を任されている。

こうした平賀が1971年6月12日の『トメアスー』に寄稿した「或る反省」と題する記事は特筆すべきであろう。平賀は、当時のトメアスーで1世の2世批判によって生じていた1世と2世の断絶に対して以下のように発言している。

一世がしっかりとトメアスーの土地に根ざして、子弟にそれが感じられると、二世もトメアスーに関心がつよくなるでしょう。何か良いことがあればそれに移って行く。後々良くなったらそれに頼れると子弟を他地方へ進出される一世の気持ちが二世の都会へ行きたい気持ちをさらにつくるのではないだろうか。我々移住者、ことに開拓殖民地では人材がないのが一番困るので、我々の理想郷現出には、少しでも多くの人々を集めねばならぬのです。理想郷現出を望むならば、トメアスーの土地を愛し、すべてをこれに捧げ、不測のものは協同してこのトメアスーに創造していく一世の確固たる気持ちがあるのではないかと私は思う<sup>90</sup>。

つまり、平賀はトメアスーの地域づくりのため、若手の育成を念頭に置いた発言をしているのである。平賀は海外移住事業団ベレン市部の主催でアマゾン入植者を対象にした「青少年営農訓練講習会」には、前述したとおり1回目の1960年から参加し、2回目からは通訳として講習会を補助する側にまわっている<sup>91</sup>。平賀は通訳・翻訳業務を多数担っており、例えば1975年6月6日の『トメアスー』には、ACARIPAPRA（農村信用救助協会）講習会文献から「カカオ栽培法」としてカカオの栽培方法や施肥方法、土壌の在り方、カカオの病気、収穫後の乾燥方法等も整理し寄稿している<sup>92</sup>。同年12月27日の『トメアスー』には、ACARIPARAトメアスー出張所の農業技師と国際協力事業団の懇談会に同席した際に胡椒やカカオ、ゴムの栽培方法に関する資料を入手し、その概略を「懇談会に同席して」と題して翻訳し寄稿している

---

なウガンダ蜂の研究で東京大学から農学博士号を得ている。1954年にはサンパウロ市創設400年祭協力委員会委員長としてイビラプエラ公園に日本館を建設し、1955年にはサンパウロ日本文化協会を設立した。1965年から日系ブラジル人の農業分野における功労者を称える山本喜誉司賞が創設される。山本喜誉司やその受賞者については、山本喜誉司記念誌編集委員会編『山本喜誉司賞の歩み：ブラジル日本移民100周年記念/ブラジル農業発展に貢献してきた先駆者達』ブラジル日本文化福祉協会山本喜誉司賞選考委員会、2009に詳しい。

<sup>90</sup> 平賀練吉「或る反省」『トメアスー』No. 35、1971年6月12日。

<sup>91</sup> 第1回の農事講習会に参加した上村は「第1回の講習会は平賀練吉氏のご指導、トメアスー視察における大変なご配慮を頂いた。平賀氏には第2回以降、北泊農研講師の通訳にも当たって頂いたことも記して感謝しておきたい。」と述べている。上村の論文には平賀の名前だけこうして書かれていることから、平賀の対応は記憶に残るものだったということが推測できる。（上村昌司「アマゾンにおける営農指導について－上村延太郎氏の功績とその背景－」国際協力事業団『移住研究』No. 21、1984、pp. 38）。

<sup>92</sup> 平賀練吉「カカオ栽培法」『トメアスー』No. 54、1975年6月6日。



<sup>93</sup>。他にもポルトガル語で書かれた農薬の使用方法を農家らへ説明していたようである<sup>94</sup>。1975年4月1日『トメアスー』では平賀は「ピメンタ栽培に関する一考察」として寄稿し、日本から来ていた専門家からの意見も交えながら、アマゾンでの農業の基本は「土づくり」であること、熱帯の土壌は破壊されやすいことを踏まえ、以下のように述べている。

土地の休閑輪作を考え、腐植集積方法を考え、自然の平衡を破らぬ形を考えて、耕地を動かない形態とするときは永年作物の随時増加が財産として残り、又立派な設備も可能となり、農家の生活を向上させる住居の改善もおこなわれて楽しい農業生活にいそしむことが出来るでしょう（中略）。押切理事長宅にある胡椒樹は、もう三十何年生です。今も三キロ半の実が取れると言います。庭の除草、ゴミ胡椒調整の滓が山に与えられており特別に化学肥料はやられておりません。かく自然は私たちに示してくれております。私はいつも感謝をこめてこの樹を眺めております<sup>95</sup>。

このようにして平賀は、自らが本や論文、講習会などで学び知ったことを『緑風』や『トメアスー』などの広報誌に多く寄稿している。1971年3月15日の『緑風』では、海外移住事業団主催農業講習会の平賀がとった「メモ」が「アマゾン土壌の性質」として取り上げられている<sup>96</sup>。また、『トメアスー』1976年4月24日でも「「土壌の肥沃度」に関する読書メモ」として、「土地が死ぬと、人は農薬だ、NだPだKだと施してますます栽培条件を悪化させる、土地はいきている、この土づくりを第一番にして土地を生かさねばならない」とも述べている<sup>97</sup>。

1975年8月1日の『トメアスー』では、「墓建立に思う」という題名で寄稿している。その内容は、アマゾン開拓の火付け役となった武藤山治、南拓社長の福原八郎、アマゾン開発協会会長、日伯国会議員連盟会長千葉三郎、胡椒の功労者のである臼井牧之助の4名とトメアスーの開拓者戦没碑建立を何とか実現したいというものである。ただし、特筆すべきは文末に有吉佐和子の『複合汚染』を引用した上で以下のように述べている点であろう。

インドや東南アジアではその木（パンの木）に胡椒の蔦をからませて、二百年というもの、病虫害で絶滅したことがないんです。ところがブラジルの胡椒栽培では棒杭を土に突きさして胡椒の蔦をまきつかせているので、十五年もすると病虫害やら根腐れ、最近発生と胡椒園が絶滅してしまうんだそうです。

---

<sup>93</sup> 平賀練吉「懇談会に同席して」『トメアスー』No. 59、1975年12月27日。

<sup>94</sup> 2011年11月11日のインタビューより。

<sup>95</sup> 平賀練吉「ピメンタ栽培に関する一考察」『トメアスー』No. 51、1975年4月1日。

<sup>96</sup> 平賀練吉「アマゾン土壌の性質」『緑風』No. 34、1971年3月15日。

<sup>97</sup> 平賀練吉「「土壌の肥沃度」に関する読書メモ」『トメアスー』No. 62、1976年4月24日。

ブラジルでは十五年くらいで胡椒の植えかえ地を求めねばならぬのに、インドは二百年そのままですよ<sup>98</sup>。

そして、胡椒の産地としてトメアスーが永続する道があると感じているとして文章を終えている。以上の平賀の文章を踏まえると、胡椒の裸地栽培の課題や胡椒の病害によって強いられるジプシー農業への疑問、また環境問題への関心等が想像できる。

CAMTA の理事を 83 年から 96 年まで務め 84 年から 90 年まで教育委員として後継者育成に務めた戦後移民である南部尚は、トメアスー開拓 70 周年記念誌『アマゾンの自然と調和して』（2009）の投稿文「平賀練吉御夫妻との思い出」で平賀から教わったことを、①百姓の本分は自給自足であり、余ったものを換金するように心掛ける、②アマゾンの土地には裸地栽培は良くないので被覆植物を植えることが大事である。休閑地を設け窒素固定のための緑肥としてのネットイクズ (*Pueraria*; *Pueraria phaseoloides*) を植え、計画的な輪作体制を心掛け土地の有効利用が必要、③世界相場を左右するだけの 2 万 t の胡椒生産の必要の 3 つあげている<sup>99</sup>。

1964 年に平賀のもとへ移住した伊藤民雄も『アマゾンの自然と調和して』（2009）の「平賀練吉御夫妻との出会い」と題する文の中で平賀夫妻を回想している。伊藤によれば、平賀は戦争中焼き打ちにあり全財産を略奪され人生観が変わったと常々言っていたという。そして、物にこだわらず必要な物は必ず与えられるという信念のもとに自分のことは後回しにしてでも多くの人の世話や相談に明け暮れる毎日だったという<sup>100</sup>。

トメアスーで特にカカオ生産に力をいれている第二トメアスーに住む高橋ジョルジは 2011 年 10 月の時点で現在 43ha の圃場にカカオと約 20 種類以上の高木樹種を混植し栽培している。彼は、多様な樹種を混植しているその理由について「近所に住んでいた平賀が常々「自然が全てを教えてくれるから」と言っていたのをうけて、できるだけ自然に近いかたちで営農していると説明してくれた<sup>101</sup>。

第二トメアスーに住む笹原富雄はアグロフォレストリー・植林を熱心に取り組む日系農家の 1 人である。1987 年 2 月 28 日の『トメアスー組合だより』には、自らが目指す農業を「カカオやフレイジョ、ブラジルナッツノキ、ゴムの植林に力を入れ、その廻りにバクリ (*Bacuri*; *Platonia insignis*)、ウシ

<sup>98</sup> 平賀練吉「墓建立に思う」『トメアスー』No. 56、1975 年 8 月 1 日。

<sup>99</sup> 南部尚「平賀練吉御夫妻との思い出」トメアスー開拓 70 周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して トメアスー開拓 70 周年記念誌』トメアスー文化協会、2009、pp. 138-139。

<sup>100</sup> 伊藤民雄「平賀練吉御夫妻との出会い」トメアスー開拓 70 周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して トメアスー開拓 70 周年記念誌』トメアスー文化協会、2009、pp. 136-137。

<sup>101</sup> 2011 年 10 月 27 日のインタビューより。

(Uxi; *Endopleura uxi*) の木等自然にある果物をうまく混植させた立体的栽培農業」だと述べている<sup>102</sup>。こうした彼の営農方法について、笹原は平賀から植林の重要性を学んだからだと度々話している<sup>103</sup>。

笹原は2010年現在もおアグロフォレストリーを実践している。例えば、カカオとブラジルナッツの組み合わせに関して「植付け間隔の問題もあるが、ブラジルナッツの木は乾燥期において水分を多く吸収してしまうためカカオと競合し良くない。また、ブラジルナッツの収穫期にはカカオの手入れを行っているときに非常に硬い外殻に包まれたブラジルナッツが上空から落ちてくるので危ない。したがってこの組み合わせは良くない。分かるのに40年かかった。」と筆者とのインタビューで述べている<sup>104</sup>。2010年現在はマメ科の高木樹種で薬木にもなるコパイバ (*Copaíba*; *Copaifera langsdorfii*) や薬木のスクウバ (*Scuuba*; *Plumeria sucuuba*) 等を積極的に植栽している。

つまり、平賀はアマゾンの大地に根を張る定住型農業がどうしても実践できるかを思考の基軸に自らも学び続けながら営農指導を進めていった。彼が関わった講習会や組合での営農、日常生活での対話などのノンフォーマルな教育を通じて、トメアスの日系農家は平賀から学んでいたと言えるだろう。したがって、こうした平賀の立ち振る舞いや農業に関する考え方は、トメアスの農家や日本から来伯した移住支援機関や研究者らにも影響を与えていたことが理解できる。

## 第5節 終わりに

本章では、ブラジルの法定アマゾン領における日本人移民の歴史と営農変遷をたどった後、今日注目されているトメアスのアグロフォレストリーの形成に至った歴史的経緯を整理した。次に、トメアスにおけるアグロフォレストリーをめぐる現状をカカオとアサイー、そしてデンドの作物に焦点をあてて現状理解をすすめた。また、トメアスのアグロフォレストリーは日系移民に限定されることなく、トメアス等の非日系のブラジル人小農家へ普及されていることも明らかにした。そして最後に、移住支援団体とCAMTAの教育委員会の活動や、指導者としての平賀練吉の教育やその思想的背景から、トメアスの日系移民のあいだで取り組まれた主要なノンフォーマル教育の実践を明らかにした。

取り上げた事例を通じて理解できることは、まずどの教育実践もトメアスで安定した生活を営むにはどうしてもよいのかを希求した営為であった。それは後継者育成や子弟教育についても同様のことが指摘できるだろう。つまり、農業者や若者を「いま・ここ」から引き離すのではなく、トメアスを故郷として根をはることを可能にする営農や、そのための技術習得を目的とした教育だったのである。

仁科雅夫は日系人のアマゾン農業への貢献について「単に新規作物を開発したということよりも、基本的に、外国人移住者がよく成し得なかったアマゾンにおける定着農業＝家族を単位とした定着農業＝を興したことであり、当時の市場など社会経済的環境から何とかして有利な換金作物を開発しなければ

<sup>102</sup> 『トメアス組合だより』『組合員訪問 立体的栽培に挑む 笹原富雄さん』No. 30、1987年2月28日。

<sup>103</sup> Masaaki Yamada、同上、1999、pp. 449-450。

<sup>104</sup> 2011年11月11日のインタビューより。

ならない必要から苦心の結果、ジュート、ピメンタが生まれたと言えよう。」と述べている<sup>105</sup>。この発言からも推測できる通り、まさにそうした定着農業を実現可能にするためのノンフォーマル教育だったと言える。

なお、戦後に日本からの移民政策が再開したさいには多くの戦前移民は新移民をコロノ（契約労働者）として雇い、彼らが独立するときには胡椒の苗や肥料を分けるなどして手助けしている<sup>106</sup>。戦前移民の援助が絶大であったことは戦後移住者が無資本で独立したにも拘わらず短期間で経営規模を拡大し大きく成長できたひとつの理由としても論じられている<sup>107</sup>。こうした行為については、日本人移民同士だけのあいだではなく日系農家が非日系ブラジル人の農家の独立を助けている例としても多く見られる。例えば、筆者が2010年10月18日から11月22日にかけてクワルタ・ヘジオン（Quarta Região）小農家協会（Associação dos Mini e Pequenos Produtores Rurais da 4ª. Região）の非日系のブラジル人小農家13名におこなった聞き取り調査では、分かっただけでもそのうちの11名は日系移民の農場で働いた経験を有していた。そのなかには、彼らが農業で独立する際に肥料や苗木を分けてもらったものや日系農家から直接農業方法を指導されたものも多かった。その他にも、現在でもトメアスーで自立農として働いている非日系のブラジル人小農家の多くが「以前日本人の農場で働きそこで農業技術や農園管理を教えてもらった」と証言する<sup>108</sup>。Hommaはトメアスーの日系移民がもたらしたアマゾン農業への貢献として、化学肥料や農業の機械化と、またブラジル人小農家や川べりに住む人びとらへの協同組合の精神や相互扶助などが日系移民から伝播されそれが彼らの日常生活でも見られるようになったことをあげている<sup>109</sup>。つまり、ノンフォーマルな教育活動は、まさに日系移民の圃場において日系移民同士、または日系移民からブラジル人の小農家・労働者へと実践され、それが胡椒栽培と同様に広く他の人びとにも普及していったと考えられる。本章では分析対象となる現存する資料が限定されていたため、移住支援機関や農協などの事例分析にのみ焦点をあてたが、まさにこうした日常生活、特に圃場での「いま・ここ」におけるノンフォーマルな教育実践もまた、トメアスーの農業発展を支える多様の要因の1つであったことが予測できる。

---

<sup>105</sup> 仁科雅夫「導入作物の選定—移住地作物導入上留意すべき事項」国際協力事業団『移住研究』No. 29、1982、p. 104。

<sup>106</sup> 角田房子、同上、1976、p. 205 等を参照。

<sup>107</sup> トメアスー産業組合、同上、1961、p. 50。

<sup>108</sup> 2010年12月2日にCAMTAを訪れたブラジル人小農家のAgenor Nones Marcielは、高橋ジョルジのもとで約1年半働いたが、高橋は非常に細かいひとで、物事をきちっと説明してくれたという。彼のもとの労働は「教育」だったと話している（2010年12月2日のインタビューより）。

<sup>109</sup> Alfredo Kingo Oyama Homma, *A imigração japonesa na Amazônia: sua contribuição ao desenvolvimento agrícola*, Embrapa Amazônia Oriental, 2007 p. 122. 並びに p. 164。

## 第4章 トメアスーの農業発展にみるunlearn

本章では、第1章で明らかにしたunlearnの概要を改めて整理する。次に、これまで日本国内で議論されてきた農業における教育活動や学習に注目する。そして、農家らの自然との対峙や、農民同士の共同学習ではしばしばunlearnが展開していることを仮説的に明示する。次に、トメアスーの3人の日系移民による営農実践やその背景にある農業に対する価値観や思想を紐解きながら、unlearnがトメアスーの農業を発展させる要素の1つであることを実証的に明らかにする。

### 第1節 農業における学習(learn)とunlearn

第1章では、unlearnの特徴として、①現代社会や学校教育等を通じて自分自身が築き上げてきたものの見方や認識、あるいはそれを構成する知識の在り方を批判的に検討する、②それらを再構築するさいには、既存の社会構造によって社会ないしは自己よりも劣位におかれる「他者」との関係性から、自分自らが学びそして変容する学習であることを明らかにすることができた。

そこで本節では、農業における教育や学習に注目したい。例えば『農業の教育力』(1990)は、地域独自の固有の文化を支え、人と自然とが共存するための環境保全機能を有してきた農業の営みが、高度経済成長や列島改造以降押し崩されてきた動きに抗し、農業や農村の教育的価値を提唱したものである。このなかで永田恵十郎は、百姓による農業労働は、自然と社会についての認識を総合的に発展させる機能、換言すれば鋭い自然観察力と科学的知識を持って自らの生活や労働、農業技術などを総合化し生産につなぐ力量形成だとしている<sup>1</sup>。

老農による農法の継承問題をもとに、農法における知識や技術について新たな見地を提供したのは西村卓である。西村は明治農法の確立において、突如として新たな農業技術の確立があったわけではなく、伝統的な自然・植物・労働観などがろ過・淘汰されたことはないということを、坂田式稲作改良法の事例をもとに明らかにした。そして、西村は農業・農法の発展を検討するさいには、近代的「科学性」に依拠するだけでなく、農民や老農たちの伝統に基づく「合理性」や「知恵」について評価する必要性を述べている<sup>2</sup>。

守田志郎は、農法における具体的な知識論やその学習の在り方についても言及している。守田にとっての農法とは、作物と土とそこに働きかける人間の関係や「場」や「空間」を通して成立するものであり、工業的論理の「技術」のように脱文脈的且つ普遍的で、どこでも通用するものではないとしている<sup>3</sup>。また、守田は、農法の記されている農書自体は、そもそも指導書として書き記されていることから、そこから農法の真実を読み解くのは容易ではないとも述べている。

---

<sup>1</sup> 永田恵十郎「自然認識と人間の発達」『農業の教育力 人と自然を活かす道』農山漁村文化協会、1990、p. 191。

<sup>2</sup> 西村卓『「老農時代」の技術と思想』ミネルヴァ書房、1997。

<sup>3</sup> 守田志郎『農法 豊かな農業への接近』(農山漁村文化協会、1972)や『農業にとって技術とはなにか』(東洋経済新報社、1976)。

「作物に働きかける」という営為を学習という視点から考察するうえでは、津野幸人の示唆も興味深い。津野は、作物の個性と能力を見極め最大限に引き出すためには、経験及び観察の経験主義に基づく絶えざる農家の学習（生涯教育）が必要だと述べた<sup>4</sup>。また、「自分の知識は自分自身の居所に適する知識にすぎないから各地について最も適した方法を各人の実験によって見出すべし」という『農業自得』『吉茂遺訓』を書き残した幕末・明治初期の篤農家の田村仁左衛門吉茂の発言に着目し、農家の農業技術がいかに属人的であり、且つ地域の文脈に依拠するものかを論じている<sup>5</sup>。また、盛永俊太郎を引用し、「農学は作物及び家畜と人類との関係の学であり、その関係はそれらが置かれた全、物理的、化学的、並に、生物的の諸環境の総合の中において攻究さる可きものである」と述べている<sup>6</sup>。

阿部謹也が述べた「教養」の育まれ方も示唆に富むだろう。阿部も吉茂が若い時に寺子屋へ行くよう勧められながらもそれを断り、算術の勉強も断って農業一筋に働き、多くの農民との共同作業に従事していることを踏まえ、彼の教養が「多くの農民との付き合いの中でそれらの人々との共同の労働の中で身につけていったものであった」と述べている<sup>7</sup>。つまり、吉茂は農業と向き合い他者との協働を図りながら自らの教養を獲得していったのだ。朝岡幸彦は吉茂の事例を踏まえ、かつての地域社会においては、学習や教育が社会的機能として十分に自立しておらず、学校という社会装置が知を独占していなかったがゆえに「学び返し」「教え返す」ことが当たり前であり、それだけ「まなびほぐす」チャンスも多かったであろうと述べている<sup>8</sup>。

これまで概観した農業や農法には、農作物や土を観察し、自らの頭で考えそれらの特徴等を読み解き働きかけるという過程があり、まさにそれは農民による学習活動だと言えるだろう。農業においては、しばしば社会的に絶対視され、優位なものと考えられがちな学校で学ぶような脱文脈化された知識についても、無批判に享受するだけでは営農は困難であると言える。なぜなら、農業そのものが先祖から継承してきた伝統的な知識や技能、その土地や地域の風土、その時々々の天候、営農する農家の経営状態（家族構成等）、そして農家が対峙する作物に大きく依存するため、個別的・文脈的な特色を持つものだからである。つまり、農業においては、近代科学に基づく知識を自ら学びほぐす必要性が常に存在することになる。

また、営農という範疇においては、しばしば農民同士の共同作業や相互扶助、交流・学習も重要となる。その際には、営農技術や営農実績に重きが置かれるため、学歴や肌の色、出自、性別、社会的地位等の既存の社会によってしばしば分断線が引かれ、且つそこに優劣、階層関係が生起する社会的な関係性を乗り越える契機も多数存在していると言える。

---

<sup>4</sup> 津野幸人『農学の思想』農山漁村文化協会、1980、p. 192。

<sup>5</sup> 津野幸人、同上、1980、p. 148。

<sup>6</sup> 津野幸人、同上、1980、p. 135。

<sup>7</sup> 阿部謹也『「教養」とは何か』講談社、1997、p. 46。

<sup>8</sup> 朝岡幸彦、酒井佑輔「〈ローカルな知〉と unlearn 概念に関する考察：鈴木敏正「地域創造教育」論を手がかりとして（鈴木敏正教授退職記念号）」北海道大学大学院教育学研究院『北海道大学大学院教育学研究院紀要』2012、p. 36。

以上の農業における教育や学習に着目すると、第1章で明らかにしたunlearnの構成要素が見られる。したがって、本節ではブラジルトメアスーの農業の発展に寄与した3人の農家の生涯や彼らの実践ないしはその背景にある考え方に注目することで、第1章で述べたunlearnについて実証的に明らかにする。

なお、本章では、unlearnにおける劣位に置かれた「他者」を暫定的に非日系ブラジル人、特にアマゾンに住む小農家 (mini-produtor) や先住民 (indígena, índio) やカボクロ (caboclo)、川べりに住む人びと (ribeirinho) 等と表象・命名される人びととする。第2章でも明らかにしたように、ブラジル全土は勿論のこと特にアマゾンの日系移民のあいだでは、上記のブラジル人は日本人より文化・社会的に劣位にあるという認識がしばしばなされてきた。2000年ごろからは日系ブラジル人の2世や3世という世代がトメアスー地域社会の中心となり、ブラジル人とも交流を深めながら地域での経済・地域活動に取り組んでいるため、そうした日系対非日系といった属性による分断線とそれに基づく優劣の関係性は消滅傾向にあると推察できる<sup>9</sup>。しかしながら、トメアスーにおいて農園を運営・管理するのはたいてい日系ブラジル人であり、その農園で労働者として働くのが学校に通うことができなかった低所得のブラジル人という雇用関係は現在もなお広く一般的である。

また、日系ブラジル人は艱難辛苦を経て胡椒栽培や定住型農業でも成功し、一定程度の経済的基盤を構築することができた。近年では入国管理法改正に伴い日本に出稼ぎをして資本を蓄積することも可能となっている。第3章でも述べたように、日系ブラジル人には日本政府からの経済的支援や技術協力、研修などの教育機会も幅広く提供されてきた。このようなアマゾントメアスーに住む日系移民とそうではないブラジル人との関係性を考察するとき、両者のあいだで社会・経済的な差異に基づく分断が生じしやすいのはある種当然だと言えるだろう。また、そうした違いが文化・社会的な関係性において優劣などの二分法的思考を強化しやすいことも推測できるだろう。以上のトメアスーの社会的背景を踏まえ、本章では「他者」を上記のように暫定的に設定したうえで、日系人によるunlearnの具体的な内実とその実証的研究を進めることにしたい。

## 第2節 平賀練吉によるunlearn

トメアスーの農業発展におけるunlearnを理解するうえで、前章で取り上げた平賀練吉による発言に注目したい。なぜなら、前章でも明らかにした通り、平賀はトメアスーの指導者的存在であり、その影響力はトメアスーの日本人移民にとって絶大なものだったと考えられるからである。そんな彼のアマゾンにおける農業観や戦前・戦後と多くの日本人にとって劣位とみなされていたカボクロ (caboclo) に対する認識がよく理解できるのは、彼が『アマゾンの自然と社会』（1957、東京大学出版）で担当して

---

<sup>9</sup> それ自体は宮尾進が指摘したサンパウロ州での日系3世や4世のブラジル人への同化・混血化傾向とも親和性があると言えるだろう（宮尾進「ブラジル日系社会の特徴と日伯学園創設の意義」丸山浩明編『ブラジル日本移民百年の奇跡』明石書店、2010、p. 260）。

いる章「アマゾン流域の開発と日本人移民の立場」である。このなかで平賀はアマゾンにおける農業方法やカボクロについて度々言及している。

例えば平賀は、アマゾンは気象、土壌、農作物は一見全て同じように考えられるが、わずかな面積でもそれぞれに違いがあり一言で「アマゾン」と片付けられるわけではないとした。そのうえで、日本人移民が農業を確立するために重要なことを以下のように述べている。

できれば主要地区に試験場を作り、気象予測、作物実験を行って農業指針を与える必要がある。けれども現状では住民は少なく、しかも教育の無い土民からその農業体験をきいて栽培耕作の指針としているが、このような状態のままでは、移民は心細い。マナウス市付近のマナカプルー連邦植民地においてさえ、第1回の移民が米作の不作に希望を失った事実があるが、科学的に進んだ日本移民としてはその地質に適した作物を選ぶか、適した耕作方を求めるよう努力すべきで、アマゾンのカボクロたちが今までやっている方法に従うだけでは満足できない。この移民の指針として、科学的な試験場の資料が是非とも必要であるが、現状ではあっても、同一条件の土地のものではない。生産に関する調査始動組織は全く整備されないままになっているのである<sup>10</sup>。

つまり、平賀によれば、日系移民がブラジルアマゾンで定着し農業で成功する方法としては、科学的思考に基づき適切な農作物を選択しそのための耕作方法を実践することだと言える。また、先住民やカボクロと同様の農業を営んでいるだけでは不十分であり、だからこそ、科学的知見を農家に提供する試験場等が必要ということなのだろう。このように、アマゾンに住むカボクロに関して言及している箇所は他にもある。

河川を唯一の交通機関とするカボクロ住民はその文化水準が低く、大自然に強く影響されており、ブラジル流に言えば植物のように生かされている格好である。産物はほとんど採集自然物といって過言ではなく、めばしい自然物の多い支流へ遡ってその流域をひらいて行く<sup>11</sup>。

カボクロに関する記述は他にもある。

カボクロ土民の栽培法を見ると多く混作であって、1つの輪作のような効能があるが、有利と見てやっているのではなく、むしろ面倒な労力をはぶくのと、なるべく小面積において働きたいから採用して

---

<sup>10</sup> 平賀練吉「アマゾン流域の開発と日本人移民の立場」多田文男編『アマゾンの自然と社会』東京大学出版会、1957、p. 101。

<sup>11</sup> 平賀練吉、同上、1957、p. 103。



いるにすぎない。殆んど耕耘はしない。勿論施肥もしない。植えて草さえ取れば自然に収穫がえられるとしか考えていない原始農といっても良い<sup>12</sup>。

これらの発言から、平賀によるアマゾンに住む先住民ないしはカボクロへの認識を読み取ることができよう。つまり、本稿での平賀によるカボクロとは、文化水準が低くかつ非科学的な農業を営む人びとなのである。当時の平賀の目には、そんな彼らはアマゾンの大自然に生かされているだけの存在として映っていた。したがって、平賀にとって、アマゾンに移住した日本人移民は彼らのようになってはならなかった。つまり、アマゾンを自ら開発し、科学的知見のもと自然環境に全て依存することなく営農していく必要があると考えていた。

ただし、そんな非科学的で自然と一体化したような農業を営むカボクロからも平賀は学んでいた、つまり平賀が彼らからunlearnしていたと理解できる発言もある。

作物にとっては微妙な影響がある。土民はトウモロコシは雨期はじめの最初の大雨に蒔けという。トウモロコシの発芽が地温が高いと良好で地中充分の湿気を要することと合致する。陸稲は雨期に入って十分に土地が潤い地温が下がって、トウモロコシが伸びて植付線目標となってから蒔けという。陸稲が地温の低下と発芽後日でりがつづくと枯れるので、雨が間断なく降る雨期に入ってまくということであるが、これは彼らの経験に学んだ所である。マンジョーカの挿茎を1月のサン・セバスチアンの日に倒木に立てかけると大きなイモがつくという。これも蒔付の適期経験が教えた言い伝えであろう。ワタは米より遅れて播かれるが、タバコとともに収穫期が充分乾燥期に入って品質の良いものがとれるためである<sup>13</sup>。

また、第二次世界大戦後の近代化した日本からアマゾンへ移住する日本人移民に対し、入植後思うようにならず不安に陥ってしまう状況に対しては、以下のように述べている。

先ずその土地で生存するにはどうすればよいかを移民は欲得を離れて知らねばならない。すなわち、その地方農民の食生活を見て自給体制をとる。彼らはそこに生存していたのである。食って生きていく道をまず開けば、日本移民の農業手腕と勤勉は、カボクロ住民の自然に打ちのめされた諦めの生活よりは直ちに上に出る。次の段階でいかにして伸びていくべきか方針を立てることになる。

移民が新天地に安住の永久農業地をつくるのが目標とすれば、その土地に新しい特有の文化をつくる位の抱負を持ち、一度は日本様式を捨て、その土地の良きものと良き日本的なるものから新様式を生

---

<sup>12</sup> 平賀練吉、同上、1957、p. 112。

<sup>13</sup> 平賀練吉、同上、1957、p. 109。

まねばならぬ。われわれの子孫はブラジル人となるのである。ブラジルに永住するなら徒らに日本人的であって排日問題を起こすことがあってはならない<sup>14</sup>。

トメアスーの指導者的立場であった平賀は、日系移民がブラジルアマゾンに根を張り営農することを重要視した。そのため、日本人移民自らが日本で学び培ってきた知識や価値観、営農方法をいったん棄て去り、まずはブラジルアマゾンの文化やまさにそこで暮らすカボクロから学ぶ、つまりunlearnする必要があると説いている<sup>15</sup>。

### 第3節 坂口陞によるunlearn

森林農業の提唱者として知られる坂口陞(1933-2007)は、トメアスーを代表する篤農家の1人であるといえよう。坂口は1933年に和歌山県の山村に生まれ、東京農業大学林学科を卒業後、ゴムの勉強をするため1957年3月に23歳でトメアスー移住地に入植した<sup>16</sup>。同大学が進めた戦後ブラジル移住第1号の「軍艦組」であった<sup>17</sup>。坂口は、1969年からCAMTAの農業担当理事として、約20年間トメアスーの農業の発展に向けて取組んだ。農事部担当理事に就任したときには蔓延していた胡椒の病害によって定住か転住かを悩む農家に対し、定住し生計を立てるための永年作物を探求していた。そこで坂口は、トメアスー入植当初に栽培されていたカカオを胡椒の代替作物として提案し、カカオの再導入・普及と経営の多角化がCAMTAを中心に進められることになる<sup>18</sup>。その後は、自らの営農に対する振り返りを

<sup>14</sup> 平賀練吉、同上、1957、pp. 107-108。

<sup>15</sup> 平賀が「アマゾン流域の開発と日本人移民の立場」を担当した『アマゾンの自然と社会』(1957)に「流動する邦人移住者—パラ州モンテ・アレグレ植民地—」と題した論文を執筆したのは斎藤廣志である。斎藤は、カボクロ住民の文化に同化される現象をカボクロ化現象と論じ、モンテ・アレグレに日本人移民よりも先に裸一貫で入植したスペイン移民はまさにカボクロ化したのだと述べている。そのうえで、それはアマゾン流域の自然環境に支配されたものであり、近代技術をもってしても自然に順応できず、無抵抗にひとしい状態で一方的に同化をとげながらも、「カボクロ文化こそは荒々しい自然に順応し得る方途としてより消極的な態度を、幾世紀かかってつくりあげた、いわばカボクロ住民の智慧であるからである。カボクロ文化が、多くの超自然的な要素を内蔵しているのも、自然に対する武器の1つであったに違いない」と述べている(斎藤廣志「流動する邦人移住者—パラ州モンテ・アレグレ植民地—」多田文男編『アマゾンの自然と社会』東京大学出版会、1957、p. 171)。つまり、本章を読む限りにおいては、斎藤は同様に人類の科学技術も歯が立たない大自然を前に自らが積極的にその大自然に包摂され順応するカボクロ化を評価していると言える。

<sup>16</sup> トメアスー入植のきっかけは、南拓の移住主任で後に東京農業大学の教授となった臼井牧野助の紹介だったという(石丸和人「インタビュー トメアスの坂口陞さんに聞く「アマゾン移住半世紀森林と作物の共生をはかる」」海外日系人協会『海外日系人』第59号、2006、p. 35。)

<sup>17</sup> ブラジル海軍の発注を受けて石川島造船が建造した軍艦に乗りブラジルへと移住したことで「軍艦組」と言われた。他の「軍艦組」としては、常光憲行(1956年農大農学部卒)と木村弘三(1957年農大短大農学部卒)の2名がいる。軍艦組の3名による移住経緯や入植初期の状況については、伯国東京農大会北伯分会「座談会「軍艦組3人、移住生活50年を語る」『東京農大卒業生アマゾン移住50周年記念誌—ゴリラのように逞しく、神のごとき愛と英知を—』(2008、pp. 92-93)を参照。

<sup>18</sup> 胡椒の代替作物としてカカオをやることを決心するまでにはノイローゼ気味になるまで悩んだという。カカオを選んだ理由としては、江畑俊家から「トリニダードにおけるカカオの栽培地調査報告」(吉

通じて元来興味を持っていた植林の重要性を再認識し、毎年1万本を植林していく<sup>20</sup>。晩年には、浄土真宗の法務使としてトメアスー西本願寺代表も務めている<sup>21</sup>。2007年に坂口が亡くなった時には、「植樹院釋浄信」という法名が贈られた。また、トメアスー俳句会のメンバーは坂口の死を追悼する以下のような俳句を多く詠んでおり、坂口による植林や森林農業への貢献が読み取れる<sup>22</sup>。

村興し 緑にかけし 植樹院 (昭子)  
自然農 残し村萌え 植樹院 (山草)  
雨季探し 森林農の 巨匠逝く (牛歩)<sup>23</sup>

坂口はトメアスーで多くの移住者から慕われていた。農業に精通しており、日系移民の多くが坂口から教えを煽っている<sup>24</sup>。1991年には国際協力事業団の短期専門家の委託を受け、ドミニカ共和国胡椒開発計画（1987-1992）の収穫後処理技術指導に参加している<sup>25</sup>。

---

田)と記された冊子との出会いであった。この冊子は南米拓殖会社がトメアスーに入植し始めたころに、農業技師をカリブ海地域に派遣し調査をさせた内容であった。これを読んだ坂口は、胡椒の廃園跡地には何を植えてもよいことに気づき、カカオを選んだという（坂口陞「アマゾン農業と日本の国際協力」友松篤信、桂井宏一朗、岸本修編『増補版 国際農業協力論－国際貢献の課題と展望－』古今書院、1999、p. 225。）。

<sup>19</sup> なお、アグロフォレストリーはしばしば坂口が考えたと言われるが、坂口自身はそれを否定している（石丸和人「インタビュー トメアスの坂口陞さんに聞く「アマゾン移住半世紀森林と作物の共生をはかる」」海外日系人協会『海外日系人』第59号、2006、p. 38。）。

<sup>20</sup> 坂口が1970年代に植林をしていたころ、多くの農家から「『坂口さん、こんな真似したら、あなたの真似したらおれたち食っていけないよ』、「趣味の農業、趣味ならまだいい、その上に『悪』がつく『悪趣味』」と言われたという（石丸和人、同上、2006、p. 40。）

<sup>21</sup> 坂口による植林や自然に対する考え方は、サンパウロのお寺で修行をしている時に「自然法爾」という言葉をきいて学んだ経験といった仏教的な影響もみられる（坂口陞「この森に生かされている」国際協力事業団『海外移住』2000、pp. 2-5。）

<sup>22</sup> トメアスー俳句会は、1963年に吉丸丘南先生に師事した人々が「大河句会」として十数名の会員からスタートした。1960年代の胡椒全盛期には俳句もかなり盛んだったようでベレン領事館まで行き、俳句を詠んだようである（「趣味のグループ」味わいある生活俳句『トメアスー組合だより』No. 29、1987年1月31日）。

<sup>23</sup> 伯国東京農大会北伯分会、同上、2008、p. 41。

<sup>24</sup> 例えば伯国東京農大会北伯分会『東京農大卒業生アマゾン移住50周年記念誌－ゴリラのように逞しく、神のごとき愛と英知を－』（2008）は、東京農業大学からアマゾンへと移住した人びとのアマゾンでの軌跡やアマゾンの文化・社会などをまとめたものである。本書には、坂口から果樹や野菜に関する栽培方法について学んだり叱咤激励を受けたなど、坂口について多くの言及がなされている。

<sup>25</sup> 坂口陞「ドミニカ共和国見聞記」『トメアスー組合だより』No. 60、1991年1月28日。なお、坂口はドミニカ共和国で胡椒の本来の共生植物の特徴を活用した生木栽培（支柱木はマメ科植物のグリリシディア）を発見し、胡椒の支柱を目的とした樹木の伐採が批判されている状況に鑑みると、こうした事例から学ぶことは大いにありと述べている。

坂口をよく知る人物の1人に石橋憲二がいる。石橋は、静岡県の日農協を定年前に退職し、1983年1月から1985年3月までのあいだ国際協力事業団専門家としてアマゾン熱帯農業総合試験場に勤務した。石橋は、坂口が話してくれたことを以下のように記録している。

坂口さんは和歌山県の山村の出身の方だ。移住して十年目に訪日をした時、兄さんがお前の分のつもりで山を買い、杉の植林をしていると言われた。陸さんは隣村にあるという自分の分という山を見に行った。杉はすでに一部に育ちつつあった。家に帰って何気なしに「杉はあれぐらいでいいよ。あとはあのままでいい」という言葉が口をついて出たのだそうだ。陸さんはその時、これといった考えがあつてのことでなく、杉の山と雑木の山を見た感じが口から出てしまったのだという。兄さんは少し気分を損ね、「なんだ、せっかくお前のためにとと思ってやってきたのに。じゃあ、あとはほっとくぞ」と言われた。

それから十年立って、陸さんは二度目の訪日をした。故郷に帰ると、陸さんの山のある村人たちが来て、一夜夕食に招待したいから来てくれという。陸さんはその席で、思いがけぬことを聞かされた。周囲の村の山はほとんどすぎになってしまった。餌のなくなったイノシシやサルが里に下りてきて農産物を荒らして困るようになった。陸さんの雑木山のある村は、雑木林のおかげで獣の被害がない。今夜はそのお礼の会だと感謝されたという。雑木林は照葉樹と落葉樹の広葉樹林で、ドングリ、シイなど多くの餌がある。杉の美林は人間にとっての美林に過ぎず、人間経済の中での価値はあるけれど、自然界では異常なのだ。アマゾンの大自然の中に暮らす陸さんには杉ヒノキ色の植林地の不自然さが感じられたに違いない<sup>26</sup>。

こうした坂口による自然に対しての眼差しは自然観は、アマゾンでの営農を通じて培われた可能性がある。坂口はアマゾンで樹木を植えることに関して、平賀の影響を受けたことをYamadaとのインタビューで語っている<sup>27</sup>。つまり、坂口や平賀のような農家らが相互に学びあい、アマゾンで農業を営む知恵や技術そして自然と向き合う際の考え方や感覚を育みつつ、それらを後継者へと継承しながらトメアスーの農業、つまりアグロフォレストリーの基盤を形成していったのだろう。では、そんなトメアスーのアグロフォレストリーが駆動するきっかけをつくったとも言える、坂口のアマゾン農業に対する認識とは一体どういったものなのか。

---

<sup>26</sup> 石橋憲二『アマゾンの一隅から』1986、p. 69。なお、石橋は本書の執筆時に坂口から学んだことが多かったとして、最後に謝辞を述べている。

<sup>27</sup> Masaaki Yamada, *Japanese immigrant agroforestry in the Brazilian Amazon : a case study of sustainable rural development in the tropics*, PhD Dissertation, University of Florida, 1999, p. 428.

坂口によれば、アマゾンの土壌は植物で形成され、植物は微生物と昆虫による有機質の分解促進で成立し、微生物と昆虫は高温多湿の条件下で生存できる不可欠な循環系を整えていると述べている。坂口はアマゾンの植生を以下の段階に分けた<sup>28</sup>。

第1次植生（3か月～2年）	イネ科植物が主体の雑草
第2次植生（6か月～5年）	ナス科植物が主体
第3次植生（1年～10年）	アオギリ科植物が主体
第4次植生（2年～20年）	再生林形成の雑木
第5次植生（10年～80年）	再生林の極相
第6次植生（40年～150年）	原始林移行型と下層木
第7次植生（60年～300年）	原始林極相

また、こうした植生の遷移には、周囲のあらゆる生物が有機的に関与していることも指摘している。例えば、山焼き以降から再生林への形成には家畜に病菌をもたらすコウモリが一役買っており、コウモリは二次林や原生林のなかでパイオニア種であるインバウーバ（Imbaúba; *Cecropia pachystachya*）の実を食べる。そこで山焼きの火のあかりをしたって昆虫が上空をまわっているところにコウモリが現れると、インバウーバの種子を落としていくという。そしてこのインバウーバの葉は大きく地表を覆うように成長し、このインバウーバの庇護下のもとで乾期の強い日光に成長を遮られることなく他の樹木が発芽してくるような有機的関係、まさに共存共栄関係が存在するのだという<sup>29</sup>。

また坂口は、熱帯農業を営むうえで、栽培技術には基準・目安がないため自然を認識し判断すること、つまり自然を一番の参考書にすることの重要性をあげている。それは例えば、月齢から植物の生長、種まき、樹脂採集などの適期であり、そこには言語や文字がないため、相当の忍耐や訓練、宗教観や哲学観なども重要だとしており、科学的理解やその範疇を超えることを自覚しておく必要性をあげている<sup>30</sup>。

坂口の自然観察について理解するうえで興味深い事例が2つある。まず1つは焼畑農業に関する意見である。坂口は日本の山火事の跡地を見て育ち、高校、大学ともに林学を専攻したため、焼畑は絶対にしてはいけないと日本で生活していた際には考えていたという。しかし、坂口は以下のように続ける。

アマゾンに来て考えが変わった。原住民、先住者の慣行農業の焼畑と、われわれ日本人の農業技術の精耕法とでは、農業の永続性で大差があり、アマゾンでは焼畑がより合理的と言える。（中略） 焼

<sup>28</sup> 坂口陞、同上、1999、p. 228。

<sup>29</sup> 坂口陞、同上、1999、p. 228。

<sup>30</sup> 坂口陞、同上、1999、p. 231。

畑の最大の利点は、無耕起、無農薬、無肥料であり、近年流行の自然農法と誇張される農法よりも、安全な農産物が得られる。焼畑農法の合理性の具体的な究明は今後の課題である。

アマゾン農業は雑草との闘いである。われわれ移住者も日本の農業知識と技術を用いて、60余年間、闘い続けた。トラクターなどの大型農業機械を駆使して、耕起、連作、輪作による雑穀、イモ類などの栽培が、永続的な勝利を得ていないのは残念に思うが、大自然の摂理のなかで無理があったとも考えられる<sup>31</sup>。

アマゾンにおいて小農が取り組む焼畑農業については、以下のようにも述べている。

アマゾンに関する限り、焼畑農業を認めなさい、ということです。それは、アマゾンでは、小農といえども、先ほど言ったように、1耕地は25ヘクタールある。平均すると、今、小農者といっても全部で40ヘクタールぐらいは持っているんです。そのくらいの面積の耕地を持っていて、昔みたいに家族労力がいっぱいあって、1年に10ヘクタールとか20ヘクタール、山を切って焼いて焼畑をやっていたのは、今はもうないんです。ちょうど三ちゃん農業で、年寄りとお母さんと、あとは、外に出て、町に行ってお金を稼いでいるといった状況なので、農業としてやっている若い人は余りいないんです。そうすると、余り大きな面積の山は絶対切れない。開きたくともできないのです。山切りというのは、相当重労働ですからね。年寄りなどにはとてもできるものではありません。だから、そういうところで焼畑農業をやるのだから、1年に平均すると精々1ヘクタールとか、あるいは2ヘクタールぐらいを切って焼いては、短期作の穀類を植えていく。1年つくって次の年にはまた、1ヘクタールから2ヘクタール切って焼いていく。そうすると単純計算ですけれども、要するに25ヘクタールずつやっていると25年で元に帰ってくる。25年というと、再生林もかなり大きな大きな再生林になって、植生は、完全に戻ったという形のところへまた戻ってくる。また、それを繰り返していく。だから、早く言えば、焼畑輪作ということです。必ず、そういう25年おきの周期で、1つの土地をずっと利用していく。

焼畑農業を認めなさいと言いたいのは、なぜかという、木を切って、火を使って焼く、火を使うというのは昔からの農業の中で完全消毒で、そして土の肥料効果も上がると言われている。これは、短期間に食物をつくるのだから。だから、農薬も要らない、肥料も要らない。（中略）だから今、全世界で有機農法などと言われているけれども、今、完全に有機農産物と言えるのは、わがアマゾンの焼畑農業しかない。アマゾンでは、ずっとこの焼畑農業でやってきたからね<sup>3233</sup>。

<sup>31</sup> 坂口陞、同上、1999、pp. 230-231。

<sup>32</sup> 石丸和人、同上、2006、pp. 41-42。

<sup>33</sup> 坂口のこのような考え方に対して、対談に参加していた西澤利栄は、（1）森林が最終的な極相林になるには100年以上の年月が必要であること、（2）極相林をつくる樹種があらわれるまでには、長い年月を必要とすること、（3）焼畑によって発生する二酸化炭素は温室効果をもたらし地球環境に影響をあたえるという点を指摘している（石丸和人、同上、2006、p. 2）

事例の2つめは、坂口の土壌学に関する認識についてである。坂口は日本で学んだ土壌ないしは土壌学について以下のような意見を述べている。

カカオを植えたときに微生物の働きが大きいつてことに気がついたね。胡椒をやりながら、僕は鶏を放し飼いにしてたんですよ。でも、どうしても五〇羽以上に増えないんだ。でも、カカオを植えたら落ち葉が溜まる。鶏がいやっていほど増えるようになった。

ここ（アマゾン）で通用する土壌学は、日本で学んだ学問とはほど遠いものだ、っていうことを痛感したね。日本では、農民は土を作れ、と言うでしょう。ここでは、植物を作れってことなんだ。植物を育て、陰をつくれれば高温多湿になって、なんでも育つ。

植物を育てることのもう一つの意味は、バクテリアなどの微生物の働き。乾期の終わりに原生林に入ると、落ち葉が厚く溜まっているの。ところが翌年三月に行くと、落ち葉がどこにもない。バクテリアにくいつくされているんだ。腐植土っていうのができる。そこいらへんに段ボールの箱をうっちゃっておくと、数週間後には跡形もなくなっている。アマゾンでは微生物の働きがものすごいんだ。逆に、胡椒だけの裸地で日当たりをよくする日本式農業では、微生物が一切働かなくなってしまう<sup>34</sup>。

坂口による焼畑と土壌に対する考え方の変化は興味深い。坂口は、まさにブラジルアマゾンで農業を営むなかで、自然やその地域の風土の特徴を丁寧に観察/読み込み、その地域（ここでは坂口の圃場）に適応した営農方法を自ら考え導き出している。坂口は、植林を積極的に始める以前のトメアスーでの営農方法を振り返り、「勉強した農業技術の知恵を働かせて、私がよかれと思ってやったことは何一つ残っていない。それは、「儲けよう」と思ってやっていることに対する天罰か、作物を奴隷化し利益のために働かせようとしたってそうはいかない、ということなのかもしれない」<sup>35</sup>と述べている。こうした発言からも、自分自身がこれまで営んできた農業を批判的に考察したうえで、自らの農業を再構築していったプロセスが読み取れるだろう。

換言すると、坂口は自らが日本で学び知ってきた普遍的で脱文脈的な近代科学知を問いに晒したうえで、自らの営農方法をよりアマゾンないしは自らが農業を営む圃場に適した・個別具体的・文脈的な発想に適応し変化させている。つまり、自己の営農方法をunlearnしている要素が見られる。

また、カカオを提案した頃の状況を坂口は以下のように述べていることも見逃せない。彼のアマゾンの自然やそこに住むカボクロへの認識を理解できる文章である。長いが引用したい。

<sup>34</sup> 坂口陞「日本人化への疑い」『中央公論』中央公論社、1994、p. 77。

<sup>35</sup> 坂口陞、同上、2000、p. 3。

自分のことでガックリきているのに、トメアスの農業協同組合の理事にされて、胡椒に代わる作物を考えてくれ、と言われたんです。移住者全体の将来がかかってる、ってね。だけど、難しいことを考えられる心の余裕なんかなかった。カヌーに乗って、トメアス河流域の原住民の集落を見てまわったんだ。

原住民はね、生活のレベルが非常に低いんです。連中の畑と言ったら一ヘクタールほどだけ。なのに、彼らはひどい病気にもかからず悠々と暮らしている。

彼らはきちんとした法則を守って焼畑農業をやっている。そこにトウモロコシを植え、米を植え、トウモロコシの穂が出る頃にマンジョッカを植える。一つの植物を規則的に植えて量産しようとする日本式の農業を決してやっていない。しかも一つの畑を使うのはせいぜいが二年だけだ。三年目には別の山を焼く。

彼らの豊かさの原因は庭にあった。彼らの家には必ず一町歩ほどの庭がある。そこに何種類もの果物の木がある。植えたわけじゃない。誰かが果物を食べて、その種が自然に芽を出しただけ。雑然としているように見えるけれど、季節の移ろいに合わせて順繰りに果物がなっていく。彼らは果物を食べて、余った物だけを売って生きている。

そうか、彼らに学ばばいい。彼らが一町歩なら日本人は二十五町歩植えればいいーそれでトメアスの農家にカカオを植えるように勧めたんです。だけど、日本人はなかなか植えない。いつ実がなるかわからないカカオを植えることなどない。気短だからなあ。すぐに答えの出る作物じゃなければ駄目なんだろう<sup>36</sup>。

つまり坂口は、カボクロや先住民と呼ばれる人びとの生活を観察し、その土地の風土や自然に適応した営農方法、つまりアグロフォレストリーのヒントを得たと述べている。近代科学知や文明化に対するの粗暴で原始的・野生的という二分法的思考の基でしばしば劣位に置かれ、学ぶことはないと考えられてしまう先住民のライフスタイルから、坂口は自分の営農を批判的に検討しそれを変更している。このように、社会的に劣位におかれた他者から学ぶプロセス自体もunlearnの重要な要素の1つであった。つまり、焼畑や土壌に関する認識の変化とアマゾンに生きる人びとからの学習という事例を通じて、坂口は自らの営農をunlearnしたと言えるだろう。

ただし、忘れてはならないのは、坂口は決して先住民と同じように生きろと主張しているわけでもないことだ。例えば、本文では以下のように述べている。

人間誰だって、これだけ儲けたい、家も建てたい、贅沢したい、という欲望があるだろう。だけど、その欲望を満たすために自然界を押しつけて、征服していこうって考え方-これは間違いだ。インディオのような暮らしをしろっていうんじゃない。さっき歩いたアンジローバの林は売れば大層な財産に

---

<sup>36</sup> 坂口陞、同上、1994、p. 76。



なる。今を焦らず、長い目で見ればちゃんと残るものなんだ。要するにもっともっと自然の持っている力に頼りながら知恵を働かして生きるってことじゃないかな。人様も生物全体のなかの一つの生き物に過ぎないんだから<sup>37</sup>。

坂口が先住民等のアマゾンに住むブラジル人を日系人との関係性において優位と見なし、逆に特別視していたという事実は確認できていない。ただ、アマゾンで農業を営む以上、先住民らがアマゾンの自然に適応し自然の力を活用して生活しているからこそ、その営みから学ぶ必要があると述べているのだろう。

#### 第4節 小長野道則によるunlearn

トメアスーのアグロフォレストリーの発展に貢献する1人として、小長野道則がいる。筆者がトメアスーに滞在し参与観察を実施した2010年6月5日から12月19日と2011年10月2日から11月26日のあいだ、小長野はCAMTAの営農教育社会委員会（CATES）の理事並びにトメアスー農務局長を務めトメアスーの農業振興を職務とし、時間があればトメアスーの農家の圃場を見てまわっていた。

トメアスーでは、小長野の圃場と酷似したアグロフォレストリーを小農家の圃場で度々見かけた。その理由としては、彼らのなかに「道則の圃場を見本にして真似た」と述べる小農家や、小長野から苗木を譲り受け植栽した小農家が多数いるからであろう。「道則の圃場は我々にとっての教室だ」と語るものや、また「自分の圃場に植えてあるクプアスーの苗木は全て道則からもらったもの。全て彼の息子だ」と語る小農家もあり、そんな彼らからの小長野に対する信頼はあつい。

2010年にクワルタ・ヘジオン(Quarta Região)小農家協会(Associação dos Mini e Pequenos Produtores Rurais da 4ª. Região)の会長(2009～2011)をつとめるジョゼ・マリア(José Maria)も小長野を信頼する1人である。彼は1969年にトメアスーに生まれ、小学校を卒業後ベレンに出て機械工として働く。父親がトメアスーで農業を営んでいたため1991年の結婚を契機にトメアスーへと戻り、1992年から父親から譲り受けた圃場を管理しながら小長野の農場で働く。

1995年にクワルタ・ヘジオン地域で旱魃が発生し、植えていた作物が枯死したときには、ジョゼ・マリアも自分の圃場を手放そうとする。しかし、小長野がそれを説得し引き止めたことで、ジョゼ・マリアは自ら農業で生計をたてていこうと決心し独立する。その後、小長野はジョゼ・マリアに対してクプアスーやグラビオーラの苗木を無償で提供したり、クプアスーとアサイ等のアグロフォレストリーを推奨する。ジョゼ・マリアは、小長野からの営農指導を通じて、施肥や土壌改良の重要性、苗木も病害虫に強いとされる品質の良いクローンのものであることや、接ぎ木の仕方や剪定方法等数多くのことを

---

<sup>37</sup> 坂口陞、同上、1994、p. 78。

学んだという<sup>38</sup>。2010年時点で彼は、CAMTAの組合員になることを目指し、将来的にはグリーンツーリズムで食べていけるようにもなりたいと話していた<sup>39</sup>。

そんな彼らは、先にも述べたWRSとCAMTAが2006年から開始した小農家へのアグロフォレストリー普及プロジェクト等を協会として引き受け、小農家によるアグロフォレストリーの普及事業や共同で管理する苗床づくり等に率先して取り組んだ。また、2010年11月には農村技術訓練機構（SENAR ; Serviço Nacional de Aprendizagem Rural）<sup>40</sup>とCAMTAがパートナーシップを結び実施している他地域の小農家の営農指導訓練講習では、クワルタ・ヘジオン小農家協会のジョゼ・マリアら小農家が他地域の小農家に対し圃場を見せてまわり、彼ら個々人のこれまでの人生経験や営農方法、また、現状の営農を踏まえた将来の夢・展望を語り、他の小農家らを鼓舞していた。



図1 SENARでの営農指導風景

（出典）2010年11月22日に筆者撮影

トメアスーにはTekenayという先住民の居住区がある。この居住区は政府機関である国立先住民財団（FUNAI ; Fundação Nacional do Índio）の管理下にあるため、先住民本人やもしくは政府の許可なしには立ち入ることが難しい。この居住区の先住民でさえも、小長野には信頼をおいている。2011年11月6日に筆者と小長野が居住区を訪問したときには、住民たちは小長野が柑橘類の接ぎ木の方法や、胡椒の苗の作り方、施肥の仕方などを説明し実践する姿を熱心に見入っていた。

<sup>38</sup> 2010年12月1日のインタビューより。

<sup>39</sup> 2010年12月1日のインタビューより。なお、2016年9月6日に数時間という限られた時間ではあったもののジョゼ・マリアの圃場を訪問したさいには、2010年にはなかった灌漑設備や自家用車、農機具などが多くみられた。2010年には1人で圃場を管理していたが、2016年にはジョゼ・マリアの息子とともに圃場を管理し営農していた。

<sup>40</sup> SENAR とは、1991年の8.315号法案によって公的に制定された機関で、農村地域の社会振興、農業分野の人材育成等に取り組んでいる。ブラジルの全州にその支部が存在している。

また、水源かん養機能が強く、法律により伐採が禁止されている小川（Igarapé）の河畔林を耕作するかどうか考えていた住民に対して、小長野は「伐採し表土が流出すると河川が土砂で埋まり、河川流量（水資源）が減少し、小川の水が飲めなくなる」ことや、「カカオや高木樹種を小川の周りに植えれば、孫・ひ孫のための将来の貯金になる」と説明したうえで、湖畔林の伐採を再考するよう促していた。



図2 Tekenayで先住民に指導する小長野

（出典）2011年11月6日に筆者撮影

小長野は、アグロフォレストリーに関するセミナーなどで講演し、また実際の現場に出て営農指導にも多くたずさわっている。2008年には、日本のNGOであるHANDS（Health and Development Service）が主催する「アマゾン西部におけるアグロフォレストリー普及活動」にアグロフォレストリーの専門家として招聘され、アマゾナス州マニコレ（Manicoré）へ営農指導しに行った経験もある<sup>41</sup>。また、マニコレ出身の農家を自宅に受け入れて自分の圃場で研修を実施してもいる。HANDSのプロジェクトマネージャーを務めていた定森徹は、小長野による農民のトレーニングに同行した際に「老農から篤農に見られた自然を注意深く観察し、変革を志向する姿勢」としての「自然をよく観察すること、貧しい一般農民のやっている手法からも何かを学び取ろうとすることを彼らが見ることができた」と述べている<sup>42</sup>。小長野の農業にかける姿勢は昔から変わらなかったようで、Yamadaが1995年にトメアスーで調査を実施した際にYamadaの目に小長野は以下のように映っている。

<sup>41</sup> HANDS『アマゾン西部におけるアグロフォレストリー普及に関する調査・セミナー報告書』2009。

<sup>42</sup> 定森徹『アマゾン西部におけるアグロフォレストリー普及の可能性とその制約条件～マニコレ市における普及活動を事例として』日本福祉大学大学院 国際社会開発研究科修士論文、2011、p. 32。

*Among nissei farmers at Tome-Açu, there were still classical figures such as Michinori Konagano (1958-), who did not hesitate to call farming their hobby, and sweated in the field with employees*<sup>43</sup>. (日系2世のなかにも、農業を趣味とよび労働者とともに圃場で汗をかくことを厭わない小長野道則(1958-)のような昔ながらの農家も存在する。)

そこで本節では、小長野の半生を紐解きながら教育やunlearnという視点から分析する。

小長野道則(こながのみちのり)は、1958年に小長野親徳(ちかのり)と道子の長男として鹿児島県肝属郡根占町(現:南大隅町)に生まれ、1960年9月5日にアルゼンチナ丸で家族と共にブラジルへ渡り岩間農場に就農する<sup>44</sup>。小長野の父親は短期間ブラジルで働いた後に帰国しようと考えていたものの、その見通しがつかずノイローゼになり父親が病で床に伏してしまう。そこで、小長野は小さい弟たち家族を支えるため、父親代わりとして農業に従事しなければならなかった。この当時、小長野は同級生らが進学のためベレンに移り住んだり、週末には日本語学校や野球に通う同級生たちの姿を見て羨ましく思ったという<sup>45</sup>。

幼いころは大変貧しく、パッションフルーツの蔓を這わせるために必要なワイヤーすら買うお金がなかったため、洗濯ヒモに這わせたりもした。洗濯ヒモがないときには、ツタ植物を代用したという。農作物への水やりについては、夜なら蒸発しないと考え、昼間は草取りや薬剤散布を主に実施し、夕方からランプで明かりをつけて行っていた。また、井戸水から水を汲むのは大変な重労働で且つその水は貴重であったことから、身体を洗うときなどもたらいのなかで水を浴び、そこから石鹸部分を取り除き、余った水を育てていた野菜にかけたりしていた。こうした彼の貧しかったころの創意工夫や経験は、ブラジル人の小農家へ営農指導をするさいにも活かした経験則として持ち出され伝達されていくものである。小長野は、経済的に決して豊かではない多くのブラジル人の小農家に対して一方的に「〇〇を植えば上手くいく」と情報を伝達し押し付けるのではなく、彼ら・彼女らの営む生活条件に寄り添い説明をする。そして、自らが貧しかったころの経験に引き付け、自ら創意工夫し営農に励めば貧しくても成功すると鼓舞するのである。

小長野は初等教育を5年生で退学し、農業に従事しながらアノエラの土地を購入し独立することになる。独立当初は、CAMTAの組合員ではなかったため、周りの大人たちから多くの指導や助言を受けている。例えば、当時メロン栽培で成功していたた神立(Castanha1(カタスタニャール)在住)は、営農にかかる肥料などを無償で小長野に提供してくれたという。また、当時ベレンに住んでいたアサノから

<sup>43</sup> Masaaki Yamada, 同上、1999、p. 608。

<sup>44</sup> このアルゼンチナ丸は第7次航で、南米に合計890名の農業移住者と技術移住者を神戸港と横浜港より連れてきた。アマゾンの河口パラ州のベレンの港で99名の農業者が下船したと言われている。(私たちの40年!!あるぜんちな丸同船者寄稿集:「あるぜんちな丸第7次航の到着を知らせる1960年9月12日のA GAZETA紙」(<http://40anos.nikkeibrasil.com.br/jp/biografia.php?cod=206>))(2016年12月1日閲覧)

<sup>45</sup> 2016年9月16日のインタビューより。

は農業方法（3本立て（パッションフルーツ、カカオ、メロン）でやる等の指導を受けたという<sup>46</sup>。また、その頃から組合外で活動していた生産者有志のグループのなかで年配者と働きながら、彼らからも助言をもらい営農した<sup>47</sup>。生産者グループでは年配者に飲めないお酒を無理に飲まされ、当時は「日本人の顔をしているくせに日本語が話せないのか」と罵声を浴びせられたこともあった。小長野は彼と同年代の日系ブラジル人と比較しても日本語が堪能だが、彼はこうした年配者との協働作業を通じて日本語で会話することを覚えたという。小長野は当時を振り返り、「異なる年代の人たちとの交流を通じて農業について学んだ」と述べている<sup>48</sup>。

ただし、生産者グループとして活動していても、仲介業者から生産物を買収されたり、営農が思うようにいかないこともしばしばあった。そして1983年の25歳のときにCAMTAへの加入を決意する<sup>49</sup>。CAMTAへ加入してからは、1985年に教育委員会の傘下にある青年部の副委員長に就任し、青年部による研修計画や実施等、積極的に組合活動に従事している。1987年には、トメアスーで開かれた新春座談会「トメアスー地域の展望」に青年部代表の1人として参加し、トメアスー郡長らとトメアスーが抱える現状（若者が働く場所の欠如等）や今後の未来について積極的な意見交換を行っている<sup>50</sup>。営農にも手を抜かず、1985年にはCAMTAの「その他の部」において組合農産物優秀賞を受賞し、1987年にはCAMTAの「パッションフルーツ」分野で優良組合賞を受賞している<sup>51</sup>。

当時のCAMTAはJICAやコチア農協等の支援を受け、国内外問わず多くの研修事業を実施し、組合員育成と新規作物研究にも力をいれていた。小長野はこうした機会を活用し、1986年には、セラード地域の先進農業地帯研修や、コチア農協主催のサンパウロ州ヘジストロ市での研修<sup>52</sup>、1992年にはマラクジ

---

<sup>46</sup> 小長野には、胸ポケットに紙とペンを入れておき、何かあるとすぐにメモをとる習慣がある。零細小農家のブラジル人に営農指導をするときにも必要なことはこのメモに書いて渡したりもする。こうした習慣は神立から真似たものであり、神立も営農や農作物に関連して自分で調べた有益な情報をメモにとり小長野に渡してくれたと述べている。（2016年9月4日のインタビューより。）

<sup>47</sup> 小長野は1975年に発足した果樹グループ（2年後には青果グループに活動方針を変更）に所属していたと考えられる。この青果グループは、30名の非組合員を中心に組織され、当時サンパウロ市場で高級果物として売買されたスペインメロンの栽培技術向上や共同出荷、検査に始まりパッションフルーツのサンパウロ市場への出荷や、必要な資材の共同購入など実施していた。グループを組織したのが非組合員だった理由としては、当時農協に加入するためには胡椒2,000本の所有と2tの生産という不文律の加入条件があり、戦後の独立してまだ日が浅い移住者らにとっては加入自体が困難だったためである。1970年後半にはサンパウロ市場でメロンやパッションフルーツ等高値で売れたため、組合員にも広がり、青果グループの活動は組合販売部に統合されることになった。（田中規子「アマゾン地域における日系移民の農業展開と協同組合の役割」酪農学園大学人文・社会科学編『酪農学園大学紀要』2000、p.326。）

<sup>48</sup> 2010年12月10日のインタビューより。

<sup>49</sup> 「シリーズ 我らが後継者（その四）小長野道則さん」『広報』No.18、1986年2月25日。

<sup>50</sup> 「新春座談会「トメアスー地域の展望」日系青年層の行動力に期待 トメアスー郡長が強調」『トメアスー組合だより』No.29、1987年1月31日。

<sup>51</sup> 『トメアスー組合だより』No.20、1986年4月20日と『トメアスー組合だより』No.31、1987年3月31日。

<sup>52</sup> 前章で述べたとおり、コチアでの研修には新井智紀も参加している（「コチア研修に新井・小長野両部員」『トメアスー組合だより』No.20、1986年4月20日）。コチアには約2週間滞在し、組合組織や青

ヤ作物部長として、ブラジル北東部でアセロラ調査等に参加している<sup>53</sup>。第3章でも述べたように、セラード研修では、主に子弟教育や青年層を活性化する営農計画促進の重要性について学んでいる<sup>54</sup>。

積極的に農業先進地に赴き学ぶ一方で、小長野はトメアスーでもCAMTAの営農指導を通じて学んでいる。例えば、小長野は、前章で論じた1982年から1994年のあいだCAMTAに勤めた農業技師の小早川利次からも営農方法について多くを学んだという。小早川は、組合員の圃場へと毎日出かけ、カカオやクプアスーの抗病種や多収穫種を探す「掘り出し物調査」や、接ぎ木等の技術普及を積極的におこなった。小長野は、当時の小早川との関わりについて「直接農業に関する指導もしてくれた。農薬が買えないとき消費期限の過ぎた錠剤を農薬代わりに使えるような方法を教えてもらったりもした。しかし、大概は他の農園ではどういう良い結果が出ているかという情報を我々に提供してくれていた。」と述べている<sup>55</sup>。小早川のアドバイスをもとに小長野は他の組合員らと共に成果の出ている農場をみてまわり自分の目で確かめて学んだという<sup>56</sup>。

JICAの果樹栽培の専門家として来伯した清水理との出会いは、小長野にとっての大きな転機であった。清水は、静岡県三ケ日農協で32年間勤務しそのあいだ農協の企画相談室長として農協の長期計画策定等に従事した。その後全国の農協経営のコンサルなどを歴任し、1994年にクプアスーなどの果樹栽培の支援・研究のために訪伯した。清水は、1994年9、10月にCAMTAが発刊する『Jornal Camta』において、収奪型農業から集約型農業への転換と、それに伴う土地生産性を高めるための技術力と生産物の品質の向上、並びに農家の協働を通じたアマゾン熱帯果樹の産地化を訴えているが、こうした清水の思いや農業に対する考え方に小長野は大きな刺激を受けたとしている。また、小長野は、清水がトメアスーに滞在していた頃いつも一緒に行動しながら、施肥の仕方などの技術的な面から、集約型農法の必要やその風土にあった作物を植え付けること、そのために自然を丁寧に観察することの必要性を学んだと述べている<sup>57</sup>。

小長野は、1996年にJICAの助成を受けたCAMTAを通じて、日本で農業研修の機会を得る。そのときには生まれ故郷の鹿児島へ行くようにと周りから勧められたが、清水のいる静岡県の三ケ日での研修を選択する。この研修は農協や受け入れ側の指導員の元で長期期間滞在することが定められていたが、小長野は清水に頼み指導員らの指導を受けるのではなく、農家の家々に滞在し、農家宅で農業体験を積みた

---

年活動について学んでいる。

<sup>53</sup> 峰下興三郎「強敵と会わせたい」『組合広報 Jornal Camta』No. 70、1992年12月3日。

<sup>54</sup> 「座談会「セラード研修で得たもの」もっと営農指導の徹底を！」『トメアスー組合だより』No. 28、1986年12月31日。

<sup>55</sup> 2010年10月28日のインタビューより。

<sup>56</sup> トメアスーの状況をよく知り文化協会の事務局長や『トメアスー開拓70周年記念誌』の編集委員を務めた角田修司は、2016年9月4日の筆者とのインタビューにおいて「小長野さんも小早川さんから農薬の巻き方などの薫陶を得た。古い胡椒の農場に石灰をまけ等といわれていたのではないか。」と話している。

<sup>57</sup> 2010年12月18日のインタビューより。



いと申し出て実現している<sup>58</sup>。そのときに、清水と共に長野県の集約型農業と先進的な技術を用いて営農するリンゴ農家らと出会い、枝を突き刺した時に地中深くまで刺さる土壌を目の当たりにし、土壌づくりの大切さや有機質・自然界でつくった堆肥を用いることで悪い土壌の農場でも上手くいくということも理解したと述べている。

小長野は、こうした研修等の学習機会を提供してくれた先達や、後継者育成に熱心だったCAMTAの活動を通じて、自らも後継者を育成していかなければならないという意識が芽生えたという。2011年10月25日の筆者との会話でも「坂口さんや高松さんにお世話になった。その頃、1996年にサンパウロ州のレジストロへ研修に行く機会を得た。当時の人は若い人を育成しようと熱心だった。だから今も人材育成にもっと力を入れていかないと駄目だ」と話している。また、小長野は、研修や視察受け入れを通じて、異なる背景を有した他者と積極的に出会い、肩書や立場性に関係なく、自ら進んで学ぶことの重要性を理解し実践していったと言える。

また、清水との出会いや交流を通じて、学校に行っていない人でも行っている人でも、能力さえあればどんな人とでも対等に対話ができ、学歴は仕事を進めるうえで関係ないことも悟ったと述べている<sup>59</sup>。こうして、JICAやブラジル農牧研究公社（EMBRAPA; Empresa Brasileira de Pesquisa Agropecuária）等の研究者とも積極的に交流を図りながら、農産物の委託試験や見学先として幾度となく受け入れ、研究所らの科学的な知見や情報を積極的に学んでいった<sup>60</sup>。

1980年代後半のトメアスーでは、1986年にトメアスー文化協会が防犯・治安対策委員会を設置して州保安局に特捜班の出動要請も行うほど治安が悪化していた。また、1991年と1995年の異常乾燥の発生と1987年以降の胡椒価格の下落にともない、多くのブラジル人小農家の離農も問題視されていた。小長野のところにもブラジル人小農家による農地売却の相談・依頼が増えるようになり、彼らから土地を購入したこともあった。一方で、小長野は、農地を手放した彼らが定職につくことなくトメアスー中心部の土地を不法占拠したり、日中何もせずただ市街地をふらついたり、犯罪に手を染める現状に憂いてもいた。

---

<sup>58</sup> 2016年9月4日のインタビューより。なお、インタビューで小長野は当時の研修内容について想起し、「「アマゾンから来ました」と長野の農家に伝えると、農家は必ず日本語に関する心配や「アマゾンはお風呂にも入らない、満足にご飯も食べられない、猛猛な野生動物が多くいる」といったようなステレオタイプのイメージを語ったと話してくれた。研修はトメアスーに残した家族のこともあり3ヶ月の研修期間を短縮し2ヶ月にしたが、農業について多くの知見を得られた研修だったため、帰国時には短くしたことを大変後悔したとも述べている。

<sup>59</sup> 2010年12月18日のインタビューより。

<sup>60</sup> 「東部アマゾン持続的農業技術開発計画」（1999-2004）のプロジェクトに従事した石塚幸寿に、プロジェクトでの日系農家との関係について尋ねたところ、「日系農家の協力は、Embrapaのカウンターパートや日本人専門家から日系農家に対する委託試験・委託栽培のお願いです。その他には圃場調査、講習会での見学先として、などもあります。小長野さんが受けた委託試験・栽培はダントツで、胡椒関連、クプアスーなど、また見学先としても幾度となく受け入れています。」とのことだった（2010年10月13日のメールのやり取りより）。

そこで小長野は、ブラジルの小農家に土地を売らないで働くことを推奨しはじめ、週末には作物の種や苗木を無料で配布し巡回指導をボランティアでおこなうようになった<sup>61</sup>。こうしたなか、1996年には小長野の家に強盗が入る。家族は無事だったものの、強盗に押し入った人びとはまさにブラジル人の小農家であった。そこで小長野は、自分ないしは日系ブラジル人だけが経済的に裕福になっても幸せにはなれないこと、日系人だけでなくその他のブラジル人の小農家等を育てることの必要性をこれまで以上に強く実感したという。このような経験を踏まえて小長野は、トメアスーに住むブラジル人小農家への営農指導や物資の支援をこれまで以上に積極的に進めるようになり、研修で学んだ営農方法や作物に関する知識は自分や日系人だけのものにするのではなく、ブラジル人小農家らにも広く普及していった<sup>62</sup>。三ケ日農協への研修を小長野にすすめた高松が「小長野さんは自分が人生で苦労してきてるから、指導・教育の力を知ってる。だから（人の話にも）耳を傾けるんだ。」と筆者とのインタビューで話しているが<sup>63</sup>、彼が幼い頃大変貧しく、日系ブラジル人であっても農業で苦労した背景、つまりブラジル人小農家の状況や「もし営農指導や教育があれば成功するのに」といったような小農家へ思いを馳せるための類似した経験と想像力があるのかもしれない。こうして日常的にブラジル人小農家の圃場へ赴き営農指導を実施するようになり、郡の農務局長に就任した後も小農支援を含む農業政策に取り組んでいる。CAMTAの理事在籍中も、ブラジル人小農家らに対するアグロフォレストリーに関する営農指導のプロジェクトなども数多く実施し、序章でも述べたようなトメアスー地域全体の農業を基盤とする地域活性化へと貢献している。

彼ら・彼女らの育成に従事する理由は、トメアスーやその産業基盤となるCAMTAの将来を危惧しているというのものもある。つまり、現在のCAMTAの熱帯果樹加工工場を維持するためには、日本へのデカセギや離農により後継者が育たない日系農家だけでなく、非日系のブラジル人小農家にも多く生産してもらいCAMTAへ卸してもらおう。そうすることで、トメアスーの地域経済が活性化する必要があると考えてい

---

<sup>61</sup> 小長野のブラジル人小農家に対する営農指導や肥料や苗の物的支援活動について、「東部アマゾン持続的農業技術開発計画」（1999-2004）のプロジェクトに従事した石塚幸寿は、「この種の支援活動は、例えばジョージ伊藤さんや笹原富夫さんや他の日系農家の方々も、自分の農場で働いていた労働者が独立する際に多くの支援を行っているわけですが、そこには、程度の差こそあれ、それまでの農場運営に貢献してくれたという感謝の気持ちも含まれていると思います。しかし、小長野さんの場合はそれ以上の意識を持っていて、近隣農民の営農安定、生活改善を図ることが出来れば、彼等だけの利益ではなく我々日系人にも安全面や組合の経営上の利益を得ることが出来る、という信念を持っておられました。」と説明している。（2010年8月23日のメールのやり取りより）

<sup>62</sup> 国際協力事業団『ブラジル国アマゾン持続的農業開発基礎調査団報告書』（1997、p.154）の「CAMTA役員との意見交換会」資料において、小長野の発言に「JICAの研修で三ケ日農協で2ヶ月間研修した。その成果は日系人だけではなくブラジル人にも教えている。」という記録がある。この時に意見交換会に参加したCAMTA理事長並びに理事計8名のなかには、たとえば鈴木エルネストも「日系人だけではトメアスの発展は無理。しかし、非日系人の果樹はあまりにも品質が悪いので工場が受け取らない。工場の操業率を高めて採算性をよくするためには、非日系人を指導して品質向上を図ることが必要（日系人を通じた技術協力の日系人への裨益）」（同上、p.155）と発言している。

<sup>63</sup> 2010年10月13日のインタビューより。



るのである<sup>64</sup>。つまり、非日系小農家へのアグロフォレストリーの普及やそれに伴う営農指導はまさにトメアスー全体の活性化や発展をも意図した取り組みだと言える。

小長野は小農家らとの関係性から、日系人だけが経済的に豊かになり生活の質を高めるだけでは、日系人の安定・安心した暮らしは得られず、トメアスーという地域全体が発展しないことを理解した。ブラジル日系人社会でしばしば生起する日系と「非」日系というような分断線を引いてしまうことが、トメアスー地域全体としての農業発展の可能性や自らの生活の豊かさを損ねることになると気が付いたのである。そして小長野は、農業技術や知識、それを伝えるための教育的営みの共有・分配を積極的に進めながら、トメアスー全体が豊かになるような農業発展の青写真を描いていると言える。つまり、小長野はトメアスーの農業の発展やトメアスーに住む人びとの生活の向上を基盤に考えた際の、「他者」（ここで言うブラジル人小農家）との関係性に分断線を引くこと自体を問いに晒し、まさにそれを棄て去ることで他者を包摂し関係性を再構築する、unlearnしたとすることができるだろう。

## 第5節 終わりに

これまで平賀練吉と坂口陞、そして小長野道則の営農実践やそれに対峙する思想的背景を紐解くことで、彼らのunlearnの契機を実証的に明らかにした。改めて整理をすると、平賀と坂口の事例からは、これまで学校や日本で学び獲得してきた農業に関する科学知をいったん問いに曝して棄て去り、しばしば社会的に劣位に定位されがちなアマゾンに住む先住民やカボクロからの学習を通じて、圃場に適応した営農へと発展する過程が確認できた。これらは第1章で理論的な枠組を明らかにしたunlearnのまさに実践だと言えるだろう。また、小長野の半生からは、ブラジル人小農家との関係性から、日系ブラジル人対「非」日系のブラジル人小農家といった分断線を引くこと自体を批判的に再考し、小農家をも積極的に包摂したかたちで農業の普及と地域の発展に取り組んだまさにunlearnの実践と言えるのではないだろうか。

なお、小長野の半生からは、トメアスーでは後継者育成に向けた取り組みが数多く実践されてきたことが分かった。これらはまさに、日系移民の定住を可能にし、アグロフォレストリー農法を発展させてきた教育・学習の諸側面と言える。それ自体は、トメアスーの歴史を俯瞰しても、例えば戦前の移住者が戦後の移住者を受け入れ数年間面倒を見ながらアマゾンでの農法や生活の仕方を伝授していく過程がしばしば見られるように<sup>65</sup>、日系移民がアマゾンに根をはり農業を営むための相互扶助の文化として脈々と継承されてきたものとも言えるだろう。そして、そうした相互に助け合い学びあう文化のなかで、平賀や坂口、そして小長野らの実践事例から可視化されたunlearnが生起し、トメアスーの農業ないしはトメアスーの地域自体の発展させた1つの原動力となったのではないだろうか。

---

<sup>64</sup> 2010年8月11日のインタビューより。

<sup>65</sup> Masaaki Yamada、同上、1999年、トメアスー産業組合『トメアスー産業組合三十年史』（1961、p.50）などを参照。

## 終章

本研究の総括をおこなうため、終章ではまず各章のまとめを整理する。そして、本研究の意義と今後に残された課題について述べる。

### 第1節 各章のまとめ

第1章では、すでに欧米で議論されている（1）人種主義・白人優越主義、（2）セクシャリティーと異性愛主義、（3）先住民や移民・難民にかかる偏見・差別に対する unlearn の実践を整理したうえで、それらの教育実践が意図する方向性や特徴を明らかにした。これらの分析を通じて、すべての実践ではしばしば自明のものとされる社会現実やその背景にある社会構造自体に疑問を呈し再考することの重要性が明らかになった。その際に特に重要なのが自分自身と社会との関係であり、社会に対する一方的な批判や働きかけでは終始しないという点である。西欧で実践されている unlearn とは、自らが置かれた社会状況や学校教育等を通じて既に獲得してきた知識やものの見方、これから獲得しようとする知識を批判的に再考し、ときには自らがこれまで獲得してきた知識の解体を意図しつつ、自己や他者、そして社会全体へと働きかける試みであった。

次に、日本でも広く議論されている比較文学研究者であるガヤトリ・スピヴァクによる unlearn の要素を、①サバルタン化をもたらす社会構造と自己との共犯関係の承認、②サバルタンとの倫理的学習関係の構築に向けた想像力、であると整理した。そのうえで、スピヴァクによる unlearn が持続可能な開発のための教育（ESD）の社会的排除の文脈において有効であることを明らかにした。

続いて、教育や学習という観点から日本独自の文脈において議論されている鶴見俊輔の unlearn、大江健三郎による unteach（教え返す）と unlearn（学び返す）、前平泰志による unlearn と〈ローカルな知〉、並びに学校教育現場での unlearn の特徴の整理を試みた。以上の unlearn の理論を整理した結果、全ての unlearn に共通する特徴として、①現代社会や学校教育等を通じて自分自身が築き上げてきたものの見方や認識、あるいはそれを構成する知識の在り方を批判的に検討し再構築する、②再構築する際には、既存の社会構造や認識によって自己よりも社会的に劣位におかれる「他者」から自分自身が学ぶことの2つを明らかにした。

第2章では、ブラジルアマゾンのトメアスーにおける公立学校と日本語教育の歴史的変遷を明らかにした後、1980年代前半に日系移民によって取り組まれた日本語教育実践について、児童らが書いた作文を手掛かりに分析した。トメアスーの公立学校と日本語教育の歴史的変遷からは、トメアスー入植当初は南米拓殖会社（以下、南拓）が中心になり学校の基盤整備に取り組んだが、南拓が撤退して以降は移住者自らが教育基盤を整備し日本語教育や学校教育の実践を展開してきたことを明らかにした。また、そうした移住者らの教育実践を支えるため、トメアスー総合農業協同組合や日本政府の移住支援機関などが支援をおこなっていたことも明らかにした。1980年代前半に書かれた児童生徒による作文の分析からは、当時の日本語教育がブラジルアマゾンと日本との関係性において劣位に位置づけることで、日本はブラジルアマゾンよりも経済・文化的に発展しているからこそ、日本語を学ぶ必要があるといった教育の意図性を明らかにした。また、それ自体がブラジル社会で存在していたブラジルアマゾン対日本、ブラジル人対日本人といった不均衡な二分法的思考をより強固にする側面を有していたことも明らかにした。

第3章では、トメアスーの農業発展の歴史的変遷と現在取り組まれているアグロフォレストリー(森林農業)の現状を網羅的に整理した。そのうえで、トメアスーの農業発展に関連したノンフォーマル教育について明らかにするため、日本の移住支援機関(現在の国際協力機構の前進となる国際協力事業団や海外移住事業団)による農事講習会や営農セミナー、トメアスー総合農業協同組合の教育委員会並びに農事部が取り組んだ営農指導や後継者育成、そして、トメアスーの指導者的立場で多くの日系移民に影響を与えた平賀練吉らの教育やその背景にある考え方を分析した。分析結果として、それぞれの教育実践が日系移民やその後継者らがトメアスーに定着し、営農できる基盤の醸成を意図したものであったことを明らかにした。

第4章では、第1章で明らかにした unlearn の枠組みを整理した後、unlearn が農業における教育や学習において展開している可能性があることを仮説的に明示した。次に、トメアスーの農業を発展させる契機をつくった3人の日系移民を事例として取り上げ、彼らの営農実践や自然観、並びにブラジルアマゾンの日系社会においてしばしば劣位に置かれるブラジル人(主に先住民やカボクロ、小農家と称される人びと)への眼差しや彼らとの関係性の変遷を分析した。その結果として、3人の日系移民によって実践された学習が unlearn であることを実証的に明らかにした。そして、こうした日系移民による unlearn を1つの要因として、トメアスーの農業やトメアスーの地域社会の発展が進んでいることを仮説的に明示した。

## 第2節 本研究から得られた成果と今後の課題

本研究で得られた研究成果は2点ある。1点目は、アマゾンのトメアスーに渡った日系移民による教育について、フォーマルな教育とノンフォーマル教育それぞれの歴史的変遷や実践を明らかにしたこと、ブラジルの日系移民による教育実践がより多層的に把握できた点である。これまでの日系移民による教育に関する研究はサンパウロやブラジル南東部を中心に議論されてきた。また、そのなかでも教育といえば日本語教育や学校教育といったフォーマルな教育活動に重きが置かれてきた。こうした現状を踏まえ、本研究ではブラジルの日系移民による教育の多層性をノンフォーマル教育という視点とアマゾントメアスーという地理的特性を踏まえて部分的ではあったが描き出すことができた。

本研究の成果として特筆すべきは、ノンフォーマル教育に注目することで可視化された学校外の学習者による多様で豊かな教育・学習実践であろう。「子どもには「いま」や「ここ」よりももっと良い生活をしてもらいたい、将来は不自由なく暮らしてほしい」といった願いは、子どもを持つ親の多くが持つものではないだろうか。筆者自身を振り返ってみれば、私の家庭は決して経済的に裕福な方ではなかった。しかし私の両親は「自分たちは高校しか卒業していないから子どもにはせめて大学は出てもらいたい」「自分たちよりも良い仕事につけるように」「自分たちが生まれ育ったような田舎町ではなく、もっと都会のもっと生活環境の良いところで生活ができるように」と筆者への教育に対する投資を厭わなかった気がする。ブラジルアマゾンのトメアスーで子どもたちの教育に熱心に取り組んだ日系移民たちも同様の気持ちだったのかもしれない。いや、それ以上に、日系移民が自ら捨てた「あそこ」の郷里の日本が経済・社会的に豊かになる現状を目の当たりにして、なおのこと「いま」や「ここ」よりもより良い生活を子どもたちにたくそう教育に対する希望を強く抱いたのかもしれない。

そうした日系移民の多くは自分たちの子どもに必死になって教育をおこなった。子どもたちが優秀な高校や大学へと進学し社会的地位を勝ち取るため、親たちは日本への出稼ぎにも進んで行った。1970～1980年代には、ブラジルで最も優秀な大学として考えられているサンパウロ大学の構内に「あなたがサンパウロ大学に入りたいと思ったら、日本人を一人殺そう」という垂れ幕が下がるくらい多くの日系人子弟が大学へと進学し、高学歴化を押しすすめた<sup>1</sup>。「日系移民は教育に熱心である」という語りは広く受容され、日系移民の教育に関する研究はそうした言説を下支えする基盤の一助になっている。

そうしたなかで日系移民の教育研究において後景に退いたのが、「いま」や「ここ」での生活を豊かにすることを意図した教育であった。換言すれば、学歴や進学、社会的地位の向上等を至上命題としないうノンフォーマル教育と、貧しさなどを理由に公教育を受ける権利を行使することのできなかった人びとの存在であった。

アマゾンという言葉は日本では魅力があるんだよね。ところがあそこは、2万、3万、10万と入ったところで、三代目には退化して猿になってしまうよ。そういう所なんだが…。

この発言は、サンパウロで研究サークル「土曜会」（後のサンパウロ人文科学研究所へと発展）を立ち上げたアンドウ・ゼンパチ（安藤潔）（1900-1983）によるものである<sup>2</sup>。これは、戦後アマゾンへの移住が国策として開始される以前に、戦前アマゾンへと渡った日系移民の状況の悲惨さを知らずして日本の新聞がアマゾン移住を大々的に取り上げていることに対し問題意識を持って語られたものである。アンドウが発言したこの座談会には、本研究でも述べた山本喜誉司や半田知雄、そしてブラジルの協同組合の父としても知られるコチア組合の初代理事長でもあった下元健吉や、本研究で度々引用したブラジルの日系移民研究の草分けでもある斎藤廣志等も参加している。このときのアンドウの座談会は、前山隆によれば「それはアマゾン移住時期尚早論であり、十分な研究と準備の伴わない移住への警告でもあり、戦前にアマゾン一帯に移住した日本人の大多数がサンパウロ方面へ転住してしまった実情などを一言で表現したもの」であった<sup>3</sup>。この発言は当のアマゾンに住む人びとの耳にも入り物議を醸している<sup>4</sup>。アンドウの発言の背景には、本論で触れたとおり、戦前・戦後とアマゾンへ日本から移住した多く

<sup>1</sup> 石川友紀、宮尾進、本山省三、森幸一、柳下宙子、三田千代子、丸山浩明「（共同討議）ブラジル日本移民研究における「空白」と「断絶」」丸山浩明編「ブラジル日本移民百年の奇跡」明石書店、2010、p. 70。

<sup>2</sup> アンドウ・ゼンパチ、半田知雄、河合武夫、木村義臣、増田秀一、鈴木悌一、斎藤廣志、下元健吉、植木隆治、山本喜誉司「在伯邦人社会と移民問題」中央公論新社『中央公論』66（6）、1951、p. 88。

<sup>3</sup> 前山隆『移民の日本回帰運動』NHK ブックス、1982、p. 18。

<sup>4</sup> 1958年から約10年間トメアスー産業組合の専務理事を務めた阿部昇は、トメアスーにおいて胡椒に次ぐ第二作物の研究の必要性を踏まえたうえで、「地方の土質と機構に適した国際商品の性格を有する産物が見出されぬ限りアマゾン流域の日本人農業者の移住地も永久に現在の殻を破り得ず、生活の向上、文化的生活を営むことは至難なことであり、悲惨なる末路となり得る可能性がある。南伯のひとびとがアマゾンに3年すめば猿になるという言葉は我々としては實に心すべきことである」（阿部昇「アマゾン地方に於ける農業と経済」（トメアスー産業組合『トメアスー産業組合三十年史』1961、p. 78）と述べている。なお、ここでは「3世代」を「3年」とする誤認が生じている。1958年9月8日付の朝日新聞朝刊6ページ「アマゾン入植者の実状 働き者には天国 千家族・七千の日系活躍」という記事の冒頭にも「3年住めばサルになる」と言われるアマゾンである」といった文章や、また戦後にアマゾン

の人びとがマラリア等の風土病や慣れない生活環境、成果を上げることが困難だった営農、経済的不況等を理由に開拓地に見切りをつけて、サンパウロ等の南東部地域やアマゾン河口の都市ベレンへと再移住した現状がある。御荘金吾は、トメアスーの戦前の入植状況についてトメアスーの農業技師であった生島重一に聞き取りをおこなったが、生島は当時トメアスーに残った人びとについて以下のように述べている。

脱耕転出を計画する人は、三度の飯を減らしても、炎天下で終日働き、主として植民地奥の原始林を無断で伐採して略奪農を営み、広大な米作地を経営して、収穫した籾を売って旅費を作り、ベレーン市郊外や南伯方面に逃げ出したのです。また入植者全体としても、アカラ植民地の将来に多くの期待は持たず、結局経済的に脱耕転出の不可能な人たちや、家族構成の悪い女子供の多い過程とか、労働能率のよくない人々が仕方なく残留して、アマゾン開拓の捨石となる覚悟で、アカラ植民地に骨を埋めようと腹を決めたのです<sup>5</sup>

また 1960 年代後半から 1970 年代前半トメアスーで胡椒の病害が発生した際にも、資本のある大規模農家は胡椒単作経営をつづけ転出が可能であったが、中小規模農家はトメアスーに残る選択肢しかなく、胡椒の病害に苦しみながら何とかして生活を営まなければならなかったという<sup>6</sup>。その状況は「緑の地獄」<sup>7</sup>と揶揄されてもおかしくないようなものだったに違いない。このようなトメアスーの移民が直面した状況を踏まえるならば、第 4 章で論じた小長野の半生を想起するまでもなく、日本語を学ぶための授業料や教材代、学校までの通学にかかる費用、そもそも勉学に励むための時間等を工面することができず、ブラジルの公的な学校や日本語学校で学ぶことができなかった日系移民は多く存在していた可能性がある。親や周りの大人から故郷への憧れや郷里に対する想いを聞かされながら、その土地に住み続ける選択肢しか有していなかった人びと。家族を養うため、貧しさから抜け出すために日本語を学ぶ余裕などなく、親や周りの大人と同じように遠い故郷へ思いを馳せたり、憧憬を抱くことができなかった人びと。そんな日系移民の「いま」や「ここ」を少しでも豊かにするために、アマゾンのトメアスーに人びとが根をはって安定した生活を営むために実践されたのが、まさに本研究で取り上げたノンフォーマル教育であった。CAMTA や移住支援団体等によって積極的に取り組まれた先進地研修などのノンフォーマル教育は、当時のトメアスーの未来を担う後継者の育成に寄与した。小長野のような後継者は先達の意図を汲んで主体的に学でいった。小長野が経験を積み農業でも安定し始めると、次は若手を育成する立場となって「日系」という範疇にとらわれることなく後継者の育成に貢献していった。CAMTA の営農指

---

へ移住した人びとのあいだでもやはり「アマゾンに 3 年暮らすと猿（マカコ）になる」と言われていた（岡村淳『忘れられない日本人移民 ブラジルへ渡った記録映像作家の旅』港の人、2013、p. 85）。

<sup>5</sup> 御荘金吾『アマゾンは流れる日本人苦闘史』家の光協会、1976、p. 58。

<sup>6</sup> 田中規子「アマゾン地域における日系移民の農業展開と協同組合の役割：一トメアスー総合農業協同組合を事例として」『酪農学園大学紀要人文・社会科学編』24(2)、2000、p. 326。

<sup>7</sup> この言葉は 1954 年にアマゾンを訪問した評論家の大宅壮一がアマゾンを「緑の地獄」と評したことで広く知られるようになった。なお、東京農業大学に設けられた拓殖学科の初代学科長でトメアスーの坂口陞や他の南米へ移住した多くの学生に多大な影響を与えた杉野忠夫は、大宅に対して「アマゾンは緑の天国」だと反論している（杉野忠夫『海外拓殖秘史—ある開拓運動者の手記—』文京書院、p. 192。）

導は、アマゾントメアスーの農業が発展し続けるための知識や技術、自然や農業との向かい方、考え方を農家らに伝承しつつ、今日世界的に注目を浴びるアグロフォレストリーの形成にも貢献した。これらのノンフォーマルな教育以外にも、本研究では取り扱うことができなかった実践は多岐にわたったに違いない。そうしたノンフォーマル教育に注目することで、学校教育や日本語教育に焦点化するだけではこぼれ落ちる学習主体や、そうした人びとによる多様で豊かな教育や学習の実践を可視化することができたのである。

2点目は、unlearn の概念枠組みを整理し且つそれを実証的に明らかにできたことである。unlearn は、これまでガヤトリ・スピヴァクや鶴見俊輔、大江健三郎、前平泰志等の代表的な論者によって頻繁に使用されてきた。それに影響を受けた多数の研究者は unlearn を鍵概念として自らの研究を論じてきたし、また unlearn を目指した実践にも取り組んできた。しかしながら、日本国内においてはその unlearn が語られた思想的背景やそれぞれの論者の unlearn の共通点や差異にまで踏み込み整理した議論はなされてこなかった。また、具体的にどういった実践や学習を unlearn と規定するのもこれまで議論されてこなかったと言って良い。したがって、本研究を通じて unlearn の理論が整理され且つそれがブラジルアマゾンの日系農家による学校外の学習から実証的に解明できたのは、今後の unlearn に関する研究の深化にもつながるだろう。それ自体は、unlearn が鍵概念として広く用いられるようになった背景にある既存の学校教育の陥穽を乗り越える、新たな学習理論の構築に向けた議論にも寄与するものと言えるだろう。

学校教育やそれが意図するところの発展 (development) を unlearn と関連させて考察する際には、例えば、思想家のトリン・T・ミンハの議論が参考になる。ミンハは知識と権力の関係性について議論するなかで「普遍的知識を打ち立てる近代のプロジェクトは、1つのもの (光) のために別のもの (闇) を排除することで、文明／未開、進歩／退歩、改革／停滞という自己満足的な二分法に埋没してしまった。」と述べている<sup>8</sup>。また、彼女はイヴァン・イリイチ (Ivan Illich) の研究を引用し<sup>9</sup>、今日の「発展 (development)」という概念には外部の者を援助が必要な者とする思想が古くはその外部者を、野蛮人、次には異端者、次は異教徒、野人、「ネイティヴ」、そして低開発国民と呼んできたことを踏まえ、そうした人びとが「欠如」しているという幻想を創り出すことと、欠如した者を「救う」という使命は、常に同時に誕生するとしている<sup>10</sup>。ミンハやイリイチによる発展や知識、教育 (啓蒙) とそれに関係する権力論の議論は、序章でも述べたフレイレの銀行型教育批判とも関連するであろう。つまり、unlearn を存在させる所以としての学校教育ないしは learn に対する批判とは、教師らが科学的・普遍的な知識を「欠如」した学習者に教える (啓蒙する) という営為を通じた、既存の二分法的権力構造や思考のさらなる強化に対してであった。しかしながら、本研究で着目したノンフォーマル教育や特に農家らの学習においては、何よりも「いま」や「ここ」に重きを置くことでこうした二分法的思考を批判し、それ自体を逆に脱構築する営みであったと言ってよいだろう。したがって、学校における教育や学習の限界やそれに対する批判を乗り越えようとするならば、本研究で実証的に明らかにした unlearn に

<sup>8</sup> トリン・T・ミンハ (竹村和子訳)『女性・ネイティヴ・他者 ポストコロニアリズムとフェミニズム』岩波書店、1995、p. 63。

<sup>9</sup> Ivan Illich, “Vernacular Values”, *Philosophica*, 26, 1980, pp. 47-102.

<sup>10</sup> トリン・T・ミンハ、同上、1995、p. 86。

注目し、それを例えば学校教育等で学習論として位置付け、教員が学習者らと実践し希求することに意義があると言えるだろう。

ただし、残された課題も多い。例えば、トメアスーにおける日本語教育や学校教育については、現存する資料が限られていたため、表層的な史実を明らかにしたに過ぎず、実際に取り組まれた教育実践の内実や教育をすすめた教員の思いなどをより掘り下げて明らかにすることができなかった。したがって、トメアスーの日系移民による教育の研究を今後深化させていくうえでは、日本語教育や学校教育にこれまで従事してきた人びとや、実際に教育を受けて育ってきた人びとへのインタビュー調査等が必須であろう。また、ノンフォーマル教育についても同様である。トメアスーにおいてノンフォーマル教育をすすめた組織は、本稿で論じた以外にも例えばトメアスー農村振興協会や農友会、文化協会、自治会、婦人会、NGO など多数ある。先述したように、農業を通じて日系農家からブラジル人農家らが学ぶ機会も多かったに違いない。したがって、トメアスーの日系移民によるノンフォーマル教育をより総合的に明らかにするためには、上記で述べた組織に関する調査や日系移民が営む農場でのアクションリサーチ等が必須だと言える。また、ブラジル南東部の日系移民によるノンフォーマル教育の比較研究ができなかったことも悔やまれる。このような比較研究ができれば、よりブラジリアマゾントメアスーにおける教育の精緻な議論や具体的な特徴ないしは研究意義が相対化して論じられたはずであろう。今後の研究課題である。

unlearn に関する研究の課題も山積している。本論では unlearn の理論的枠組みを明らかにしたうえで、それが存在することを実証的に明らかにした、あくまでも unlearn に関する研究であった。したがって、社会教育学や生涯教育・学習等で既に学習論として議論がすすめられている拡張的学習<sup>11</sup>や、習慣かされた思考の在り方や認識の方法・枠組を省察的・批判的に検討しそれらを改めていく過程としての J・メジロー (Mezirow) の変容的学習 (transformative learning)<sup>12</sup>等との比較に基づく unlearn の可能性や限界にまで言及することができなかった。また、例えば「村を捨てる学力」を育む近代の学校教育に対するオルターナティブな教育として近年注目されている「場の教育(地域・土地に根差した教育)」(Place Based Education) との関係性等も検討することができなかった<sup>13</sup>。こうした比較研究ができてはじめて既存の学校教育や学習を乗り越える新たな学習理論の提起にもつながるだろう。

---

<sup>11</sup> ユーリア・エンゲストローム (山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取善宏・高橋登訳)『拡張による学習—活動理論からのアプローチ—』1999 等を参照。

<sup>12</sup> Mezirow, J. *Transformative Dimensions of Adult Learning*, San Francisco, 1991.

<sup>13</sup> 「場の教育」については、岩崎正弥・高野孝子『場の教育—「土地に根ざす学び」の水脈(シリーズ地域の再生)』農文協、2008 を参照。

## 主要参考文献一覧

- 青木公『甦る大地セラード 日本とブラジルの国際協力』国際協力出版会、1995。
- 赤尾光春・早尾貴紀編『ディアスポラの力を結集する—ギルロイ・ボヤーリン兄弟・スピヴァク』松籟社、2012。
- 赤尾光春・早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読む離散を架橋するために』明石書店、2009。
- 朝岡幸彦「グローバリゼーションのもとの環境教育・持続可能な開発のための教育（ESD）」日本教育学会編『教育学研究』72(4)、2005、pp. 112-125。
- 朝岡幸彦、酒井佑輔「〈ローカルな知〉と unlearn 概念に関する考察：鈴木敏正「地域創造教育」論を手がかりとして(鈴木敏正教授退職記念号)」北海道大学大学院教育学研究院『北海道大学大学院教育学研究院紀要』2012、pp. 29-41。
- 阿部謹也『「教養」とは何か』講談社現代新書、1997。
- 安藤丈将「鶴見俊輔の小集団と民主主義」『現代思想』青土社、43 巻、2015、pp. 108-117。
- アンドウ・ゼンパチ、半田知雄、河合武夫、木村義臣、増田秀一、鈴木悌一、斎藤廣志、下元健吉、植木隆治、山本喜誉司「在伯邦人社会と移民問題」中央公論新社『中央公論』66 (6)、1951、pp. 86-99。
- 石丸和人「インタビュー トメアスの坂口陸さんに聞く「アマゾン移住半世紀森林と作物の共生をはかる」」海外日系人協会『海外日系人』第 59 号、2006、pp. 34-43。
- 泉靖一・斎藤廣志『アマゾン その風土と日本人』古今書院、1954。
- 石川雅典「出稼ぎ創出の実態と家庭・地域生活—アマゾン地区日経集団地の留守家族、出稼ぎ経験者の調査から—」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 (上) 論文篇・就労と生活』明石書店、1995、pp. 585-604。
- 石川友紀、宮尾進、本山省三、森幸一、柳下宙子、三田千代子、丸山浩明「(共同討議) ブラジル日本移民研究における「空白」と「断絶」」丸山浩明編「ブラジル日本移民百年の奇跡」明石書店、2010、pp. 67-83。
- 石橋憲二『アマゾンの一隅から』自費出版、1986。
- 今村光章、石川聡子、井上有一、塩川哲雄、原田智代「Bob Jickling の「持続可能性に向けての教育(EfS)」批判」日本環境教育学会編『環境教育』13(1)、2003、pp. 22-30。
- 伊豫谷登士翁「方法としての移民 移動から場をとらえる」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』有信堂、2007、p. 3-23。
- 池沢充弘「unlearn、unteach する「女たち」の語り：大江健三郎『水死』における憑坐と教育-言語態」言語態研究会『言語態』2015、pp. 47-65。
- 岩崎正弥・高野孝子『場の教育—「土地に根ざす学び」の水脈(シリーズ地域の再生)』農文協、2008。
- 上塚芳郎・中野順夫『上塚司のアマゾン開拓事業』自費出版、2013。
- 上野俊哉『ディアスポラの思考』筑摩書房、1999。
- 上村忠男、太田好信、本橋哲也「討議 スピヴァクあるいは発話の場のポリティクス」『現代思想』青土社、vol. 27-8、1999、pp. 42-67。
- 内村悦三『実践的アグロフォレストリー・システム』国際緑化推進センター、2000。



牛田千鶴編『南米につながる子どもたちと教育—複数文化を「力」に変えていくために—』行路社、2014。

エットーレ・ジェルピ（前平泰志訳）『生涯教育—抑圧と解放の弁証法』東京創元社、1983。

エドワード・サイード（板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳）『オリエンタリズム 上』平凡社ライブラリー、1993。

遠藤十亜希『南米「棄民」政策の実像』岩波現代全書、2016。

小内透編著『講座 トランスナショナルな移動と定住 第2巻 在日ブラジル人の教育と保育の変容』お茶の水書房、2009。

大江健三郎『定義集』朝日文庫、2016。

大江健三郎「さようなら、私の本よ！」講談社、2006。

大澤聡「「対話」の条件—大江健三郎「おかしな二人組」三部作」言語対研究会『言語態』2009、pp. 109-121。

大野盛雄・宮崎信江「アマゾンにおける仕込について—ジュート生産の場合—」多田文男『アマゾンの自然と社会』東京大学出版会、1957、pp. 265-317。

大貫良夫（編）『ラテン・アメリカを知る事典』平凡社、1999。

岡村淳『忘れられない日本人移民 ブラジルへ渡った記録映像作家の旅』港の人、2013。

梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の见えない定住化—日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク—』名古屋大学出版会、2005。

カスタンニャール日伯文化協会「日系人の教育意識（日本語教育・ブラジル公教育）についての—考察—ブラジル・カスタンニャール郡における教育意識調査より—」国際協力事業団『移住研究』No. 33、1996、pp. 89-115。

鏑木功「日語学校児童生徒の意識について—アマゾン日系2、3世児童生徒の日本語学習への関心度—」国際協力事業団『移住研究』No. 18、1981、pp. 28-42。

蒲生正男「アマゾンにおける日系コロニアの同化過程—トメ・アスウ植民地—」泉靖一編『移民：ブラジル移民の実態調査』古今書院、1957、pp. 465-522。

上村昌司「アマゾンにおける営農指導について—上村延太郎氏の功績とその背景—」国際協力事業団『移住研究』No. 21、1984、pp. 36-42。

ガヤトリ・スピヴァク（上村忠男、本橋哲也訳）『ポストコロニアル理性批判 消え去りゆく現在の歴史の為に』月曜社、2003、pp. 415-416。

ガヤトリ・スピヴァク（鶴飼哲監修 本橋哲也、新田啓子、竹村和子、中井亜佐子共訳）『スピヴァク、日本で語る』みすず書房、2009、

ガヤトリ・スピヴァク（鈴木英明訳）『ナショナリズムと想像力』青土社、2011。

ガヤトリ・スピヴァク（上村忠男訳）『サバルタンは語ることができるか』みすず書房、1998。

河口和也『クイア・スタディーズ』岩波書店、2003。

木村聖哉・鶴見俊輔『「むすびの家」物語り ワークキャンプに賭けた青春群像』岩波書店、1997。

楠原彰『学ぶ、向き合う、生きる 大学での「学びほぐし(アンラーン)」：精神の地動説のほうへ』太郎次郎社エディタス、2013。

久野収、鶴見俊輔『現代日本の思想—その五つの渦』岩波書店、1956。

黒田公男「アマゾン・ジュートにかけた青春ー高島義雄元アマゾニア産業研究所員ー」国際協力事業団『移住研究』No. 12、1976、pp. 21-23。

小泉康一「現代世界の人の移動ー複合する危機と多様な人々」小泉康一・川村千鶴子編『多文化「共創」社会入門ー移民・難民とともに暮らし、互いに学びあう社会へー』慶應義塾大学出版会、2016、pp. 102-112。

小島祥美『外国人の就学と不就学社会で「見えない」子どもたち』大阪大学出版会、2016。

KOBE 外国人支援ネットワーク編『在日マイノリティースタディーズ I 日系南米人の子どもの母語教育』2001。

国際協力事業団『移住事業国別調査報告書(北部ブラジル)』1991。

国際協力事業団移住事業部『ブラジルにおける日本語学校巡回指導報告書』1986。

国際協力事業団『移住事業国別調査報告書 北部ブラジル』1991。

国際協力事業団『ブラジル日系人実態調査報告書』1990。

国際協力事業団『南米(主としてブラジル)における日語教育事情調査指導報告書』1982。

国際協力事業団「現地の動き 移住地と共に歩んだトメアス日本語学校」国際協力事業団『海外移住(384)』1980、pp. 14-15。

国際協力事業団『アマゾン地域の農産業と日本人(集団地のその農業)』1988。

国際協力事業団『トメアスー移住地マラクジャー・ジュース加工対策事業報告書』1991。

国際協力事業団『ブラジル国アマゾン持続的農業開発基礎調査団報告書』1997。

子安潤『反・教育入門ー教育課程のアンラーン』白澤社、2006。

斎藤廣志「流動する邦人移住者ーパラ州モンテ・アレグレ植民地ー」多田文男編『アマゾンの自然と社会』東京大学出版会、1957、pp. 160-220。

斎藤廣志「アマゾン辺境の移住者ーリオ・ブランコ直轄領タイオーン植民地」多田文男編『アマゾンの自然と社会』東京大学出版会、1957、pp. 109-174。

西藤雅夫「アマゾンにおけるアヴィアードと産業組合(〈特集〉経済学)」滋賀大学経済学会『彦根論叢』1961、p. 133-155。

酒井直樹『ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』東京大学出版会、2006。

栄田剛「移住地農業生産の展開過程ー第2 トメアスー、アルト・パラナ、サンファン移住地の比較考察ー」国際協力事業団『移住研究』No. 19、1982、pp. 82-99。

栄田剛「トメアスー農業の動向概観」国際協力事業団『移住研究』No. 14、1977、pp. 93-109。

坂口陞「アマゾン農業と日本の国際協力」友松篤信、桂井宏一朗、岸本修編『増補版 国際農業協力論ー国際貢献の課題と展望ー』古今書院、1999、pp. 224-234。

坂口陞「この森に生かされている」国際協力事業団『海外移住』2000、pp. 2-5。

坂口陞「日本人化への疑い」『中央公論』中央公論社、1994、pp. 75-78。

坂口満宏「出移民の記憶」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』お茶の水書房、2011、pp. 80-103。

崎山政毅「文体に抗する「文体」ーサバルタン研究の批判的再考のための覚書」『思想』岩波書店、1996、pp. 146-177。

定森徹『アマゾン西部におけるアグロフォレストリー普及の可能性とその制約条件ーマニコレ市における普及活動を事例としてー』日本福祉大学大学院 国際社会開発研究科修士論文、2011。

椎野信雄「育児の社会化について」『文教大学国際学部紀要』第14巻2号、2004、pp. 113-124。  
 品川ひろみ「トメアスーの教育と保育：日系関連の教育施設を中心として」北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室『『調査と社会理論』・研究報告書』2008、pp. 123-132。  
 渋沢史料館『企画展図録 日本人を南米に発展せしむ 日本人のブラジル移住と渋沢栄一』2008。  
 清水睦美・「すたんどばいみー」編『いちょう団地発！外国人の子どもたちの挑戦』岩波書店、2009。  
 ジョン・ヘミング（国本伊代・国本和孝訳）『アマゾン：民族・征服・環境の歴史』東洋書林、2010。  
 新藤慶、小野寺理佳、濱田国佑「僻地農村におけるデカセギの影響」北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室『日系ブラジル人のトランスナショナルな移動と定住（外国人集住地域の社会学的総合研究；その8）』2009、pp. 281-312。  
 杉野忠夫『海外拓殖秘史—ある開拓運動者の手記—』文京書院、1959、p. 192。  
 第2トメアスー移住地20年史編集委員会『アマゾンに挑む 入植20周年史』1984。  
 瀧藤千恵美「ボイブンバに見るアマゾンの描かれ方—トアードに登場する理想かされたカボクロ像」名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』2004、pp. 203-215。  
 田中規子「アマゾン熱帯地域における日系協同組合の経営危機とその要因分析—トメアス総合農業協同組合を事例として—」北海道大学大学院農学研究院『農経論叢』No. 52、1996、pp. 181-191。  
 田中規子「アマゾン地域における日系移民の農業展開と協同組合の役割：—トメアス総合農業協同組合を事例として—」『酪農学園大学紀要 人文・社会科学編』24(2)、2000、pp. 289-340。  
 對木佐玖「アカラ植民地事情 其一」拓務省拓務局『ブラジル移住者便り』拓務省拓務局、1934、pp. 103-110。  
 辻小太郎著『ブラジルの同報を訪ねて』日伯教会、1931。  
 津田英二「学ぶ側に視点を置いた理論」末本誠・松田武雄編著『新版 生涯学習と地域社会教育』春風社、2010、pp. 167-189。  
 津野幸人『農学の思想』農山漁村文化協会、1980。  
 角田房子『アマゾンの歌 日本人の記録』中公文庫、1976。  
 鶴見俊輔「Unthink をめぐって」京都精華大学出版会編『リベラリズムの苦悶』阿吽社、1994、pp. 2-19。  
 鶴見俊輔『教育再定義への試み』岩波現代文庫、2010。  
 鶴見俊輔「教育を問う」佐伯胖他編『岩波講座1 現代の教育 危機と改革 いま教育を問う』岩波書店、1998、pp. 3-29。  
 鶴見俊輔・関川夏央『日本人は何を捨ててきたのか 思想家鶴見俊輔の肉声』筑摩書房、2016。  
 鶴見俊輔『思い出袋』岩波新書、2010。  
 鶴見俊輔『鶴見俊輔座談 社会とは何だろうか』晶文社、1996。  
 鶴見俊輔・重松清『僕はこう生きている 君はどうか』潮文庫、2016。  
 寺神戸曠『ボリビア移民の真実』芙蓉書房出版、2009。  
 Dean Current, Ernst Lutz, Sara J. Scherr（林幸博訳）「アグロフォレストリーの農民の費用便益(The Cost and Benefits of Agroforestry to Farmers)」農政調査委員会『のびゆく農業—世界の農政—』No. 857、1996。  
 トメアスー開拓50周年祭典委員会『みどりの大地トメアスー トメアスー開拓50周年史 1929-1979』1985。

トメアスー開拓 70 周年祭典委員会記念誌委員会『アマゾンの自然と調和して トメアスー開拓 70 周年祭典委員会記念誌』2009。

トメアスー産業組合『トメアスー産業組合三十年史』1961。

トメアスー産業組合『トメアスー植民地案内』1975。

トメアスー総合農業協同組合『トメアスー総合農業協同組合創立 60 年史 1949-2009』2009。

トリン・T・ミンハ（竹村和子訳）『女性・ネイティヴ・他者 ポストコロニアリズムとフェミニズム』岩波書店、1995。

内藤直樹・山北輝裕編『社会的包摂／排除の人類学—開発・難民・福祉』昭和堂、2014。

長岡正雄「アマゾン流域における適正農法に関する考察」国際協力事業団『移住研究』No. 21、1984、pp. 29-35。

長尾武雄「昭和初期の海外移植民事業」海外移住事業団『移住研究』No. 6、1970、pp. 19-24。

長尾武雄「アマゾン開拓の先駆者たち」海外移住事業団『移住研究』No. 8、1972、pp. 59-65。

永田恵十郎「自然認識と人間の発達」『農業の教育力 人と自然を活かす道』農山漁村文化協会、1990、pp. 160-188。

長野正「中南米における日本語教育の課題」国際協力事業団『移住研究』No. 32、1995、pp. 61-91。

二井紀美子「ブラジルの生涯学習：1985 年民政移管後の民衆教育を中心に」名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯・キャリア教育研究センター『生涯学習・キャリア教育研究』2009、pp. 17-26。

二井紀美子「ブラジルの識字教育—連邦直轄区の取り組みを中心に—」新海英行・松田武雄編著『世界の生涯学習現状と課題』大学教育出版、2016、pp. 131-148。

西野瑠美子『エルクラノはなぜ殺されたのか 日系ブラジル人少年・集団リンチ殺人事件』明石書店、1999。

西沢利栄、本郷豊、山田祐彰、小池洋一『アマゾン—保全と開発』朝倉書店、2005。

仁科雅夫「“こしょう”の需給事情」国際協力事業団『移住研究』No. 20、1983、p. 85。

仁科雅夫「アマゾン日系農家の現状と問題点」日本熱帯農業学会『熱帯農業』No. 3、1983、pp. 198-204。

仁科雅夫「導入作物の選定—移住地作物導入上留意すべき事項」国際協力事業団『移住研究』No. 19、1982、pp. 100-104。

西村卓『「老農時代」の技術と思想』ミネルヴァ書房、1997。

日本海外協会連合会アマゾン支部「第二回海協連アマゾン支部指導員連絡協議会議事録」1959。

根川幸男『戦前・戦中期ブラジルにおける日系移民子弟教育の史的研究』総合研究大学院大学博士学位請求論文、2013。

根川幸男「海を渡った修学旅行：戦前期ブラジルにおける日系子弟の離郷体験（国境を越える人の移動：グローバルな視点から）」日本移民学会編集委員会『移民研究年報』2015、pp. 37-55。

根川幸男「近現代日本人の海外体験と日系移植民史の時期区分 - 「連動史」を描くために」根川幸男/井上章一編『越境と連動の日系移民教育史』ミネルヴァ書房、2016、pp. 1-29。

根津朝彦「信頼の種をまく人、鶴見俊輔」『現代思想』青土社、2015、pp. 212-215。

野口敬子「上塚司と日本高等拓殖学校-アマゾン開拓について」国際協力事業団『移住研究』No. 27、1990、pp. 76-86。

野口敬子「上塚司と日本高等拓殖学校（完結編）」国際協力事業団『移住研究』No. 30、1993、pp. 185-235。

野元弘幸「外国人の子どもたちの排除の構造と対抗的教育実践の原理—日系ブラジル人の子どもたちとブラジル人学校を中心に—」日本社会教育学会編『日本社会教育学会年報(社会的排除と社会教育)』第50集、2006、pp.104-116。

パウロ・フレイレ(三砂ちづる訳)『被抑圧者の教育学』亜紀書房、2010。

林丈一「略説・アマゾンの農業」国際協力事業団『移住研究』No.14、1977、pp.80-92。

HANDS『アマゾン西部におけるアグロフォレストリー普及に関する調査・セミナー報告書』2009。

半田知雄『移民の生活の歴史—ブラジル日系人の歩んだ道』サンパウロ人文科学研究所、1970。

平賀練吉「アマゾン流域の開発と日本人移民の立場」多田文男編『アマゾンの自然と社会』東京大学出版会、1957、pp.99-120。

深沢正雪「第2章日系メディア史」ブラジル日本移民百周年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史 第3巻 生活と文化1』2010、pp.180-182。

福原八郎「アマゾン流域の開発」文部省実業学務局編『移植民教育』1929、p.209-254。

藤田省三、久野収、鶴見俊輔『戦後日本の思想』岩波書店、1959。

伯国東京農大会北伯分会『東京農大卒業生アマゾン移住50周年記念誌—ゴリラのように逞しく、神のごとき愛と英知を—』2008。

ボニー・マッケルヒニー「ネオリベラル多文化主義とカナダの謝罪の時代」大阪大学未来戦略機構第五部門未来共生イノベーター博士課程プログラム『未来共生学』2016、pp.33-68。

本郷豊・細野昭雄『ブラジルの不毛の大地「セラード」開発の奇跡』ダイヤモンド社、2012。

前田隆『移民の日本回帰運動』NHK ブックス、1982。

前平泰志「〈講演記録〉ガストン・ピノーを語る：人と仕事」京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』2010、pp.177-184。

前平泰志「〈ローカルな知〉の可能性」日本社会教育学会編『〈ローカルな知〉の可能性 もうひとつの生涯学習を求めて』東洋館出版社、2008、pp.9-23。

増田秀一『エメボイ実習農場史』エメボイ実習農場史刊行委員会、1981。

松下佳代「大学における「学びの転換」とは-unlearn 概念による検討—」東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』東北大学出版会、2010、pp.5-15。

松田博「A・グラムシのサバルタン論の生成に関する覚書」立命館大学産業社会学会編『立命館産業社会論集』第39巻1号、2003、pp.151-160。

丸弘毅「通商局 南拓アカラ植民便り」外務省通商局『移民情報12月』1929、pp.76-79。

丸弘毅「植民地気分横溢のアカラ植民地」日本植民通信社『植民3月』1930、pp.143-45。

丸山恭司「教育という悲劇、教育における他者：教育におけるコロニアリズムを超えて」教育思想史学会編『近代教育フォーラム』2002、pp.1-13。

丸山英樹『ノンフォーマル教育による社会参加とエンパワメント—ベルリン在住トルコ女性移民の社会福祉事業を事例として—』2013、学位論文。

丸山英樹・太田美幸編『ノンフォーマル教育の可能性—リアルな生活に根ざす教育へ』新評論、2013。

御荘金吾『アマゾンは流れる 日本人苦闘史』家の光協会、1976。

ミックメーヒル・カイラン・松元エリカ「日本における言語教育環境の移民への影響—日系人帰国生家

族の経験から」森本豊富・根川幸男編『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向かって—』明石書店、2012、pp. 118-135。

宮尾進「ブラジル日系社会の特徴と日伯学園創設の意義」丸山浩明編『ブラジル日本移民百年の奇跡』明石書店、2010、p. 255-266。

宮島喬『外国人の子どもの教育 就学の現状と教育を受ける権利』東京大学出版会、2014。

村上克尚「対話のネットワークとしての「私」：大江健三郎『さようなら、私の本よ！』における諸概念の分析を通じて」東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻『言語情報科学』2013、pp. 259-275。

モアシル・ガドッチ（野元弘幸訳）「ラテンアメリカにおける民衆教育の歴史と思想」（江原裕美編『内発的發展と教育』新評論、2003、pp. 356 - 382。

本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波書店、2005。

森脇礼之・古杉征己・森幸一「第3章 ブラジルにおける子弟教育（日本語教育）の歴史」ブラジル日本移民百周年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会『ブラジル日本移民百年史 第3巻 生活と文化 1』2010、pp. 251-370。

森幸一「ブラジル日本移民・日系「研究」の回顧と展望」丸山浩明『ブラジル日本移民百年の軌跡』明石書店、2010、pp. 13-66。

森幸一「日系集団地にとっての「出稼ぎ」のもつ意味」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 （上）論文篇・就労と生活』明石書店、1995、pp. 547-584。

守田志郎『農業にとって技術とはなにか』東洋経済新報社、1976。

守田志郎『農法 豊かな農業への接近』農山漁村文化協会、1972。

安岡健一『「他者」たちの農業史 在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』京都大学学術出版会、2014。

安田浩一『ルポ 差別と貧困の外国人労働者』光文社新書、2010。

野生生物を調査研究する会「植林 NGO 奮闘記 「現地のニーズを掘り起し、現地リソースを活用し、現実にあった活動を！」（公益財団法人国際緑化推進センター『緑の地球』通巻 109 号、2014、pp. 6-9。

山本喜誉司記念誌編集委員会編『山本喜誉司賞の歩み：ブラジル日本移民 100 周年記念/ブラジル農業発展に貢献してきた先駆者達』ブラジル日本文化福祉協会山本喜誉司賞選考委員会、2009。

山本正三・松本栄次「アマゾン・トメアス入植地における日系人農業の変容」『獨協経済』No. 70、1999、pp. 7-15。

山本長次『評伝・日本の経済思想 11 武藤山治 日本の経営の祖』日本経済評論社、2013。

ユーリア・エンゲストローム（山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取善宏・高橋登訳）『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』新曜社、1999。

吉田文（「グローバル人材の育成」と日本の大学教育：議論のローカリズムをめぐって（〈特集〉グローバル化と教育内容）」一般社団法人日本教育学会『教育學研究』81(2)、2014、pp. 164-175。

吉田直子「国際「理解」の陥穽を問う：「沖縄」という他者を手がかりに」日本国際理解教育学会編『国際理解教育』2012、pp. 33-42。

吉田正純「「世界社会フォーラム」と成人教育 「もうひとつのグローバリゼーション」のための教育は可能か？」日本社会教育学会編『グローバリゼーションと社会教育・生涯学習』東洋館出版社、2005、pp. 215-227。

ラリタ・ラムダス（園崎寿子訳）「「開会式講演 成人教育・生涯学習・グローバルな知識への挑戦とその可能性」特集「抑圧者の教育学」へ向けての一步 第5回ユネスコ国際成人教育会議」『人権教育』明治図書出版、1997、pp. 48-56。

レイブ&ウェンガー（佐伯胖訳）『状況に埋め込まれた学習』産業図書、1993。

レイモンド・ウィリアムズ（若松繁信・長谷川光昭訳）『文化と社会—1780 - 1950』ミネルヴァ書房、2008。

山之内裕子『国境を越える在日ブラジル人の教育—ブラジル人保護者とブラジル人学校経営者の「戦術」に着目して—』森本豊富・根川幸男編『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向かって—』明石書店、2012、pp. 156-168。

Alfredo Kingo Oyama Homma, *A imigração japonesa na Amazônia: sua contribuição ao desenvolvimento agrícola*, Embrapa Amazônia Oriental, 2007.

Alfredo Kingo Oyama Homma, *História da agricultura na Amazônia, da era pré-colombiana ao terceiro milênio*, Embrapa Informação Tecnológica, 2003.

Andréa Vieira Lourenço de Barros, *EVOLUÇÃO DOS SISTEMAS AGROFLORESTAIS DESENVOLVIDOS PELOS AGRICULTORES NIPO-BRASILEIROS DO MUNICÍPIO DE TOMÉ-AÇU, PARÁ, BRASIL*, Tese apresentada ao Curso de Pós-Graduação em Ciências Agrárias/Agroecossistemas da Amazônia, da Universidade Federal Rural da Amazônia - UFRA e Empresa Brasileira de Pesquisa Agropecuária - Embrapa Amazônia Oriental, 2009.

ASSOCIAÇÃO KOTAKU DO AMAZONAS *A SAGA dos KOUTAKUSEIS no AMAZONAS Uma história de pioneirismo, sofrimento, perseverança e SUCESSO*, 2011.

Barlas, C. Kasl, E. Kyle, R. MacLeod, A. Paxton, D. Rosenwasser, P. and Sartor, L. *Learning to Unlearn White Supremacist Consciousness*, California Institute of Integral Studies, 2000.

Brown, B. *Unlearning discrimination in the early years* Trentham Books, 1998.

Carpenter, V. “Teaching Children to “Unlearn” the Sound of English”, *Teaching Indigenous Language* 1997, pp. 31-39.

Castellani, D.C.; Monteiro, R.E.; Takamatsu, J.A.; Kato, O.R.; Rodrigues, M.R.L.; Miccolis, A.; Costa, M.; Casara, J. *Estudo de sistemas agrossilviculturais para produção de dendê (Elaeis guianensis) em propriedades rurais de Tomé-Açu (PA)*. CONGRESSO BRASILEIRO DE SISTEMAS AGROFLORESTAIS, 2009.

Celso Furtado, *Formação Econômica do Brasil*, Companhia das Letras, 2007

Cross, Erin G. *Gender (in)Query: Young Adults Learning, Unlearning, and Relearning Gender in a Queer Majority Space*. 2010, Publicly accessible Penn Dissertations Paper.

Gayatri Spivak “FEMINISM AND HUMAN RIGHTS”, N. Shaikh, *The Present as History: Critical Perspectives on Global Power*, Columbia University Press, 2007, pp. 172-201.

- Ivan Illich, "Vernacular Values", *Philosophica*, 26, 1980, pp.47-102.
- Ilan Kapoor, "Hyper-self-reflexive development? Spivak on representing the Third World 'Other'", *Third World Quarterly*, (4(25)), 2004, pp.627-647.
- Jose Maria Ramos, "The Mumbai World Social Forum: Alternative Futures from the Grassroots", *Journal of Futures Studies*, 2004, 8(4), pp.103-110.
- Leiko Matsubara Morales, "The Nihongogakkô Communitarian Schools: Yesterday and Today", Tizuko Morchida Kishimoto & Zeila de Brito Fabri Demartini, *Education and Culture: Brazil and Japan*, 2012, pp. 187-208.
- Marilyn Cochran-Smith, "Blind Vision: Unlearning Racism in Teacher Education". *Harvard Educational Review*, 2000, Vol. 70, No. 2, pp. 157-190.
- Marilyn Cochran-Smith, "Learning and unlearning: The education of teacher educators." *Teaching and Teacher Education*, 2003, No. 19, pp. 5-28.
- M Yamada, H L Gholz, "An evaluation of agroforestry systems as a rural development option for the Brazilian Amazon", *Agroforestry Systems*, 2002, pp.81-87.
- Masaaki Yamada, *Japanese immigrant agroforestry in the Brazilian Amazon : a case study of sustainable rural development in the tropics*, Ph.D. diss., University of Florida, 1999
- Mezirow, J. *Transformative Dimensions of Adult Learning*, San Francisco, 1991.
- Prefeitura Municipal de Tomé-Açu, *Autodiagnóstico e Plano de Desenvolvimento Municipal de Tomé-Açu*, 1991.
- Priestley, T, *Learning to Unlearn: A Case Study of the Initial Rejection and Subsequent Acceptance of Homosexuality by Heterosexuals*, Teachers College, Columbia University, 2009.
- Stéphanie Wahab, Sunshine "Sunny" T. Gibson, "Hybrid Chronicles: Biracial and Biethnic Perspectives on the Pedagogy of Unlearning Racism" *The Qualitative Report*, Vol.12, 2007, pp. 414-429.
- Riegel, Chara Joy, *Buddhist philosophy and practices as applied to unlearning racism*, Smith College School for Social Work Northampton, Massachusetts, 2008.
- Stokke, Christian, *Unlearning White Superiority Consciousness-raising on an online Rastafari Reasoning Forum*, Department of Social Anthropology University of Oslo, 2005.
- UNESCO, *Final Report -Fifth International Conference on Adult Education*, Hamburg, Germany, 1997, (<http://www.unesco.org/education/uie/confintea/documents.html>) .
- Zeila de Brito Fabri Demartini, "Japoneses em São Paulo: desafios da educação na Nova Terra." In: Demartini, Zeila B. F.e Kishimoto, Tizuko M.. (Org.). *Educação e Cultura - Brasil e Japão*. EDUSP, 2012, pp. 23-46.
- Vanessa Andreotti, "An Ethical Engagement with the Other Spivak' s Ideas on Education" *Critical Literacy, Theories and Practices* 1(1), 2007, pp. 69-79.
- Zeila de Brito Fabri Demartini, " Memórias de velhos mestres da cidade de São Paulo e seus arredores" , *Relatório de pesquisa*, São Paulo: Ceru, 1988.



Zeila de Brito Fabri Demartini, “Japaneses in São Paulo: Challenges of Education in the New Land” , Tizuko Morchida Kishimoto & Zeila de Brito Fabri Demartini , *Education and Culture: Brazil and Japan*, 2012, pp. 23-48.

## 謝 辞

本論文をまとめるにあたり、多くの方々からご指導・ご協力をいただきました。特に、指導教官である朝岡幸彦先生を筆頭に、降旗信一先生、中川光弘先生等からもご指導やご助言をいただきました。また、東京農工大学環境教育学研究室的皆さまからも、多くの助言や叱咤激励をいただきました。心よりお礼申し上げます。

ブラジルトメアスの調査では、山田祐彰先生や梅村エリオ氏、佐藤卓司氏、田中規子氏、石塚幸寿氏、定森徹氏、林建佑氏等には大変お世話になり、調査に関する助言や関係者の紹介、資料提供等どれだけ助けていただいたかわかりません。また、トメアスに住む小長野道則氏や2010年から2011年当時CAMTA理事長だった坂口ワタル氏、CAMTA農事部の皆さま、組合員の皆さま、トメアス文化協会の皆さま、JICAボランティアの皆さま、トメアス俳句会の皆さま、ファームステイを快く引き受けてくださった高木誠也一家と角田修司一家、クワルタ・ヘジオン零細小農家協会の皆さまには、調査関連だけでなく、私生活においても大変ご協力いただきました。

酒井くん！ドクトール（博士）になって偉くなっても  
また必ずトメアスへ遊びに来いよ。待ってるからな。

これは、本論文と向き合うことが困難でいつそのことまとめるのを諦めてしまおうと思っていた時期に、トメアスである方からかけていただいた言葉です。この言葉を通じて自分の非力さや無知と向き合います論文をまとめる、そしてそれをお世話になったトメアスの皆さまにきちんと返すためにまたトメアスを訪れることが、今の自分自身にとって重要なのだと決断することができました。このようなトメアスの方々の励まし抜きには、本論文をまとめることは到底できませんでした。ここに改めてトメアスの皆さま、並びに関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。

また、2012年から鹿児島大学生涯学習教育研究センター（2017年現在はかごしまCOCセンター社会貢献・生涯学習部門）に着任して以降、研究と仕事の両面で多くのご指導と励ましをくださった小栗有子先生、農中至先生並びに鹿児島大学関係者の皆様にも心よりお礼申し上げます。小栗先生と農中先生との議論や勉強会を通じて、そもそも私が研究をすることの意義やその目的を問い直す機会を数多くいただきました。お二人には、今後とも変わらずご指導ご鞭撻いただけますようお願い申し上げます。

なお本研究の一部は、平成27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究（B））（課題番号15K17350）による支援をいただき実現したものであることをここに記し感謝の意を表します。

そして最後に、陰ながら支えてくれた妻の恵や家族、そして日本・ブラジルの友人に心より感謝申し上げます。

2017年9月1日

酒井 佑輔